昭和49年12月20日印刷　昭和50年1月1日発行1月号（第29巻第1号）毎月1回1日発行　昭和31年4月20日第3種郵便物認可　昭和42年4月21日国鉄大局特別扱承認雑誌第210号

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1 1975

奇譚クラス

1975・1

奇譚クラブ（昭和四十九年十一月二十日印刷　昭和五十年一月一日発行　一月号　第二十九巻第一号　毎月一回一日発行　昭和二十六年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号）

THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

1

¥600

定価六〇〇円

雑誌 2805－1

団鬼六作

花と蛇

瞠目のサディズム小説の総集篇、決定版——全一冊正、続篇総収録

奇譚クラブ臨時増刊号　定価一〇〇〇円（送料当方負担）

第1章 美人探偵登場
第2章 恐ろしい陥穽
第3章 華麗な流浪図絵
第4章 教授者来たる
第5章 失敗の餌食
第6章 教授への好餌
第7章 餓狼魔の哄笑
第8章 悪魔の地下室
第9章 恐怖の美女
第10章 翻弄されるお嬢さま
第11章 淫蛇の執念
第12章 美姉妹危うし
第13章 色事師調教
第14章 美津子教師受難
第15章 落花徴塵
第16章 密室のショー
第17章 脱走の失敗
第18章 華やかな地獄屋敷へ新顔
第19章 二つ折りの哀歓
第20章 身代金奪取の失敗
第21章 一千万円の身代金カップル
第22章 翻弄されるカップル
第23章 地獄の響宴
第24章 脱出の法悦
第25章 奇妙な運命の三々九度

第26章 飼育される白い動物
第27章 悪魔と悪女の悪業
第28章 屈辱の地獄絵図
第29章 逃走の恐怖と失敗の結末
第30章 悪鬼達の忍ばれる残虐場
第31章 淫らな花無残の修羅場
第32章 汚すまじきシヨ！の展開
第33章 華々しき美女の調教
第34章 対峙するいたぶる美女との屈伏
第35章 華々しき美女の屈伏の宝石
第36章 対峙するいたぶる美女との美女
第37章 蓋恥図絵の展開
第38章 清純な令夫人の屈服
第39章 人身御供の令夫人
第40章 深夜窓の美少女と公衆
第41章 小夜子の執拗な調教
第42章 一筋縄に入る
第43章 愛撫の羞恥責め
第44章 生れかわるスタート京子
第45章 激しい訓練
第46章 低脳スタートへの結婚
第47章 愛弟子と屈辱の日本婦人
第48章 蓋恥と屈辱の日本婦人
第49章 悪魔たちの哄笑地獄
第50章 珍芸室の汚辱
第51章 地下室の哄笑
第52章 美姉妹危うし
第53章 華々しき令夫人
第54章 淫靡な時代劇シヨー
第55章 結末の展開
第56章 甘美な牝犬に到る
第57章 新しい拷問の結末
第58章 貴責めの結末
第59章 荒縄の彼方の天国
第60章 失神したマゾ女体
第61章 貴責めの陶酔境
第62章 高手小本縛り
第63章 汚辱の縄
第64章 身動きできぬ縛り
第65章 ボリウムを縛る
第66章 浮上した女体
第67章 M女二輪の花
第68章 開股縛りの幻想
第69章 鏡の前のひとときを晒し
第70章 愉悦のつひとときを晒し
第71章 ハリツケ貴め
第72章 美しき吊り貴め
第73章 苦痛かな又悦楽かな
第74章 一筋縄に入る

奇ク臨時増刊号＝〈縛られた女ばかりの特集〉

女体緊縛写真集

定価一〇〇〇円（送料50円）

（カメラ・ハント楽我記……辻村　隆
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本　鉄三

カラー・フォト・セクション
柔肌に喰い込む麻縄（前田真知子）
グラビア｜女体麻縄緊縛の華
美女（シーラ・ケニー）
金髪碧眼の美女（シーラ・ケニー）
答打ちの痛苦（関谷富佐子）
浣腸責めの序曲（長井葉津子）
亀甲縛りの美態（左近麻里子）
麻縄と白肌の対照（中河恵子）
責め疲れの放心（中河恵子）
沖縄美人の緊縛（梨花悠紀子）
刺き玉子の縛り（座間明子）
狂変する裸女（佐々木真弓）
紅毛の白人責め（川路むら子）
海老責めの狂態（シーラ・ケニー）
ボリウムに挑戦（座間明子）
鞭打ちの陶酔（関谷富佐子）
祭壇の人身御供（渡部好美）
稚妻は縄を知りぬ（金原加奈子）
開股の正面と背面（中河恵子）
非情な責めの終末（長井葉津子）
柱縛りの完璧（三浦純子）
処女縛りに途惑うを（川路むら子）
麻縄に身をゆだねる（中河恵子）
盗視する緊縛の光と影（長井葉津子）
緊縛女体の光と影（川路むら子）
両手挙げ棒責めに浮く（中河恵子）
柱宙縛りに苦しむ（佐々木真弓）
後手吊りに責めて（座間明子）
どこでも責めて（関谷富佐子）
鞭の法悦（渡部好美）
花と蛇の静子で頂戴（中河恵子）
柱縛りの女体（渡部好美）
猿ぐつわの哀歓（長井葉津子）
日本式縛りの白人（シーラケニー）
マゾの女王にムチ（関谷富佐子）
柱縛りに恥らう（金原加奈子）

夫婦プレイの慈味（渡部好美）
長襦袢の艶姿（花坂道子）
豊満なボインを誇る（愛川悦子）
美女今縛られる（梨花悠紀子）
折檻にも汚れる（前田真知子）
責めたいの碧眼のず（シーラケニー）
猫の目のような女（絹川文代）
足吊りのある責め風景（中河恵子）
亀甲縛りの花（渡部好美）
M女二輪の花（三浦純子）
愉悦のひとときを晒し（川路むら子）
開股縛りの幻想（中河恵子）
鏡の前でのひとときを晒し（前田真知子）
ハリツケ貴め（左近麻里子）
美しき吊り貴め（前田真知子）
苦痛かな又悦楽かな（関谷富佐子）
一筋縄に入る（中河恵子）
逆エビの縄の魔術（三浦純子）
愛撫の羞恥責め（渡部好美）
黒縄と白肌の責めの陶酔（前田真知子）
身動きできぬ縛り（関谷富佐子）
ボリウムを縛る（座間明子）
浮上した女体（中河恵子）
汚辱の縄（佐々木真弓）
高手小本縛り（川路むら子）
貴めの陶酔境（関谷富佐子）
失神したマゾ女体（中河恵子）
荒縄の彼方の天国（三浦純子）
甘美な牝犬に到る（梨花悠紀子）
新しい拷問の結末（前田真知子）
貴責めの結末（川路むら子）
結末の展開（佐々木真弓）
華々しき令夫人（金原加奈子）
淫靡な時代劇シヨー（中河恵子）
珍芸室の汚辱（関谷富佐子）
地下室の哄笑地獄（中河恵子）
悪魔たちの哄笑（座間明子）
蓋恥と屈辱の日本婦人（関谷富佐子）
愛弟子と屈辱の日本婦人（中河恵子）
激しい訓練（渡部好美）
生れかわるスタート京子（前田真知子）
麦性色事師の登場（三浦純子）
小夜子の執拗な調教（中河恵子）
人身御供の令夫人（前田真知子）
清純な令夫人の屈服（前田真知子）
蓋恥図絵の展開（前田真知子）
あくどい陥穽（中河恵子）
対峙するいたぶる美女との屈伏（川路むら子）
華々しき美女の調教（中河恵子）
汚すまじきシヨ！の展開（中河恵子）
悪鬼達の忍ばれる残虐場（中河恵子）
悪魔と悪女の悪業（中河恵子）
屈辱の地獄絵図（中河恵子）
逃走の恐怖と失敗の結末（中河恵子）
淫らな花無残の修羅場（中河恵子）
悪魔と悪女の悪業（中河恵子）
飼育される白い動物（渡部好美）

◎御注文は暁出版株式会社へ前金にて、お申込み願います。……その他多数……

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルの応募によって数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文献誌としての絢爛たる金字塔を、打ち樹てて参りました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未既婚の別、年齢などは一切問いません。遠近に拘らずお申込み願います。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壱万円以上拾万円まで、即金にてお払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しが無い限り絶対致しません。故、御安心の上、御応募下さい。尚、告白文をお書き下さった方には謝礼を別に原稿料を、資料を提供下さった方には、お申込みの節、お好みの傾向をお知らせ下さいますと尚、お支払いに際しても幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載をとはしておりますが、若しご都合によって発表を望まれない場合は、そのご旨お申し出下さいますれば改めて打ち合わせしたいと思います。助手や介添えとしての出演、若しくは編集部資料作成についてのプレイ出演などの役に任じて頂きたいと思います。その際の報酬は、改めてご相談に応じたいと思います。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願います。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがなければ結構です。

●申込先。大阪市住吉区大領町四の六八　暁出版株式会社　編集部

◇本誌三百号突破記念◇　百萬円懸賞原稿募集

▽賞　金△

入選作品	第一席	二十萬円
入選作品	第二席	十萬円
入選作品	第三席	五萬円
入選作品	第四席	三萬円
入選作品	第五席	二萬円
佳作優秀作品		一萬円
選外佳作作品		五千円
		10篇
		15篇
		10篇
		5篇
		3篇
		1篇
		1篇

▽内　容△

奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三百号の多きを数えるに至りました。その間、風俗雑誌のパイオニアとしての幾多の辛酸を具に嘗めながら、読者の皆様の温かき御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。本誌は異色ある風俗文献誌として生長し、今まで読者の方々の投稿や力作が春の花のように咲き乱れ、SM文献誌としての本誌の真価がいやが上にも高められて、更に一層の充実と清新化を計念して、皆様の作品に期待しまして原稿募集を企画しました。

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ一貫した風俗文献誌として生長し、同性愛、変装、生首狂い、変態風俗、奇習珍奇異風俗、特異風俗、慣習紹介、アブノーマル・サディズムに関連したものを始めとして、緊縛、女相撲、女丈夫美、女斗美、嗜好、女体、輝美、妊娠、嗜好、見世物、色風俗、崇拝、テクニックなど、古今東西を問わず異色文献に属するものを取り上げて下さい。

一、形式は、小説、創作、読物などのフィクション物でも、告白、体験、手記のようなノンフィクション物でも結構です。見聞記、レポート、ルポルタージュも大いに歓迎致します。写真、画、参考資料などがあれば添布下さいますと幸いです。（資料に限り返戻の求めに応じます）更に、論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式のものでも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。模倣とか亜流は絶対に排して下さい。あくまで野心的な新作に限ります。幾多のS作家を輩出させて本誌の誌面を野心のある読者の方は登竜門として試みて下さい。

▽規　定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限ります。原稿は必ず二百字詰原稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上三百枚迄に制限致します。

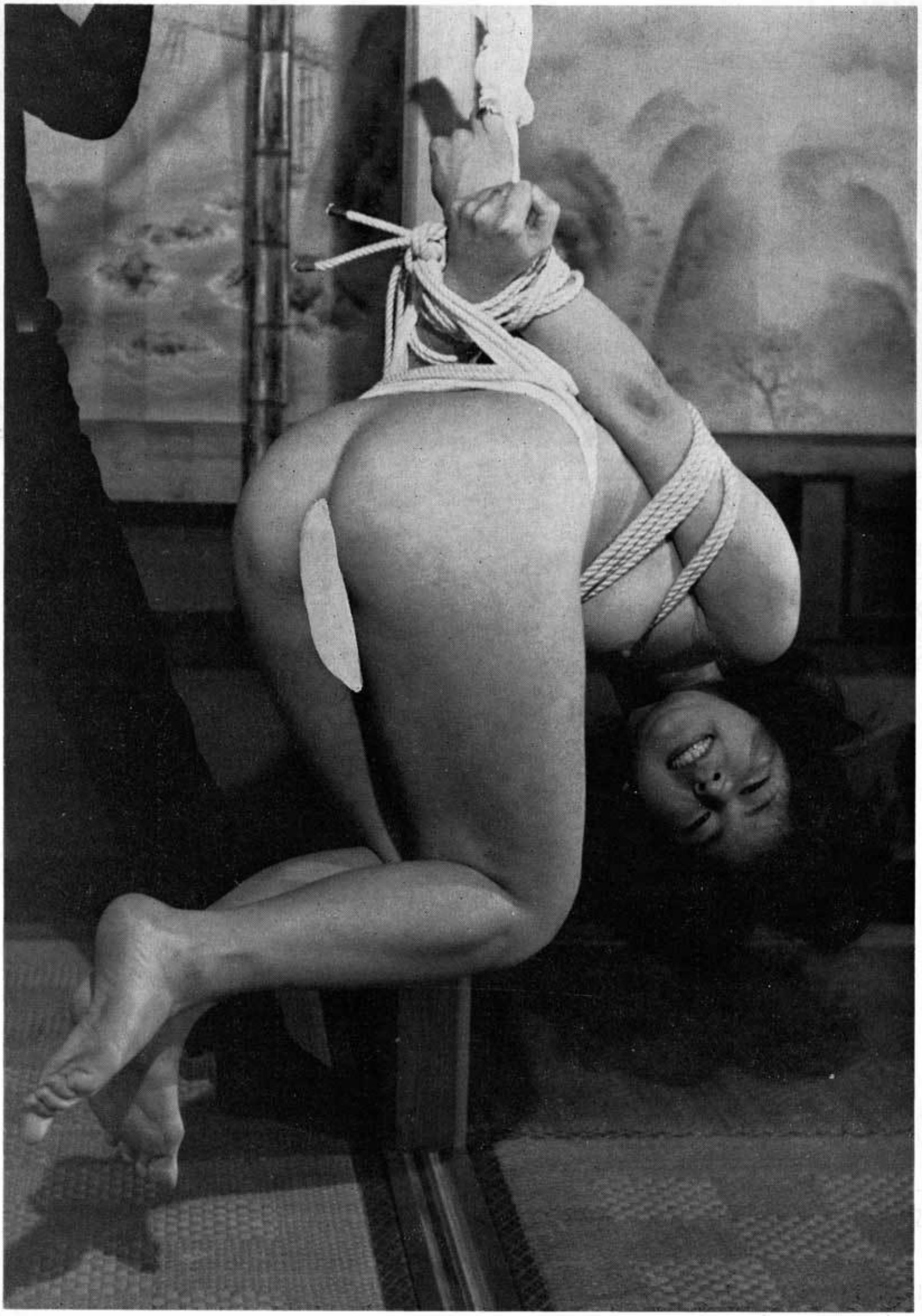
一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚掲載の際、発表に支障ある個所を削除することもありますので予め御諒承願います。原稿は原則として返戻は申上げませんが故、原稿御入用の方は前もってお申出下さいますよう願います。

一、懸賞応募作品は、第一頁に〈懸賞〉と区別するため、一般応募原稿、読者原稿と下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは絶対に致しません故、御安心下さい。永続性のある作品を発表して、貴方の力量と手腕を、どうか発揮して下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉区大領町四の六八、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断わり致します。

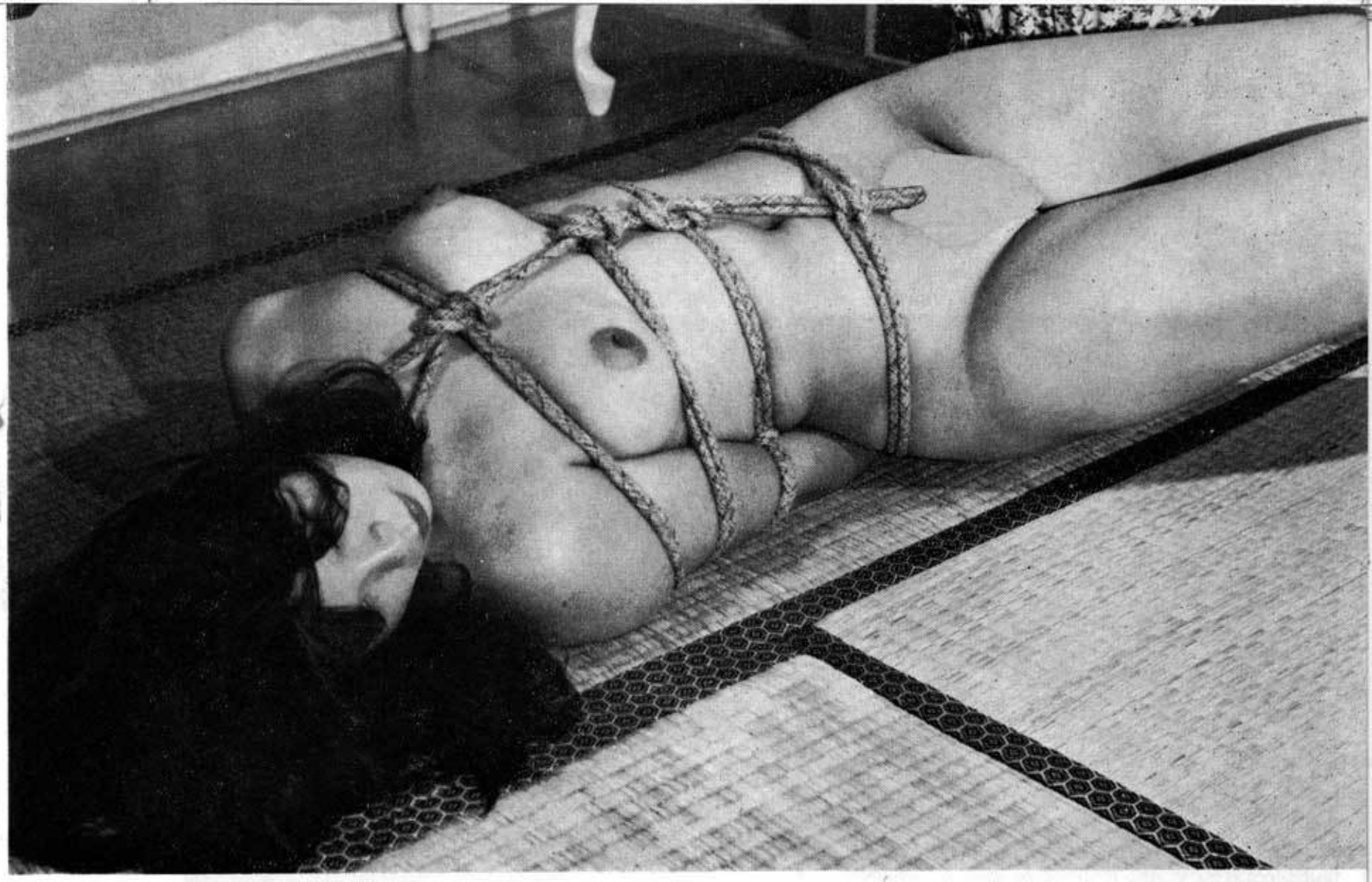
美と緊縛の接点

塚本鉄三・撮影



後手吊りの愉悦

〈前田真知子〉



昭和五十年　**一月号目次**　〈第二十九巻　第一号〉〈通刊第三百二十三号〉

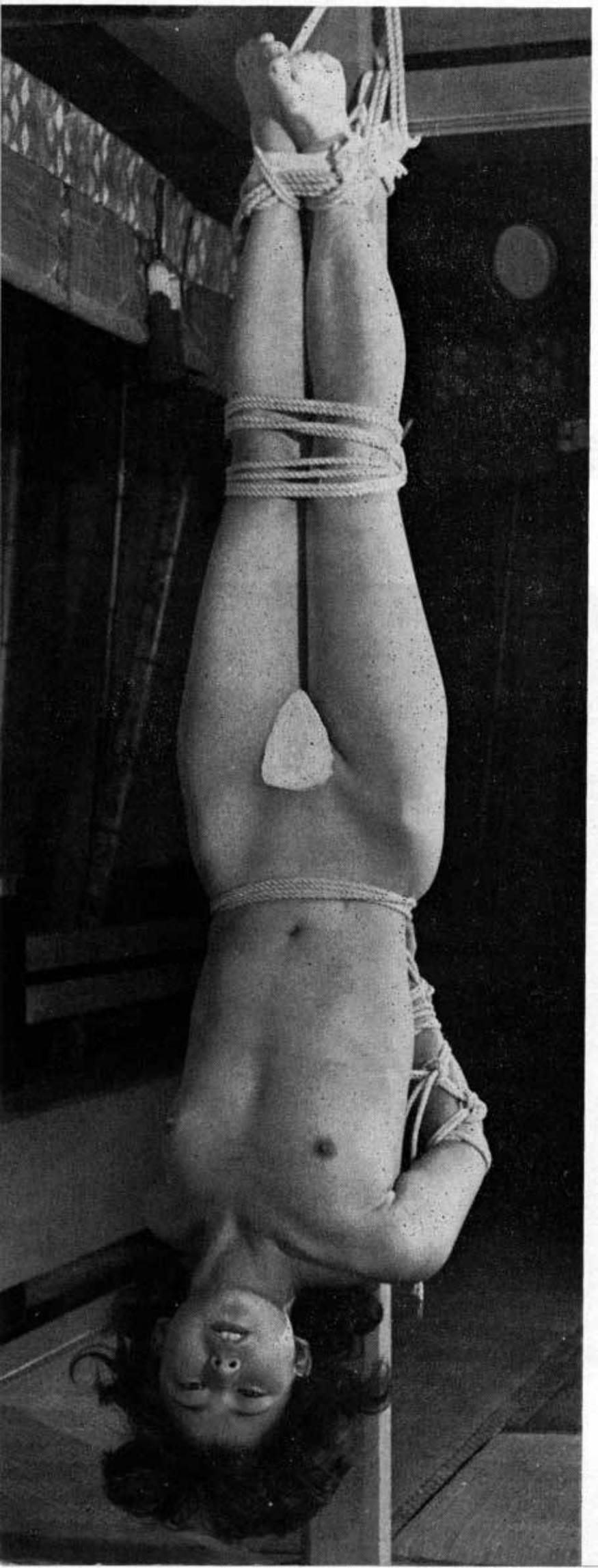
フォト「**淑かな家庭婦人の美しさ**」
△**モデル・藤田明子**▽……藤川冬一郎…(29)
〔カメラ〕と〔ペン〕のルポルタージュ△**山口艶子の巻**▽
『**ブルーディの休日**』……塚本　鉄三…(30)
SMマンの天国——セブ島……竹迫　誠也…(60)
連載・M派交友録(58)『**交錯する愛情**』……鬼山　絢策…(66)
連載小説『**大噴火**』△第七十五回▽……千葉　青鬼…(82)
体験記『**S病院始末記**』……芦川富士男…(90)
随筆『**ふんどし・腋毛・ETC**』……鈴木ゆり子…(96)
連載・Mグループ作品『**女の虜囚**』(11)……佐治　麻造…(102)
論評『**さるぐつわ**』(3)……新川　裕夫…(114)
我が告白『**あぶ・らぶの遍歴**』……今野　垣春…(123)
孤独な紀代よりの便り『**飛驒の高山にて**』……西条　紀代…(128)
連載・時代S小説『**紫蘭の門**』(41)……風流極道軒…(132)
論稿　**縛りの美学**……ロマン派生…(144)
告白　**婦屁論オンパニズム**……黄　与三郎…(151)
告白　**私の長い長い一日**……清水　敏明…(53)
憧憬　**和装美と意地悪責め**……高橋　秀樹…(166)
体験　**いまどきの娘**（ケイ子のこと）……小岩新次郎…(171)
SM談義、ダベリ会、よもやま話……塚本　鉄三…(176)
論稿　**覗きの美学**……舟橋　一郎…(184)
あたしを狂わす〝プッシー・リング〟……長谷田真知子…(194)
読者通信……編集部…(260)

美と緊縛の接点（塚本鉄三・撮影）

後手吊りの愉悦●情婦マノンの縛り●逆さ吊りでいたぶる縦縛りの味…前田真知子
法悦のさるぐつわ●開股縛りの華麗さ……笠井奈保子
羞恥のなかの女●鏡の中の縛女●陶酔……矢島　靖子
縛りに溶け込む女体……鈴木千鶴子
バイブ責めの戦慄●さらしもの…高村　浩子
膨隆への縄目●目かくしの恐怖●ケモノの生態……山口　艶子
白豚の荷造り……苗木　陽子
哀愁の目ざなし●菱縄縛りの柔肌深田　菊子
惑溺……渡部　好美
旅愁の宿にて……山原　清子
目次フォト……堀　貴代子・前田真知子

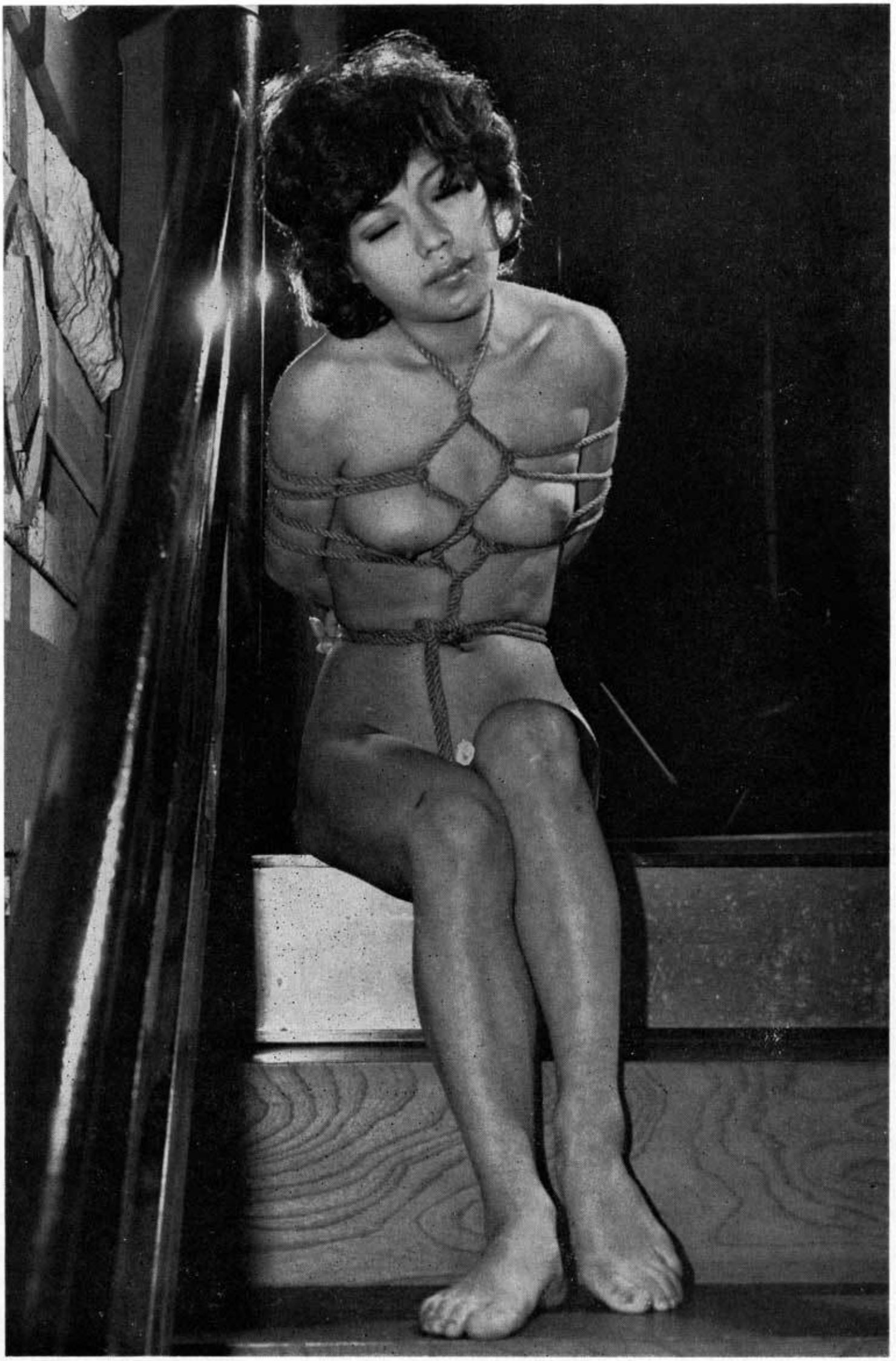
イメージギャラリー

浴室の腰かけシャワーと共に恵みの飛まつ●双臀の重圧、契約愛人●吟味与力、問責●ハンモック、女王様のおあそび●哀願踏台……岡　たかし
先公さっさと宿題やッちゃいな●凶悪犯逮捕●社長と課長、昼はOL、夜は女王様……春日田春夫
豊満女体の逆海老吊り……マエダ・ヒオミ
ショーウィンドーの怪●V相鑑定●虜囚の女王●溪谷めぐり……水江　伸



奇クサロン（200）

S研の有義性について……袋井　頑鉄
年上の女の魅力の虜に……村田　暁
ポルノ紀行北欧旅行SM見聞記…大西　弘明
あるマゾヒストの切なる願い……門田　益夫
告白　浣腸の好きな女……川崎　一郎
告白　新しい獣姦愛欲の道……甲斐千恵子
SMは華麗な生の証し……鷹　探美生
あぐら座りの魅力……座頭　孝司
アナクロニズム論に就いて……小沢　準一
なつかしき奇クさまざまいる……山本　一章
ゴムマニアの期待と希望……印場　旭
昔日の思い出……山本　丈二
マンネリからの脱出法……橋爪　次郎
乳房責めABC……秋田貴与志
牝犬タマコの告白……児玉　嬰子
私をパートナーに……添上　市郎
或ファンからの手紙……水島　知足
奴隷妻志願のこと……笠井奈保子
女性の羞らい……伊倉　広樹
アヌス訓練の実施……後野　満
エネマ・メイトを求む浣腸と私…秋山　明
私達二人だけの楽しみ……宮前　好児
トルコ嬢の秘戯指南……殿川　庄治
愛姦会について御意見を求む…仕上　太郎
ネオンの影の女より……花村　蓉子
灯台下暗し……今　二郎
白豚第三世にびっくりしたぜ……東　一郎
浣腸とオムツの関係……沖　洋
SM未経験M女性へ……SM研HO
マゾに溺れてしまった私……山部　俊子
私の縛って責めてみたい女性…甲州　呆人
M派憤懣録……田島　甲一
再びパリ滞在のことなど……毛利　雪男
VARIA・SADISM……小沢　準一
我がマゾの妄想について……高浜　豚六
S研ニュース……塚本　鉄三
奴隷妻八重子とのプレイ近況…橋本　二郎
更に躍進奇譚クラブの読者評…林　繁三
近頃の夫婦プレイについて……阪東　太郎
十二月号の緊縛フォトについて…嵐　龍次
被虐の映像……高原　三佳
女に責められたい私……貴野　好夫



縛りに溶け込む女体　　〈鈴木千鶴子〉

開股縛りの華麗さ

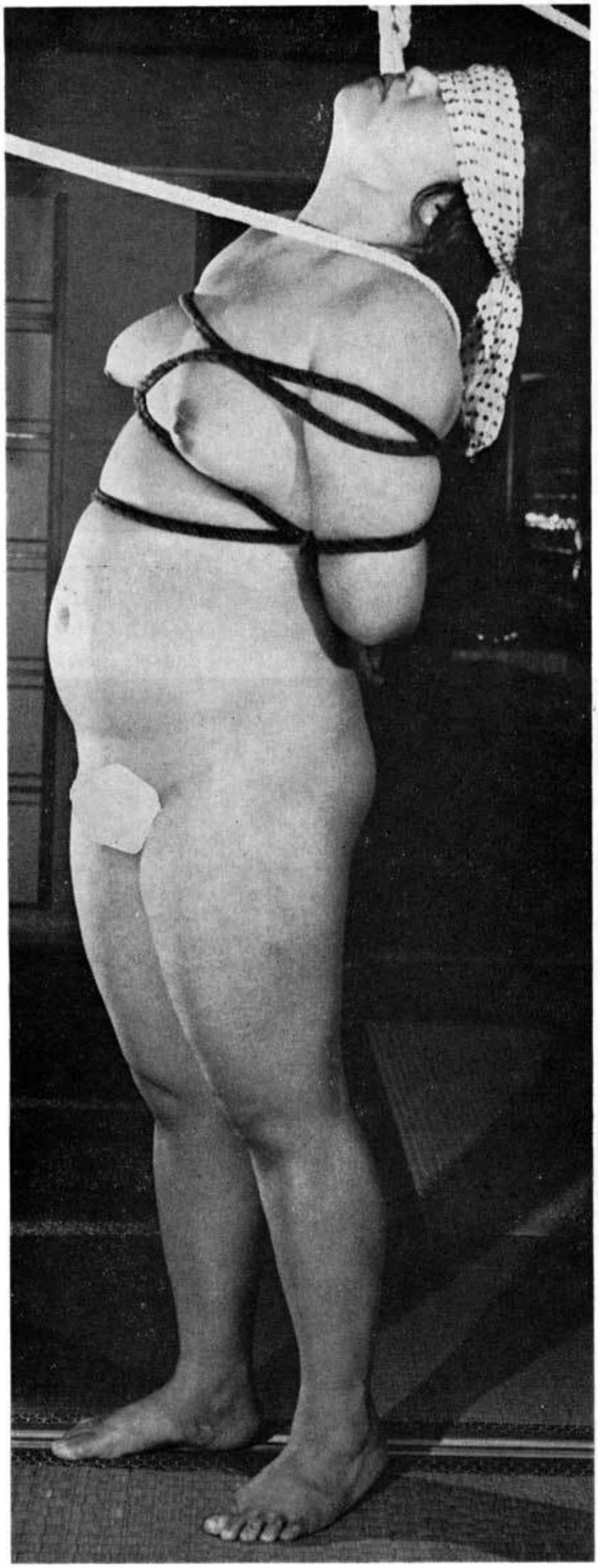
<笠井奈保子>

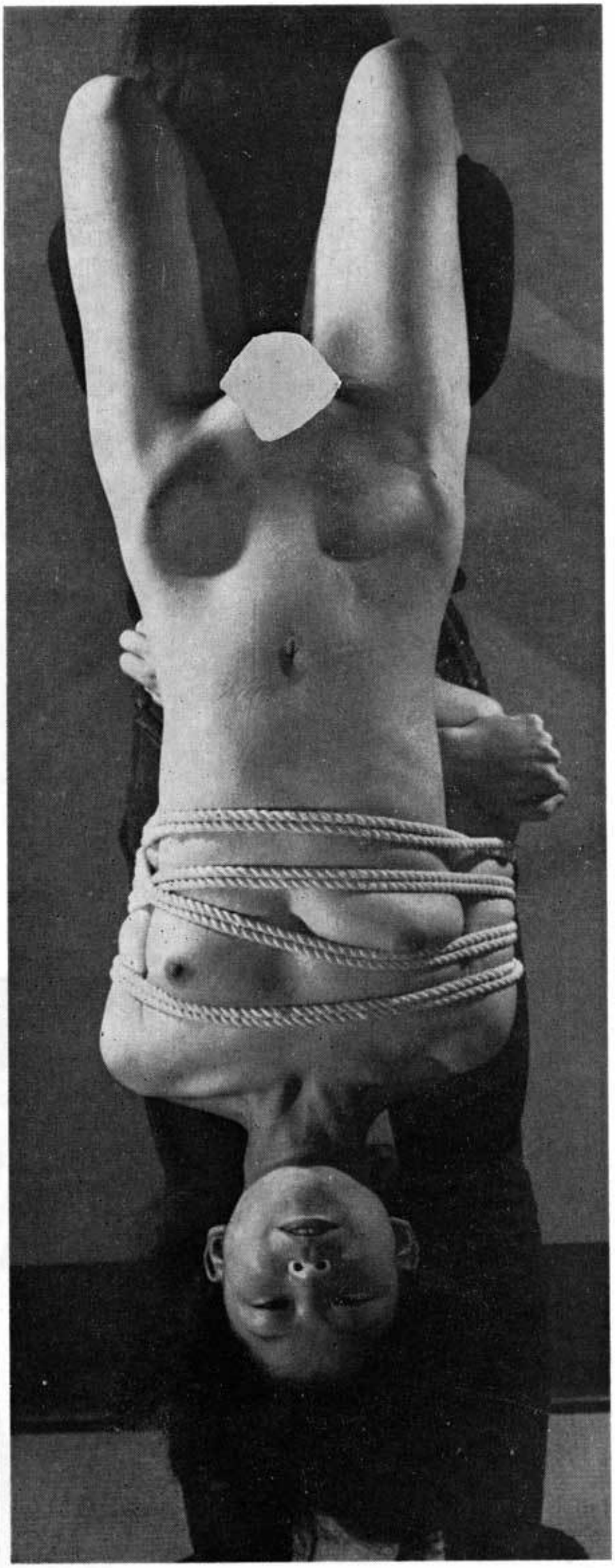
バイブ責めの戦慄　　<高村浩子>

膨隆への縄目　　<山口艶子>

目かくしの恐怖

<山　口　艶　子>



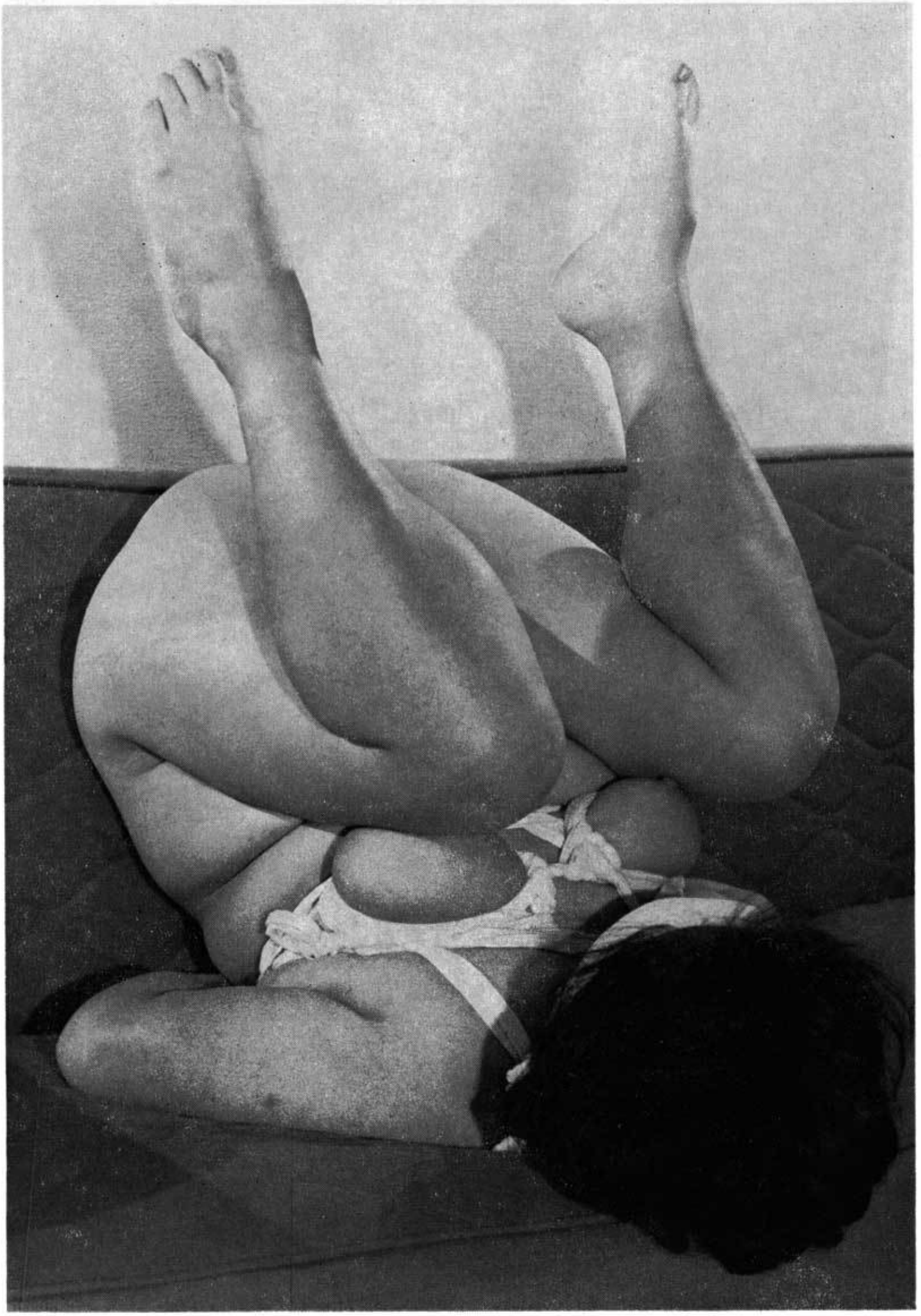


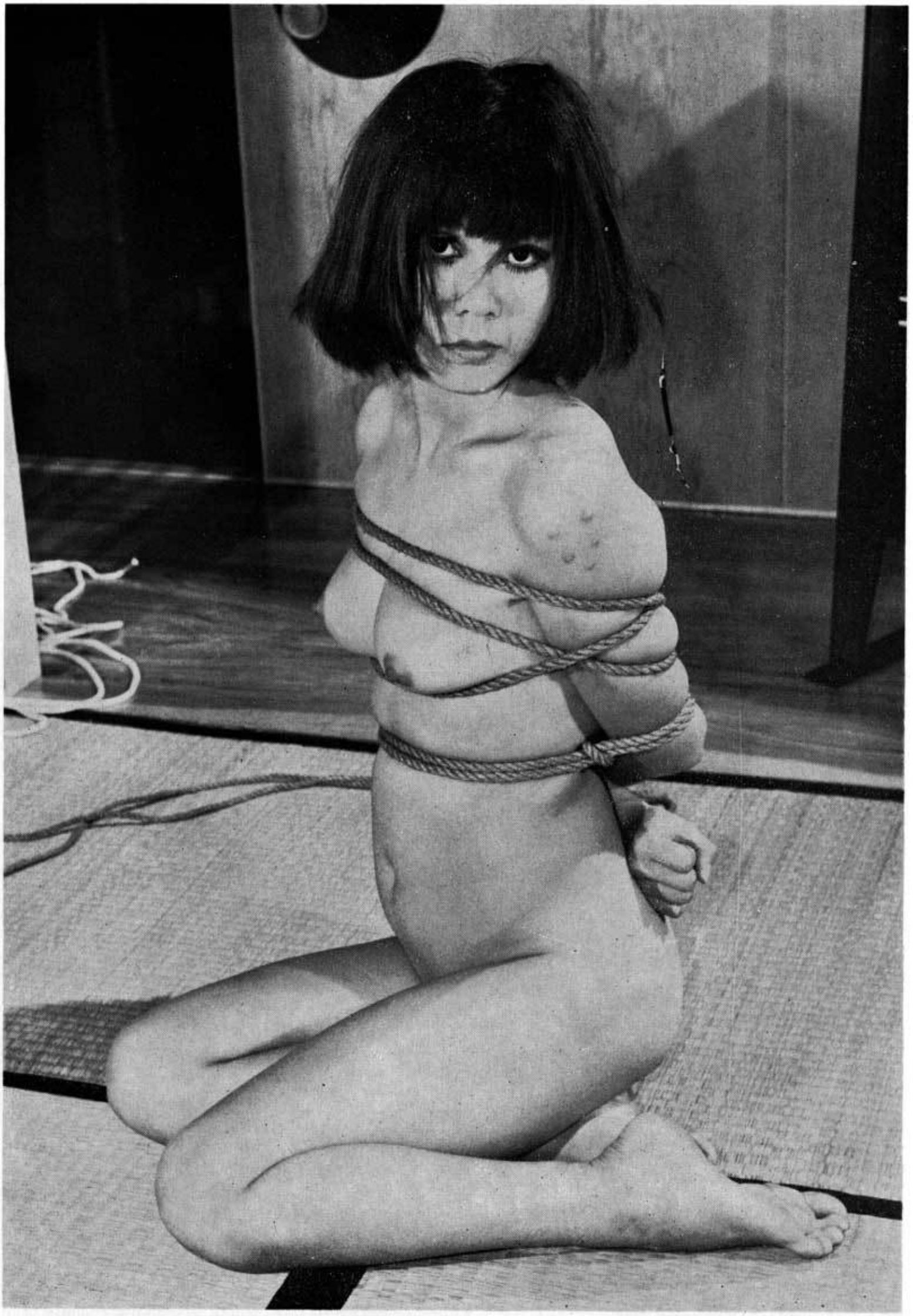
情婦マノンの縛り

<前　田　真　知　子>

白豚の荷造り

〈苗木陽子〉

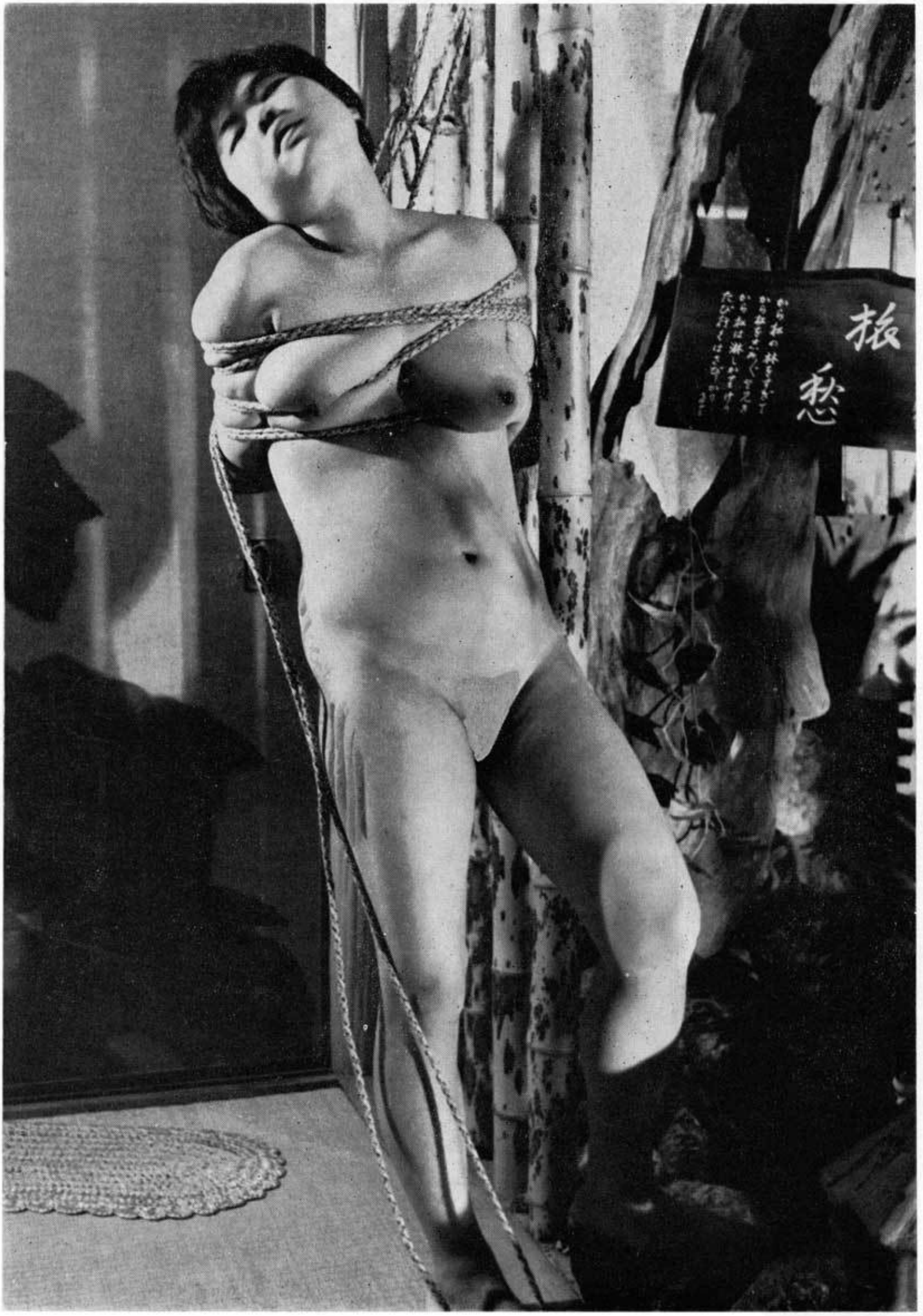


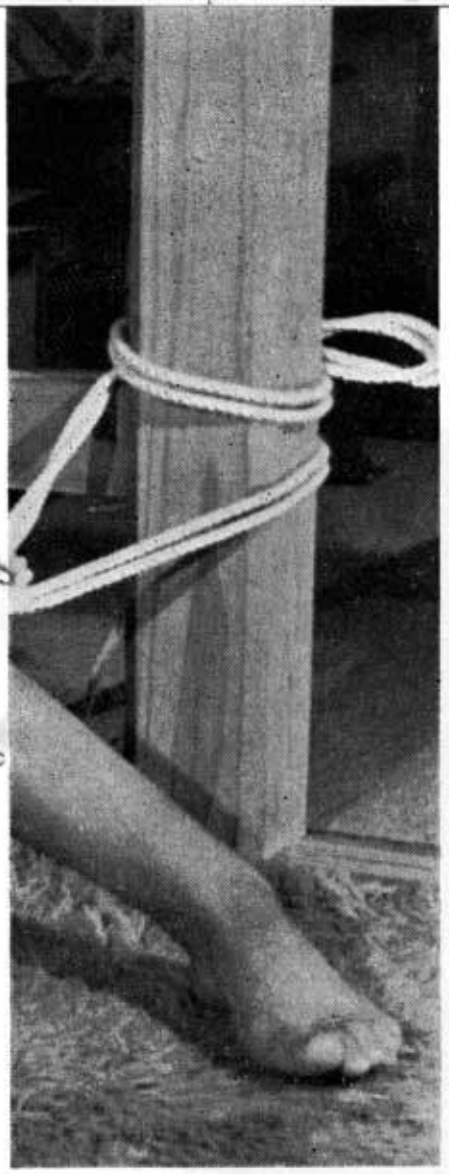


哀愁の目ざなし　　〈深田菊子〉

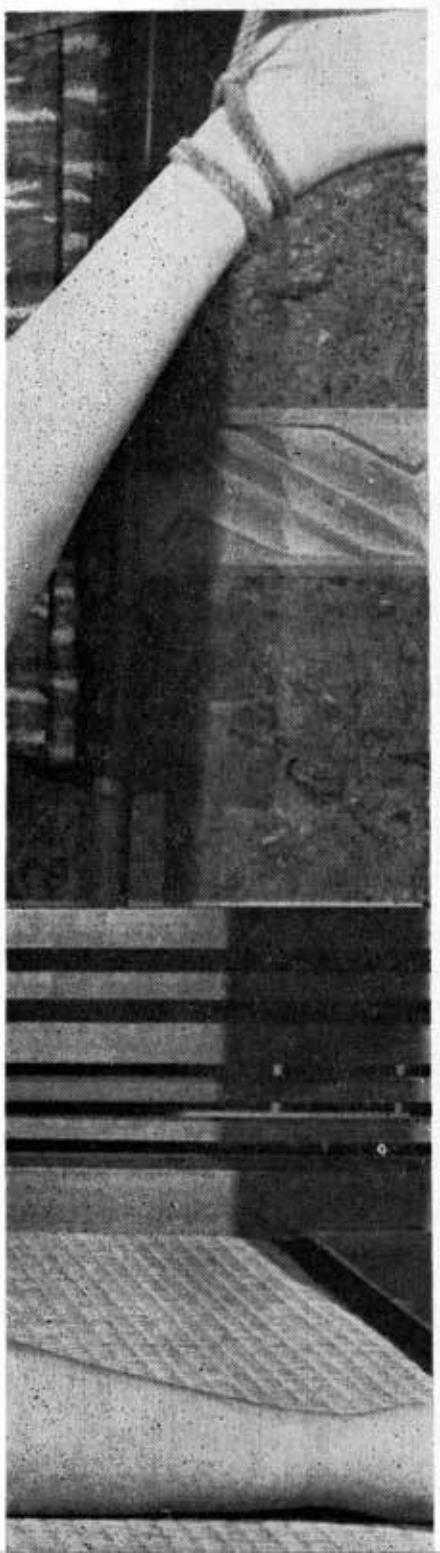
旅愁の宿にて

<山原清子>

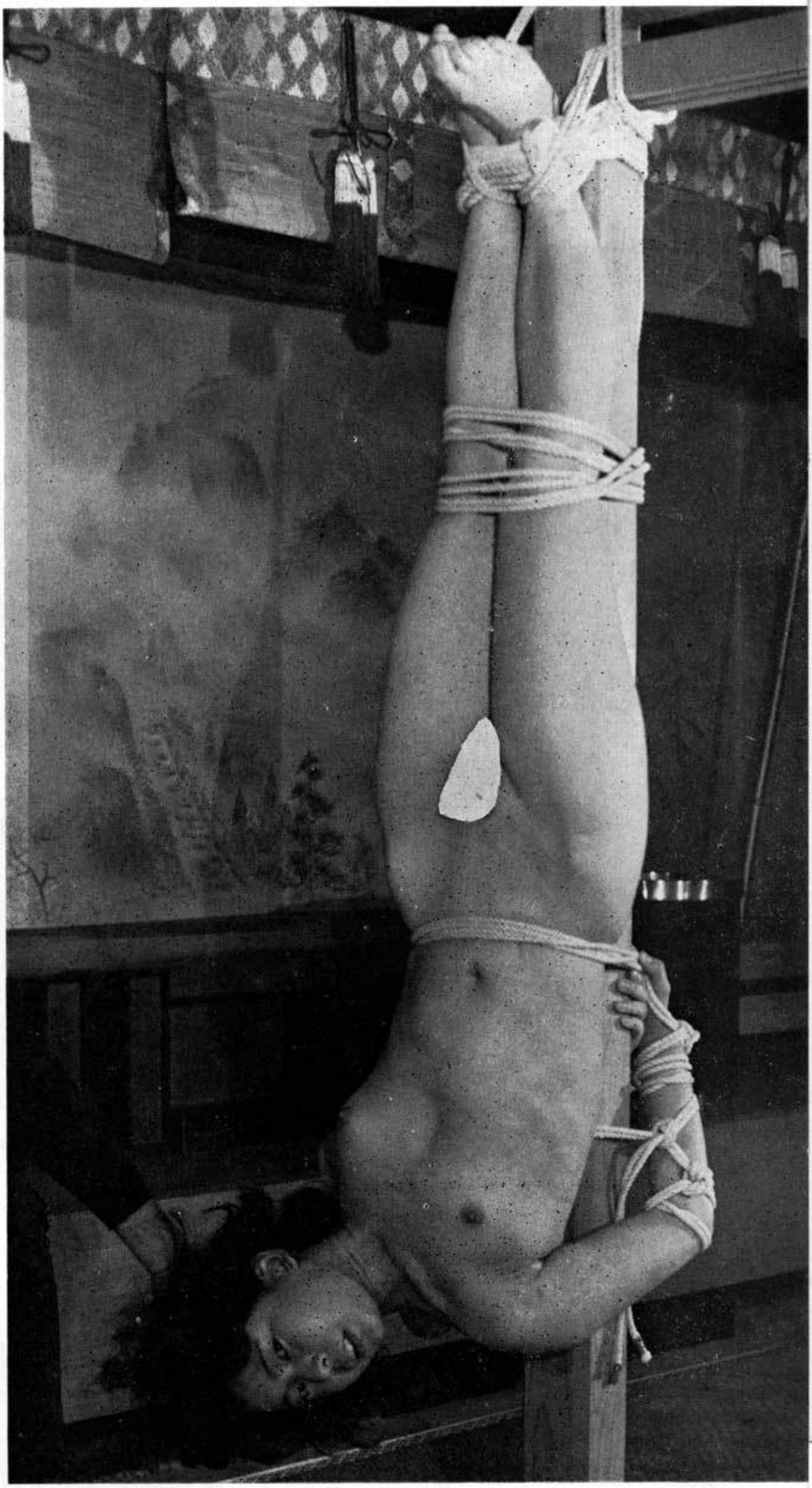




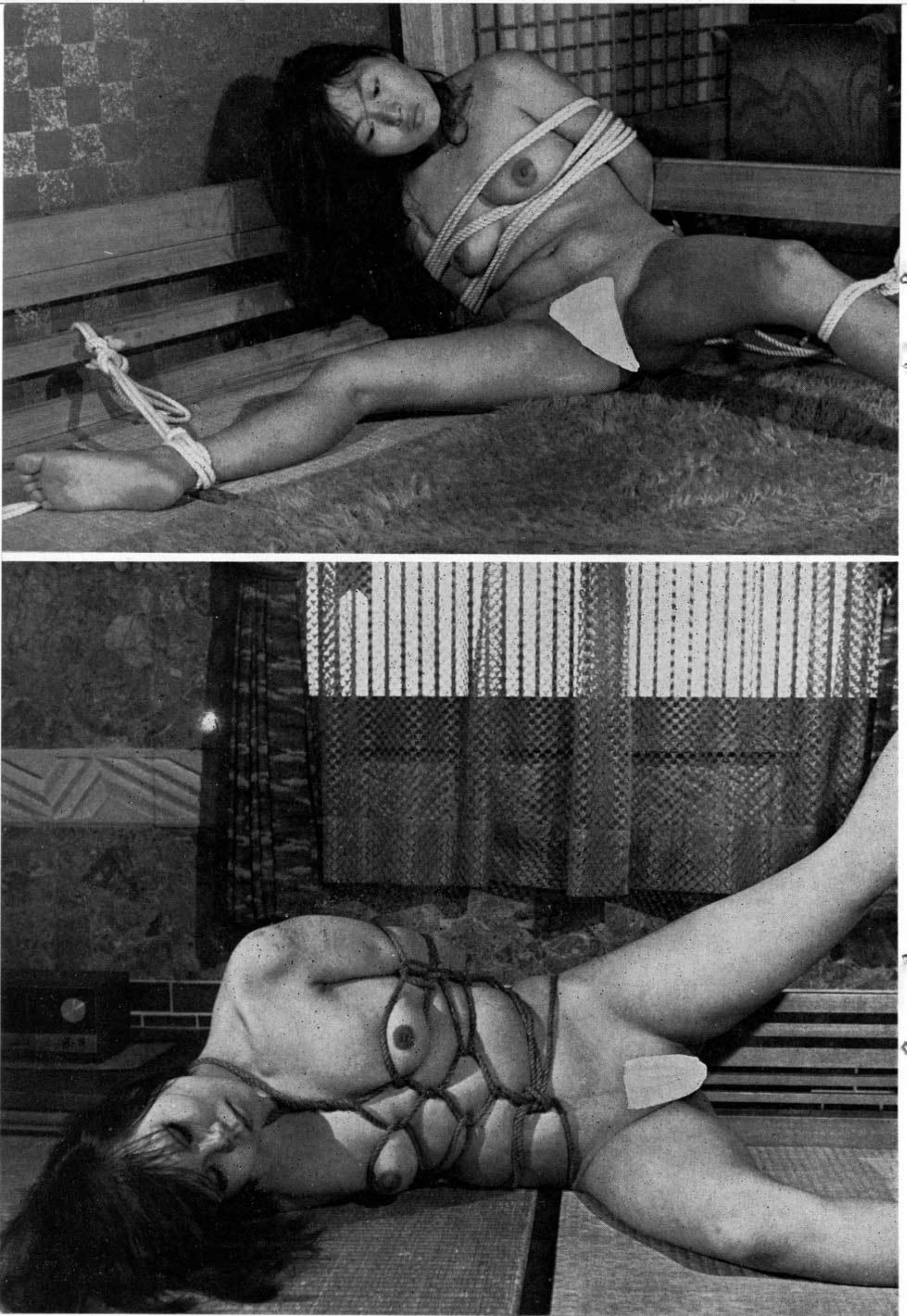
さらしもの　〈高村浩子〉

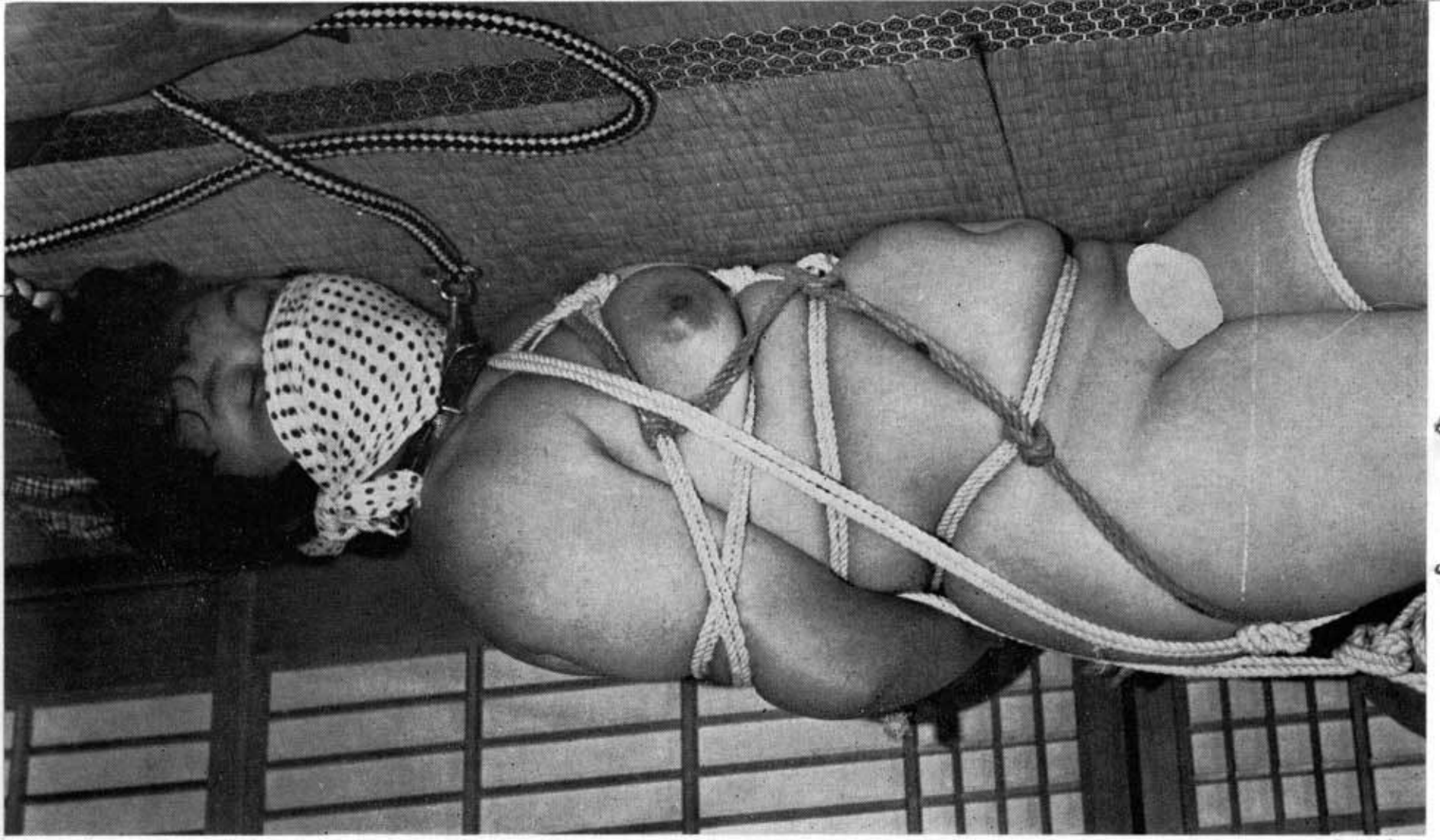


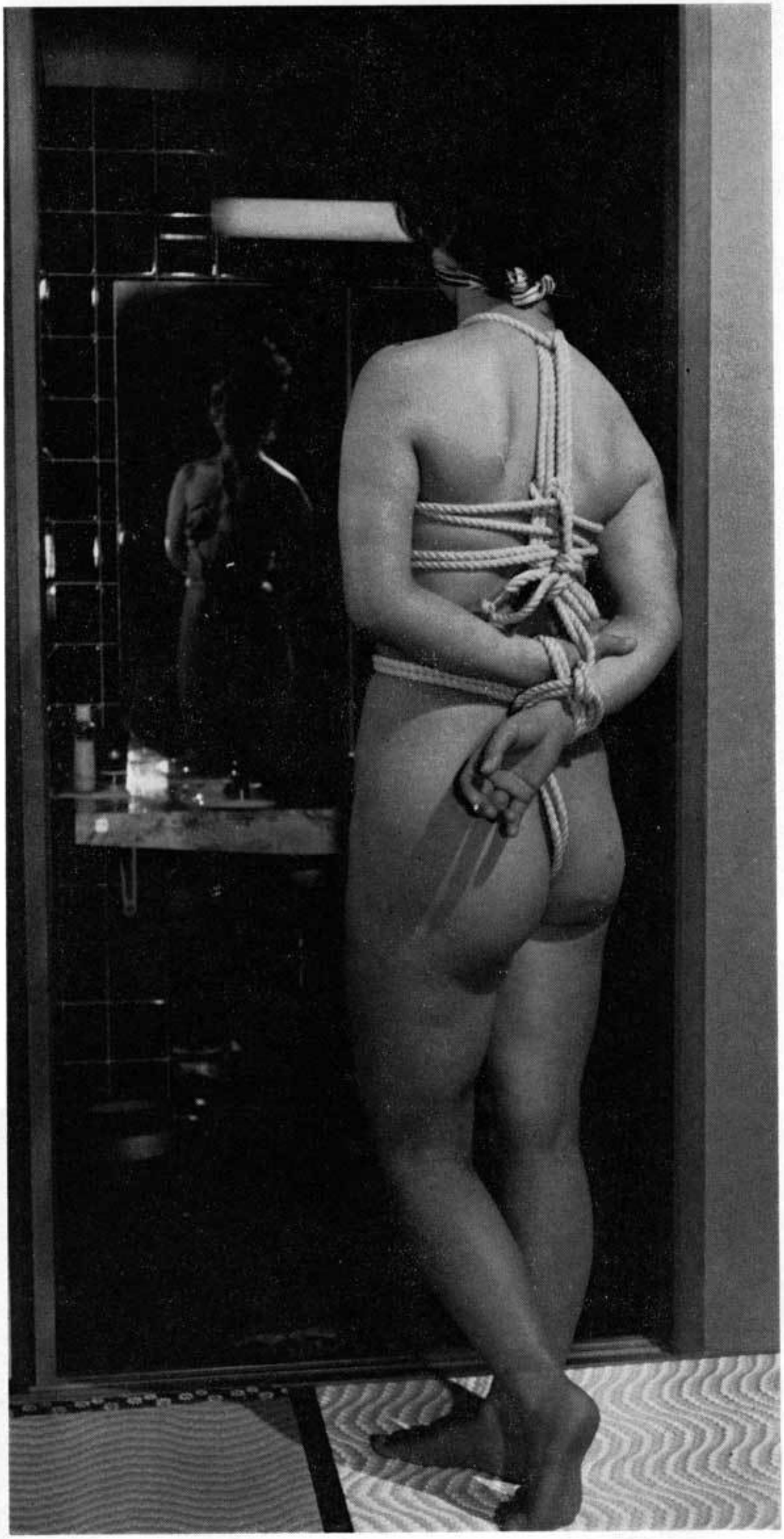
菱縄縛りの柔肌　〈深田菊子〉



逆さ吊りでいたぶる　〈前田真知子〉



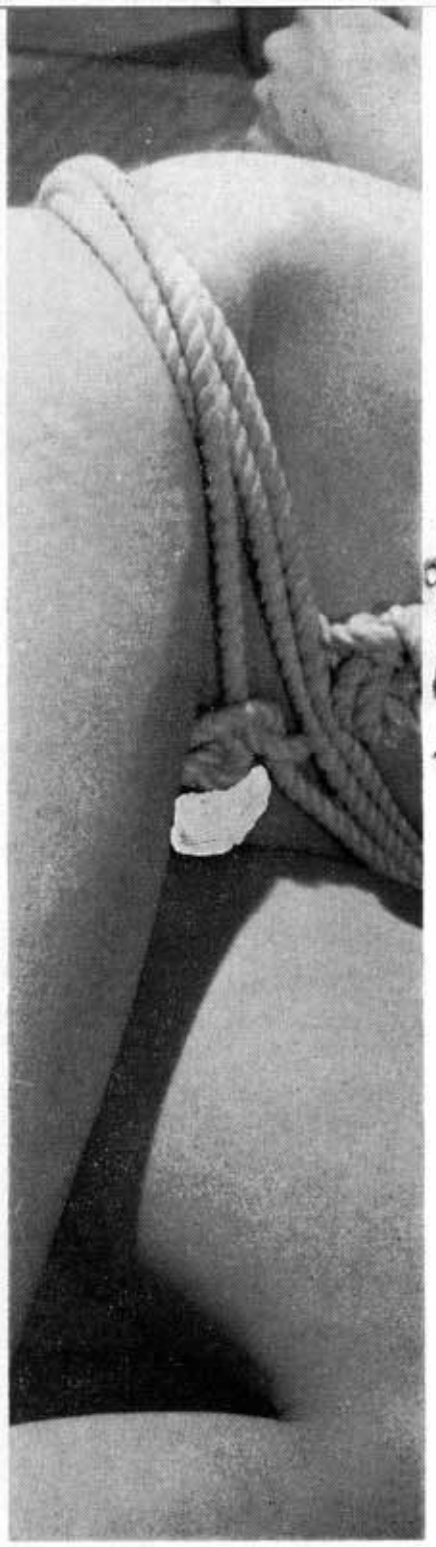




〈矢島靖子〉

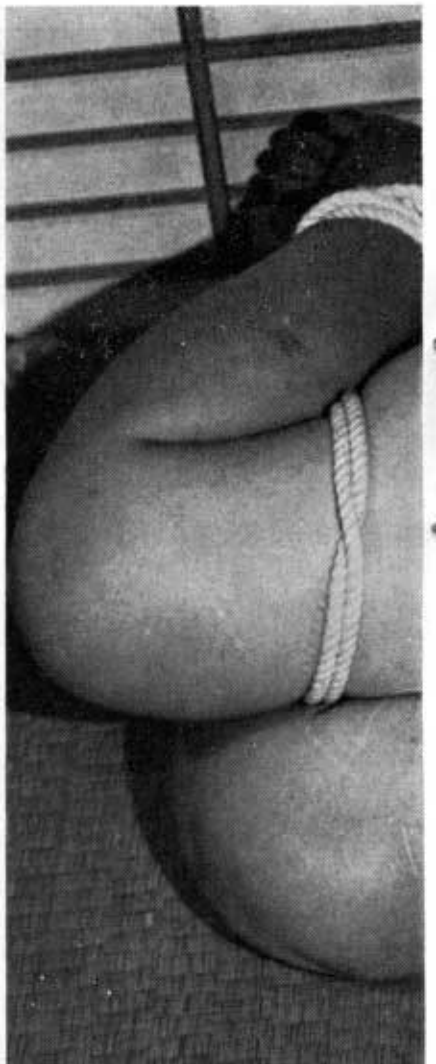
鏡の中の縛女

縦縛りの味



△前田真知子▽

ケモノの生態



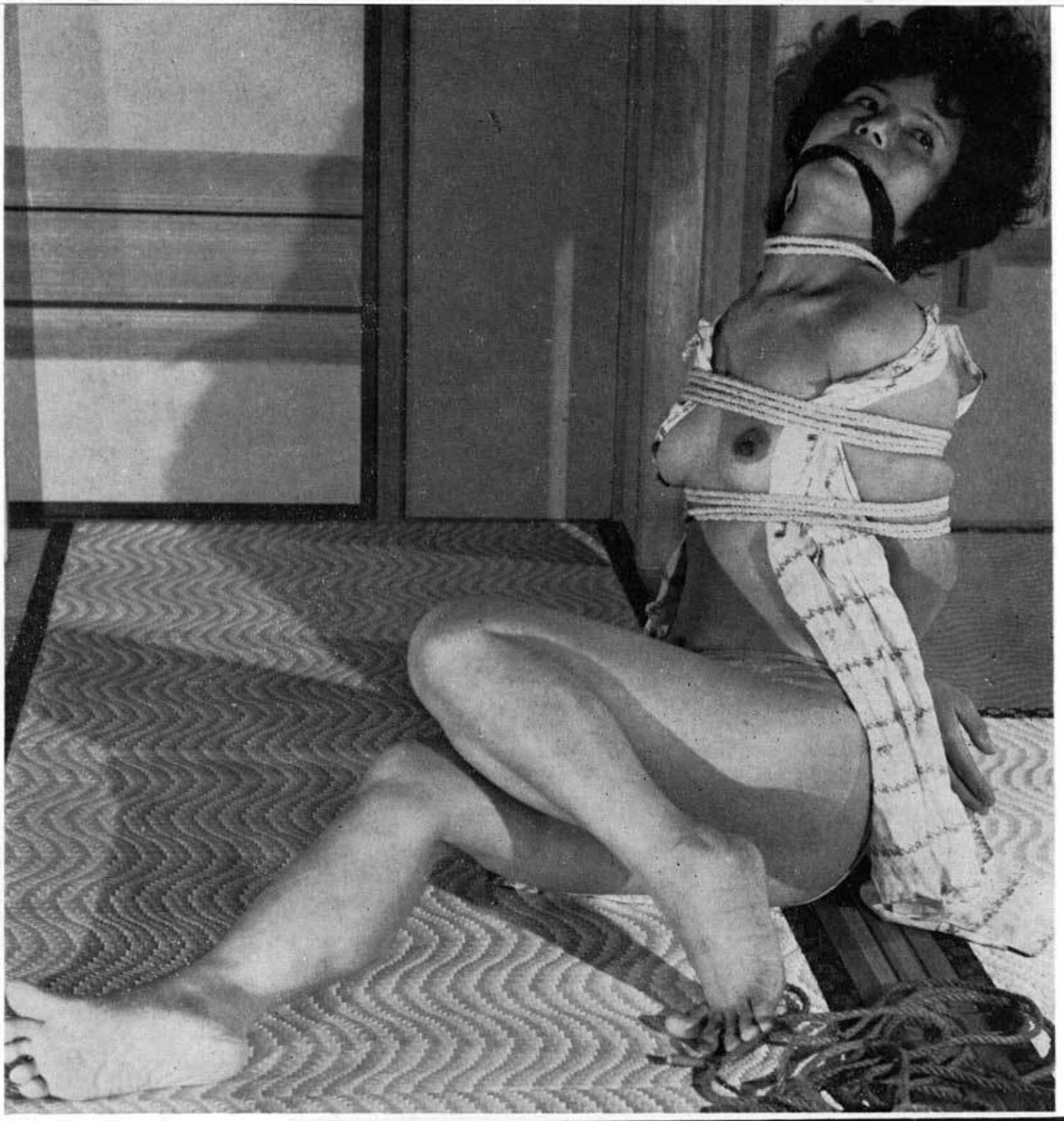
△山口艶子▽

陶酔

〈矢島靖子〉

惑溺

〈渡部好美〉



奇譚クラブ

1975
1月号

<第29巻第1号・通刊第323号>

――淑かな家庭婦人の美しさ――……モデル……藤田　明子……

地方公務員として堅物で通っている私だがここ十数年来、女体緊縛に関しては目のないほど溺れきってしまっている。そして、若い女性よりも、中年の家庭婦人が、その淑かな羞らいを含んだ虚飾の衣服を剝ぎとられて全裸で縛られているところに、限りない被虐的な美しさを感じとっている。

上品で最高学府を出た裕福な家庭婦人である藤田明子が奇ク誌上に姿を現わしたとき、私は身体中の血が沸きかえるようなショックを覚えた。こんな上品で淑かな婦人が公開の誌上に全裸の緊縛肢体を晒そうとは。これこそ、奇クが私のために、わざわざ企ててくれたプレゼントではないのかと疑った。

藤田明子こそ、私がいつも夢に描いていた理想の緊縛女性なのだ。彼女を見ていると、私の血は煮えたぎり、あらぬ妄想が次々と頭の中を駈けめぐるのだった。（藤川冬一郎）

[カメラ]と[ペン]のSMポルタージュ

ブルーディの休日

＜新入荷〃白豚〃飼育調教日記より＞

塚本鉄三

縄で縛っただけで艶子の裸身は忽ちにして凄い反応を示した。いろんなタイプの女を縛りつけている私でさえ、艶子のそんな顕著な変化にびっくりした。クラゲのように、全身がくにゃくにゃになり、自分で立っているのが、やっとという有様だ。女が縛られるのが大好きか、どうかは、先ず手をさし入れてみたらわかる。艶子は、もう最初から、その方はメロメロだった。私が口に出して、そのことを、あからさまに言うと彼女は「言わないで、言わないで……」と顔を赤らめて、身悶えるのであった。

☆メス豚再入荷

八月下旬、山口艶子のキングサイズの素晴しい女体を徹夜で責めてから、一週間ばかりした、九月五日のことだった。

机の上に一通の速達便が置いてあった。白い長封筒の裏を見ると、＜富山にて、艶子より＞と、してある。

封を切ると便箋が一枚、出てきた。

＜昨日より富山へ来ています。どうしても、お逢いしたく、五日に、雷鳥9号にて、そちらへまいります。20時45分、大阪駅正面出札口にて、お待ち下さい。山口艶子＞

恐ろしく短い手紙だ。

五日といえば今日ではないか。

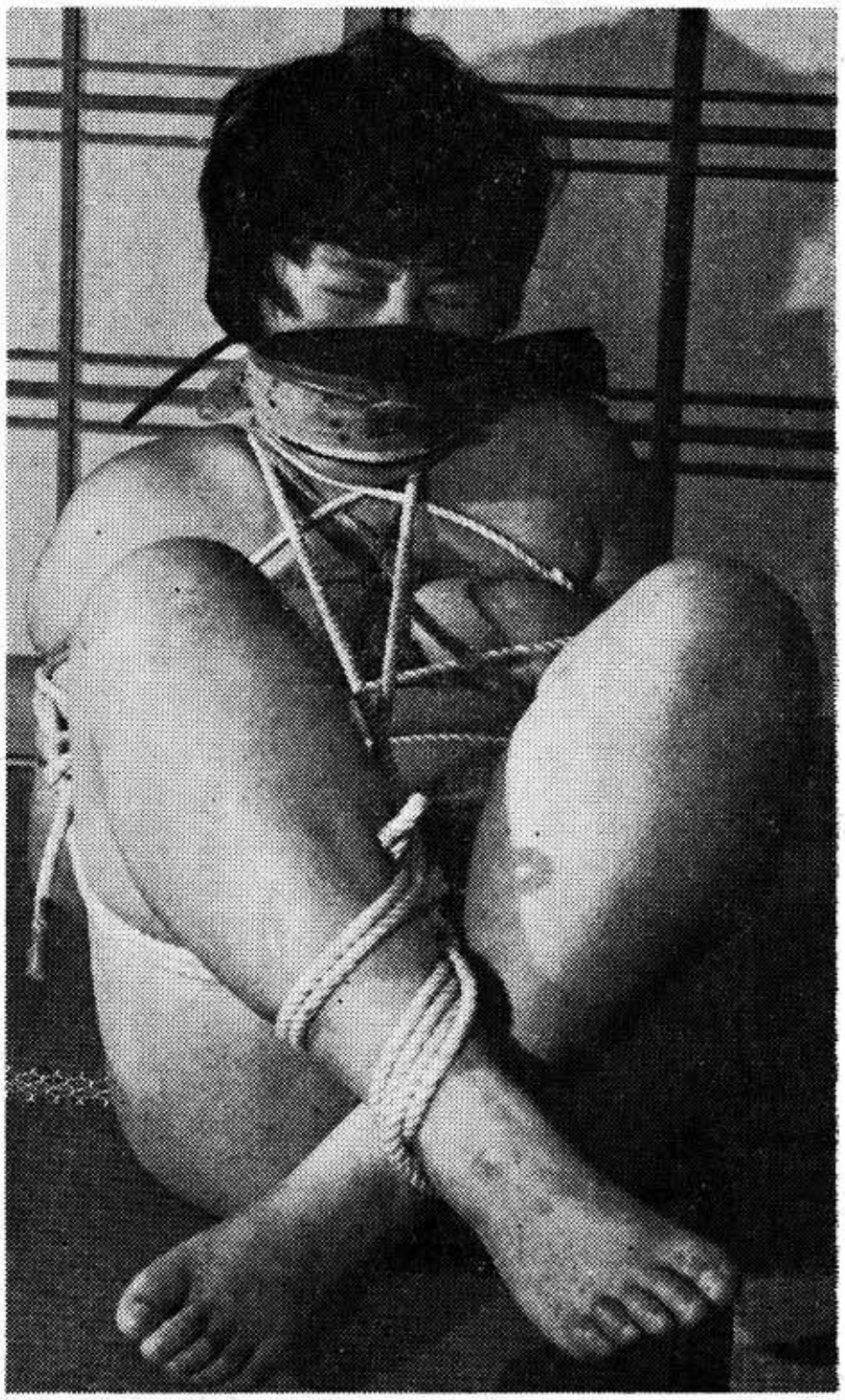
私は反射的に腕時計を見た。もう既に、彼女は列車に乗り込んでいる頃だろう。

幸いにして、今日の晩から翌朝にかけて、私の身体は、あいていた。しかし突然のことで二つの鞄の中は、一週間前、彼女を責めたときに用いたカメラや小道具が、そのまま未整理で、ほうり込まれていた。私はフィルムを補充しただけで車のトランクに入れた。

ラッシュアワーが過ぎると、あの雑踏が嘘のように静まり返っていた。駅前の駐車場もガランとしていて、タクシー乗場にも数台の車が人待ち顔に停っているだけだった。

頬を撫でる夜気も冷やっとしていて、ネオンの明りが瞬くように、うるんでいた。

駅の構内へ入ると流石に人が右往左往して



いた。でも立ち止まることなく、足早に、それぞれ思いの方向へ立ち去ってゆく。

時間かっきり、出札口から人の波が溢れてきて、その中に山口艶子は、いた。

Tシャツにビッグ・スカートという軽快な身なりで、大きな紙袋を一つ、提げていた。

私が片手を挙げると、彼女は、それを、すぐに見つけて近づいてきた。

一言二言、言葉を交わすなり、人の波に流されるようにして外へ出た。

急なことなので私は別にホテルを予約しているわけでもなかった。それに、時間も余りない。駅の裏手へ少し入れば、そんなホテルは軒を並べて、いくらでもあった。

山口艶子は、長途の旅の疲れなんか少しも外に見せずに頬をふくらませ、目を輝かせてついてきた。一週間前の徹夜のプレイが今更のように思い出されてきた。

いくら責めても、責めても、全身が縄によって燃えてくると、彼女の目がギラギラと光って、体毎、遮二無二、迫ってくるありさまは、それは凄かった。さすがの私も、たじたじとなり、朝方になって思わず、睡魔に襲われたものだ。だが今日は、もう時間が、おそい。夜を徹して明日の朝までプレイを、ぶっ通しで、やったとしても数時間に過ぎない。

「ねえ、あなた。あなたって、アンネの女、きらい？」

車に乗ってから、彼女の饒舌をひとわたり聞いたあとで、急に改まって、突然、艶子は妙なことを言いだした。

「ええ？　アンネの女って。ソレ、なんのことだい？」

「真面目に答えて。ねえ、メンスの女とプレイするの、あなた、おきらい？」

「そりゃ、好きでも嫌いでもないが、何故、今になって、急に、そんなこと聞くのだ？」

「私、今、メンスなのよ。だから、あなたにきらわれちゃ、いけないと思って……」

「ええっ、そりゃまた、いつから？」

「昨日からなの。私、この前にプレイして頂いてから、それが忘れられなくて、毎日毎日あのようにして、責められたくて仕方がなかったのよ。それが昨日メンスが訪れたら、急にプレイが恋しくなって辛抱できなくなって

しまったの。それで生理休暇を貰って、来てしまったってわけなの。御迷惑じゃなかったかしら？」

「生理休暇をね。そりゃ、僕はメンスだからって、別に、どうということもないが、貴女の方が不愉快ではないですか」

「いいえ、そうじゃないんです。私って、メンスのときは身体が熱くなって、どうしようもないんです。メンスのときの方が、とても興奮してしまうんです。ですから、もし、アンネの女が、おきらいじゃなかったら、プレイして下さい。お願いします」

「ふん、ふん、そりゃいいが、メンスのときに興奮するんだったら、また、一晩中、僕を眠らさないのと違うか」

当日の朝になって来潮したという女性で、電話で断ってくる人、待合せ場所まで来て、そのことを告げる人。或は途中で突然、来潮して、自分では恥かしいと言って、私に薬局へ生理帯を買いにやらせる人——と、さまざまだが、生理中の女性とプレイをしたのは、一再ではない。

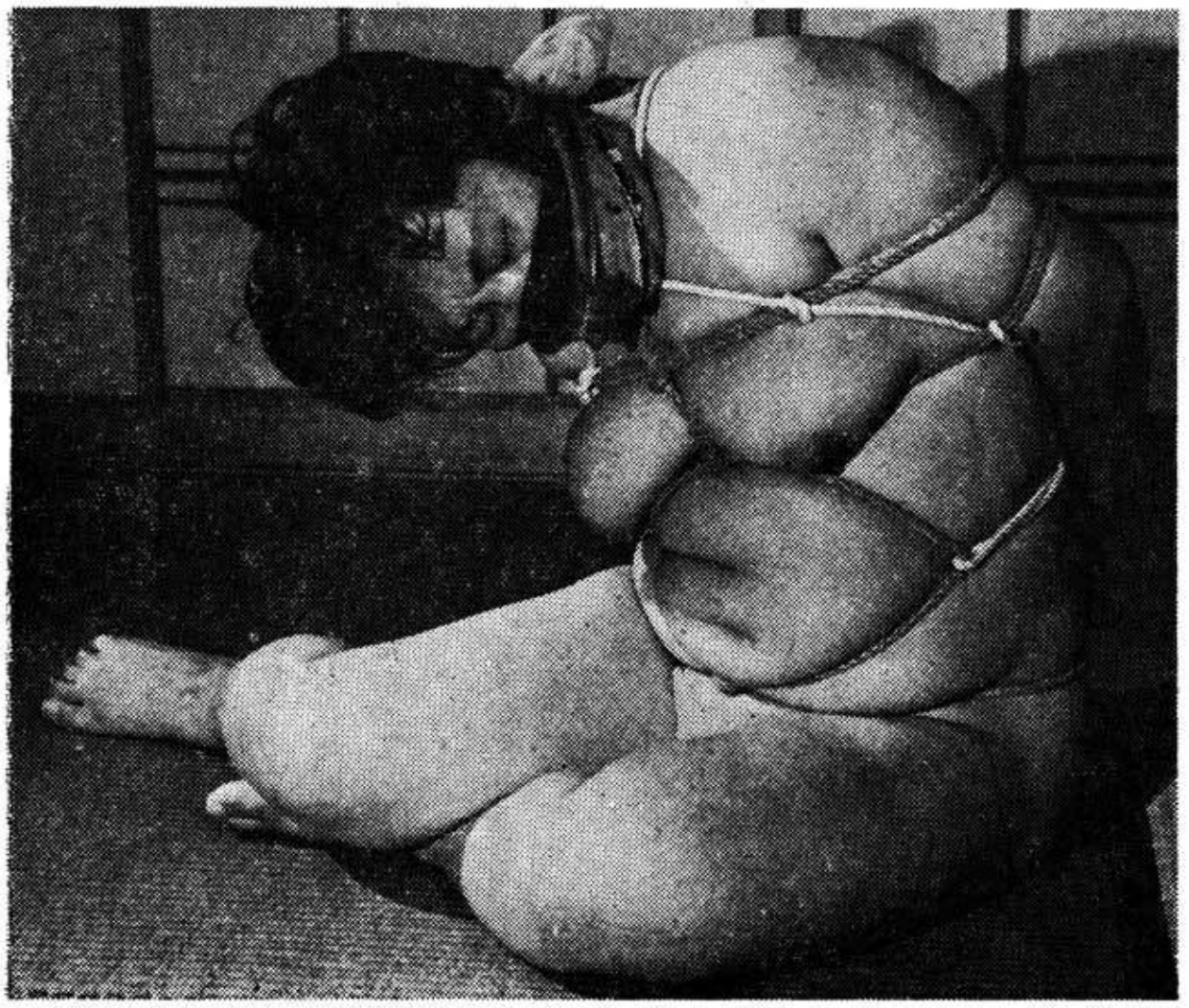
たった一回の例だが、メンスの真最中なのに、私に何も言わなかった女性がある。告げたら、私が嫌うとでも思ったのか、黙っていたお蔭で敷布から掛布団の裏まで真っ赤にしてしまって、洗濯賃を払うとき、こちらの顔も真っ赤になってしまったことがあった。

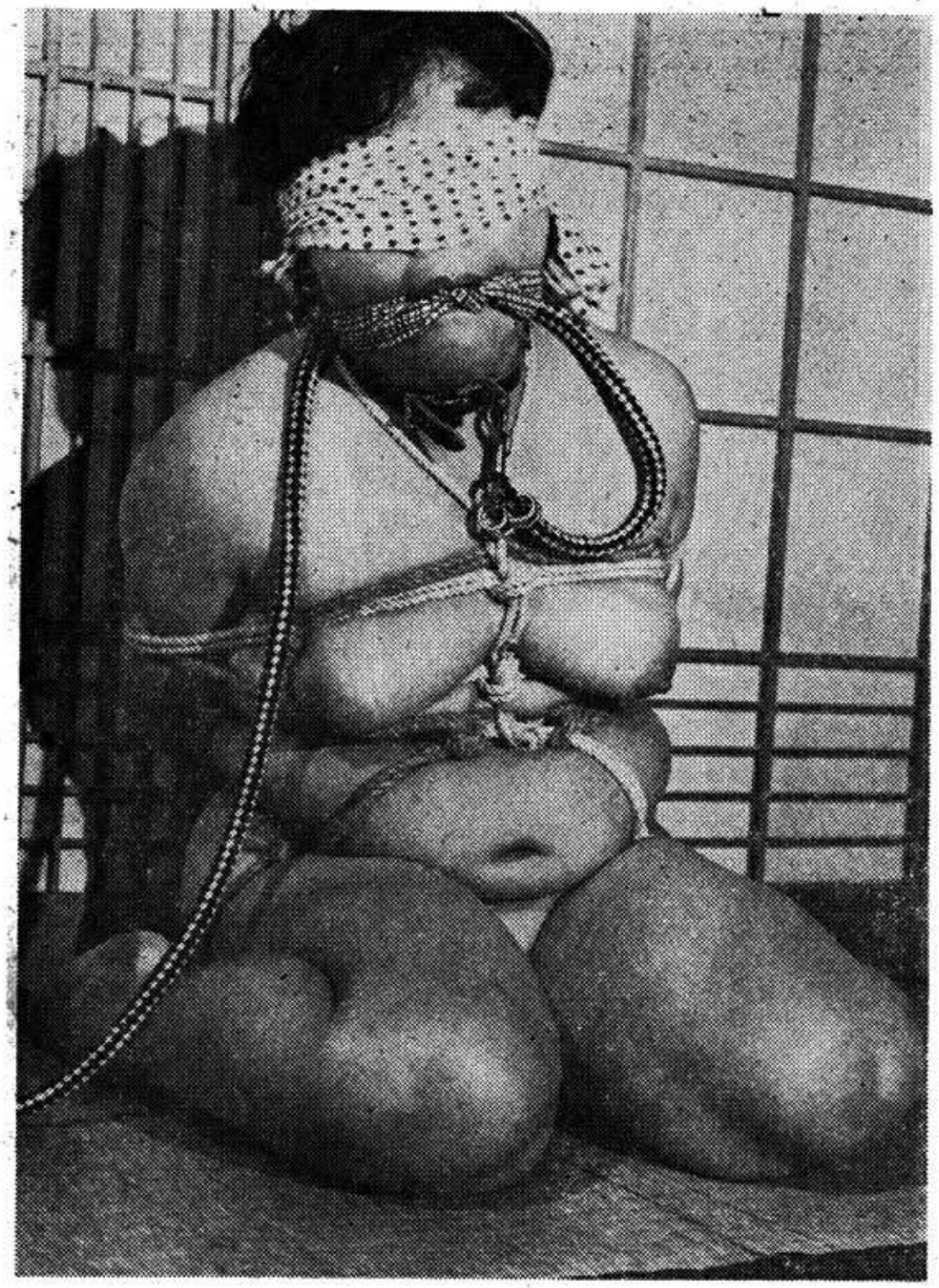
後で考えてみると、この女性の、あのときの、燃えようは、どうやら〝生理時昂進型〟のようだった。

今、山口艶子から、それを明らさまに告白宣言されてみると、私もいささか怖気をふるった。そうでなくても、この前、この76キロの豊満な肉体で、夜通し迫られて顎を出しそうになったのだ。それに、更に輪をかけて〝生理時昂進型〟が加わったとしたら一体、どんなことになるだろうか。

私は先ず、彼女を食事に誘うことにした。もう既に午後の九時すぎだから、勿論、私は夕食は済ましていたが、この前の別れ際の艶子の健啖ぶりを見ているとこれから、夜っぴいての連続プレイをやることを考えてみると、ここらで営養補給をしておく必要がありそうだ。

淑女に対して、「私、お腹、空いたわ」なんて自分の口から言わすなんて、紳士のエチ





ケットに反するだろう。

大川畔の瀟洒なホテルに落着いたのは、宿泊時間になる十一時に少し早かった。

山口艶子とは、もう初対面ではない。二人は、お互いに慣れている筈だ。殊に、彼女は私に対しても、プレイに対しても、この前の初対面のときのような固さはない筈だ。

そして、このカメラ・ルポを読まれる読者の方にとっても、〈山口艶子〉なる女性は、先月号（十二月号）に於いて、先刻御承知のことだから、私は今更、彼女のことを、くどくどと、説明することもないわけだ。

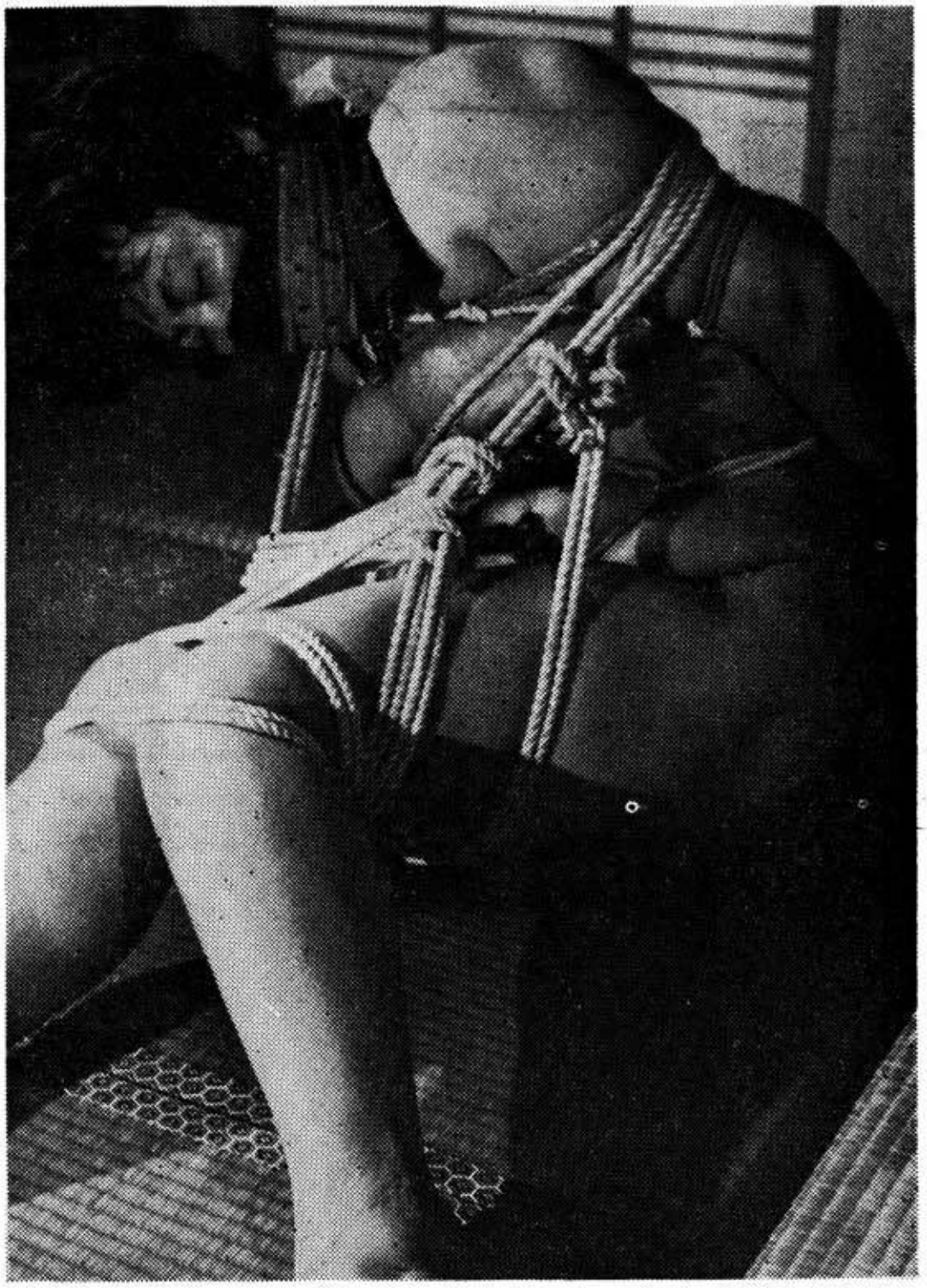
単刀直入、忽ちにして、SMプレイに入ったって、奇異な感を受けられることもないわけなのだが、さて、こうして、密室の中で、たった二人きりで近々と顔をつき合わしてみると、どう、責めのきっかけを見つけだしたらいいのか、私は戸惑ってしまった。

実のところ、八月の末、彼女の夏の休暇を利用しての京見物に便乗して、プレイの機会を持つという僥倖に巡り合うことが出来たのだが、この前のプレイの後で話し合った予定では、十一月の中旬に、奈良から法隆寺、それに飛鳥方面へ旅行したいから、そのときを利用して——と言うことだった。

それが、一週間後という、こんな早さで、しかも、何の考える余地もなく、足下から鳥の飛び立つように、再び逢うことになってしまったわけだ。勿論、私にしても、何一つ、腹案を樹てるヒマなんかなかったわけだ。

ただ、今日の昼前、彼女からの速達便を手にしたときの、かっと燃え上ったような心のたぎりの余燼だけが、身体の奥底で、まだ、くすぶっているような気がした。

私が山口艶子からの手紙を読んだとき、先ず目に浮んだのは、小山のように盛りあがった真っ白い女肉であった。〝白豚〟と呼ぶにふさわしい、むくむくした女体が縛られて悶える様であった。私は恥かしいことながら、



山口艶子が、今日来るのだ——という文面を読んだだけで、この前のプレイのことを想像して、下半身が熱くなってしまった。

それだからこそ、今、こうして、彼女と二人っきりで、面と向かって顔をつき合わしてみると、まだ、何もしないうちから、全身の血が下半身に集中したみたいになった。

責めのプランも、へったくれもない。とにかく、このセックスの塊のような（失礼）メス豚のところきらわず、責めて責めて、責めまくることだ——と思った。

そんな私の気配を察してか、彼女は紙袋の中から着替えを取り出そうとした手を一旦、止めて、いざるようにして、両手を背後の畳について、壁ぎわまでスルスルと退いた。

そうした警戒心の強い彼女の態度が、ようやく燃えはじめている私の心と体に油を注いだ。

私はパッと一跳躍すると、彼女の首に左腕を巻いていた。豊かな肉づきの肩と胸とが、私の脇腹に、ふわっとした気持のよいクッションを感じさせる。

「待って、待って。私、まだ、メンスの手当てをしなければ……」

全部を言わせず、私は彼女の唇を自分の唇で押えた。だが、彼女は私の頬を左手で突いて唇をはずし、私の胸を圧し上げた。

凄い力だ。なにしろ、体力があるものだから、私の上半身を浮かすようにして、両手を突っ張り、両足をバタつかせた。

これが初対面だったら、もっと静かに、私のするがままにさせていたかも知れない。だが、今日は、これで二回目だ。だから、彼女も心おきなく、私に抵抗しているのだろう。

今、生理の最中だという彼女。昨日始まったとすれば、今日あたり、一番、量が多いのではなかろうか。それが、八時間以上も列車の旅を続けてきたのだから、途中のトイレで何とかしてきたにしても、今、ここで、私の

目の前で、それらのすべてをさらけ出されるということは、若い女として耐えられない羞かしさに違いない。

しかし、こうした際、男の生理というものも、不思議な動きをするものだ。

女性が隙を見せて誘発し、男性が、その気になって最高に燃え上って襲いかかっていった際、これから生理のお手当を致しますから一寸、お待ち下さい——ではハイ、お待ちしますから、ごゆっくり、どうぞ——というわけには参らぬのが、男の体というものだ。

彼女が猛烈に抵抗すればするほど、意地わるく、彼女の一番、隠しておきたい秘密の部分を、暴き出したいという露悪的な気持が湧いてくる。

そんな気持が、私をして一段とハッスルさせるのだ。

突っぱねる手を払いのけ、バタつかせる足を膝の下に組みしいて、彼女の疲れを待つことにした。だが、私も彼女も洋服を着たままだから、もう、これ以上の進展はない。

私は右足を伸ばして乱れ篭を引き寄せ、その中の紐を右手に摑んだ。

数年前、彼女が盆踊りの夜、四人の青年に襲われて輪姦されたという光景が、ふと、私の頭をよぎった。或はまた、彼女も、そのときのことを思い出しているのではないのか。

私は彼女の左手首に紐の端を結んだ。

手首を背中へ回し、紐を襷をかけるように右肩から左脇へ通した。

片手を括ると、彼女の抵抗は急速に弱まった。私が手を伸ばすと、抗うふりをしながら自分で右手を背中へ回して、私が括り易いようにした。

彼女の両手を括ってしまってから、私は彼女の腹の上に馬乗りになって背広の上衣を脱いで部屋の隅へ投げすて、靴下を脱いだ。

ねっとりとした脂足の足の裏で、彼女の頬を挟みつけた。

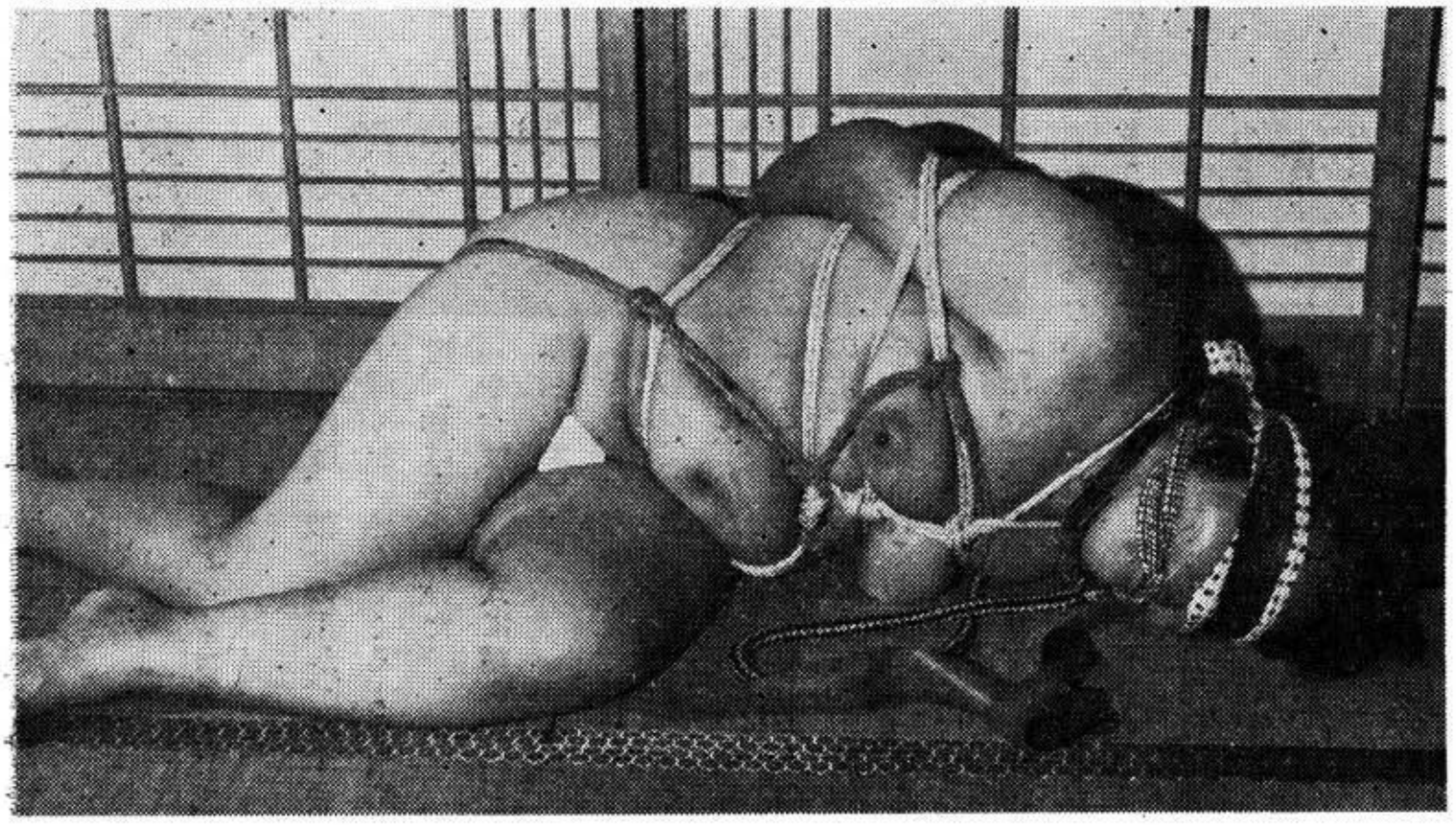
「いやョ、いやョ」

彼女は顔を振って、私の足を、払いのける。

太っているから、彼女のお腹は至極、跨がり心地がよい。足を伸ばして指で彼女の耳タブを、きゅっと挟んだ。

少し位、動いたって金輪際、放すものか。

「ねえ、おトイレへ行かして頂戴！」



私は、それには答えず跨がったままでシャツを脱いだ。さっきからの運動で暑くなってきたのだ。彼女の額にも汗が、にじんでいる。

「どうだ、暑そうだね。この洋服を脱がしてあげようか？　裸になったら涼しいよ」

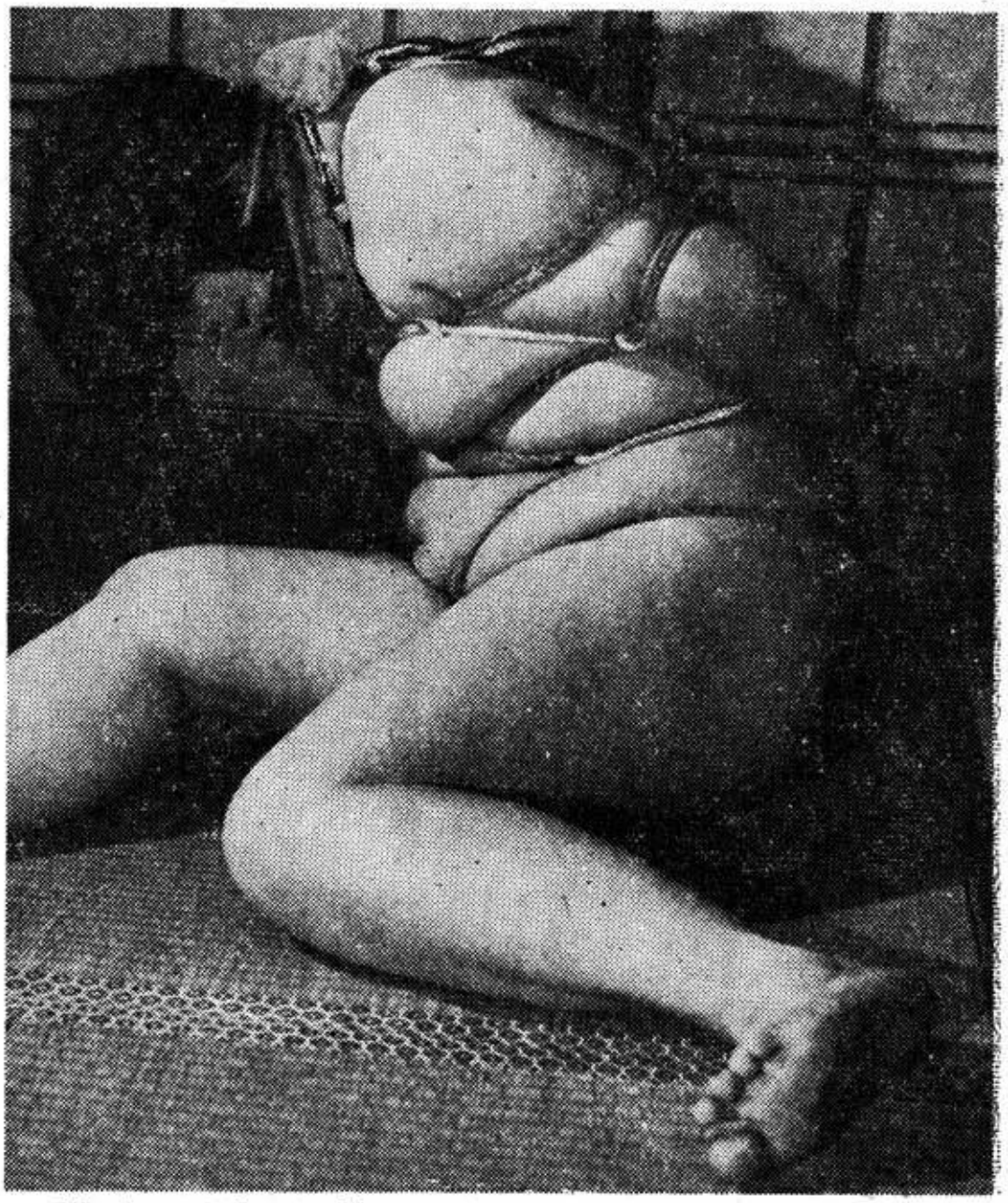
「ねえ、耳が痛いわ、放して……」

「放してあげるから、裸になるね」

私は腰をずらして、スカートのホックに、手をかけようとした。

「いや、いやっ、いやよ」

彼女は身をよじって急に暴れだした。



私は、そこが、どうなっているか見たかったし、彼女は、それを見せたがらなかった。

足が激しく動くので、私はスカートを脱がすことを諦めた。その代り、ビッグスカートを捲くり上げて手を差し入れることに成功した。そこには、ノーストッキングの逞しい太股があった。その奥には、ピンク色のバンドが肌に喰い込むように見えた。

私は、スカートのフレヤーの中に頭を潜り込ませていった。

と、そのとき、スカートを捲くりあげていた私の左手の甲に、鋭い疼痛が走った。

「痛っ」と思った。

いつの間に紐を解いたのか、彼女の右手の爪が、私の手の甲に喰い込んでいた。

「それだけは、イヤよ」

彼女は止どめを刺すように言った。

動けば、彼女の爪が、ますます深く喰い込んでくるようなので、私は手を引いた。

「やっぱり、本式に縛らないと駄目だね」

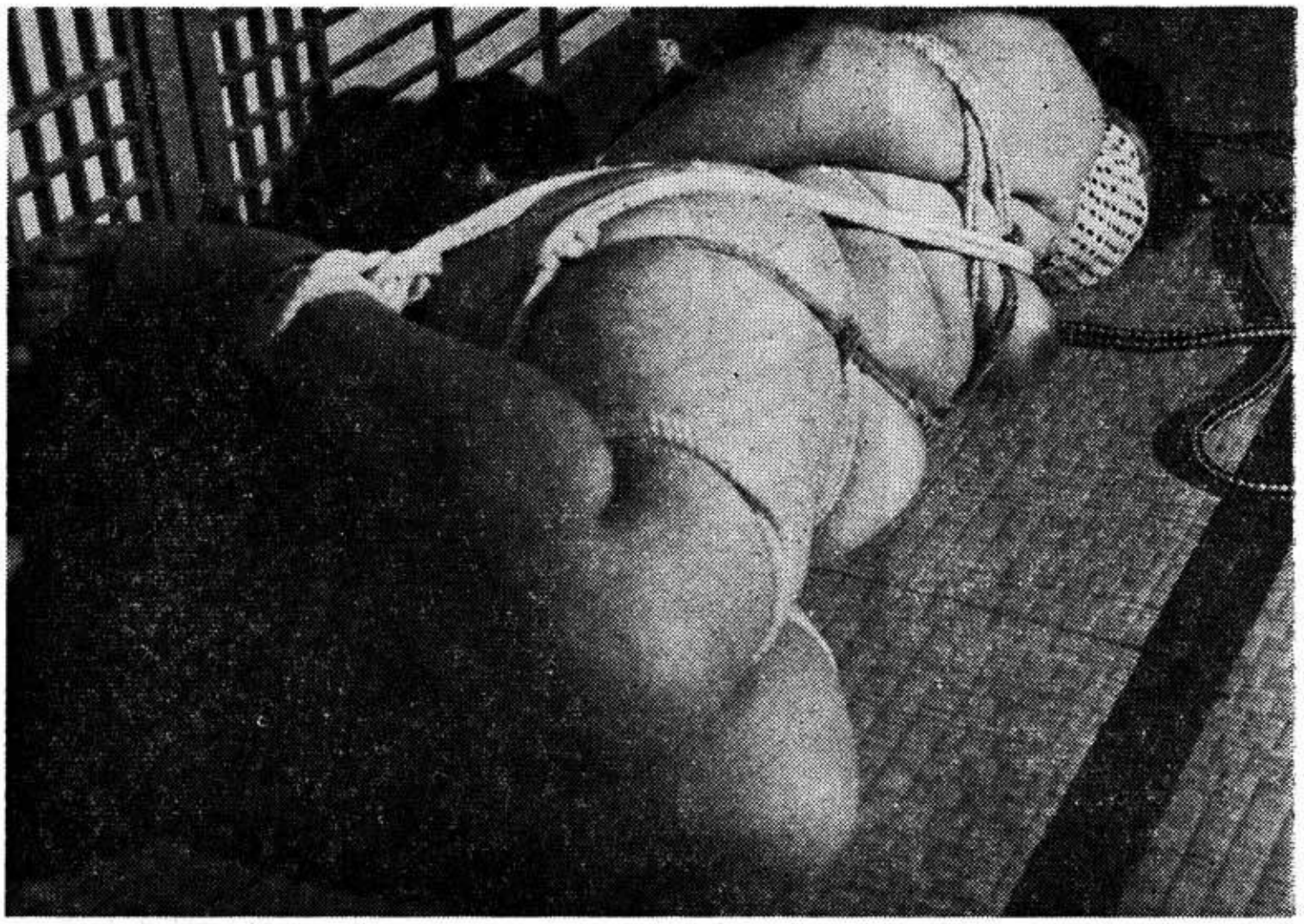
「そうじゃないのよ。私って、縛られてしまったら、くにゃくにゃに、なってしまうの。それは、この前のとき、経験ずみなのよ。だから、そうなった身体を今、見られるのは、とっても羞かしいわ」

「だって、この前は、すぐに縛らせたじゃないか。それに、あんなに燃えたところを、すっかり見せたくせに……」

「まあ、それを言わないで……。今日は違うのよ。メンスですもの、見せられないわ」

「見せられないけど、プレイだけなら、やるというのかい？」

私は自分の手の甲を見た。爪痕が残ってい



て、血がにじんでいる。舌先で舐めた。

彼女は左手首の紐も自分でほどいて、ハンドバッグを持つとトイレへ消えていった。

私は、この前、使ったままで押し込んである鞄の中のカメラや小道具を取り出して整理しだした。

この前に行ったSMプレイの延長のようでもあり、また、うんと場違いなような気もする。さて、これから、この女を、どのようにして責めてやろうかと、改めて思案する。

どうせ、ドロドロとしてケモノの肉と肉とが、ぶつかり合うような淫らで、とても陰微な泥沼に溺れることになるのだろう。

そうだとすれば、何も考えることはないのだ。思いのままに、なりゆきに従って、その退廃的な惑溺の中に、身をまかすだけで、よいではないか——そんなことを自棄的に考えた。

飼育だとか、調教だとか、そんな七面倒くさいことは考えることはない。

白豚は所詮、白豚なのだ。白豚はメス豚として成仏させてやるのが慈悲というものだ。白豚以外の何物でもないのだ。

そう考えると、私は気が楽になった。

とにかく、艶子という76キロの女体を縛って、いじめてやることだ。

☆ピンクSM映画

隣室の八帖の間を責場に使おうと、配光の準備をしているときだった。

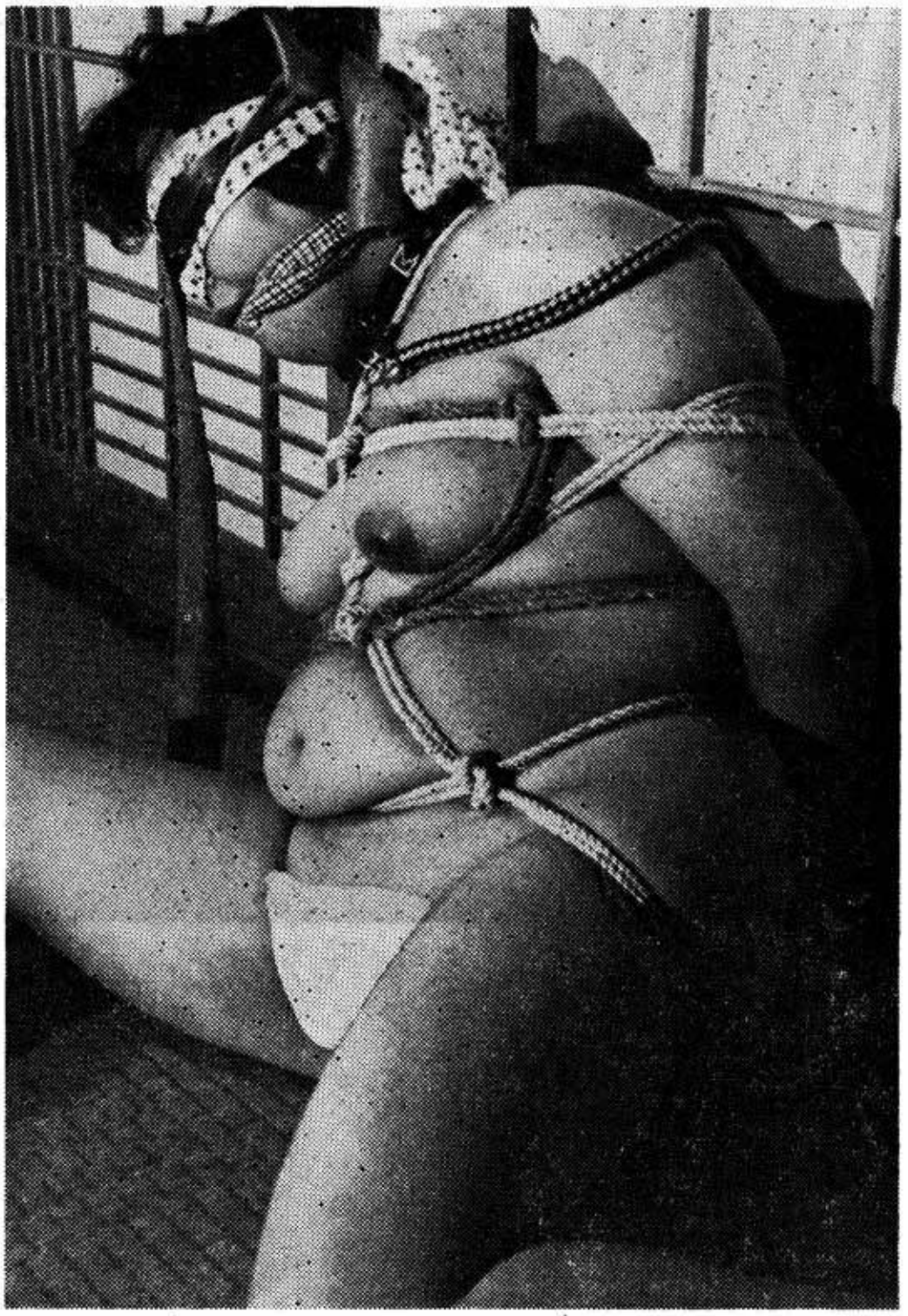
「あなた、早く、一寸、来てごらんなさい」

艶子の弾んだ声がした。

私は手を止めて走っていった。

「ほら、映画よ。ピンク映画よ」

テレビの画面では、白いシーツを敷いた布団の上で全裸の女が うつ伏せになって、もがいていた。男が背後から迫り、両手をうしろに回して縛っている。その縛り方が如何にも緩く、今にも解けそうだったが、そんなホテル備え付けのテレビの画面に、〝縛り〟が



出てくるとは珍しかった。

ピンク映画も、普通のことだったら、飽きられてしまって、こんな風にSMを取り入れてきたのだろうか。

そのうち、男は女の足や太股、お臍なんかを舌で舐めだした。女は擽たがって暴れまわり、男は喜んで執拗に、女の体のあちこちを舐めまわす。女の足を両手で捧げるようにして、舌で男が舐めているところなんか、多分に男性M的なのだが、画面は、そんなことは一向に、お構いなく進展していった。今度は男が太筆を持ちだしてきて、女の肌を、くすぐり初めた。

女を縛った縄は、今にも解けそうだし、それに、女の如何にも、わざとらしい大袈裟な体の動かしようや喘ぎ方が気に入らなくて、私は、余り感興も湧かなかったが、彼女は、じっと息をこらして眺めている。

やがて、太筆が女のお臍の穴をかきまわすと、女は大声を挙げて喚き、それをしおに、画面が消えた。

百円硬貨を二枚、投入口に入れて見るホテル備え付けのピンク映画だ。

山口艶子の胸が、大きく波打ち、目がランランと輝いている。映画に挑発されて、大分催してきたようなのだ。上体が、ぐらりと揺れて、私の方へ、もたれかかってきた。

私は、彼女の手を把った。

立たそうとするが、とても重くて動かすことが出来ない。私は、その場で彼女を裸にしていった。彼女は、もう、何の抵抗も示さない。忽ちにして、ブラジャーとパンティだけになった。いつの間にやら、さっき穿いていたピンクの生理帯は白い下着に変っていた。

私は白いロープを取り出して後手に縛り、ブラジャーを取り去ってから、たゆたゆとした乳房の上下に縄を回していった。きゅっ、きゅっと、要所要所で締めつけて肉のたっぷりとついた肌をくびると、艶子は目を閉じ、

両膝を開いたままで全身を支えて、上半身がゆらゆら揺れた。

今にも、私の方へ寄りかかって、倒れてきそうだ。それを押しかえすようにして、更に別の縄で先に縛った縄に編むように、ひっかけて締めつけてゆく。

物凄い緊縛感だ。

二の腕の縄と縄の間の肉が、ぷくっと盛りあがっている。針の先で突いたなら、忽ちにして赤い血が噴き出そうに、ふくれて、赤紫色に肌が変色している。

「ケ、ケダモノにして……」

彼女は呻くように言った。目は依然として固く、つむったままだ。

私は犬の首輪をはめ、曳綱をつけた。

「ほら、お前は白豚から犬になったんだぞ」

「もっと、もっと、乱暴に扱って。お願い、このぶくぶくと肥え太ったメス豚を、暴力で犯してほしいの。乱暴にしてほしいの」

「メス豚じゃない。お前は犬になったんだと言ったろう。それ、ワンと吠えてみろ」

私は艶子の上半身を両手で抱いた。

むっくりと飛び出た乳房の先の乳首が腕の内側に触れた。彼女の全身が思わず、ビクリと震える。豊かで温かい肌の感じだ。

私は掌を丸い肩先から胸、お臍——へと、這わしていった。そして指は当然のように白いスキャンティに、かかった。110センチの逞しいヒップだから、その布片は、如何にも小さく見えた。この前と違って、今度は素直に私の手で下着をとらせた。

今や、彼女は完全に裸になってしまった。

見事な眺めだ。

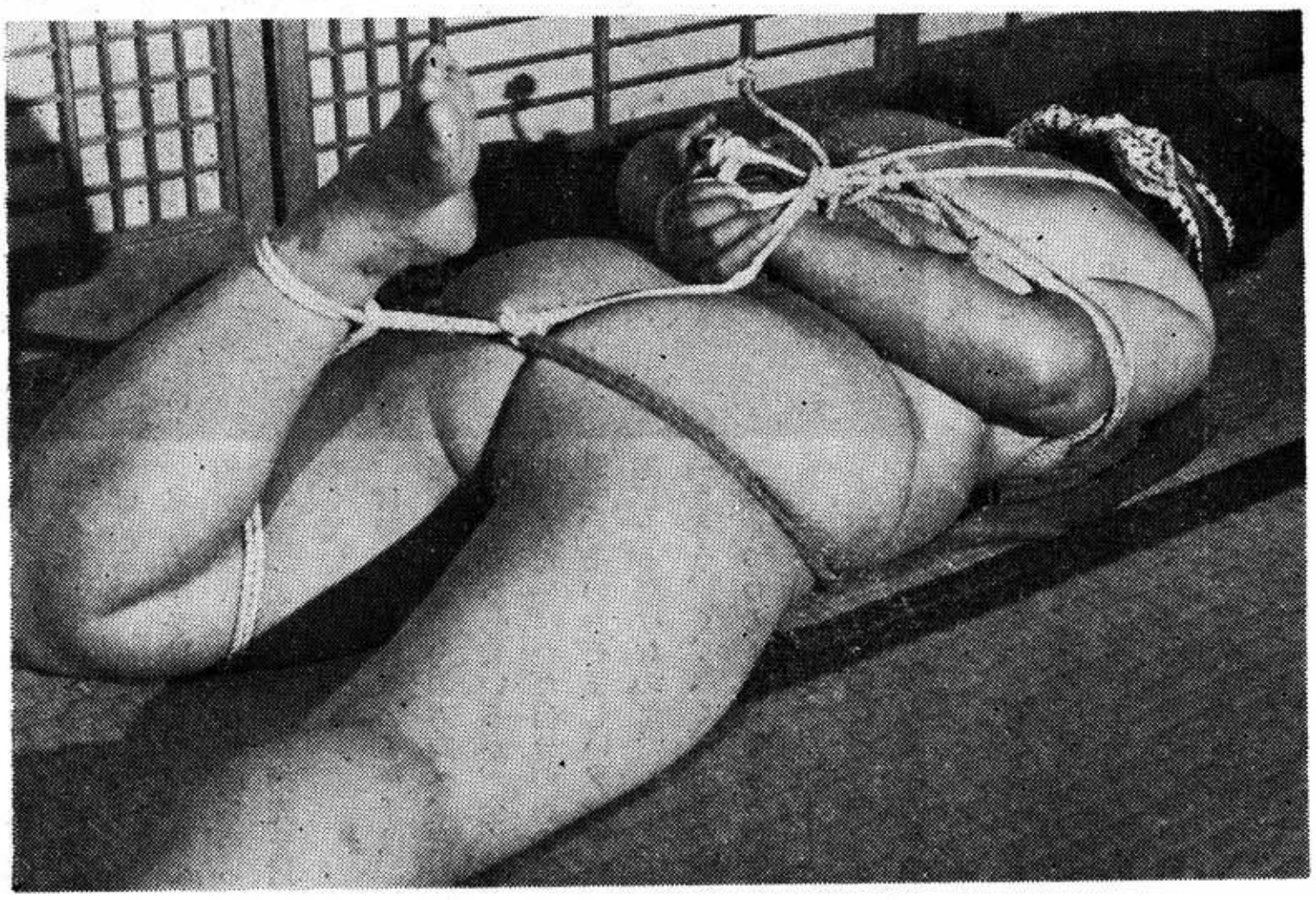
私は惚々と、艶子の全裸を眺めた。

正面向いた女体の、どこもかも白くて、シミ一つない、見事な裸身だ。

その真っ白い雪肌が、むごたらしくも縄によって俵のように、くびれているのだ。

私は、やおらカメラを取り上げて左手にグリップの革を通して構えた。

「フフフ、これから、そのぶくぶくと肥えるだけ肥えた



素っ裸の白豚の身体を、写真に撮ってやるからナ。うんと泣いて、悶えてみせないか。どうだい、アップにしようか?」

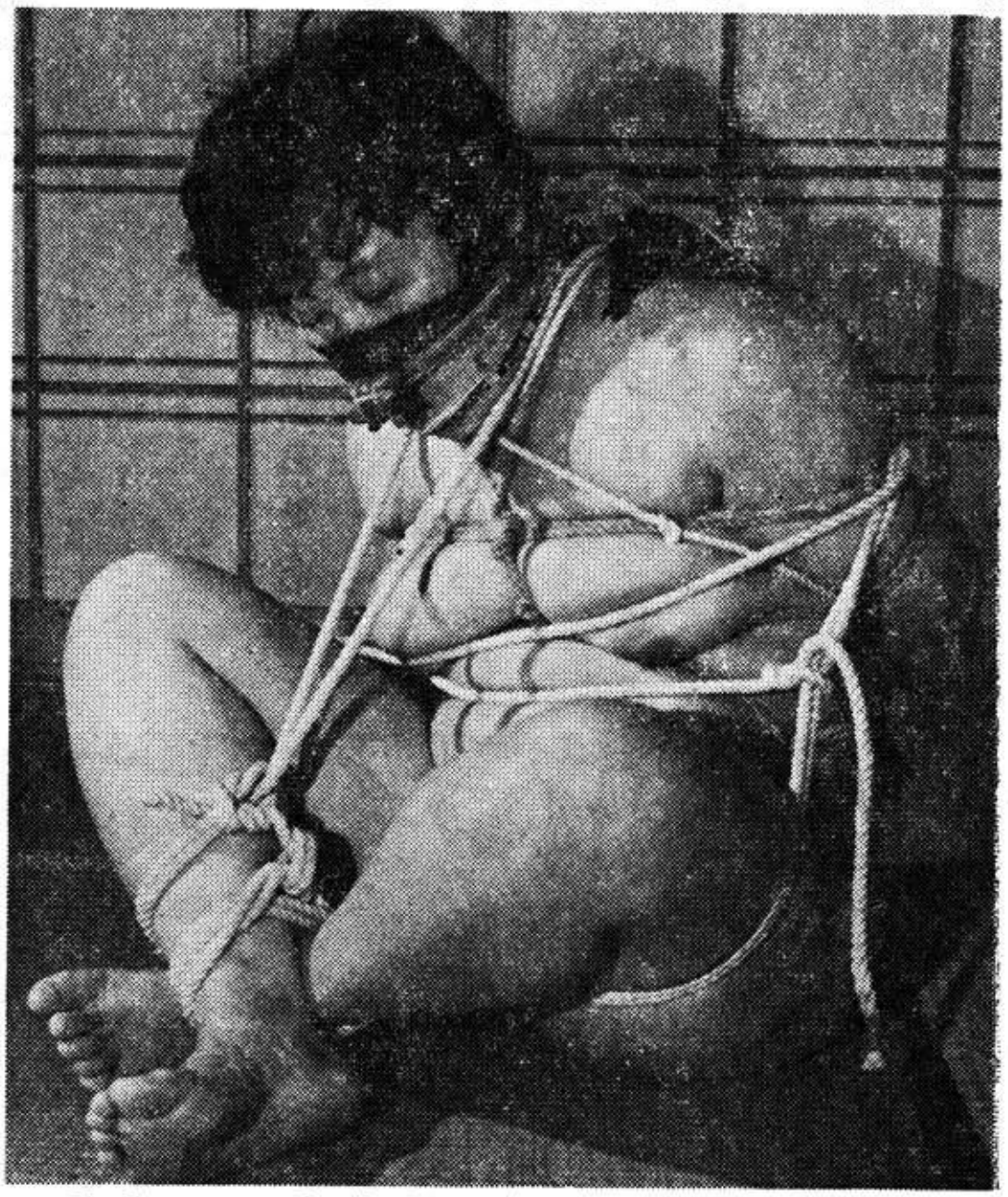
「ネ、ネェ、目をかくして…」

私は彼女の願いに反して、そのよく喋る口に浴衣の紐で猿ぐつわを噛ました。この女の口はよく喋り、そして、感極まったら、どんな羞かしいことでも大声で叫ぶのだ。

それから、目かくしの手拭をした。

これで目も見えず、口もきけないのだ。

私は、ゆっくりと背後へまわって、逞しいお尻を見る。むっくりした肉の丘だ。



そっと、手で白い肉塊に触れてみる。

彼女は、何をされるかわからないので、ビクッとして全神経を背後に集中する。その隙を狙って、私は、そっと手を脇から回して、前の方を探った。

あれれ、これは予想以上に凄い。

虚をつかれて、彼女は私のなすがままになり、猿ぐつわをされた口で呻きながら、私の胸の中に倒れ込んできた。

縄で完全に縛られてしまうと、これほどまでに激しく変化してしまう女体も珍しい。

私の眼は艶子の全身を舐めまわし、両手は せわしく動く。私は生ツバを飲み込んで、やおら腰をずらして脚を彼女の股にかけて、押し開こうとした。彼女は私の悪企みを察して、ぎゅっと両膝をつぼめる。

私は右手を伸ばして、お臍の脇から太股のつけ根の陽の当らない雪のような肌に、指先を這わしていった。

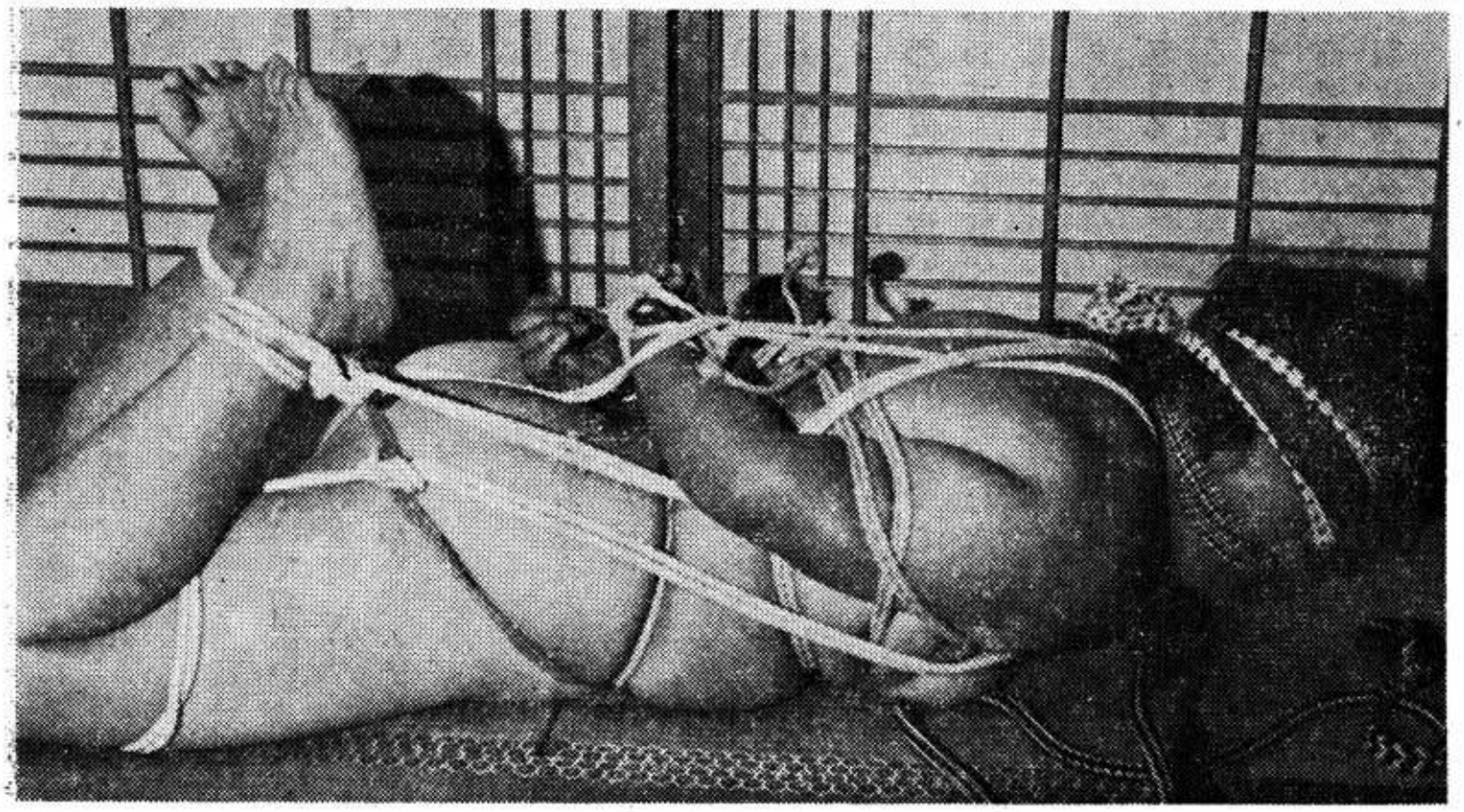
目隠しをされている艶子は、私が指先を、どの方向へ、どのように動かしているか、全く、わからない。ただ自分の肌の触感で、そのおぞましいタッチを感じとるだけなのだ。

「ううう、くくく、ふーう」

猿ぐつわの下で、呻き声がする。多分、くすぐったい——とでも言っているのだろう。

途端に、彼女の両膝の力が少し緩んだ。

その隙を狙って、私は左足と右手とで、ぐいと彼女の股を開かせた。瞬間、タンポンの細い糸が見え、その糸の先にパイロットの小さな布片がポツンとついているのが、私の視線をチラッとよぎった。だが、彼女は、すぐさま両腿を力一杯、合わせてしまったので、



忽ちにして、白くて豊かな肉の膨隆のなかに、それは、かくれてしまった。

私の網膜の底に、残像として映ったタンポンの白い糸は、とてもエロチックで陰微だった。

普通だったら、なかなか若い女性の生理時の、そんな場所を覗き見るなんて、出来たものではない。しかし、私の心はそんなチラッとした瞥見だけでは気はすまない。彼女の言うように、乱暴な仕草で秘奥を暴き、電光の下にさらけ出してやりたい——という衝動が、耐えがたく湧き起ってきた。

それにしても、私の目の前に縄で縛られて横たえている白い肉塊の、なんという淫猥なことよ。よくもまあ、若い女の身空で、羞かしげもなく、ここまで肥満させたものだ。

まさに、女の肉塊と呼ぶにふさわしい淫猥そのものの白豚の姿なのだ。

縄でくびれていても、たわわな重味に余って、だらりとたれた乳房は、あの洋服を着ていたときの上品な山口艶子の肉体の一部だとは、とても思えない淫らさなのだ。

私は、この乳房を責めたくなった。いや、乳房ばかりじゃない。お臍も、お尻も、太腿も、どこもかも、責めまくりたかった。

私はムチを手にして立ち上った。

「さあ、自分で膝を開くんだっ」

第一打が、臀部の付け根へ発止と当った。

「うっ、うう、うー」

彼女は大仰に喘いで身をよじった。腰のところに、彼女の性感帯があるのを、私は、この前のプレイのときの実験で、よく知っていた。更に、第二打を、そこ目がけて狙い打ちにムチを当てた。

ピチッ——心気味よい音だ。

跳ねるように彼女の全身が躍動する。

「脚を開け、脚を開いて、何もかも、すっかり見せるんだっ」

それから後は、もう、尻といわず、太腿といわず、乳房といわず、ムチの連打を、処きらわず、浴びせた。

彼女が転げまわって背中を見せれば、私は遅しく盛りあがった臀部に、ピシッとムチの穂先をきめつける。ぶ厚い女肉にムチが、ぶち当る確かな手ごたえ。手に響いてくる手ごたえは、なんという快さであろうか。

ムチのピシッ、ピシッという手ごたえの快

さに酔っているうち、あらあら不思議、あれほど堅く締めていた彼女の両膝が、徐々に、徐々に緩んできたではないか。

その太腿の内側、外側と交互にムチを当てる。なにしろ、肉がたっぷりとついて幅広いものだからムチ打ち甲斐があって素晴しい。

太腿の外側から尻の脇へ、力まかせにムチを揮ったときだった。

「ふーむ、むむ、ううーむ」

一きわ高い呻き声が洩れたかと思うと、口に噛ました紐の端からタラタラと涎が糸を引いて垂れた。

畳の上へ後頭部で支えて顎が、のけぞる。突っ張った両方の太腿が、ブルブルとケイレンしているのが、はっきりとわかる。

腰が畳から浮いて、あれほど、しっかりと合わせていた膝が開いてきたではないか。

私はムチを捨てて前へ回ってみた。

タンポの糸が、はっきり見えている。

私は糸の端に指をかけてソロソロと引いてみる。彼女は腰を浮かしたまま、完全に、のけぞったブリッジの格好だ。

そろりそろりと引きずり出してから、一気に引き抜いた。血のにじんだ綿球が、目の前で、ぶらりぶらりと揺れている。

メンゼスの女が好きか、嫌いか、今は、そんなことを言っている余裕はなかった。彼女の太腿の内側のケイレンだけが、私の太腿に身ぶるいするような快さで伝わってきた。

とにかく、凄い反応だ。

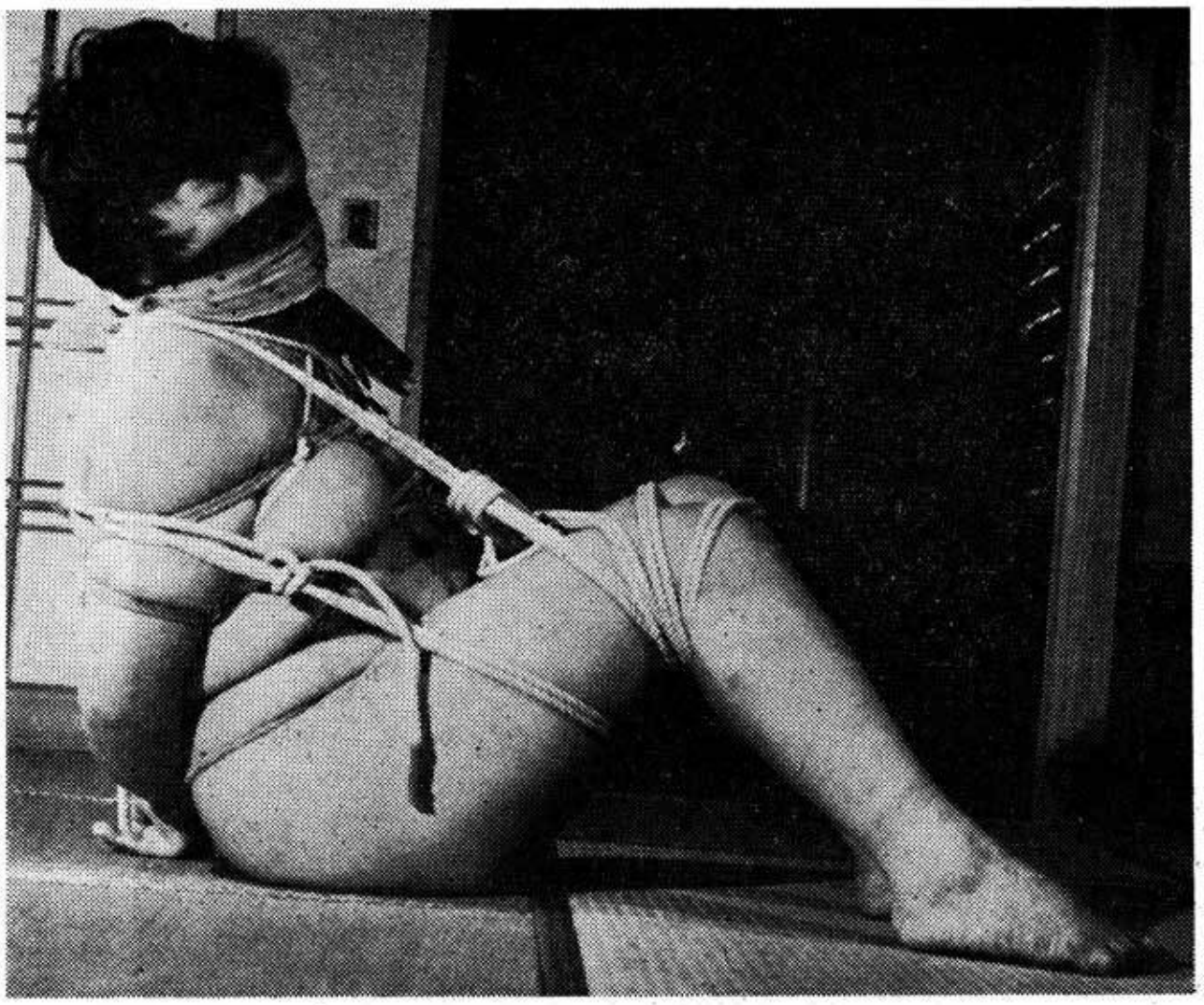
こんな女も珍しい。

私は猿ぐつわの紐を解いてから、目隠しの手拭も取り除いた。

「ほら、目をパッチリと開いて、僕の顔を見てごらん」

「いやョ、いやョ。そんなこと言わないで。それより、もっと、乱暴に扱って……」

艶子は一寸、目を開いたが、すぐに閉じてしまう。瞑目していることで、羞かしさが、すっかりなくなってしまうとでも思っているのだろうか。



私は彼女が目を開いたなら、血のついたタンポンの綿球を無理にでも見せてやろうと思っていたのだが、それも出来ない。

「じゃあ、お望みに従って、乱暴に取扱ってあげましょうかね」

私は山口艶子を乱暴に取扱うべく、やおら迫っていったのであった。

☆血みどろのプレイ

一週間前に、山口艶子とSMプレイをしたとき、徹夜で幾度となく挑んだにも拘らず、私は遂に最後まで果てずじまいだった。

だからこそ、朝まで元気でおれたのかもしれない。この超弩級型のスタミナの持主に、まっとうなことで立ち向ったところで、所詮刀折れ矢尽きるのが関の山であろう。今となっては、〈接して洩らさず〉。この手でゆくより仕方がない。幸いにして、私は完全に自分で自分がコントロール出来た。だから、いつも、最高のコンディションで、元気でおれたし、SMプレイに対する感興も、最後の最後まで、失わずにおれた。

それと、一番よいことは疲れないことだ。疲れてしまうと、どうしても意欲が湧かなくなってしまう。男性というものは、いつも、そこが充実していないことには、SMプレイの迫力も期待することは、むずかしい。

今、山口艶子は、生理時の昂進と、SMピンク映画鑑賞の挑発と、それに縄で本式に縛られた興奮とで燃え狂っていた。

〈ケモノのようにして犯されたい〉と、真剣に願っている女が、目の前で喘いでいる。

お臍の深い窩を中心にした幅広い腹部が、一定のリズムで、膨らんだかと思うと、また大きく凹んでいる。凹んだかと思うと、忽ちにして、むくむくと膨らんでいるのだ。

私は風呂へ行きたい——と思った。

やはり、〝血〟に対して、先天的に嫌悪の感があった。早く洗い流したいと思った。

女性がアンネであれば、それは仕方のないことだった。文字通り血まみれのプレイだ。

「おい、艶子、風呂へ行こうか」

彼女は私のその言葉で初めて目を開いた。

「私も、それを考えていましたの。お風呂だ

ったら、汚れても、お湯で流せますものね。でも、女の私の口からは、お風呂へ行こうって、言い出せませんでしたわ」

彼女は何か誤解していたらしい。浴室へ行って、メンスの排泄物で汚れるのも心配しないでプレイをしようと言っているのだ。

私は彼女の縄を解いた。

二人で裸のまま、浴室へ飛び込む。

「ねえ、私をケモノのようにして、乱暴して下さらない？」

ひとわたり身体を洗ってから、彼女は、私に、そんなことを頼んだ。よくよく最初のときの体験が忘れられないのだろう。

ここでだったら、生理の汚れも、気にしなくてもよい。すぐに湯で流せばよいのだから。

だが、私も私だが、彼女も彼女だ。よりによって、こんなときに、こんなことを行うなんて、よっぽど、どうかしている。

浴槽の縁に両手を支えさせて彼女に、ケモノスタイルをとらせる。

アブの泥沼の中に、とっぷりと漬って、全身で惑溺してしまうと、もう、行き着くところまで行き着かない限り、後へは引けない気持だ。塚本鉄三という男の、そんな附きあいの良さが、SM趣味の紳士淑女にとって一つの魅力になっているのかも知れない。

縛っていなくても、そんなケモノスタイルで背後から責めるというだけで、彼女は非常にエキサイトした。

こういうラーゲだと、少しも痛くないと言った。そして長くて執拗で貪婪だった。

いつ果てるとも知れぬ彼女の体力に、私の方が圧倒されそうだった。

「ケモノになりたいの。私は、ケダモノにしてほしいの。ケダモノに、ケダモノに……」

彼女は夢遊病者のように叫びつづけた。

相手は、メンスの女——。

それは、凄く、異妙なことを行っているような薄気味わるい気持だった。

これは白豚だ。人間の女ではない——。そう思い込むように努めた。

実際、この大きな引臼のような臀部、これ

は人間の物ではない。まさに動物じみた生々しい巨大さなのだ。

私は堪能して、そのケモダノを責めることを中止したが、彼女は、まだ、もっと継続して欲しいような素振りなのだ。だが、私は、中腰のままの不安定さに飽いていた。

あとは、ベッドへ行ってから——ということで、私は浴室を出たのだった。

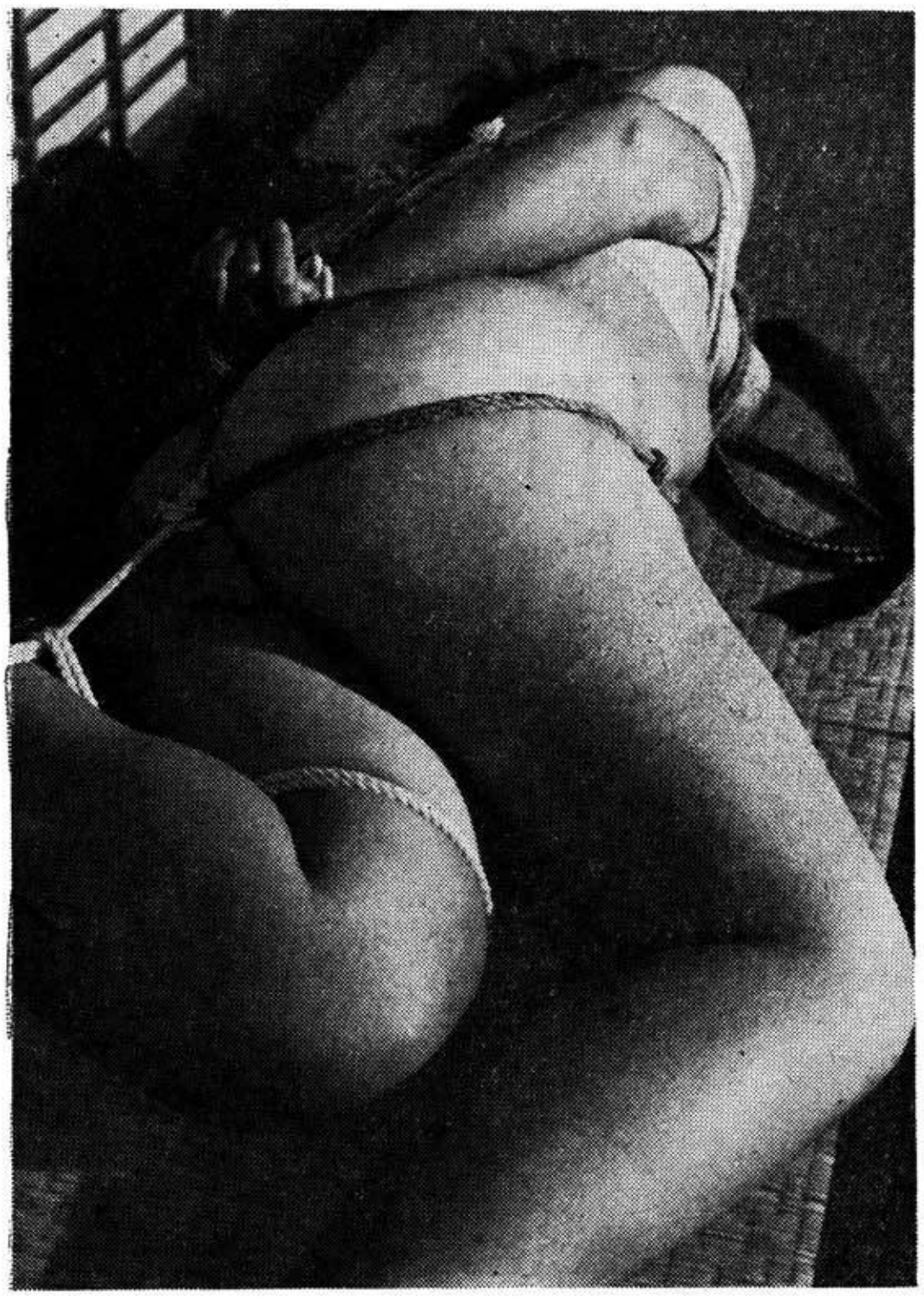
ベッドで横になっていると、彼女は浴衣を羽織ったままで、すっと、私の傍にすべり込んできた。備えつけの浴衣では、前が合わさらないくらいに体格がよいのだ。大きな乳房が、こぼれるように、襟の外に、はみだしている。しかし、不思議なものだ。こうして、浴衣をまとっていると、全裸のときのような〝白豚〟という気がしないのだ。

浴衣の襟の間から匂ってくる湯上りの、ほのかな体臭は、やはり若い女のものだ。

この前、第一回の逢瀬のときは、私も気負っていたし、彼女も私に対する恐怖にも似た警戒心を抱いていたが、今日、第二回目ともなれば、お互いにリラックスしていた。

いわば、今日は、山口艶子が思いがけなくも、突然、私の手元へ飛び込んできたような形なのだ。今日のヒル、彼女からの速達を受けとるまでは、私は一週間前の第一回のプレイから、こんなにも早く、再び逢うことが出来るなどとは夢にも考えていなかった。

艶子は頭を私の腕の上に乗せるようにして私に添寝した。彼女の寝方というのが、それは面白いのだ。頭の方を先に、すべり込むように挿し入れてきてから、次に下半身を持ってくるのだ。



「艶子って、太っている割に、身体がやわらかいのだね。やはり若いからかナ」

「私、学校時代、バレーをしていましたし、今でも、運動はしていますのョ」

彼女はニッと笑った。唇の脇の両えくぼが両側同時に、くいっと深く窪むのが、とって

も可愛いい。身体は大きいけれど、素朴で、無邪気で、そんな感じに好感が持てた。

「艶子は、可愛いい、可愛いい。可愛いい娘さんだ」

私は彼女の房々した髪を手で愛撫した。

彼女は顔を私の胸に押しつけてくる。

艶々とした丸い肩が襟からのぞいている。その健康そのもののような輝く肌の白さ。

私は、その丸々とした肩先を撫でるようなふりをして浴衣を押しひろげた。肉のたっぷりとついた真っ白い円筒のような太腿が、私の目の前でスーッと姿を現わした。

彼女は私に対して、今や何の警戒心も持っていない。太腿は、いささか開き気味にさえなっているのだ。ついさっき、私に対して行った激しい抵抗ぶりは、嘘のように思える。

抱き寄せると、彼女も自分から、積極的に両腕で、すがりついてきた。

「可愛いい、可愛いい。艶子は可愛いい」

口に出して、そう言うと、私にすがりついた彼女の手に力が入った。

このよく太った娘を、白豚とか、犬とか、ケダモノとしてではなく、人間の女として、愛したいという気持になった。

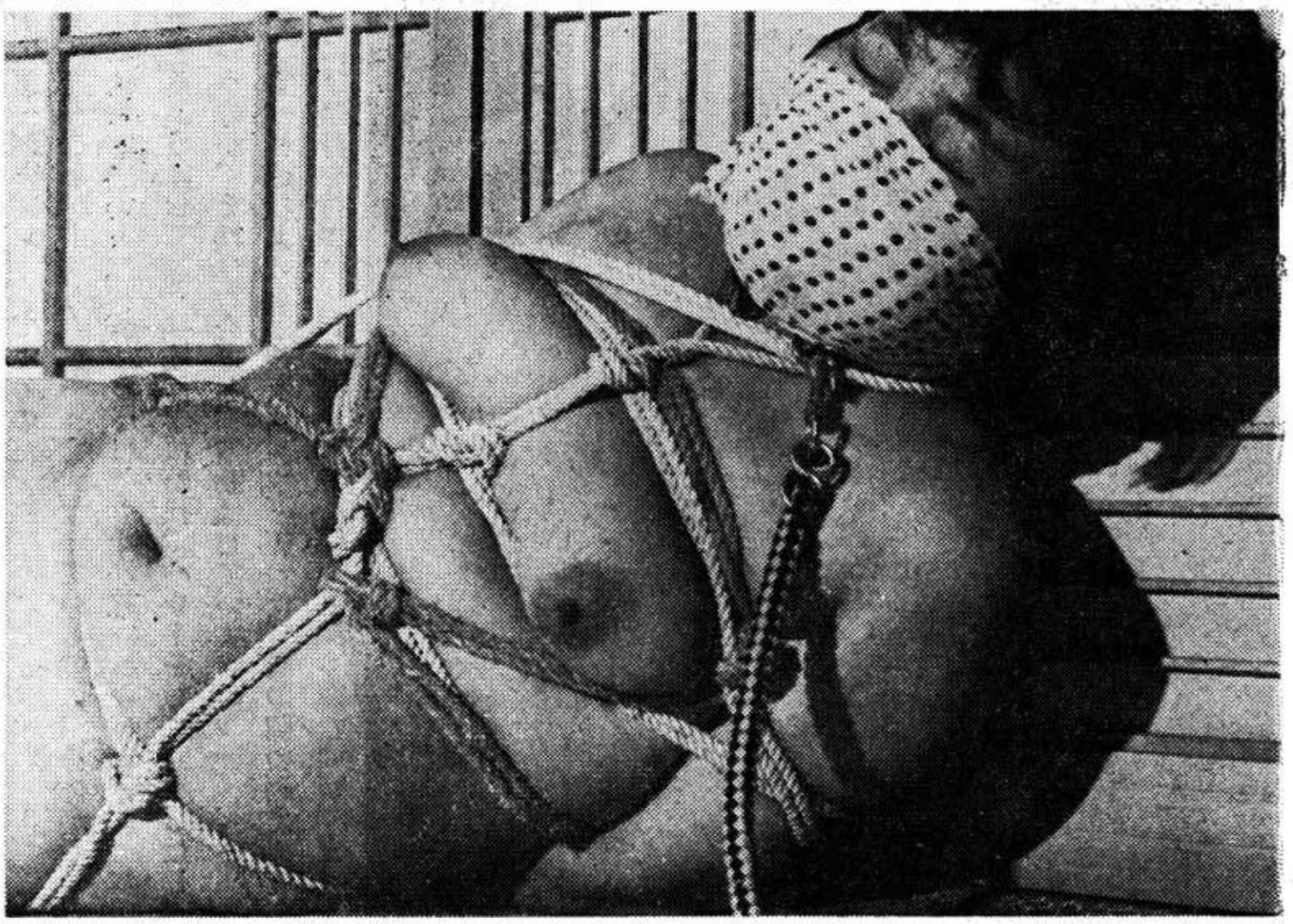
「ねえ、縄のアト、すっかり、とれてしまったわ。こんなに……」

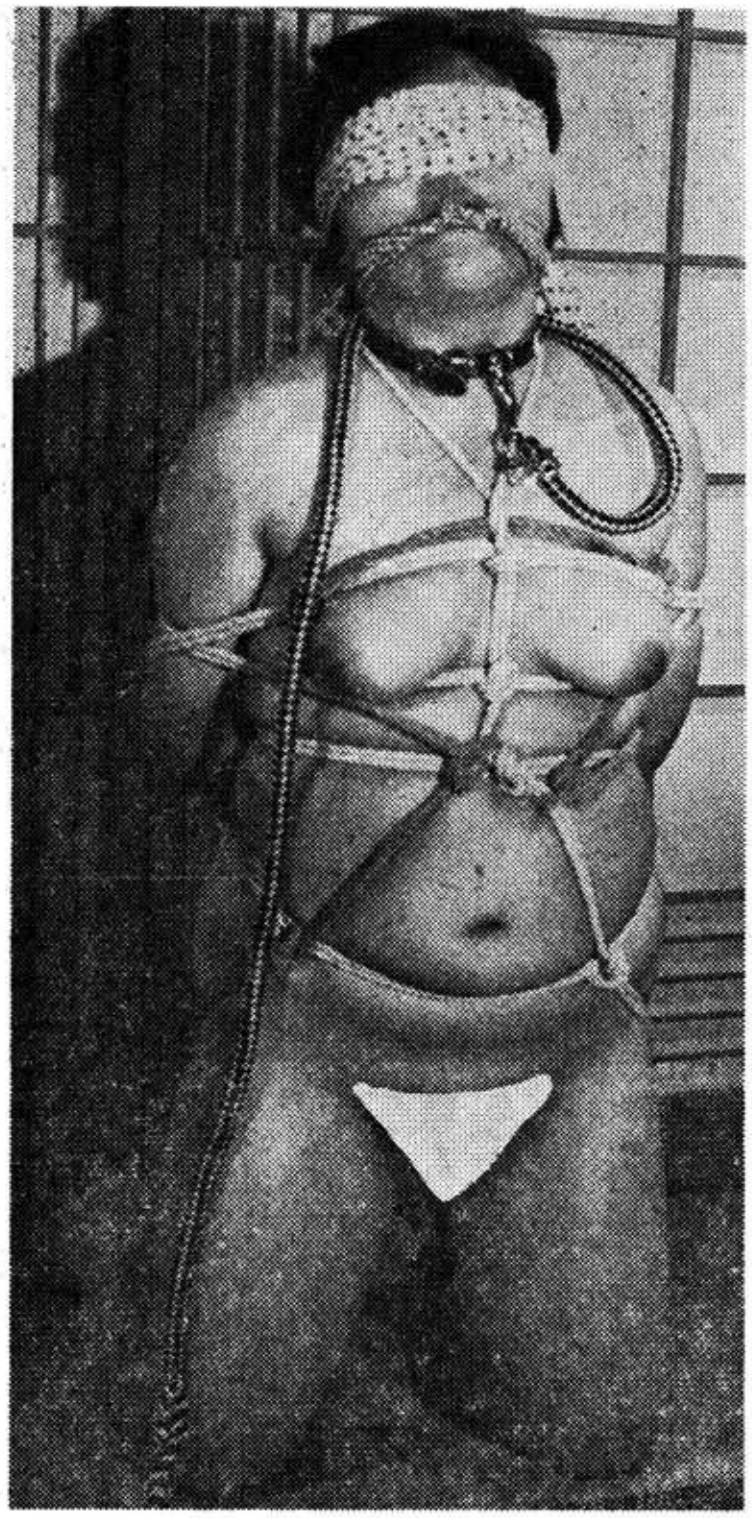
彼女は私の目の前に手首を出して見せた。

手の輪郭の外側が透明なガラスでも見るような手の白さなのだ。体格に比較して、華奢な感じの手の指だが、この爪が何度も何度も襲ってきて、遂には私の手の甲に、深い爪アトを残してしまったのだ。

でも、縄を解くたびに、いちいち、縄の痕が消えたことを報告するあたり、とても、いじらしい感じがする。私に対して、爪を立てるのなんか、やはり女としての身を守る防禦本能なのだろうか。

飼犬は主人に対してジャレついてきて、軽く歯を当てたりしても、決して、本気で噛みついたりは、しない。ましてや、人間の女性が畜化して飼育動物となっ





た場合、主人である男性に真剣で立ち向かってくることはない。

私の目にも、はっきりとわかるくらい、自ら縛られ易いように、それとなく手を後へ回してくるものなのだ。それが、マゾの本性というものなのではないか。

それは、Sの立場の男性についても言えることだ。わざと相手の女性の肌に傷つけたり殊更、局部的な疼痛を与えたり、機能的な障害を後々まで残すようなことを絶対にするわけがない。あくまでもSMプレイであり、遊びであるのだから、お互いの快感を昂める努力はしこそすれ、逆効果になるようなことはする筈はないのだ。

今、山口艶子は、この前の私の態度に安堵したのか、全身を投げだした格好で、私の傍に身を横たえていた。

「今日は、また突然だったね。私がもし、不在なんかで、貴女の手紙を読まなかったら、迎えに行けなかったんだから、危かったよ。もう少し、早い目に電話でも、出来なかったのかね」

「私、アンネになったら、プレイがしたくって、とても辛抱できなくなってしまって。それで、私、賭けたんです。もし、迎えに来て下さらなかったら、そのまま、一人で大阪で泊って帰ろうと思って……」

「まあ、とにかく、逢えてよかった。そういえば、生理だったんだね。今は、もう、その方は、いいのかナ」

「これ、準備してきましたワ」

彼女は大きなビニールの風呂敷を見せた。

「ほ、ほう、準備のいいことだナ」

「私って、アンネになったら、身体が燃えて燃えて、仕方がないんですの。それに、この前、一晩中、責められたときのことが忘れられなくって、矢も楯も、たまらないんです」

彼女の目がギラギラと光ってきた。

もう、その気でいるらしい。

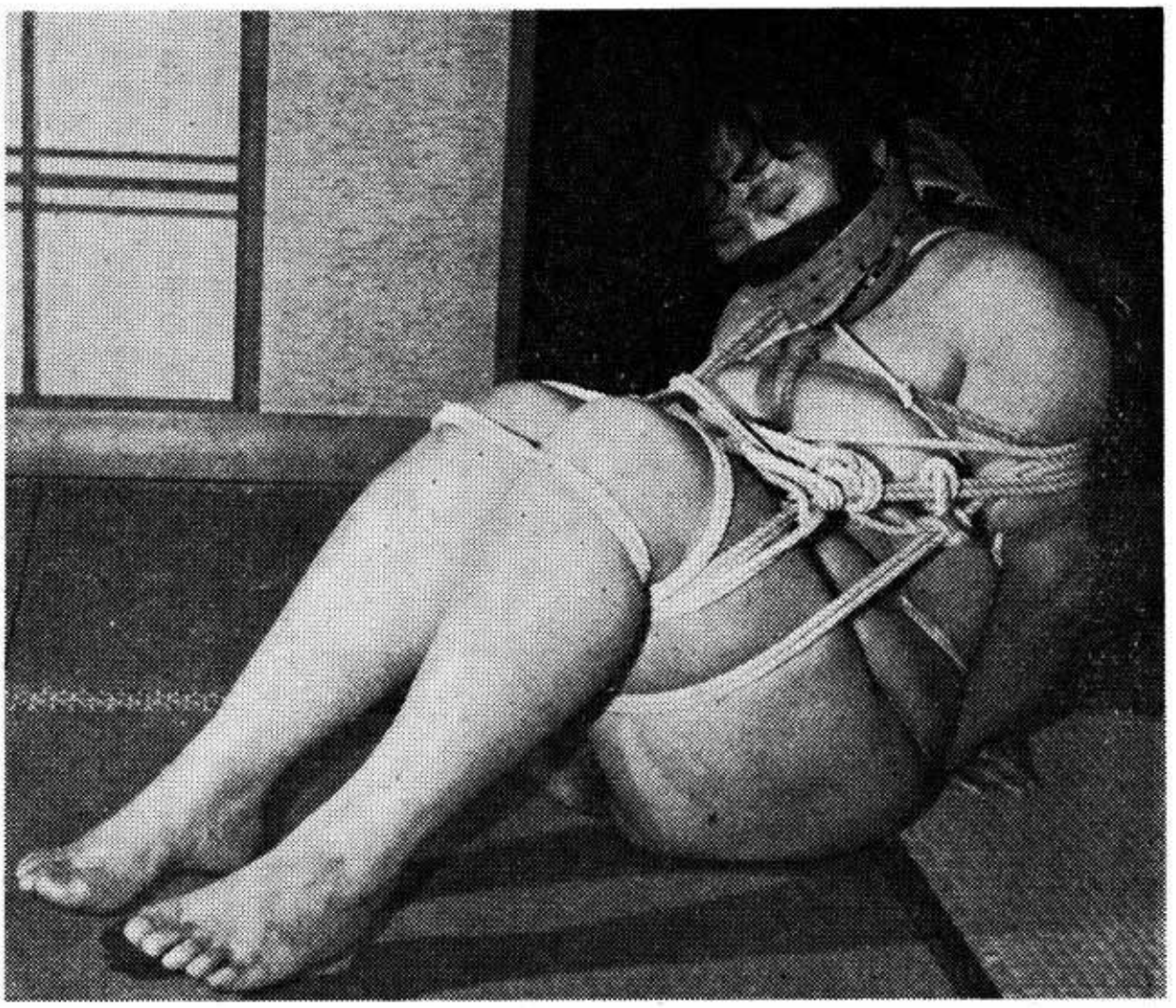
私が太腿に手をかけても、少しも抵抗をしない。いつの間に取り換えたのか、新しいタンポの白い糸が見える。

私は、それをソロソロとひきずり出した。

「シーツが汚れるワ」

彼女は私にビニールの風呂敷を手渡す。それを下へ敷けというのだ。

まさに動物的というに、ふさわしい光景だった。何もかも、下ごしらえが終ってから、更に彼女が要求を出した。



気持がいいんですもの、仕方がないわ」

「ふふん、また、盆踊りの夜に犯されたときのことを思い出しているのだナ」

私は白ロープを取り上げて高手小手に、早縄で山口艶子の裸身を、きつく縛りあげたつもりだが、彼女の豊満すぎるほどの、肉体の弾力性は、その白いロープを、はじき返す位だった。そう、力をこめて早縄を打ったことで、このでも、形式的にもせよ白豚は観念したように瞑目した。

目隠しをしてくれとも、猿ぐつわをしてくれとも言わなかった。

私は目の下の、ふくよかな艶子の顔の変化を、じっと冷ややかに眺めていた。

「私をきつく縛ってから乱暴に扱って……」

「ええっ、また縛るのかい?」

「私、縛られる方がいいの。変でしょ、縛られていた方がいいだなんて。でも、その方が

声を出したければ、思いっきり大きな声で喚き、泣き叫ぶがよい。

私はテレコのマイクを、そっと彼女の枕もとに忍ばせた。

実際、この女は、よく喋る女だし、猿ぐつわをしていなければ、その折りも、いろんな嬌声を連発した。そのことを、あとで言うと「言わないで、言わないで。私は何も覚えていないわ」と、消え入りたげに羞かしがる。真実、覚えていないのか、それとも、格好悪いから、そう言っているのか、それは私にも判断がつかない。

この前のプレイの経験からして、彼女のそのときの声を録音すべく、私は秘かにソニーの携帯用小型テレコを鞄の中へ、放り込んでおいたのだ。

彼女自身が覚えていなくてもよい、覚えていてもよい。そのときの派手な声を、縛っておいたままで再生して聞かせてやるということは、この純朴な田舎の娘を羞恥責めにするのに、もってこいの方法ではないか。

この娘の声は多彩であるし、変化があり、それに、巧まずして、いろんな言葉が相の手に入るので、聞いていて、すこぶる面白い。それに、時間が滅法、長いときているから、録音するのに、もってこいだ。

太っている女の声は奇麗だと言われるが、

彼女の声も澄んでいて高いから、その点でも録音向きといえるのだ。

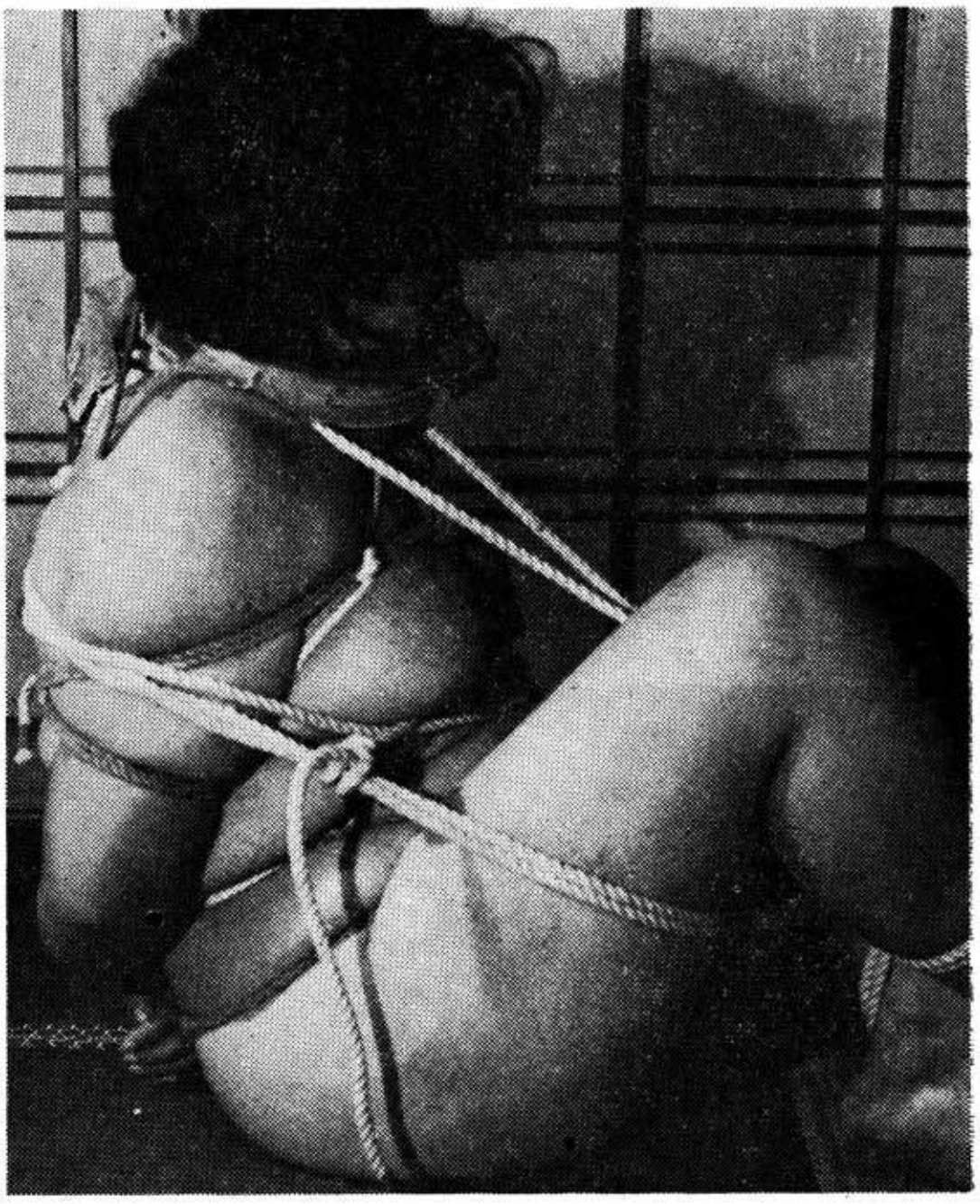
こんな羞恥責めの経験の少ない純朴な彼女のことだ。自ら作って発する声では、よもや、あるまい。と、すれば、責められることによって、やむにやまれぬ衝動となって、思わず知らず洩らしてしまうのだろう。

そう思うと、私の内なる嗜虐心が、むくむくと、好奇心をもち上げだした。テレコを彼女に知らせず、秘かにセットしてしまったというだけで私の心は、いやに躍った。

事実、それは凄かった。

メンスであるという女の生理の性衝動に及ぼす謎については、私には全く未知の世界であった。

或は、さっき一緒に見たピンクSM映画が彼女のM心、好き心に影響していたのか。それとも、こうして、縛られていることが、相乗効果を発揮したものか。それは、私にも何とも判断がつきかねたが、とにかく、数十分の間、彼女は完全にケモノに変身して、狂乱状態を、さまよいつづけた。



私は、全身に精気が漲って嗜虐心をいたく満足させつつ、いつまでも冷静な傍観者であり得た。責めの当事者でありながら、それに溺れきってしまえないサムシングがあった。

時間は長く、そして　燃え尽きてしまうことを知らない快感は大きかった。

見ている／聞いている／接している／快感というものはそれは、たまらなかった。

虫に刺されて、痒くて痒くて、辛抱できないところを、心ゆくまで掻いている快感に似ていた。やがて、掻いて掻いて、掻き破っても、まだ掻きつづけていた。

掻痒は止んでも、快感だけが残っていた。

山は幾度となく二人に訪れた。

艶子の山の際にはテレコが作動して活躍したのは言うまでもない。

或は高く、或は低く、糸を引くような悲鳴にも似た嬌声に混じって、聞き方によっては猥らとも思える世迷言が、はっきり入った。

マイクを隠してから、縄を解くと、ぐったりしていた彼女が、途端に跳ね起きるなり、「シーツを汚しちゃ、困るわ」と叫ぶと、下

に敷いてあったビニールの大風呂敷を包むなり、浴衣をひっかけて走っていった。

太っているのに、そんなことには素早い、彼女の仕草に、私はおかしかった。明らかに風呂敷の真中の、そのあたりとおぼしき個所に、相当量の血の塊を見ていたのだ。

私は、布団の上に仰向けになったままで、枕もとの煙草に手を伸ばしていた。

☆ケモノのプレイ

大体、今日のこと自体が、思わぬことの連続だった。もし、山口艶子からの速達が来なかったとしたら、こんな仕儀に立ち至ることはなかったのだ。

それにしても、メンスの最中の女を責めたという後味の悪さは、私の身体の上にも、明らかに残っていた。それはただ、肉体の上の表面的なものに過ぎないものであった。浴室へ行って、洗い流してしまえば、それで、さっぱり、すむものであった。

山口艶子という娘は、私に対して、また、新しい変った体験をさせてくれたものだ。メンスの最中に、こんな激しい嗜虐的なSMプレイを、自ら進んで没我的にやろうという女性なんて、そうザラにいるものではない。その点、或意味では、貴重な存在であるかも知れない。

「シャワーを浴びてきたワ」

浴衣の胸と胴の二カ所を紐で結んだ艶子が私の傍へ腰をおろした。そこだけがぐっと、マットレスが凹んだ。

「お風呂へ、お行きにならないの？」

私が返事をしないでいると、私の身体に掩いかぶさるようにして腕をさし出した。

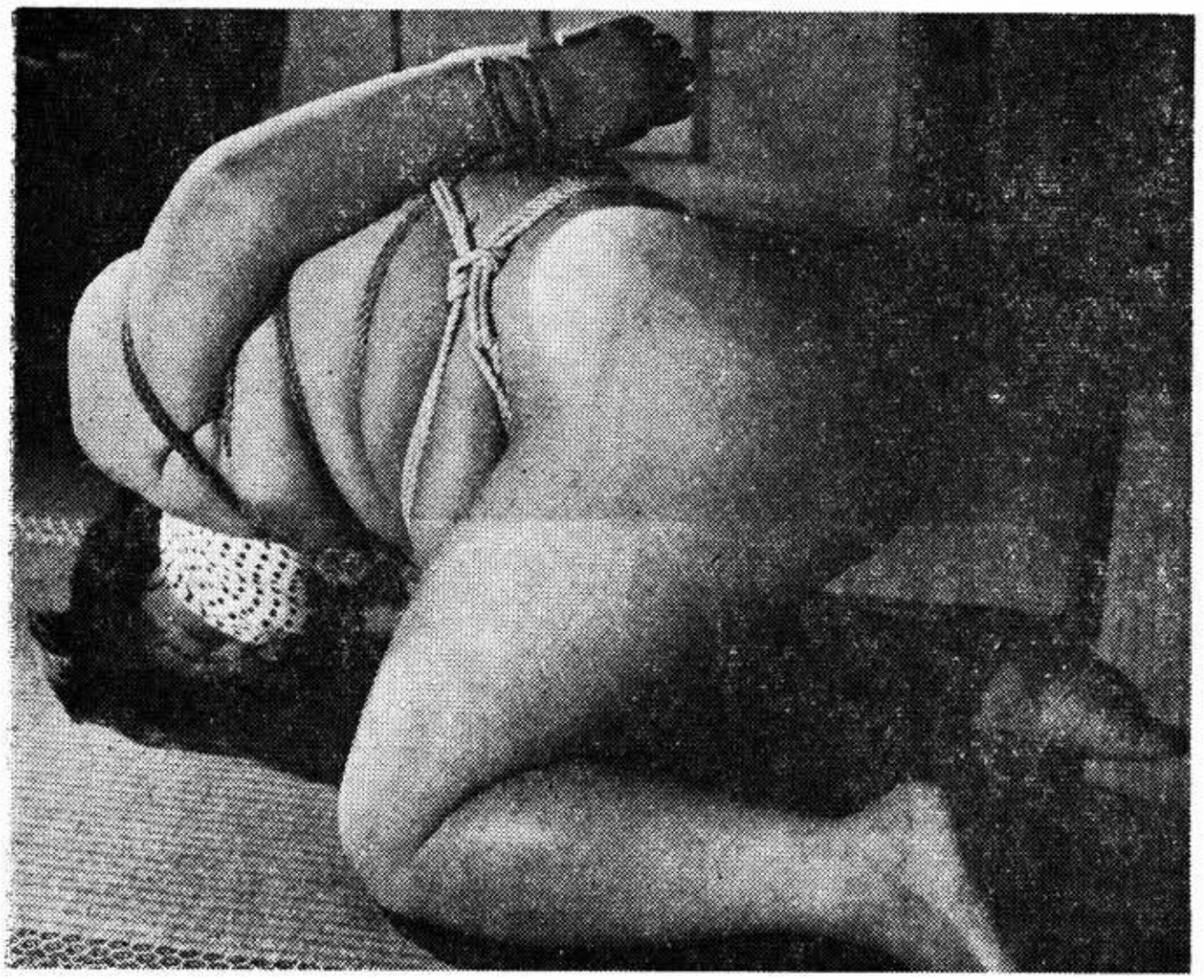
「ホレ、こんなに早く、縄のアトが、とれてしまったわ」

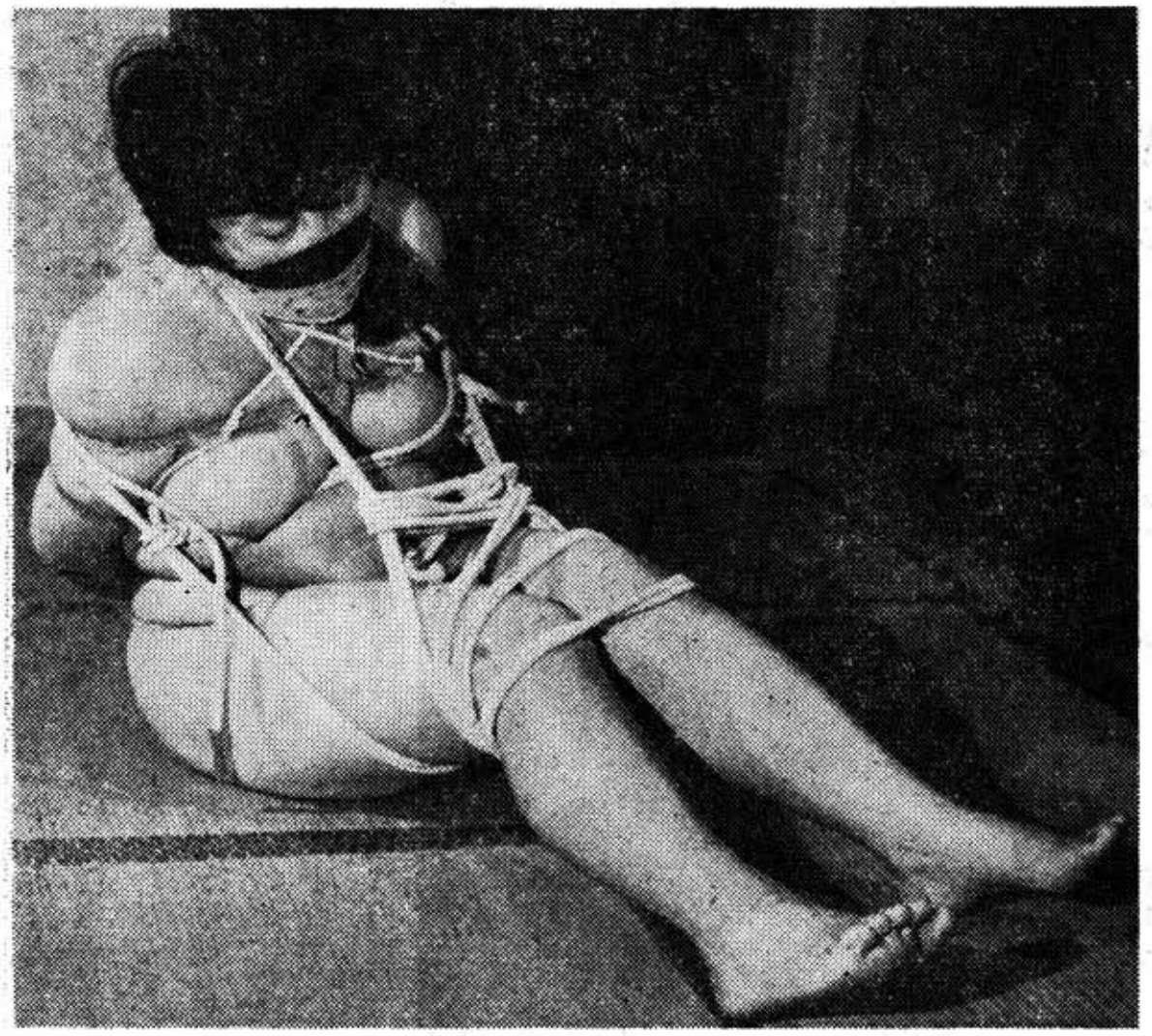
余りにも、目の前に近々と、白い肌を寄せてきたので、私の目の焦点が定まらない。

「うん、とれたか、とれたか。それはよかったナ。どれどれ、見せてごらん」

私は彼女を布団の中へ引きずり込んだ。

〝きっと、また、そこへタンポを挟み込んできやがったんだろう。さて、次は、どんな責





めを加えてやろうかナ〃

そんなことを考えていた。

先にも言ったように、今日は突然なことだったので、私は何も腹案はなかった。行き当りばったりに、彼女の顔を見たら、そのときの思いつきで、なりゆきにまかしてプレイをやろう——と、安易に考えていたのだ。

初対面ではないという気易さもあった。写真を撮ること——が面倒くさいという物懶ささが、身体の端々にあった。

頭では考えずに、身体ではSMプレイを楽しみたいというズルイ気持が濃厚だった。

いつか、以前にも、こういう気持になったことが何度かあった。これをスランプというのだろうか。自分では、そうは思わないが、どういうわけか、写真を撮るよりも、プレイに溺れてしまいたくなってしまうのだ。

「ねえ、お写真、撮るんじゃないの?」

中河恵子や山原清子には女性の方から、そう督促されたことが幾度もあった。しかし妙なるプレイの旨酒に酔いしれていると、カメラを持つことが億劫になることが間々あるものだ。今の私は、どうやら、そんな境地に、はまり込んでしまっていたようだ。

どうせ、彼女は、今夜も私を一睡もさせない気でいるらしい。スタミナ抜群の彼女のことだ、よもや、このまま大人しく寝てしまうなんてことはしないだろう。

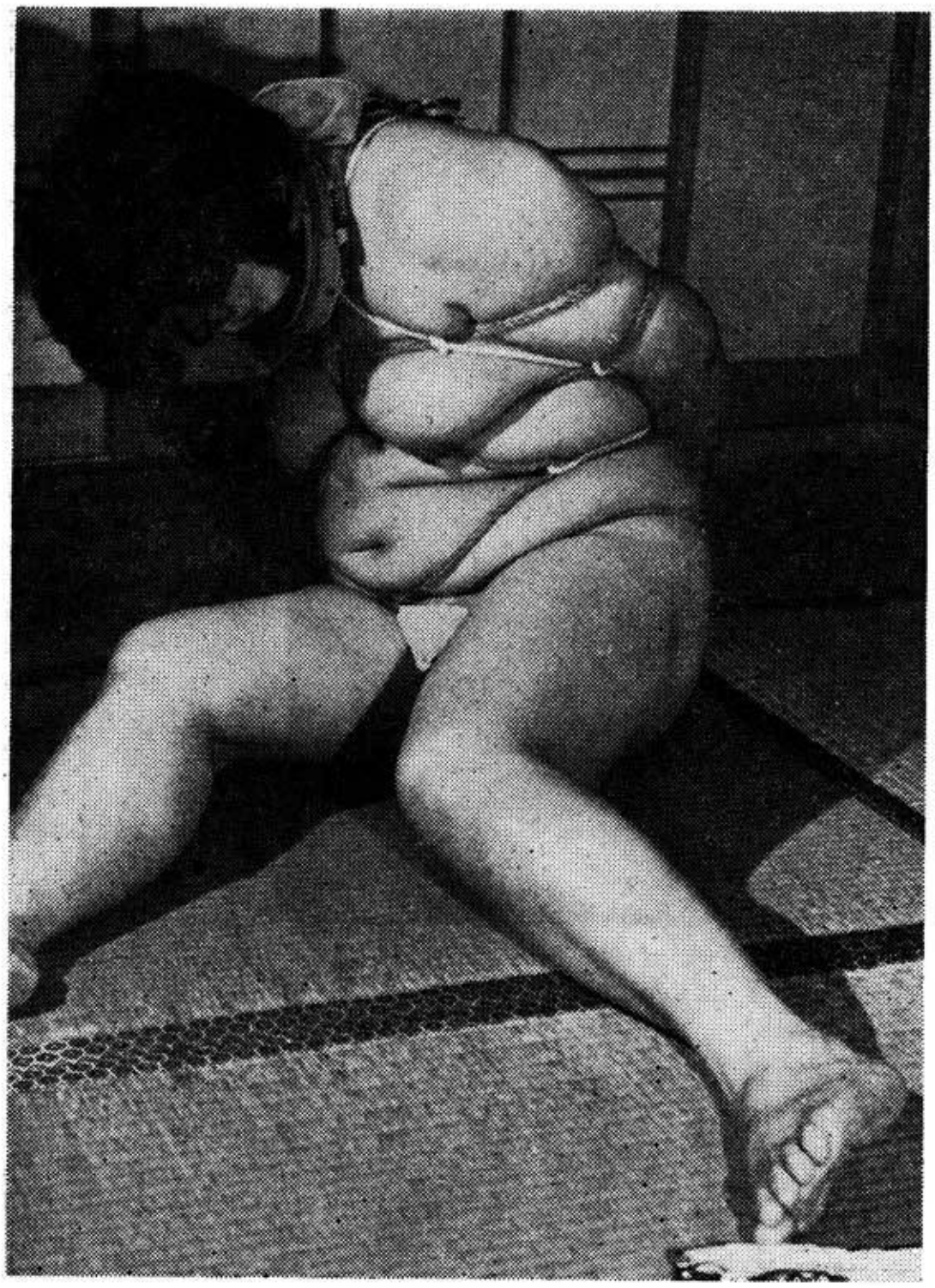
私は打診的に話しかけてみた。

「どうだい、さっきのピンク映画は大変、気にいったようだったね。熱心に、喰い入るようにして見ていたじゃないか」

「あんなの、私、初めて見たわ。あの、お臍を筆で、くすぐるのなんか、とっても感じたの。たまらなかったわ。私も、あんな責め、されてみたいわ。ウフフフ」

彼女は温かい身体を、スルスルと私に寄せてくる。太股の豊かで、ふくよかな感触。そして、それが彼女の癖なのか、頭の方を先に押しつけてくるのだ。

「そうだね。今日は道具も持って来なかったから、次に逢う機会があったら、やってみようか。ただ筆で擽るだけじゃなしに、キミのその雪肌に絵筆で、絵や字を書くんだ。そりゃ面白いゾ。例えば、このデッカイお尻に、〃白豚〃なんて書くんだヨ」



「イヤー、聞いているだけでも、くすぐったいワ。それから私、浣腸もされてみたいの。まだ一度も、そんなこと、されたことないんだけど、雑誌なんか読んでいて、ゾクゾクとしちゃうのよ。なんでかしら?」

「艶子って、欲張りなんだね。縛られただけで、あんなに、全身がくにゃくにゃになるくらい亢奮するのに、ムチで打たれたら、凄く喘いだだろう。それに、まだ筆責めと浣腸責めを望むなんて、底知れないエッチだね」

私の手は無意識のうちに、彼女の胸へ滑り込んでいた。掌いっぱいに溢れるような豊かな乳房だった。シコシコとして摑み甲斐のある膨満な肉塊だった。

彼女は私の言葉を聞いているのか、いないのか、顔を私の腕のなかに埋ずめている。

「大きなお乳だナ。こんな見事な乳房に乳枷でも嵌めて責めたら、さぞ愉快だろうよ」

「そんな責めって、ありますの?」

「この大きなお乳を、周りから締めつけて、もう、これ以上、大きくならないというくらい飛び出させておいて、むくむくっと張りきった乳房に、いろんな悪戯をやるんだよ。勿論、突き出た乳首も、いたぶるがね」

「そんな責め、次にして下さるの。聞いているだけで、胸がドキドキしてきたわ。ねえ、もう一度、思いっきり手荒く縛って下さる。私、なんだか、お話を聞いていたら、また、縛られたくなってきたわ」

「艶子って、よくよく縛られることが、大好きなんだね」

「そうよ、いけない? でも、あなたが、この前のプレイで、こんな私にしてしまったのよ。みんな、あなたのせいだわ」

「うん、すると、全部、この僕の責任って、わけか。すると、お嬢さんのお求めに従って縛らにゃ、なるまいね」

私はふと、顔を挙げて隣室を見た。そこには、先刻、撮影をしたまま、ストロボやカメ

ラが人待ち顔に、ころがっている。
私は、やおら立ち上った。
「じゃあ、縛るから、こっちへ、おいで」
彼女は浴衣で前を押えて近寄ってきた。
「思いっきり、きつく縛って頂戴。痛くっても、私、辛抱するから……」
この前の初対面のときの堅さは、すっかり取れていた。男に馴染じんだ女の身のこなしが、ありありと読みとれた。縄で縛られることの耐え難い快味が、このぶくぶくと肥満した女の骨の髄まで、しみ通ったのだろう。
羞恥心のかけらである彼女の胸と腹と、その下を掩っている浴衣を、私は手荒く剝ぎとるなり、私の胸を圧し返そうとする彼女の手を逆にとって、背後へ捻じ曲げた。
自分の首にかけていた縄で、先ず両の手首を交叉させて縄を掛けた。両手を制しておかないと、彼女の鋭い爪が鷹のように、私の手の甲を襲ってくるのだ。いや、後手に縛っておいても、不用意に私が背後から近づいたりすると、私の裸の腹部に爪を立てたりすることがあった。
両手首を背後で縛ってしまうと、あとは、肉づきの豊かな肌を、くびるように、縄で、ぐいぐいと締めつけてゆけばよいのだ。要はこの女の上半身の自由を完全に奪ってしまって、爾後の羞恥責めを心おきなくやれるようにに、拘束すればよいのだ。彼女自身が、きつく縛って——と言っておるのだがら、その点手加減する必要がなくて気が楽だ。
といって、殊更、相手を苦しめたり、疼痛を与えたりすることは、私自身、好まない。僧くて、縛ったり責めたりするのではないのだから、それが当然だろう。僧いどころか可愛いくて、可愛いくて、仕方がないからこそ、こうして縛ってしまうのだ。
肉づきがよいから、縄が肌と肌との間に埋没してしまうくらい、凄い緊縛感だ。
縄捌きが進行してゆくに従って、瞑目したままの艶子の上体が、例によって、ゆらゆらと大揺れに揺れだしてきた。
倒れないように彼女の上半身を支えながら縄と縄の間から飛びだしたように膨らんでいる肌を、掌でさするようにして弄んでみる。
雪のように白かった肌が、縄にくびれて、赤褐色に変色しているのだ。そこへ、私の手の掌が手荒く、こすってゆく。
そのときの反応を見るのが、私には楽しみだった。縛られたままで、全裸で立たせられている艶子は、身体の前面も背後も、全く無防備で、私の攻撃にさらされているのだ。
逞しいお尻を弄ぶのも自由だし、深い臍窩に、指を突っ込むことだって出来た。
彼女は、イイイと奥歯を噛みしめて、必死に声を洩らすまいと耐えている。
やはり、そうだ。
この女は、縛られることが大好きなのだ。
それが、何よりの証拠には、タンポをして糸を垂らしたままの個所が、私の探っていった触手に、明らかな痕跡を見せたのだ。
縛られることが、大好きな女なのだ。
この前、一晩の飼育で、こんなにも、なってしまいやがったのか。
あれから、今日で一週間目。その間、この白豚のような女の肉体の中で、一体、どのようなマゾ心の醸成がなされたのだろうか。
いやいや、そんなことを、ゆっくりと考えている暇など、私にはなかった。
彼女の身体は急速に力が抜けて、くたくたと、私の方へ倒れかかってきた。縛ったままで、棒倒しになることを恐れて、私は素早く両腕で抱えるように支えた。
畳の上に倒れると、二の腕の縄が恐ろしいほど肌に喰い込む。逞しい臀部の盛り上がりは、まるで小山のようだ。シミ一つない真っ

白い肉の丘が、艶々しく輝いている。

そこは、先に配光したストロボの射程距離だ。この一廓で、この女がもがいている限り、カメラによって捕捉されるわけだ。

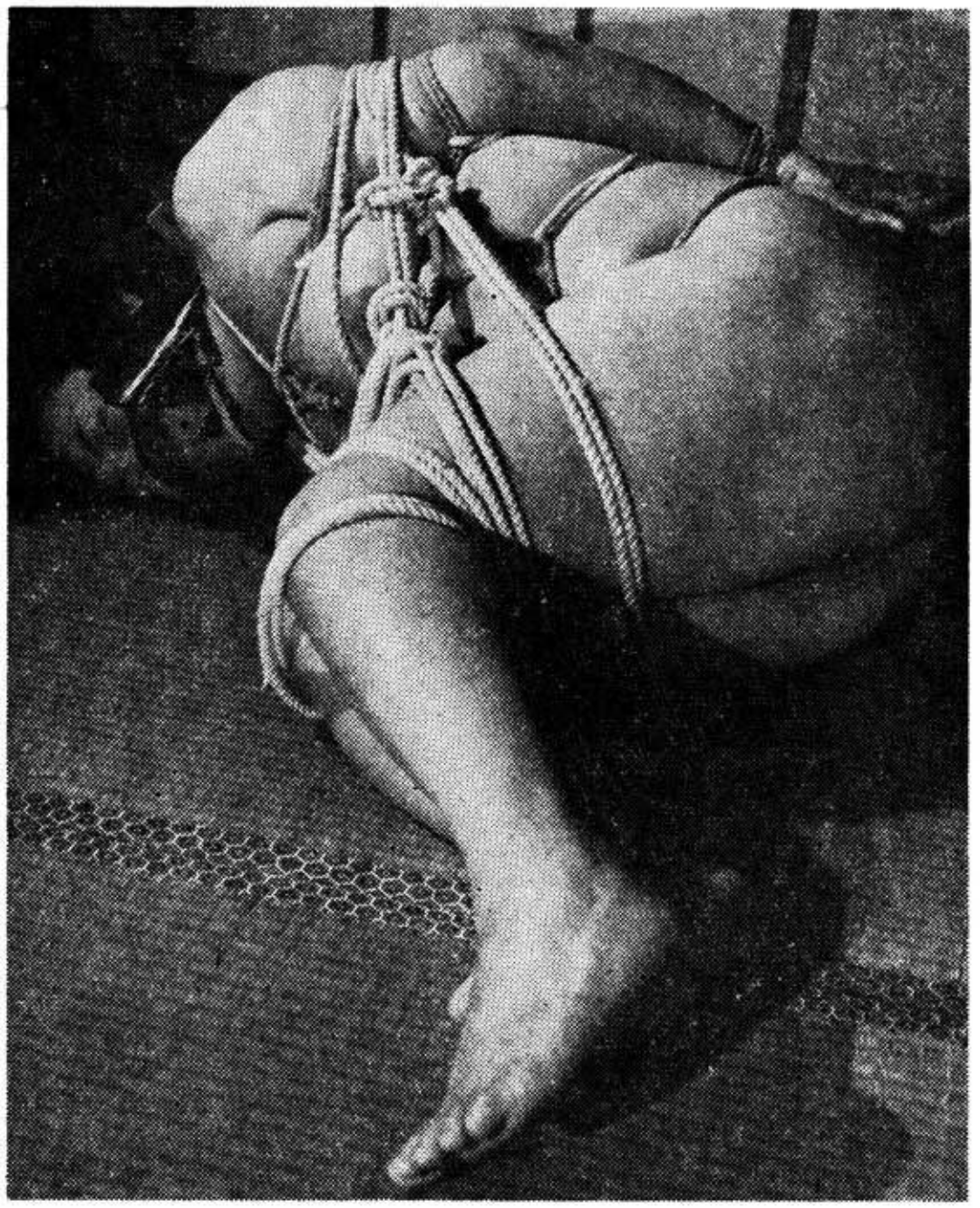
私は、足もとに転がっていたカメラを手にして構えた。

「艶子、そのお尻を突っ立てたケモノスタイルを写真に撮ってやるからナ。じっとしてるんだぞ。動くなよ」

「いやいや、このままだったらイヤ。顔をかくして頂戴。お願い」

「よしよし、顔だけかくしてやる。顔をかくしたら、このデッカイお尻の隅々を、どこから写しても、いいというんだナ。どうだ？　そうなんだろう？　このぶくぶくと猥らなまでに肥満したお尻を、写してほしいんだろう」

目隠しをして、その上から中袋のゴム布でしっかりと掩ってやると、あらあら不思議、彼女のお尻は、むくむくと盛りあがる。



私はシャッターを切ってから、カメラを置いて、双丘に手をかけて菊の蕾を見る。

新潟生れ、新潟育ちの雪国にふさわしい雪の肌の奥に、どのようなアヌスが鎮座ましますか、私にも興味と関心があった。

開かれている、見られている——と、はっきり彼女にも分っている筈なのに、彼女は、ただじっと、私のなすがままにしていた。

観念しきったような従順なその態度に、私は見ているだけでは、すまなくなった。

途端に、臀部がピクッと、ふるえたかと思うと、「いやョ」彼女の口が開いて、忽ちにして身体の構えが、くずれて横倒しになってしまった。

それをしおに、私は馬乗りに跨がり、左足を差し出して、彼女の口へ足の拇指を挿し込んだ。

「さあ、舐め、舐め。舐めないと、ここんところを、擽っちゃうゾ。そら、どうだ」

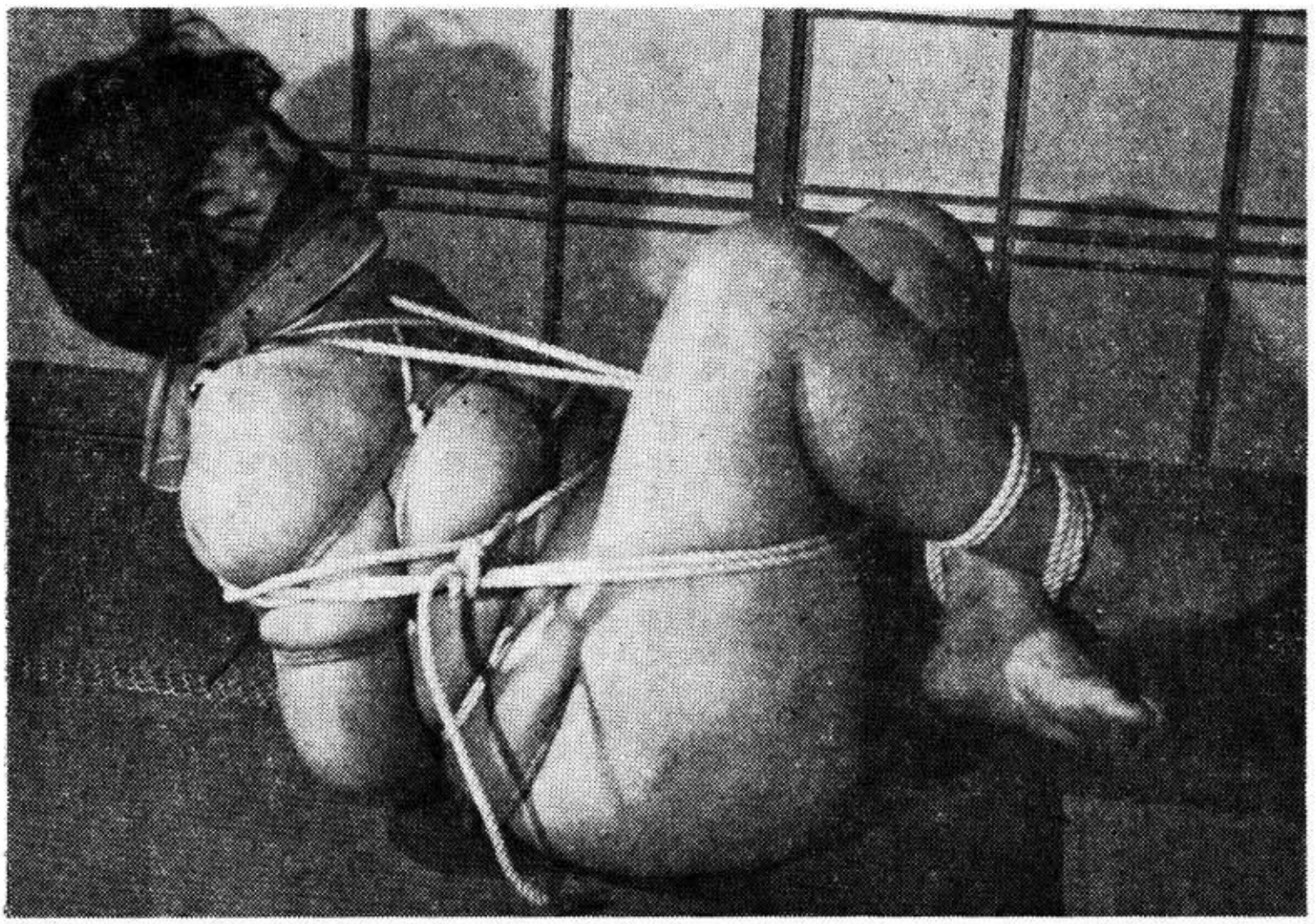
私は双丘の狭間（はざま）に指を伸ばしてゆく。

彼女は、舌をチロチロと小出しにして塩辛い拇指の先と裏とを舐める。家畜としての訓練が、どうやら緒についたようだ。

拇指をぐぐっと無理に捻じ込むと、彼女は仕方がないといった風に口を開いて、パクッとくわえた。この前と同じことだ。舌を回わ

して、チユッチユッと吸っている。
むずがゆく、擽ったい感触が全身を走る。
上から眺めていると、如何にもペットに飼育してしまったという気が如実にする。どんな気持で舐めているのだろうか。ただ単に、強要されるから、舐めているのだろうか。舐めるというより、しゃぶっている感じだ。
プチュッ——と足の拇指を引き抜いておいてから、腰を上げて彼女を抱き起した。
「どうだ。メンスの具合を、今、ここで見せてみないか。その上、縛られたら、どんなになってゆくか、見たいものだナ」
「いや、いやっ、そんな羞かしいこと、させないで。お願い、許して……」
目隠しをすると、平常は饒舌な彼女も、言葉少なになってくる。これは不思議な現象だった。そして、彼女の目が見えないことをいいことに、私もドギッイ言葉を、あからさまに浴びせかけ、そして、実際に、ところきらわず指を這わせてゆくのであった。
「あああ、そんなとこ、触らないで……」
私の執拗な指が、どこへ行くのか、さっぱり、わからないのが、彼女にとって不気味なのだろう。でも、この目隠しは、彼女自身の願いによって施したものなのだ。
「よし、それじゃ、触わのは許してやるから、そ代り、自分で脚を開いてタンポの糸を、見せてごん。僕がここで見ていてげるから、自分で開くんよ」
「いやん、いやん、許し……」
「さあ、一思いに、開くだっ」
私は、パンと手を拍っみせた。
彼女は何が起ったか、からないので、脅えて、面に向いたまま、さっとを開く。
〃うまくいったぞ〃
私は、ほくそ笑む。
「ほら、もっと大きく開んだ」
しめしめ、手足を使わに、彼女の両股を開かせことに成功したのだ。私真正面からカメラを構え

てはるずく　足正わてんてだあら、のる



シャッターを切った。タンポの白い糸も、はっきりとファインダーの中央に入っている。

☆犬にして嬲る

ぎゅうぎゅうに縛られて、一時間以上も、弄んでいても、山口艶子は縄を解いてほしいとは一言も言わない。

縄の肌に対する喰い込みようや、後手に締めあげられた手の指の変色ぐあいから見て、このあたりで休ませる必要があると思った。

目隠しを取ると、彼女はキョトンとしてから、初めて自分の、あられもない姿に気がつき、あわてて両股を、ぴたりと合わせる。

何本もの縄を、あとからあとから、つけ加えて縛ってあるので、一本を解いたからといって、急に全部がバラバラに解けるというわけにはいかない。一つ一つの結び目を丹念にほどいてゆく必要がある。手間がかかった。

縄を除いたあとの二の腕の肌は、びっくりするほど深い窪みを見せている。胸にも胴にも、縄目そのままの痕が、くっきりとついている。縄を完全に取り除いたあとの艶子の裸身は、まるで、雪の肌が赤い刺青で縄模様に彩られているようだ。

私は、そんな艶子のむごたらしい裸身を見て、そこはかとない憐憫の情をおぼえた。

「可愛いい、可愛いい、とても可愛いい」

そんな言葉が、私の口を衝いて出た。

今の自分の気持を一語で表わす適確な日本語が、すぐには見当らなかった。

サヤン（Sayan）という気持だった。

いじらしいと言うのでもない。気の毒というのでもない。気の毒といえばそれよりも、もっと男と女との愛情が介在した複雑な心情だった。

私は彼女を抱擁した。

やはり、「可愛いい」と、口で表現するより、仕方なかった。

「ねえ、あちらへ行こう」

私はベッドの方を指さした。

彼女も私も素っ裸である。こうした際、相当の距離のあるベッドまで、二人とも裸のまま歩いてゆくということは、まことに格好の悪いものだ。これが、同じ裸でも、彼女が縛られていて、私が引き回して追い立ててゆくというのならサマになるのだが、女を縛っていないとサマにはならないのだ。

「艶子、お前の好きなケモノにしてやろう。さあ、四つ這いになるんだ」

私が命ずると、彼女は一寸、何をされるのかと怪訝（ケゲン）なまなざしで私の方を顧ったが、私の至極、真面目な表情を見ると、素直に、その場で四つん這いになった。

大きな乳房が、ぶるるん——と揺れて紡錘（すい）形に垂れて乳首が下を向いている。

私は裸のまま、彼女の背中に跨がった。

裸の肌に、じかに触れる、すべすべとした背中、胴、お尻の快い感触だ。

ふくよかで、温かで、ぶ厚い皮下脂肪の柔らかさが、私の全身を痺れさすように快い。

私が両足を浮かしても、彼女は私の全体重をしっかりと支えている。しかし、そうして私を乗せたまま、四つ這いで歩くということは、如何に体格のよい彼女にしても、いささか無理だった。

私は犬の首輪を、彼女の首に嵌め、曳綱を鎖につけた。

「そら、艶子、お前は犬になったんだぞ。犬になったんだから、四つ這いで歩くんだ」

私が曳綱を引っぱると四つ這いで歩く。

豚のように肥満した見事な白犬だ。私は、肌の感触を楽しむために、彼女の背中に跨がり、歩かせるときは、両足を畳につけて体重が彼女の背にかかるのを防いでやった。

途中でムチを拾って跨がったままで彼女のお尻を叩いてやる。勿論、力まかせにではな

湿きンッ わし女つ私ぞく俯 戴う┐私 で人 っ尻い

いが、それでも彼女は、お尻をぶたれると、必死になって四つ這いを続けた。

楽しいプレイだった。主人とペットの関係が、これで、すっかり確立した。

ベッドへ戻ると、彼女は私に言った。

「犬のように縛って。私をうしろから乱暴に犯して頂戴」

艶子は頬を布団につけて俯伏せになって、お尻を高くあげ、左右の手を、それぞれの膝の外側へやった。私は彼女の手首と膝頭とをつないで縛った。これで彼女は、バックを無防備に晒したまま、身動き出来ないわけだ。

ビニールの風呂敷をシーツの上へひろげてから、タンポの糸をそろそろと、ひきずり出した。べっとりと湿った血染めの綿球だ。

「ほら、これが……に挟まっていた奴だ」

横へ、ねじ曲げた彼女の目の前に、赤く染まった綿球をブラブラさせる。彼女は目も口も、堅くつむったままでいる。

私は、それをポイと灰皿の中へ捨てた。

それから後は、言わずと知れたケモノに対する苛責のない凌辱だ。

この女——どうして、こんな格好ばかり、大好きなのだろう。

私はふと、そのことを考えてみた。

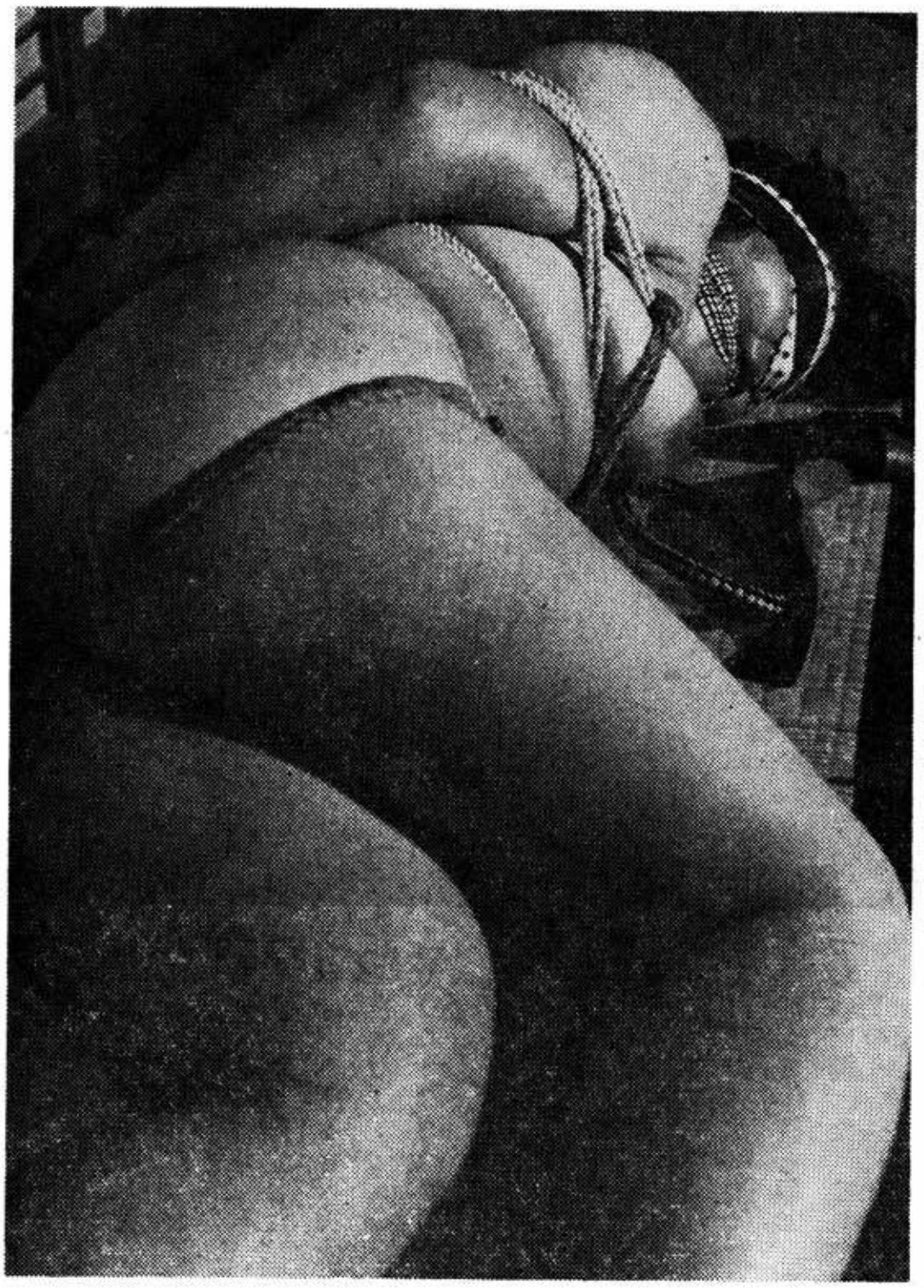
数年前、初体験のときの輪姦のことが忘れられないのか。男そのものを怖れ、嫌っておりながら、悲しい女の性(さが)で、肉体の方が、そのときのポーズを郷愁しているのか。

或は、それとも、本来、彼女自身の肉体の奥深く潜んでいたマゾが、今になって外部へ現われてきたのだろうか。

いずれにしても、彼女の燃えようは凄かった。大好きなラーゲで犬のように縛られているのだから、彼女としては、もっともなことであったのだろう。

縛られて裸身をさらすということが、これほどまでに、マゾの女性を燃えあがらせることになるものなのか。

私は顔を上げて、外部に向って開いている



たった一つの小さな窓を見た。その窓ガラスには、すでに薄鼠色の明るさがあった。

朝、もう朝になったのだ。

そう思うと、急に、この生腥いばかりの部屋が薄暗い水底（みなそこ）に沈潜しているような気がした。明るい光線の届かない暗室のなかで蠢いている二匹の動物が、ここにいた。

手首と膝頭を縛られた不自然な格好の山口艶子は、まさにケモノじみたスタミナの持主だった。私が、そこにいる限り、彼女は、もうよいということは言わなかった。

ケモノとケモノの対決だった。

ああ、とうとう、夜が明けてしまうまでプレイをしてしまった。

睡くもなく、疲れも感じないのが、自分でも不思議だった。いやむしろ、もっと、もっと、アブの泥沼のなかへ、全身で、とっぷりと溺れきってしまいたいというヤケクソな気持が、しきりにした。

落花生を、手拍子で意地になって食べているような心境だった。満腹しているのに、手の方は情性で口へ豆を運んでいるのだ。

私は事実、飽食している筈だった。

それなのに、まだまだ、もっと、このドロドロとした脂ぎったプレイを続けたい、このまま中止してしまうのは惜しいという気持が心の隅にあった。そんな心が徹夜のプレイなのに、私の体を倦ませなかった。

その反面、もう一つの心は、何か、人間の行うべきではない異様なことを行っているのだという自省心が、兆しはじめていた。

女の身体というものは、大海原のうねりのようなものだった。一定のリズムで押し寄せては止まることを知らなかった。

☆再会を約して

あわただしい一夜であった。

生理休暇を利用しての山口艶子のSMプレイ旅行である。

私にしても、本来、ベッドのなかで睡眠をとるべき休養の時間をプレイに利用しているのだから、昼、少し睡いのを辛抱すれば、仕事には支障がないわけだ。

この前のときも、翌日は普通に仕事をしていた。もっとも、その夜は睡くて、一晩中ぐっすり熟睡したのは勿論だ。しかし、熟睡したお蔭で、朝は頭がすっきりとして、とっても気分が爽快だった。だから、私にとって一晩ぐらいの徹夜は、なんでもない。

彼女は、明日の仕事の関係で10時10分大阪発の特急で帰るというので、ゆっくりもしておれない。入浴をすませると、彼女は身仕度を整え、私は、ちらばっている小道具類を二つの鞄に押し込んでいた。

この密室での連続プレイが何時間になるだろうか。あれだけ飽食した筈なのに、なんとなく、この部屋を離れ難い気持だった。もっと、もっと、二人で一緒にいたいという気がしきりにした。

写真も余り多くは撮っていなかった。あれもやりたかった、これもやりたかったという心残りがしたが、何といっても、突然、本当に突然、思いがけなく、急に予告もなしに彼女が訪れたので、私には心の準備もなく、また小道具の準備も出来なかった。

今回は、彼女の来潮が、すべてを狂わしてしまったといってもよい。メンス最中の女を縛り上げて、ケモノとして徹底的に責めるということが、私にとっても初めてのことであり、異常な体験であった。

普通だったら、秘しておくべき女の生理を隠さないばかりか、それが故、尚一層、昂進して、羞恥の極を、あからさまに責手の私に見せてしまったのであった。私は、まじまじと山口艶子の、ふくよかな顔を見た。

「十月の下旬か、十一月の上旬に、奈良へ来ると言っていたけど、予定通り来るのかい。来るんだったら、僕もスケジュールに組んでおかないといけないからね」

「ええ、奈良の秋は、どうしても見ておきたいと思ってるんです。まだ、十月か十一月かはっきり、わからないんですけれど、是非、参りたいと思っていますの。よろしく、お願いしますわ。日がきまりましたら、お電話かお手紙、差し上げますから……」

洋服を、ちゃんと着てしまうと、これがケモノになって犯されたいと願うマゾ女だなんて、とても見えない。

不思議といえば不思議だ。

きっと、新しいタンポを詰めて、そ知らぬ顔をして列車に乗り込むことだろう。

〈私は何も、そんなことは知りません〉と澄ました顔をしていることだろう。

次回に山口艶子が来たときには、その仮面をズタズタに引き裂いて、マゾの本性をさらけだしてやろう。そのとき、彼女は、どんな顔を、私の前に見せることだろうか。私は、今から、それが楽しみである。

今度は、小道具も十分に準備していって、この76キロの肥満体を、きりきり舞いさせてやろう。昼は、彼女が生まれて初めて訪れるという奈良の東大寺から法隆寺、そして飛鳥の石舞台なんかを見物して、夜は一睡もさせないで、緊縛責めと羞恥責めを連続に施して完全にケモノにしてやろう。

そんなことを考えながら、私は彼女を大阪駅へ送っていった。

「私、この前、自分が実際に縛られてから、奇譚クラブの古い号を、改めて全部、読み返してみましたわ」

彼女は別れ際に、そんなことを言った。

私は何か言いたかったが時間が刻々迫っていた。乗降客が右往左往し人混みのなかに消えてゆく彼女に手を振るのがやっとだった。

SMマンの天国――セブ島

＜女に浣腸しアヌス・セックスで果てる＞

竹迫誠也

つい、こんなピチピチとした女なら、本気になってチョッカイ掛ければ、皆、ホテルまでアヌス責めについてくるような錯覚に陥ってしまうような、彼女等の肉体のすべてを、さらけ出したような親しさがあった。

さて、夜は早目に昨日と、また違った女のたまり場の置き屋に赴き、そこで昨夜のローウリーと異なったタイプのメルシーを伴ってホテルにつく。なにしろ、昨夜は最初の異国の夜であり、初めてのパイパンに接し、吾ながら大ハッスルし、まともなセックス（うち一回は後背位）を二回、アヌスセックスを一回、都合三回も果てたほか、浣腸をし、涙を流して排泄したクライマックスを体験し、更に今日はゴルフをしたという事で、スタミナも可成り減少している恐れもあったが、女体が変われば、スタミナなんか関係ない事が判った。

早目に夕食を終り、暫くベッドの上で、お互いに裸になってジャレつき、例のとおり、浣腸をしたい意志表示をメルシーに示した。

なにしろ、肛門のことを、アヌス、アーヌス、エーナルと色々に発音しても、全く彼女に通じないのには困った。最後はイチジク浣腸をもって私の尻に挿入する仕草をして、やっと判った。

やはり、どこの国でも女性は浣腸という事に大きな拒絶反応を示すことだ。彼女も昨夜のローウリーと同じように、きつい表情をし「ノウ、ノウ」と烈しい抵抗を示したが、昨夜と同じようなワザとらしい怒り方をし、浣腸に成功した。

今夜のメルシーは、昨夜のローウリーと全く異なり、陰毛の濃い事。ヘソの下あたりから逆三角形の剛そうな陰毛が、彼女の前を完全に覆っている。浣腸をする時は、私の最も好きな、うつ伏せの腰をグッと突き出したポーズにした。

そうすると、アヌスがモロに目の前に現われ、しかも、ジャングルの下の方も露出し、

さて、東洋の楽園、男性の天国――セブの第二日目は、第一日目の未知という不安感も少しとれ、また前夜の全くのパイパン女性の腰の抜けるような特別サービスと、それに加えて、日本的浣腸プレイを満喫して、やっと気持も安定してきた。

午前中は、近くのセブカントリー倶楽部で一応、真面目にゴルフもし、いい気分のまま昼は街でショッピング。デパートや、その他の店の売り場には、いずれも昨夜、抱いてアヌスを探ったようなタイプの十二、三才から十五、六才位までの、まだ、どことなく、あどけなさが残っている若い女性が圧倒的に多く、日本人の小生を、親しみのある微笑みで迎えてくれる。

すこぶる眺めがよい。彼女のホンの針で突いたような小さなアヌスを、じっくり時間をかけて、もみほぐすことが出来た。これは最もアヌス的な姿勢なのだ。

時おり人差指を少しアヌスに挿入、彼女は、うつむいているので何かわけの判らぬ、うめきというか、悲鳴をあげるが、こういった時に言葉が判らないのは、非常に都合がよい。私のいきり立った……した……を彼女の手に握らせ、アヌスをいたぶる事の痛快さは正に天下一品だ。

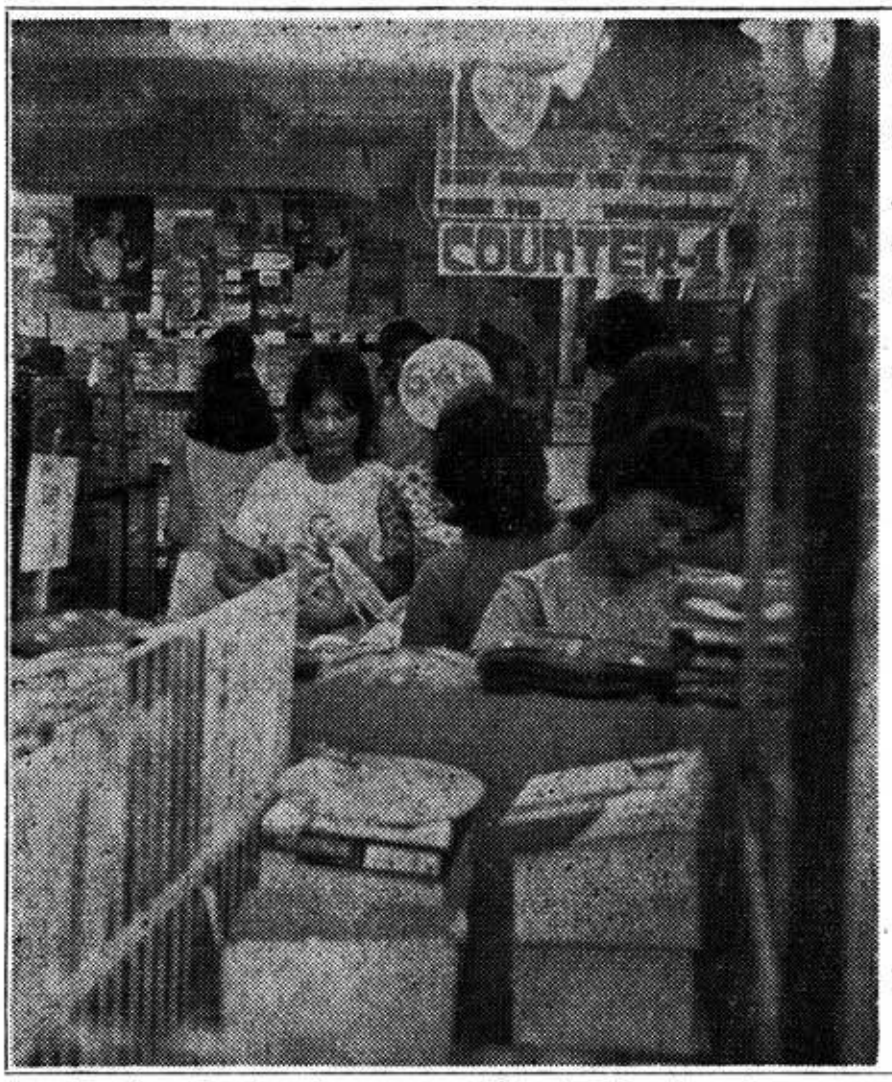
彼女のアヌスは、さしも針の穴のように小さかったが、人差指で探ってくるうち、ポマードの油にもなれ、アヌスの中の左右ばかりではなしに、腸内の柔らかい壁を縦横になでさすり、かきまわした。

その頃になると、彼女もあきらめたのか、時々尻をグッグッと、ひくひくさせたり、悲鳴とも呻きともつかない声を洩らしながら、私のいたぶりに身をまかしていた。

僅か十四才、日本なら、さしずめ中学3年位の可憐ともいうべき女性が、アヌスを蹂躙されているのだ。日本国内では到底、考えられない、また味わえないプレーが、ここセブの街では自由に出来るのだ。

正にSMマン、特に浣腸狂と自負する私にとっては、二度と味わえない楽園だった。

二十分程、彼女の後門は勿論、前門も交互に撫でいたぶり、頃はよしと人差指を抜けばアヌスも、中から少し盛り上ったようになり、僅かであるが、めくれたようになり、浣腸をするのに、より容易な状態になった。



デパートにはオヤと振り返させられるホリの深い十四、五才の若い女性が目立つ

当然、いちじく浣腸を二個、注入しチリ紙でアヌスを押さえ、排泄を耐えさせ「ノーノー」と尻をふるわせながら、苦悶する彼女のアヌスを押えたまま、そろりトイレへ運び、排泄させた事はいうまでもない。

その夜も前門二回、アヌスセックス一回という驚異的強さで終った。しかし、三回目は流石、時間もかなり要した事は止むを得ない事だった。なにしろ、昨夜、今夜と、二人の全く異なった、しかも十四、五才の女とセックスし、浣腸プレイをし、思う存分、あられもない写真を撮り、アヌスセックスまでして安い。料金は置屋に一人に付、一五〇ペソ（日本円六千円位）。それに彼女にチップ十ペソ（約四百円強）を払った。単にセックスだけなら五ペソのチップですむのだが何しろ、他人がやらない浣腸とアヌス責めをしたので、少しハズんで十ペソ払った。

彼女は非常に喜んで、朝方、いそいそと置屋へ帰っていった。つまり、女代は二人の女

性と二日セックスし、浣腸し、チップも合せて日本円で僅か一万三千円程度なのだ。何と安い事だろうか。

日本なら、バーの女かキャバレーの女を引っ掛けるだけでも、飲み代として数万円を要し、更に彼女等と単にホテルにしけ込むだけでも、彼女等に何万円かは、払わないといかん。しかも、浣腸を容易にさせてくれる女なんて、滅多にいない。

その点、セブは何と極安で女が手に入り、容易に浣腸させてくれるところだろうか。全く、極めて安直にSMプレイをさせる事だ。しかも、SMをさせてお礼として僅か四百円強のチップで、彼女が喜び、入念なサービスをしてくれるのだ。

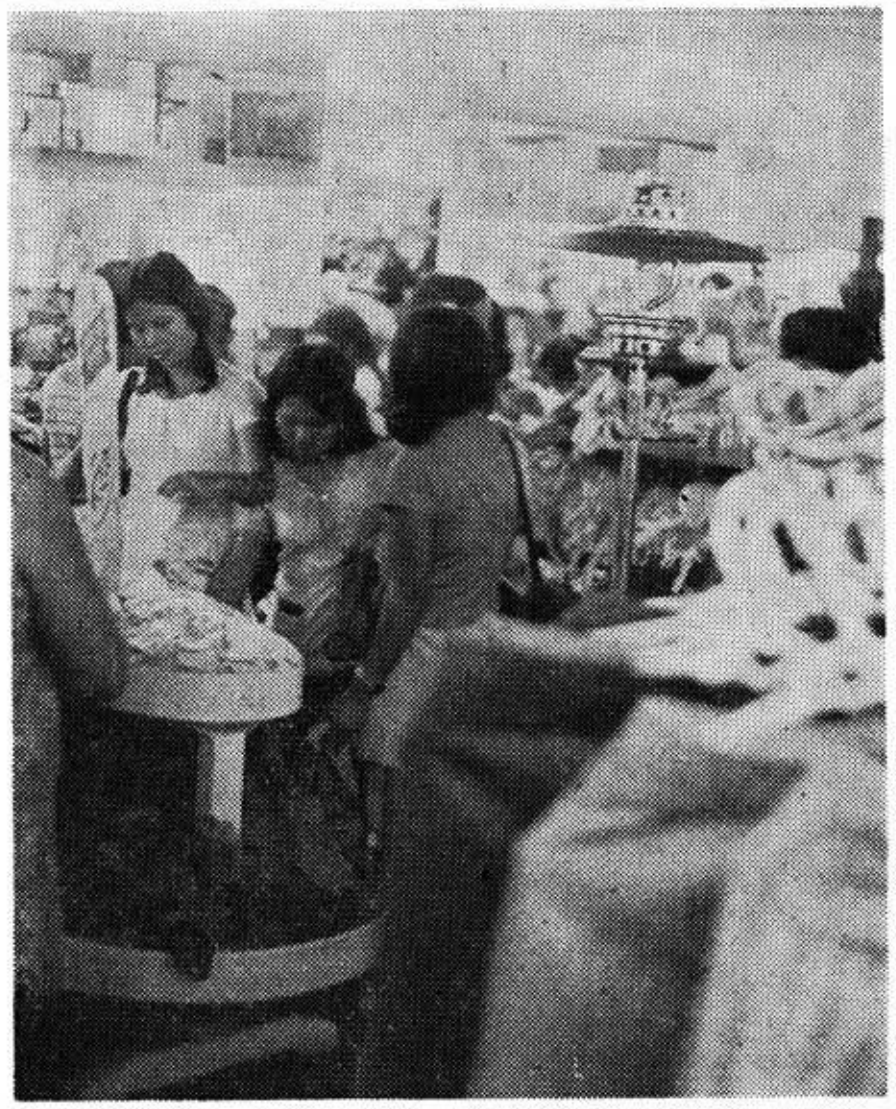
事実、果てた後、彼女等は決してチリ紙を用いない。口でくわえ、舌で上手になめながら、キレイにしてくれるのだ。

こういった事は、最愛の吾女房でさえ、してくれはしないだろう。もし、こんな事を要求したら離婚されないとも限らない。

女にとって極めて屈辱的行為を、僅か十四才かそこらのあどけない小娘が、さも自然のように当然のように、口でキレイにしてくれる事には驚きというより感激し、正に男性天国だなあーと痛感した。

私は何も旅行会社を宣伝しようとは思っていない。だが、私が僅か二夜、セブの女と接し、彼女の献身的なサービスを味わい、且つ極めて容易に安直に、こういう事が出来る体験し、皆に一回はセブへ行かれる事を心より、すすめる。

フイリッピンといえば、すぐマニラ観光だが、マニラは、もはや日本人客が可成り荒しかも国際都市化して、女代も大体二五〇ペソ（一万円強）とセブに比し可成り高く、サービスもおざなりで、浣腸する事なんて恐らく駄目であろう。



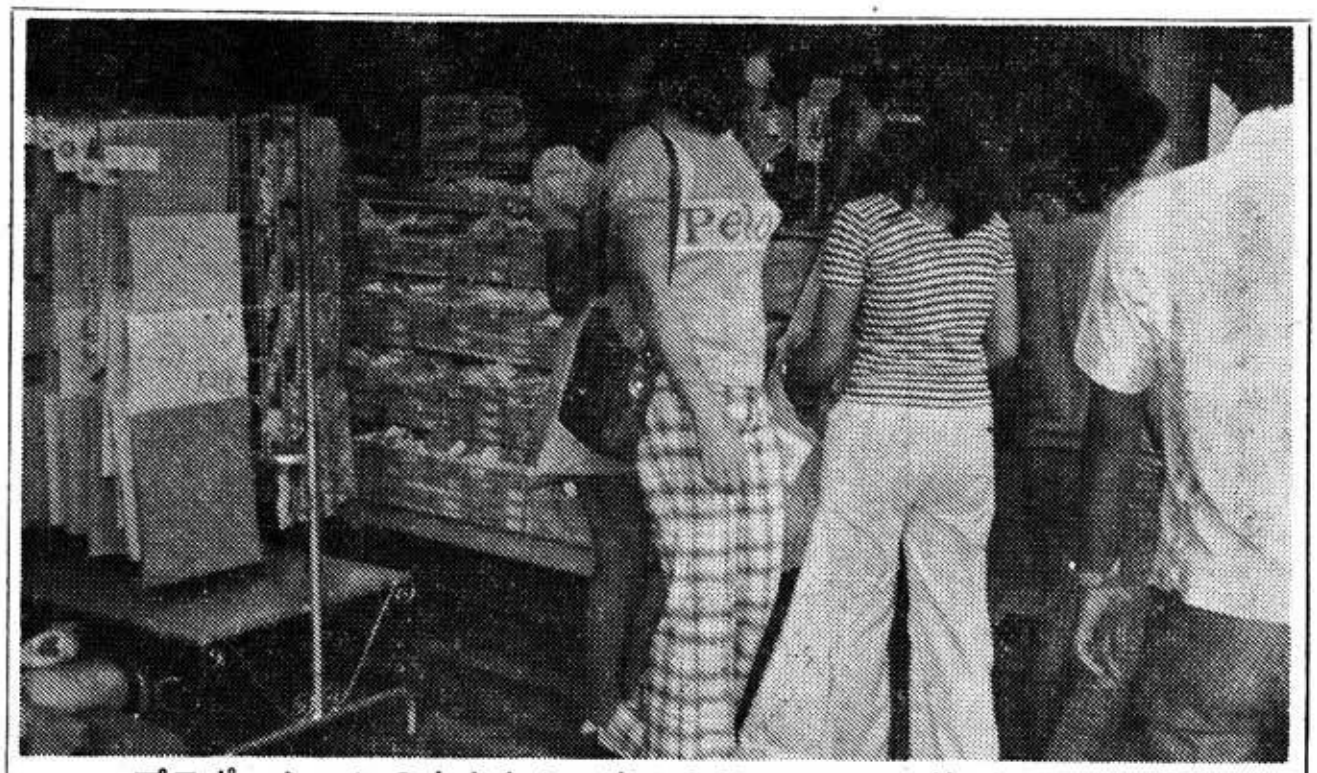
売場でパンティを選ぶセブの若々しく美しい女性

たとえ浣腸させたとしてもチップ十ドルから二十ドル（三千円から四千円）は要求されるだろう。

だが、マニラから僅か空路50分足らずのセブまで足を伸ばせば、自分好みの女性が安く自由に選べるし、夜はアヌスセックスも、OK。浣腸は勿論、その人の好みによっては緊縛やフェチ等々、SMプレイがタダのようなチップだけで出来るのだ。

現に私は二夜連続で女を抱き、浣腸し、排泄させて、その支出が一万三千円で済んだのだ。

その間、前門のセックス四回、アヌスセックス二回、それに、浣腸と撮影なのだ。SMマンにとって、これ以上の天国があるだろうか。



プロポーションのよさとカモ鹿のようにスラリと伸びた足は彼女等のパンタロンの上からも十分うかがえる

読者の諸氏よ。単にSM誌を読んで、何で悶々とする必要があろうか。

セブへ行きなさい。SMの天国、浣腸プレイの天国、セブへ行かれん事をすすめる。決して、誇張でも宣伝でもない。これが今日のセブの実体なのだ。

航空運賃、宿泊費や女代一切、含めて大体、三泊四日で十五万円前後あれば十分なのだ。

韓国にて不安な心で旅し台湾、香港、ハワイにて、単に興味だけで十数万、或は二十万から三十万も使うなら、自分の好きなプレイが出来、凡べてが満足して帰国できるセブ旅行こそ、貴男の夢を、現実にしてくれるのだ。

このたび、はからずも商用でセブへ行く機会に接し、行く前より遥かに大きい現実と満足感を、私一人のものにしたくはなく、奇クを読んでいる多くの読者にも、少しでも体験させたいという気持で一杯なのだ。

大体が、浣腸という行為は、何処の国の女性でも、心穏やかに受け入れてくれるものではない。拒否されてこそ、当然なのだ。まして、アヌス・セックスとなると、これは、もう言語同断といってよいだろう。

それなのに、このSMマンの天国――セブ島に於ては、その困難な浣腸プレイとアヌスプレイを満喫することが出来るのだから凄いものだ。〝浣腸狂〟を以て任ずる、この私を満足させてくれたのだから推して知るべし、更に、その上は諸氏の腕前如何によっては、どのように進展しないとも限らない。

狭い日本を離れて異国へ旅をするということだけでも、伸々と羽をのばすという開放感に包まれるものであるが、こうして、異国の若い女性に接触してみると、異常なまでのリビドを感ずるものなのだ。

幸か不幸か、私は、若い女性に対する浣腸とアヌスに強い関心を持っているため、自然と、そういうことになってしまったが、他の傾向のSMマンでも、きっと、その趣向を最大限に満たしてくれることと思う。

私はピチピチとしたセブ女性の若々しいヌードは勿論、パイパンの具合まで、バッチリとカラーで写真に撮ってきた。一番傑作だったのは、やはり、なんと云っても、彼女たちの浣腸された後のアヌスの模様を、細大洩らさずカラーフォトで記録に残してきたことであった。

――（おわり）――

連載・M派交友録（58）

交錯する愛憎

佐戸崎昂の巻（4）

鬼山絢策

殴られるまま

岩見崇は、辛抱強い男であるが、佐戸崎昂に対しては、どうにも我慢のならぬ憤懣が、いつまでも消えなかった。

学生時代に初恋の女を奪われ、佐戸崎は奪って犯すと、すぐその女を捨てた。仕事の口を見つけ出すと、それも横取りされた。

それでも岩見は辛抱し、さして怨みもしなかった。

加納吟子を知ったのは、ヤプーショーという、世にも妖奇な催しの時、岩見と佐戸崎は同時に知った。佐戸崎はショーの単なる見物人だったが、岩見の方は友人の黒田から頼まれてヤプーとして出演し、吟子を「女王様」として思いきったショーを共演したのだからどちらかというと、岩見の方が吟子に、より接近した立場にあったのだが、その後、手の早い佐戸崎が、すぐ吟子の劇団にわたりをつけて、吟子と関係を結んでしまった。

布施明に似てノッペリした佐戸崎に、吟子は、ただ好奇心だけで身体を許したのだが、エゴでサジスチックな佐戸崎を嫌い出し、佐戸崎から逃がれようとしているのを知った岩見は、アパートを見つけてやって吟子を隠した。その頃から岩見は吟子に真剣な愛を感じ一時は結婚を夢見たことさえあったが、岩見のM的な性格が正常なセックスに失敗した。

岩見はマゾヒストではあるが、正常なセックスが不能というわけではない。普通の女性例えば旅先で一夜の伽をつとめる女などとは普通の男性としてセックスできるのである。

だが吟子に対しては、そのあまりの美しさ

に、敬慕の情が深すぎて、緊張のあまり、うまく行かなかった。爾来、岩見は吟子と結婚するということは諦め、女王と奴隷の関係で満足するようになったのだが——その間に介在する佐戸崎に対してだけは、どうにも我慢ができなくなっていた。

「俺の女を横取りした」と怒る佐戸崎だが、吟子は佐戸崎の女でもないし、横取りしたのでもないが、事情を説明して分かるような男ではない。揚句の果てに百万円で吟子を譲ると約束しておきながら、百万円、取り上げると平気で吟子と関係している。金を返せと言えば、「いつでも返してやる」と言うに決まっている。もちろん、口先だけで返すはずはないのは分かっている。証文一つ、取ったわけではないし、法的に訴えることも、できないい。だまされることを半ば以上、察知していながら、騙された自分の愚かさにも肚が立つし、哀れむべき男と寛大な気持で接していたが、それにも限度があるのだ。

その佐戸崎を、また、うとんずるようになった吟子に、岩見は気をよくしていた。

佐戸崎の不信をなじる吟子に調子を合わせて、しゃべるうち、これだけは言うまいと思っていた、佐戸崎に百万円、騙り取られたことまで口走ってしまったのだった。

「そうなの。ほんとに悪い奴だわ」

吟子を金で買い取った——と思われることは、吟子を娼婦化し、侮辱することになる、と思うからこそ、黙っていたのだが、それを聞いても吟子は別に機嫌を悪くした様子もなかったので、言うべきでなかったと後悔しながらも、一面、安堵の気持だった。

暑かった夏も過ぎ、秋も、そろそろ終りを告げて、朝夕は肌寒さを感じる頃になった、ある日、岩見は新しく開店したパン屋で、うまそうなパンを見つけ、吟子の好きなクロワッサンも買って、二人で楽しい朝食を食べようと、吟子のマンションの扉を押した。

部屋に入ると、異様な悪臭が鼻をついた。マリファナと、すえた酒の匂いだった。

部屋には誰も居なかったが、喰い散らかした食べ物が、テーブルにのっていた。

「誰？　タカシ？」

「ハイ、そうです。まだ、おやすみですか」

寝室から吟子の声がし、ボソボソと男との話し声が聞えた。十時を過ぎているというのに、まだ寝ていたのか。それに男がいる。

——まずい時に来たな——

と思った瞬間、寝室から素っ裸の佐戸崎が現れた。ストリーカーのように、何から何まで剝き出しのままだった。

「おい、岩見。お前に話があるんだ！」

佐戸崎の顔を見た瞬間、虫酸がはしる思いがした。その佐戸崎の方も凄い目で岩見を睨んでいる。

「まあ、そこへ座れよ」

登場人物紹介

加納吟子（28才）アングラ劇団の女優から、クラブのホステスをバイトし、テレビのカヴァーガールとして一時、売り出すが、佐戸崎のすすめでポルノ映画に出演する。佐戸崎とは愛憎が交錯して複雑な感情のもとに〝くされ縁〟的な関係にある。岩見に対しては好意はもっているが、マゾヒストとして扱うことが、彼に対する好意だと思っている。

佐戸崎昴（36才）画家、さっぱり画を描かない画家で、女から女へと、女を喰いものにしている男。本来、画才はあるのだが、世に認められず、世をすねて自堕落な生活を送っている。

岩見崇（37才）挿絵やイラストで、せっせと、まじめに稼いできたが、吟子に恋したために生活が狂ってしまい、四百万の貯金も家も、とうとう失う。

文句のあるのは岩見の方である。だが、まず佐戸崎の話を聞こうとソファに腰かけた。

「お前、俺が、よっぽど嫌いのようだな」

佐戸崎は立ったまま、岩見の前のテーブルへ片足をかけると、きゃしゃな身体に似合わぬものを誇示するように、岩見の鼻先へ突きつけた。

「嫌いなのは構わねえが、人を罠にかけて陥れるような真似はするな」

「何のことですか」

「この野郎ッ、素っ呆けやがって！」

ピシリと頬に平手打ちを食わした。

――何をッ！――

と立ち上ろうとする鼻先へ佐戸崎がピストルでも押しつけるように額へ筒先を突きつけてきた。グニャリとした不快な感触だった。

「てめえは吟子に映画に出るのをやめさせたな。反対だけするなら、まだ許せるが、里見監督のところへ行って吟子は絶対、出ないと断ったな。そして俺の悪口を、あることないこと散々言いやがったじゃねえか」

これは全く寝耳に水で、根も葉もないことだし、岩見の考えても見ないことだった。

「なにを言うんですか。ぼ、ぼくは……」

「蔭に回って吟子にも俺の悪口を散々たたいて、俺から離そうとしたな」

「そ、そんな……」

「俺が百万で吟子を売ったと言ったな」

これは、ほんとうである。吟子が佐戸崎にしゃべったのか。一瞬、岩見は、ひるんだ。

「俺が、いつ吟子を売ると言った」

佐戸崎は、テーブルへかけた足の膝小僧でゴツンと岩見の頭を小突いた。

「何をするッ！」

立ち上ろうとする頬へ、ピシピシと平手打ちが二つ三つ、飛んだ。岩見は下から佐戸崎を突きとばして立ち上った。今日は決着をつけてやる覚悟だった。

その時、寝室から吟子が例の長襦袢のような赤いガウンを、まとって現れた。

「タカシ！　乱暴は、おやめッ！」

吟子の声は、まさに鶴の一声だった。

岩見は振り上げようとした拳を下げた。

「何だ、この野郎！　やる気かッ」

立ち上った佐戸崎は勢いを得て、岩見の顔を拳をかためて殴った。吟子は佐戸崎の殴るのは止めようとしない。

岩見には、それが情けなかった。非力の佐戸崎の殴るのなど、それほど痛くはなかったが、涙がポロポロと出た。

「やい、俺は吟子を金で売ろうなんて言った覚えはないぜ」

「じゃあ、あの百万は、どういう金です」

「それは、お前から借りたんだ。売ったんじゃねえ」

「それじゃ返して下さい。僕は今、金が必要なんです」

「金が欲しけりゃ、返してやる。何だ　百万ぽっちの金で俺を縛ろうってのか」

「いつ、返してくれます？　口先だけじゃ困りますよ」

「そのうちに返してやるよ」

「それでは返したことになりませんね、期限がなければ。たかが、百万ぽっちの金です。すぐ返して下さい」

「ああ、返してやるさ。そのかわり、金を返しゃ、もうお前とは何の義理もねえんだぞ」

「それは返してから言うせりふです。いつですか。明日ですか」

「うるせえな、この野郎！　大体、あの金は返済期限なしと言う約束だったんだぜ」

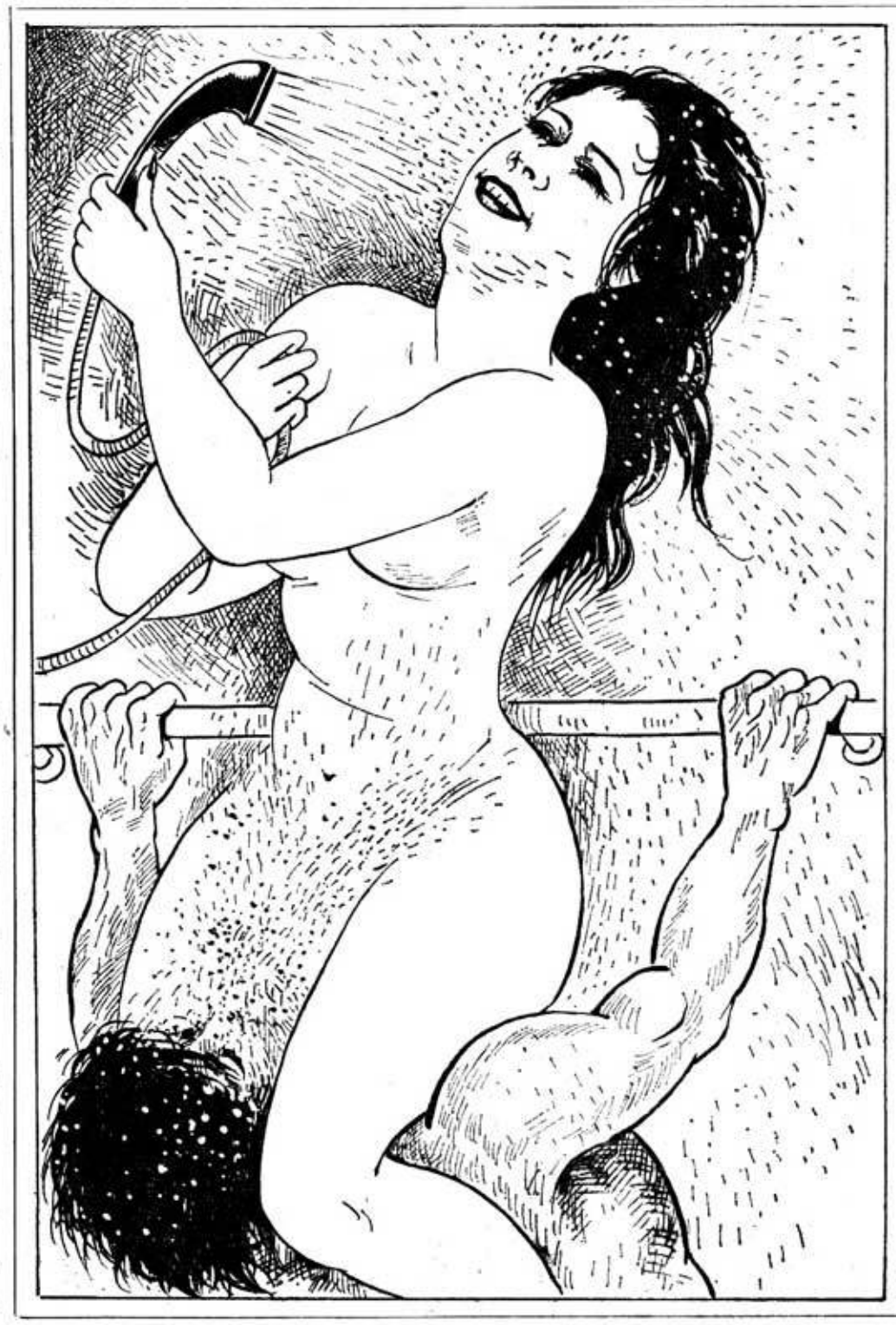
「それは確かに、その通りです。しかし、それなら事実上、もらったも同然でしょう」

「何を言やがる。俺が吟子を金なんかで売る男だと思ってんのか、この野郎」

佐戸崎は足を上げて岩見の腰を蹴った。
岩見が、憤怒をこめて向うとした時、
「タカシ！　およしッ！」
りんとした吟子の声に、岩見は、すがるように吟子を見て下を向いた。

凄んだあとで

吟子は椅子に腰かけ、その前にうずくまった岩見の顔を、しっかりと股に、はさんだ。
「サア、言われた通りにするんだよ。手を後ろに廻して！」
こんなにも極端に、吟子が佐戸崎の方に味方するとは思っていなかった。自分に対して冷たく、厳しく、この前とは打って変った吟子の心情を忖度しかねて、岩見の頭は混乱していた。
——あてにならぬは女ごころか——
「早く、後ろに手を廻して！」
という命令が何度か聞こえてきた。
「乱暴すると、いけないから」と人を、まるで猛獣扱いするつもりか。
——そうだ。彼女は縛るのが好きになったと言っていたっけ——
だが、いまは佐戸崎がいるので、この男の前で縛られると、何をされるか分らない。
そう思いながらも、再三の吟子の命令には従わざるを得なかった。
両手を後ろへやると、待ち構えていた佐戸崎が、紐で手首をギリギリと縛った。
「ハハハハ。サア、これでよし。これじゃ抵抗したくもできねえだろう。ざまあみろッ」
佐戸崎は足を上げが岩見の背中を思いきり蹴った。衝撃を受けて岩見の身体が前へかがみ、吟子の肉体の壁に、ぶっかった。
「てめえは、ふたこと目には金、金と言やがるが、吟子への愛を金で買ったつもりなのか



イメージギャラリー『浴室の腰かけ、シャワーと共に、恵みの飛まつ』岡　たかし

浅ましい根性じゃねえか。そうだろう」

「フフフフ」

股の奥にピッタリはさまった顔をガッチリと締め上げて、吟子は、ふてぶてしい笑いを漏らした。

「おい、岩見。お前と俺とは十何年かの親しいつきあいだろう。その友情を裏切るようなことをして、いいと思ってるのか」

「……」

弁解したくも、その口は吟子が封じて自由を奪っていた。

「一体お前は、これまで吟子に何をしてやったんだ。タマに小遣い銭を貢ぐ程度だろう。それで吟子を自分のものにしたと、うぬぼれてやがんのか」

ドカンと背中に、又、足蹴を加えた。

「俺はな、吟子を心底から愛してるんだぜ。吟子のほんとうに喜ぶことをしてやってきてるんだぜ。吟子を、ここまでノシ上げてやったのも俺だぜ。お前が、いくら反対しても又映画に出るんだ。今度のギャラは、五十万だぜ、五十万。その次は百万だ。この作品で認められれば、東映や日活からも誘いが、かかる。吟子は押しも押されもしねえ大スターさまになるんだ、ハハハ。それは誰のお蔭だと思う。皆、この俺サマのお蔭なんだ。てめえみてえなヘナチョコ野郎のすることとは、わけが違うんだ。分かったか、この野郎」

岩見の後頭部へ足のうらをあてがって、グイと吟子の股の方へ押しつけた。

口一ぱいに吟子が押し入ってきた。

――昨夜から今朝がたまで、佐戸崎は、どんな愛し方をしたのだろう――

二人の痴態が岩見の脳裡に浮かんだ。

佐戸崎の罵りの言葉の中に、ひとつの真実を見出した。

――そうか、吟子を本当に喜ばしているのは佐戸崎の言う通り、彼なのかもしれない――

岩見は自分が吟子に対する愛の奉仕と比較してみた。

――自分は、ただ吟子を愛し、敬い、そして金を貢ぐだけだ。佐戸崎の方は吟子に夢を与えている。〝将来は大スター〟という、吟子が一番、望んでいるものへの、途を開いてやっている。果たして、その通り行くかどうかは別として、吟子が、ひたすら志すスターの夢を叶えてやろうとしていることは事実なのだ。それと吟子に収入の道を与えている。五十万というギャラが、ほんとかどうか疑わしい。また、そうだとしても、吟子の手に入るのは二十万も入らないだろう。佐戸崎が半分以上、頭をハネてしまうのは目に見えていることだ。だが、吟子にしてみれば、今はその夢で一ぱいなのだ――

吟子が佐戸崎を憎みながらも、彼の顔を見ると、結局、彼になびいてしまうのも、そのへんの事情にあるのだと思った。

それと、もうひとつ、大きな〝力〟を佐戸崎は持っていた。岩見のもっていない〝力〟だった。それは後に佐戸崎が如実に見せた。

「いいか、岩見。お前が俺に飽くまでも盾つくと言うんなら、俺にも覚悟があるぜ。吟子とは、つき合わせねえ。なあ、吟子」

「フフフフ」

吟子は佐戸崎が岩見を、いたぶるのを愉快そうに笑い、太股をギュッと締めてきた。

「それでも、いいか。この家の扉を押させねえ。シャット・アウトしてやる」

佐戸崎の言っていることは矛盾を通り越して滑稽でさえあった。この家は岩見のものなのである。吟子に住まわせているとは言っても、譲ったわけではないし、名儀は依然、岩見のものだし、管理費も岩見が払っているのだ。それを吟子の家のように思っている佐戸崎の言い分が、おかしかった。

だが、佐戸崎が吟子を完全に支配している事実だけは否めなかった。

「どうだ、それでも、いいか。おい吟子。返事をさせてやれ」

吟子は自分の肉体にへばりついているかぶたでも引っ剝がすように、岩見の髪を摑んで引き離した。

「どうだ、おい。それでも、まだ、この俺を向うに回す気か、ええ?」

「そういう気はありません」

「お前が蔭に廻ってコソコソやったことを悪いと認めるか」

「僕は別に……」

「認めるか、認めねえかを聞いてるんだよ。弁解をきこうってんじゃねんだ、この野郎」

佐戸崎は又、岩見の頭を蹴った。

「どうなんだ、この野郎」

「認めます」

「そうか、よし。まあ俺にしたことは俺だけが目をつぶって許してやるが、吟子の仕事を妨げた罪のつぐないは、しなくちゃ、いけねえぜ。そうだろう」

猛々しく怒り狂ってるうちに急に、ちょっと穏やかになり、妥協的な発言をしてくることがある。その時は必ず、あとに何か要求する条件を持ち出す時なのだ。

「つぐないって、どんなことですか」

「吟子が撮影所に通うのに電車やタクシーに乗って行くのは、見すぼらしいとは思わねえか。スターならスターらしく車で乗りつけた方がカッコいいだろう。だから、吟子に車を献上しろよ」

そう言って岩見の顔色を、うかがった。

——とうとう、本音をあげたな——

岩見は、これまでにも何度か、この手を喰っている。「吟子を売ってやる」と百万の要求を出した時、その約束を破ったことについて詰問しようとスナックでの対話の時にも、言葉巧みに責任を、はぐらかしたばかりか、逆に「吟子ほどの女を、百万ぽっちで買えると思うか」というように持って行き「もっと出せ」と言った風に持ちかけてきた。

最初は凄んで見せ、途中で〝友情〟を持ち出して軟化し、そして条件を切り出すという手なのである。

——いくら俺が人が好いと言っても、もうその手には乗らない——

岩見は肚をきめた。

〝力〟の差

吟子は、百二十万円のシトロエンのスポーツ・カーが欲しいと言い出した。要するに百二十万円、出せと言うことなのである。

前に声楽の勉強するといって三十万円、渡したが、吟子は声楽の勉強なんか全然、しなかった。今度だって、車を買うかどうか分からないし、佐戸崎が間に入れば、相当ピンハネされることは目に見えている。

「僕には、もう一円の貯金もないんです」

そう言って断るよりなかった。

吟子が金をねだる時は、せいぜい四、五万円程度である。だが、佐戸崎に智恵をつけられると、三十万とケタが違ってくる。

そんなカラクリも分かってきた。

「嘘をつけ。貯金癖のある、てめえが、貯金のないことはねえだろう。吟子さまに、ほんとに可愛がってもらいたかったら、借金してでも都合しろよ」

「僕は四百万円、貯金がありました。それがお二人のため全部、使ってしまったんです」

「何だ、四百万ぽっち。俺が二、三枚、絵を描きゃ、その位の金は、すぐできるんだが、

これはお前と吟子の間の問題だからな」
「じゃあ、僕が融通した百万円を返して下さい。それをソックリ吟子さんに上げますよ」
「何を言やがる、この野郎ッ」
佐戸崎は怒って、続けざまに岩見を蹴りつけた。
「ふたことめには俺に貸した金の催促しやがる。こうなったら意地でも返さねえぞ。取れるもんなら、取って見ろッ」
佐戸崎の言うことは無茶苦茶だった。いつもこうだから、まともに話をする気になれないのである。
佐戸崎は罵り続けながら岩見を殴り、蹴り続けた。だが、非力な佐戸崎は殴り疲れて、吟子と並んでベッドへ腰を下ろした。
その前に後手に縛られた岩見が芋虫のように転がっているのを見下ろして、
「フン、この野郎、もう逆さに振っても鼻血も出ねえな」
「サア、どうかな。あんたが責めたんじゃ出さないよ。あたしが、じっくり責めて出させてみるよ」
「まだ俺に盾ついてやがるんだな。よしッ」
「やい、岩見。てめえが、いくら俺と張り合うつもりでも、どでい無理というもんだぜ。その証拠を、いま見せてやるからな。そこへかしこまって、ようく拝めよ」
佐戸崎は吟子を抱き寄せ、右手で乳房をつかみながら左手で首を引き寄せ、接吻した。
「どうだ。これが、てめえにできるか。しょうとしても吟子女王さまのお許しが出ねえだろう。それから、こうだ」
吟子を抱いたまま、ベッドへ倒れるように折り重なった。上になった佐戸崎は、
「ホラ、よく見ろ。俺と吟子の間柄は、こういうものだ。見たか、分かったか」
佐戸崎は、荒く体を動かした。岩見のところからは、佐戸崎の腿の蔭になって、その正体は見えなかったが、口を半開きにして首を振る吟子の様子で、佐戸崎の動きが相当、深いえぐりであることが分かった。
「どうだッ！　お前に、これが、できるか。吟子と、こうやったことは一度も、ねえだろう。ハハハハ、ざまあ見ろ」
それは当っていない。岩見も佐戸崎と同じ動作をしたことは、二回ほどあるのだ。
ただ、いずれも失敗してしまったため、自ら諦めもし、やめてしまったのだ。
「ね、あんな……」
下から吟子が抱きついて佐戸崎の唇を求めた。
「フフフ、分かってるよ。オイソレと終わりには、しねえよ。野郎をさかなに、うんと楽しもうぜ」
佐戸崎は、おこしていた半身を、ピッタリ吟子に密着させた。
「どうだい、岩見クン。羨ましいか。やりたくっても、お前には、できねえんだ。指を咥えて見てるしかねえ。そこが、お前と俺との根本的な相違なんだ、分かったか。変態野郎は変態らしく、そこで、かしこまって拝観してろよ。ああ、快い気持だぜ。たまらねえ。こんな楽しいことのできねえ、お前って野郎は、よくよくの不幸者だな。カタワだな」
佐戸崎は岩見を悪罵することで、サジスチックな昂奮を求めているのだ。
岩見には、それは分かっていた。だが岩見の最大の弱点である、一人前の男の機能を発揮できないことを、こうも露骨に面罵されることは、傍らに吟子がいるだけに辛かった。
岩見は、吟子と最初に会った、バー〝マドンナ〟の時のことを想い出していた。
――あの時も、酔った佐戸崎が自分を、からかい出した。だが、あの時は、ことごとに吟子が自分を庇ってくれた。自分の味方になっ

てくれた。それが、いまは、どうだろう。佐戸崎と一緒になって、自分に対する屈辱を楽しんでいる。女とは変るものだな――

だが、吟子を怨む気持などは毛頭ない。もともと自分が、そういう風に仕向けたのだから、罪は自分にあるのだと思った。

吟子は自分をノーマルな性格に直そうと思って努力してくれた。それですら自分は失敗した。普通の女性なら、自分がMであるということだけで身を引くであろう。ノーマルに戻そうとしてくれたことは、自分に好意を持っていてくれたからである。それに失敗すれば、そこで遠ざかるのが普通の女だろう。

にも関わらず、吟子は付き合ってくれている。自分の考えていることと、多少の相違はあるにしても、自分の好みに合わせているつもりで吟子は行動してくれているのである。

そう考えれば吟子は、やはり得難い女性であった。

イメージギャラリー『先公、さっさと宿題やっちゃいな』春日田春夫

激しい行為は、休戦状態に入っていた。

「おい、吟子。見ろよ、あいつのツラを。もの欲しそうなツラ、してるじゃねえか。お預けをくった犬みてえだ。俺達のおこぼれを頂戴したいってツラだぜ。アハハハ」

吟子も薄笑いを浮かべながら岩見を見た。

「可哀想だから、おこぼれを、頂かしてやれよ。俺達の、あまりものをな」

佐戸崎は吟子の身体の上から退いた。

「フフフ、面倒くさいよ」

「まあ可哀想だから、あの宿なし犬にも御慈悲を恵んでやれよ」

吟子はベッドから、だるそうに起き上がると、キッチンへ行ってガラス器の音をカチャカチャ言わせていたが、コップにウイスキーの水割りを持ってやってきた。

「あ、おい。俺にもつくってくれよ」

「面倒くさいなあ、自分でつくってよ。此奴が動かないと不便で、しようがないよ」

ひと口、飲みながら岩見の前に立った。

はだけたガウンの裾が割れて、丸い太腿が岩見の顔に迫ってきた。

「どう、タカシ。フフフ」

吟子は岩見の頭を撫でた。下から見上げる

と、あごがくびれて、花びらのような唇が美しかった。

吟子は微笑しながら片足をゆっくり上げて岩見の肩を跨いだ。

〝ホラ、こんなになっちゃったヨ。どうしてくれる？〟

というように、まともに向き合った。

香りも一層、高くなり、複雑な芳香をただよわせている。コーヒーで言えば、吟子の香りはモカである。だが、いまのそれは、ブラジルかジャバか、苦味の濃い味がブレンドされた香りであった。

「ホラ、どしたのさ。フフフ」

吟子は、岩見の方で寄ってくるのを待っている風であった。

「フフフ、恥かしいの。まさか、もうそんなガラじゃないよね」

吟子はマリファナの酔いが、まださめていないようである。目がトロンとしている。

岩見にとっては、吟子のこの匂いが〝マリフェナ〟であった。この匂いを嗅いでいると佐戸崎に対する抵抗感も屈辱感も麻痺してしまうのだった。

岩見は口を開け、歯を当てないようにしてくろい唇に唇を合わせた。

「おい、見えねえぞ。こっち向いてやれよ」

ベッドから佐戸崎が、どなる。

「フフ、何言ってんのよう。見たきゃ、こっちへ来て見りゃ、いいじゃないのさ」

と言いながらも吟子は、腰を捻るようにした。

それにつられて岩見の上半身も捻じ向けられた。

「アハハハ。おい、岩見。それが、おめえの役だ。天から授かった役だよ。吟子、中までようく掃除させてやれ」

佐戸崎の声を聞くと、岩見は一瞬、舌の動きがとまる。

「印度へ行くとな、人間の階級が七十いくつにも分けられてるんだ。まあ大ざっぱに分けても四階級ある。日本で言えば、士農工商だな。それ以上に厳然と区別されてるんだ。ホテルへ入ってもマネージャーとボーイでは身分が違う。ボーイは、どんなに働いても、絶対マネージャーにはなれねえ。階級が違うからだ。だがボーイの下に、まだ階段がある。床を磨いてる奴だ。ボーイは客のトランクを運んでチップをもらえるが、床拭きは客からチップも、もらえない。ただ、床を掃除するだけの役だ。此奴も絶対にボーイには出世できねえんだ。岩見、お前が、その床掃除の役だよ。お前は俺達の汚したあとを掃除する役それが天から授かった職業だ。そうだろ、岩見」

「じゃ、あたしは何の役？」

「お前は世の中の鼻の下の長い野郎共をトロトロにして金を絞り取る役だ」

「あんたは？」

「お前とアレして、その金を使う役だ。アハハハハ」

「フン、都合のいいこと言ってらあ」

吟子の股がギュッと岩見の首を絞めた。グッと呼吸が詰まったが、弛められる瞬間に新しい泉が沸き出し、岩見の喉をうるおした。

吟子も上でコップからチビリチビリとウイスキーを飲んでいた。

佐戸崎がベッドから起き上がった。

「おい、俺にも飲ませろよ」

「飲みたいの、あたしのオシッコ」

「バカ！」

佐戸崎は岩見の背中の方に立つと、後からダラリとしたものを岩見の頭の上に乗せた。

「アハハ、此奴は今に出世するぜ」

「どして」

佐戸崎は吟子からコップを、ひったくって

ガブリと飲んだ。
「だって、そうだろう。ホラ、キンの冠を頂いてるじゃねえか」
「アッハハハ」
吟子が身体を揺って笑った。酒がこぼれて岩見の頭にかかった。
「おい、もったいねえじゃねえか。此奴に飲ませるのはモノが違うだろう」
「違うの。あんたのものに飲ませたのよ」
「アッ、なるほど、きいてきたぜ」
ウイスキーは、確かに佐戸崎の尖端にも振りかかった。それがピリピリと刺戟したか、みるみる膨れ上がって行くのを、二人は見つめていた。
「アッハハハ。こりゃ、いいや。効くぜ」
見つめている吟子も燃えてきて、岩見の首を両股でキュッと締め、深く舌をはさんで締めた。
「ええい、邪魔だッ！　てめえなんか、引っ込んでろッ」
佐戸崎は岩見の髪を摑んで、後ろざまに引き倒した。
「アッ……」
泣き出しそうな岩見の顔を尻目に、佐戸崎は吟子の肉体を奪って、ピッタリと裸と裸の身体を密着させた。
片足で岩見の胸を踏みつけたまま、頬をピッタリくっつけて、コップの酒を、交互に飲み干した。
「へへへへ、今度は、俺さまの可愛がる番だよ。てめえはそこで、おとなしく拝んでろ」
佐戸崎は立ったまま、岩見の顔の真上で、吟子と抱き合った。

くるくる変る女心

あまりにも長時間、後手に縛られていたので、岩見の手首から先は痺れてしまって、感覚がなくなっていた。
今、机に向かって仕事をしようと思っても指先が動かず、指先が思うように動かず、強いて指先に神経を集中して描こうとすると、ブルブルと手がふるえてしまって、引くことができなかった。
岩見は絵を描こうとしても指先が動かず、脳裏には、佐戸崎の狂ったような執拗な責めと、ただれたような吟子の肉体が浮かんできて、とても仕事ができなかった。
ものを食べる時も、口の端が痛くて大きく開けられなかった。
あの時、吟子が口へモロに掩いかぶさっている上から、佐戸崎が吟子の背中を踏みつけたので、一瞬「ウッ！」と息が詰まるかと思ったが、その時、唇の端が切れたのだろう。
なんで、こんなに佐戸崎から責められなければならないのか——
佐戸崎は吟子と自分の映画の仕事を、岩見が邪魔していると誤解しているのだった。
あの時、岩見は、もう意識が半ば、もうろうとしていたが、吟子と佐戸崎が激しく言い争う声が聞こえた。
何をしゃべっているのか、岩見は既に聞きとることもできないくらい疲労していた。
マリファナのせいで佐戸崎も吟子も、かなり、おかしくなっていたようだった。
鉛筆で下絵を描こうと思っても、なかなか画想が浮かんで来ないし、手がふるえて描けないので、岩見は鉛筆を放り投げた。
そこへ久し振りに鬼山から電話がかかってきた。
今、新宿の「マドンナ」に来ているが、黒田氏もいるから来ないかと言う。
仕事もできないし、こんな時は久し振りにあけみの顔を見るのも、いいだろうと思って出かけて行った。

「どうしたんです。顔色が、わるいですね。身体の具合いでも悪いのですか」

鬼山に言われた時はギクリとした。

そう言えば、この頃、鏡も見ないが、ひとが見れば、よほど憔悴しているのであろう。

「いえ、ちょっと疲れているだけです」

「大丈夫ですか。実は、また一つ、表紙と扉を描いてもらおうと思うんですが、やってくれますか」

時間が早いせいか、あけみは、まだ来ていない。酒を飲む前に、仕事の話を片づけてしまった。

「もとのマンションの方は、やはり行ってるんですか」

黒田が顔をジッと見ながら聞いた。

酒が入ってくると、岩見の気持も、くつろいできた。最近の事情を鬼山と黒田の問われるままに話した。

「どうも何だな。あの加納吟子という女性はあなたを、かなり阻害してますな。このへんで少し距離をとった方が、いいんじゃないんですか」

「しかしね、鬼山さん。そりゃ、なかなか踏んぎれないもんですよ。そこがMの人間の辛いところで、僕なんかも、そういう女性に、どれだけ悩まされたか、しれませんよ」

黒田が岩見の心情を察し代弁してくれた。

「イヤ、あなたは溺れているようで溺れていないあくまでもプレイとしての領域を出ずに、その中で楽しんでいますよ」

鬼山は最近、一番、親しくしていた春木俊野氏が、二十才以上も年の違う女に溺れて、家庭争議にまで持ち込んでいるのが悩みの種だったが、岩見もそうなってもらっては困ると思って忠告したのだった。

「まあ、何といっても、まだ僕は独り者ですからね。妻子に迷惑をかけるというようなことはないので、仕事の方は、どんなことをしても一生懸命、やりますから――」

あけみは今日は休みと見えて顔を出さないので、マドンナを早目に切り上げた。

別れる時は、岩見は、かなり元気を取り戻している風に見えた。

岩見は鬼山の忠告を容れて、しばらく吟子のもとを訪れるのは遠慮しようと思った。

一週間ほど経つと、口の傷も癒り、疲労も快復した。仕事も順調に、こなせた。

そうなると、また吟子に会いたくなったが我慢していた。そこへ吟子から電話だった。

「どしたのさ。あんたの仕事の電話もメモしてあるしさ、ちょっと来ない？」

「ハイ、すぐ行きます」

吟子の呼び出しに、もうたまらないといった風に、一も二もなく応じた。

吟子は愛想よく迎え「いろんなもん買って来たから二人でつくって食べようよ」と冷蔵庫を開けた。吟子が料理をつくるなどということは滅多にないことだった。

キッチンでジャガイモの皮を剝いたり、味噌汁のつくり方を教えたり、二人で、まるでとのように楽しく動き廻った。

こんな時の吟子は素直で岩見の言う通りになって、女らしい優しさを見せた。

「この頃、佐戸崎君は来ますか」

岩見の一番、気になっている事柄だった。

「あいつ？　フフフ、来ないわ」

「そう言えば、この間、何か言い合ってましたね。僕は、よく分からなかったけど」

「あいつね。あたしの仕事を自分のものにしようとしてるのよ。あたしのマネージャー気取りでいるけど、そのくせ、あたしの仕事を邪魔しているのは彼自身なのよ」

「どうしてですか」

「自分の取り分を欲しがるから、嫌われるの

よ。あたしのギャラの倍以上も、取るんだもん。ひどい奴よ。あたしなんか、まだマネージャーなんて持つ柄じゃないのよ。そんなもの、なくたって自分でダイレクトに交渉できるわ。人を、ばかにしてる」

「何か僕が邪魔してるように誤解していましたね」

「そうじゃないのよ。あれは、あんたを責める口実よ。あいつは全く、ひどいんだから。今度、奴が来たら俺の小便も飲ませてやる。お前と俺の小便をミックスして飲ませてやろうなんて言うのよ。アラ、お料理つくってる時に汚いわね。ごめんなさい」

料理ができて、ウイスキーをオンザロックで二人で楽しく食事した。岩見は何だか自分の家庭を持ったような幸福感に浸った。

先日の吟子とは、まるで人が違うみたいだった。

「ねえ、今夜、泊まってっていいわよ。あたし一人で淋しいから、慰めてくれる?」

「ハイ、喜んで……」

「サービスしてくれる? フフフ」

何と今夜の吟子の綺麗なことであろう。

「今夜、あたしがサービスしてあげてもいいわよ」

今夜の吟子は、すごく親切で、やさしい。

食事が終って、ほろ酔いになったところで扉に鍵をかけて、ベッドへ誘われた。

「ねえ、たまにはチャンとしたの、やらないこと?」

それは岩見にとっては不可能であった。

「そう言って下さるのは有難いんですけど、やっぱり僕のサービスの方から先にさせて下さい」

「フフフ、そう。いいわよ」

そういう点は、もののわかりのいい吟子である。キリリと表情までが引き締まって、いつものサジスチンに早変りした。

「今日は面倒くさいからね。ダイレクトに行

イメージギャラリー……『双臀の重圧・契約愛人』……岡　たかし……

くわよ。そこへ仰向けにおなり」
吟子は最初からパンテイを、はいていなかった。いきなり顔の上へ、ペタリと跨がると
「サ、一生懸命、サービスおし」
激しい上下の運動が行われた。
「ウッ！」
瞬間、ククックッと力がみなぎってくるのを意識した。
——ああ、いまなら正常な行為もできるかもしれない——
口に出したくも塞がれて、しゃべれない。
吟子は猛烈に押しつけてきた。
「フフフ、あたしだって、いい気持だよ」
一たん、このポーズに入ってしまうと吟子は、なかなか許してくれなかった。行きつくところまで達しないと、休ませてさえくれないのだ。
それでも岩見は、うれしかった。
二人きりで、水入らずで、こうして楽しめるのは、幾日振りのことだろう。
〝今夜の吟子さんは、ほんとに優しい〟
この前は、マリファナを吸っていて、半分気狂いみたいだった。それと、あのあと、佐戸崎と何か、まずいことがあって、再び佐戸崎を憎み出したのに相違ない。

ポルノ写真

ドンドンと扉をノックする音が聞こえた。
「あらッ！」
一瞬、吟子の動きがとまり、上と下で不安そうに顔を見合わせた。
「おい、開けろ。開けろよッ、吟子」
「佐戸崎だわ。黙って……」
吟子は居留守を使う気だった。
「おい、どうした。早く開けろッ」
ドアは激しく乱暴にノックされる。吟子のくちがキュッと岩見を締めた。
「おい、どうしたんだ。開けろよ」
吟子は緊張に両の太股をキュッと締めた。舌を強くはさんだまま、動かなかった。
「おい、居ることは分かってるんだ。扉の下から、あかりが洩れてるじゃないか」
「ちき生ッ、まずい時に来やがって」
小声で舌打ちしながら、舌をキュッキュッと締めあげる。
「開けなきや、管理人を呼んでマスターキーで開けさせるぞ」
チョッ！
舌打ちした吟子は、
「開けるわよ。何よ、こんなに遅く」
「早く開けろッ」
吟子は仕方なく岩見の上から立ち上がるとはだけたガウンの前を合せて、
「すぐ帰すからね。あんた、ちょっと隠れてらっしゃい」
キョロキョロ周囲を見回して、ベッドの下を指差した。
岩見は居間へ行って洋服をとってくると、ベッドの下へ潜り込んだ。
「今夜、疲れてるの。用事なら明日、来て」
「いい話を持ってきたんだよ。開けろよ」
扉の内外で押し問答していたが、結局、吟子は折れて扉を開けた。
「何だよ、おい。俺を玄関払いする手はねえだろう」
吟子を押し戻すようにして佐戸崎が入って来た。
「ウワー、臭い！」
かなり、酒を飲んできたと見える。
「話って、なによ」
佐戸崎は、うさんくさい目つきで、部屋の中をキョロキョロ見回していたが、
「誰が来たんだ」
「誰も来やしないよ」

「嘘をつけ。二人で酒を飲んだじゃねえか」
テーブルの上にグラスが二つ、のっていて料理も二人前の皿が並べてある。
「あんたに関係ないわよ、そんなこと」
「おかしいな。妙に隠すじゃねえか」
佐戸崎はキッチンの方へ行って見、更に寝室へ入って行こうとした。
「ねえ、今夜は帰ってよ。話をきくからさ」
とめる暇もなく寝室へ入って行った佐戸崎は、ベッドの下を覗き込んで簡単に発見してしまった。
「この野郎！　何だって鼠みたいに、そんな所へ潜り込んでやがるんだ。出て来い！」
岩見は、観念して這い出してきた。
半分、頭を出したところを、
「俺の留守に、つけ込みやがって！」
佐戸崎は靴のまま、岩見の頭を蹴った。
「な、なにをするんだッ」
岩見は、よろけた身体を立て直して起き上がると、身構えた。
「なにお、この野郎ッ」
佐戸崎が拳をかためて殴りかかるのを、岩見は片手で受けとめると、ドーンと押した。
佐戸崎は、もろくもドスンと、ひっくり返ったが、
「野郎、やりゃがったなッ」
と、ポケットからジャックナイフを、とり出した。
「やめてー。ねえ、やめてよッ」
あとから入って来た吟子が、後ろから組みついた。
「この野郎！　舐めやがって。この俺に手向いする気かッ」
振りほどいた佐戸崎は吟子の頬にピシピシと平手打ちをくれた。
「やめてよッ」
吟子は泣き声になった。
「まあまあ乱暴は、やめて下さい。向うへ行って話し合いましょう」
冷静をとり戻した岩見が、なだめた。
「何言ってやんでえ」
文句を言いながらも、吟子に引っ張られて居間へ戻った。
「あたしが隠れてって、頼んだのよ」
「何で、隠れるんだ。知らねえ仲じゃなし、何も隠さなくたって、いいだろう」
「今夜は、あんたと会いたくなかったのよ」
「なにい、このあまッ！」
とびかかろうとするのを、岩見が押しとどめた。
「誰だって、その日の具合いってものがあるでしょ。あたしは何も、あんたの女じゃないんだからね」
「おめえ、俺に向って、よくそんな口がきけるな。ぶっ殺してやるぞ」
いきり立つ佐戸崎を、
「まあまあ、おとなしく話し合いましょう」
岩見は、おだやかに押しとめた。イザとなれば腕力では到底、岩見の敵でないことは佐戸崎も知っている。ここで乱暴すれば、岩見も実力行使に出ることは目に見えているから佐戸崎はソファに腰を下ろすと、グラスにウイスキーを注いでガブッと、あおった。
吟子もふてくされたように腕を組み、煙草を吸いながら、なおも佐戸崎とやり合った。
吟子も岩見が、そばにいるので、佐戸崎が手出しできないことを知ってるから、一歩も後へ引かず、仕事の、うわ前をはねたことやだまされたことなどを素っ破抜いた。
いくら佐戸崎が詭弁を弄しても事実の前には勝てなかった。佐戸崎は、しどろもどろになり、吟子に、やり込められてきた。
「お前達なあ、俺に向って、そんな口をきくけどよう、俺を怒らせねえ方がいいぜ。人を怒らせて得になることは何もねえんだ」

「とに角ね、もうあんたとは、会いたくないの。絶交だわ」

「フフフ」

佐戸崎は凄い目つきをして吟子を睨み、ふてぶてしく笑った。

「おい、俺は今まで、お前達を陰になり日向になりして、かばってきてやったんだぞ」

「何をよ。何で、そんなことがあるのよ」

「これを見ろ」

ポケットから二、三枚の写真を出すと、ポイと投げた。ヒラヒラと床へ、散らばった。一枚は表を見せて床に散った。

――あッ！――

吟子は息をのんで、それを拾い上げた。岩見も見てしまった。

それは、つい今しがた、やっていた、吟子と岩見の、いつものプレーの写真だった。

だが、同じオブシーン・フォトでも、二人をドキリとさせるポーズだった。

吟子は片膝を寝かせて岩見の頬にピッタリあてがっていた。片方の膝は立て膝になっていて、そのために岩見の顔が間から覗けていた。立て膝した膝頭に手を当て、片方の手は着物をグッと、たくしあげていた。

吟子は顔を斜めにして、横を向いている。その後方に佐戸崎が腕組をして笑って立っている。その方へ笑いかけていた、吟子の顔が特に、まずく撮れているというのではないのだが、何か間が抜けたような、極めて淫らな表情になっていた。

しかも床すれすれから、かなりなアップで撮っているために、吟子の下半身が異常に大きく誇張されていて、太腿などは実物の倍もあるような、太さになっていた。

一方、岩見の方は、目を半目にして、寝呆けたような顔に写っていた。ちょうど、まばたきをする瞬間を捉えたものらしく、それこそ間の抜けた痴呆のような顔で、片頬が吟子の太股に圧されて、ゲッソリと、こけて、まるで顔の輪郭が崩れていた。口も歪められたまま、大きく開けられ、アップのために、吟子の内部までが妙に鮮鋭なピントで捉えられていた。

何もかも、さらけ出してしまっているということが、吟子のもつ神秘的な美しさを破壊してしまっている絵であった。

他人がこの写真を見たら、どう感ずるか。つまり、吟子も岩見も知らない他人が見たら大胆な、そして珍奇な写真としか感ぜられないだろう。だが、吟子と岩見が見た場合、これは自分の一番、醜い場面、一番、羞かしい場面を撮られた――と感ずるのである。

吟子は、自分のヌードを撮られても、たとえ露出している写真を撮られても、別に恥かしいとは感じない。そこに自分の美しさが表現されていれば、それはワイセツではないと思っているからだ。

しかし、この写真のように、自分の顔の表情も一番、痴呆的な瞬間の表情を捉えられ、均勢のとれた肉体が醜く歪められて撮られた写真には、甚だしい羞恥を感じたのだった。

もちろん、この写真は例の週刊誌「女性ライフ」の記者とカメラマンが取材に来た時に撮られた写真であることは、二人とも、すぐ分かった。

――あの時、こんな恰好、したかしら――

佐戸崎の言うままに、色々なポーズを撮り調子にのって、かなり大胆に振舞った。

「凄い凄い」と言うカメラマンのおだてにのって、驚異の目をもって見る婦人記者を、もっと驚かせてやろうという、奇妙な見栄みたいなものに、そそられて、こんなところまで発展してしまったことを想い出した。

岩見の方は「顔だけは写さないでくれ」と頼んであるのに、こんなにも、ひと目で自分

と分かる、それも一番、間抜けな表情をした瞬間を撮られているのだから、まるで自分の犯した犯罪を発見された時のような、恐怖と羞恥を同時に感じたのである。あとの写真も同じような写真だった。

佐戸崎は、二人が激しいショックを受けたのを察知すると、

「こういう写真が世に出ることを、俺は極力拒否してきたんだぜ。あの時のカメラマンはこの写真を雑誌に載せると頑張ったんだぜ。そうだろう、簡単だよ。肝心な所だけ黒く塗りつぶしてしまえば、それで平気で、パスするわけだからな。だが俺達が、この写真を見た場合、肝心な部分などは、どうでもいいんだ。そこが塗り潰されていたとしても、恐らく、こんなワイセツな写真はないだろう」

さすがに佐戸崎は、二人の弱点を摑んでいた。そしてそれが「的を射た！」と見た時、彼の弁舌は冴えてきた。

「俺はカメラマンに極力、頼んで、こんなところの写っているフィルムを、買い取ったんだ。カメラマンは自分の撮ったフィルムは絶対に人手に渡さないもんなんだ。それを拝み倒して十万円、払って買い取ったんだぜ。俺は、お前達には話さねえが、蔭でこんなに苦労したり、金を使ったりしてるんだぜ」

十万円も佐戸崎が払うわけがないけれど、フィルムを佐戸崎が持っているかどうか、それは嘘かほんとか、分からなかった。もし持っているとすれば、大きな弱点を握られていることは確かだ。

「これを週刊誌にスキャンダル・ゴシップの特集として流したら、吟子の女優としての生命は終りになるぜ。だから、俺を怒らせねえ方がいい」

「フン、そんなもんで、あたしの弱点を摑んだつもりでいるの。なにさ、そんなもん。発表するなら、したって構わないよ。その代りあんたの収入の道も途絶えるんだからね」

「そうなったら俺はまた絵描きに戻るさ」

二人は互いに虚勢を張り合って口論しているが、それは二人きりの問題についてだけで岩見のことには全然、触れていないのだ。

岩見が、どんな気持でいるかは、二人にとって眼中にないことなのだった。

切り札として出した写真に、一時は、たじろいだ吟子だが、吟子の方も捨て鉢気味で、佐戸崎に突っかかって行った。

とうとう、癇癪をおこした佐戸崎が、

「なにを、この女ッ」

再びパシーッと平手打ちが、とんだ。

「暴力は、よしなさい」

岩見が立ち上がり佐戸崎の手をおさえた。

「てめえ、やるかッ！」

佐戸崎は猛獣のように歯を剝いた。

（続く）

☆SM画稿 募集!!☆

☆SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしいSM画稿を読者の方々から募ります。

☆画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチシズムに関係したものでも、本誌の内容にマッチするものでしたら、お好みのものを、お寄せ下さい。

☆必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カット的なものは半分大でいいと思います。

☆掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイデアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

〈奇譚クラブ編集部〉

第七十五回

王女のAV

「いつかお前が抱いたククリ枕だがね……」

パーティは、ライフ・ショーの男女が何度目かの大浪に乗ってヘトヘトになるまで続けられた。そして、叩いても、ケシかけても、ビクともしなくなってしまうと、妙にシラケた空気が出てきて、有明も、ようやく、お開きにすることを考えはじめた。たちまち、アマゾン女兵たちは、どこかへ、いなくなってしまう。英国のレディ二人は、ウイリー博士夫妻に引き立てられてポートエリアの牢獄に連行された。

英国風の落ちついた調度に飾られたバーに残ったのは有明と新津の二人だけだった。そうなって有明が最初に声をかけた言葉が「ククリ枕」、つまり、数カ月前に新津が抱いた杉本美和子、脱走罪に問われて悲惨にも0号・生存刑に処せられつつある重罪人についてであった。（第21回、第40回、第57回参照）

「あいつは、たった一回で、マンマと君の子ダネを宿してしまったんだ」

有明の足下、厚い敷物の上に顔を埋めるように平伏している新津が、どんな顔をしたかは見えなかったが、そのムキ出しの肩がピクピクと動いていた。

極限状態を強いられ続けてきた半年の間に新津の感受性は、すっかり痲痺してしまったようだ。その証拠には、有明がこのようにショッキングなことを言ったのに、新津の方はそれ程、心を動かされてはいなかったのである。

それより、彼はさっきから、この千載一遇とも言うべきチャンスを、取ろうか取るまい

かの二者択一に悩んでいた。彼は今、ここへ来て始めてといってもよい程、五体の拘束を解かれていた。その上、目の前には有明一人きりしか、いない。

―若し今、ひと思いに……。

飛びかかって有明の首を締めることだって不可能ではあるまい。警察官として自ら鍛え抜いた柔道の業には自信があった。一対一なら、決して有明に負けるとは思えない。

この誘惑は、新津にとって物凄く新鮮だった。思わず武者振いが出た程である。洞察力にすぐれた有明が不覚にも新津の本心を見透していないらしい。まるで隙だらけである。新津の四肢には力が、みなぎりはじめた。

「新津君、今は二人だけだ。こんなときは、それ程、この国の作法に、とらわれなくてもいいよ。さあ上体を起して、顔をあげ給え。一杯あげよう」

新津の鼻先に、オンザロックのグラスが突きつけられた。顔をあげて、うっかり心の動きを見破られてしまいはしないかと怖ろしかったので、うつむきながらグラスを受ける。

「グッと干して、そうそう。そこで、一緒に来たまえ。彼女に会わせてやろう」

気軽に立ち上って背中を見せる有明を、

――今だ。後から、とびかかって……

と瞬間的に思った。膝を立ててマラソンのスタートのような姿勢である。

が、その瞬間、有明が振りかえった。

「変なことを考えない方がいいよ。私を殺して、どうやって逃げようというのかね。私の声紋がなければ動かないポイントが要所要所にある。私が死ねば、忽ち、この国は崩壊するだろう。この国の自由人たちは皆、このことを胆に銘じている。だから、反逆が起らないのだ。新津君、君に与えた手足の自由は、私にとびかからせるためではない。より一層私に仕えて貰いたいからなんだよ」

新津は、ヘナヘナと、うずくまってしまった。何も気づかないようでいて、有明はチャンと自らの危険を察知していたのである。

ウイリー博士を除いて、この国の男は、ことごとく去勢され脳手術を受けて、いわゆる『男奴』にされている現実をみれば、自分以外に『男』の存在を認めない有明の厳しさがよくわかるのであるが、不思議なことに、新津だけはウイリー博士に次ぐ例外になろうとしていた。色々な配慮が、かくされているにしろ、何よりも有明が新津を好ましく思ったことが最大の要因であったといっていい。

だから今、大変な反逆未遂が発覚したからといって、少しも罰する気にならないのである。かえって、大腹中を見せつけることで新津の心服を期待してもいた。それは講談本の中で小田原攻めの秀吉が、向背のわからぬ伊達政宗に自らの佩刀をあずけて単身、攻囲軍の配置を案内したという故事に似ている。計算し抜かれた図太さとでも言おうか。

それより大切なのは、この国の運営には、有明が生きていることが不可欠であるという

前号まで＝秘密裸女王国の独裁主、**有明**は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷属を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。英国王女**メリー**とて例外ではなく、未だ正式のレセプションになる前から、帰国直後の有明たちによって慰みものにされていた。かつて彼女のお付きだったイングリス卿夫人**ジャネット**も共に捕えられて、思いがけず王女を責めるのに一役、買わされてしまっていた。

認識が徹底しているということである。一人しか操縦士のいない旅客機で、突然その彼が死んだとしたら、飛行機は墜落する他はあるまい。この国でも、有明の死は全員の死を意味していた。アマゾン女兵に、クーデターの可能性が若干、残されていたとしても、このキーを奪回しない限り、有明と一緒に自分達も自滅する他はなくなってくる。

ついでだから、この管理機構を、もう少し説明しておくことにする。

有明が不在の場合、ポート・エリアとパレス・エリアの間の通路は開閉出来なくなる。この通路は三つあって、第一は、女囚たちを投げ入れる高いところにある入口。これは俗に「地獄門」と呼ばれている。（第24図、参照）第二は、有明だけが出入操作の出来る下の通路。これは秘密とされている。（第62図参照）それから、もう一つ。華清湖の奥に、大后の貴和でさえ知らない極秘の脱出口があって、抜け道として地上に出ている。これら三つとも、有明の肉声による暗号呼称を電気的に声紋として、とらえることによってのみ作動が可能になるのだから、有明がいなければ動かすことが出来ないのである。

又、食糧については、原料はパレス・エリアに貯蔵されていて、必要量だけ、独自のコンベヤーによってポート・エリアに送られ、加工される。ポート・エリアに、もし反乱等が発生した場合、忽ち食糧がストップしてしまうのである。逆に電力、その他のエネルギーは、ポート・エリアにおいて製造されるから、これはパレス・エリアにおける暴動をコントロール出来る。ともに、あらゆる不測の事態に対処するため、有明が慎重に考え抜いた結果であった。

戦意？　を喪失した新津は、ただなすこともなく、有明の後に従って歩いた。

いったんメインビルディングを出て、道ひとつ隔てた入口を入る。数名の男奴ガードマンによって厳しく警護されていて、さすがの有明でも合言葉をいわなければ通して貰えなかった。男奴には融通というものが考えられないからである。

入口には大きな文字で、

「インスティテュート・フォア・ヒューマン・サイエンス（人間科学研究所）」

という文字が掲げられている。つまり、これがウイリー博士の膨大な研究を支える本陣なのである。

中のロビーで、再びウイリー博士の出迎えを受ける。

「さっきの二匹は、もう運び込んだのかね」

という有明の質問に対して、博士は一礼して答えた。

「はい、そう致しました。何分にも時間がないものですから、一刻も早く、と考えまして……」

「今、何をしているの？」

「測定です、体力の」

「ちょっと覗いて行こうか」

といって、ジロリと新津を振り返った。

何でもない凝視だというのに、ギクリとする新津だった。

激しい息づかいが、扉の外からでさえ聞えてきた位だったから、中へ入った途端、その余りにも凄まじい修羅場は、有明のような怪物は、ともかく、新津を恐怖のドン底に陥れるのに充分であったといっていい。

体力測定室の一隅にある測定器具のひとつに、今、メリー王女が縛りつけられていた。否、縛りつけること自体が目的ではなかったのである。彼女は強いられた不自然な姿勢の

もとで、極端な運動をさせられている。

上体を水平に倒した恰好で、両手首を左右に強く、ひかれている。

足下にはコンベヤーベルトがあって、速度を自由に調節出来る。馳けなければ、足は自然に後に持って行かれて、否応なく腰が落ちてしまう。そこで彼女は、その腰を鎖で吊りあげられていた。それも褌縛りの縄尻を吊られるなどという簡単なものではなく、AとVの双方に挿入された特殊な器具の先端で、ひきあげられているのだ。詳細を書くことは許されないが、賢明な読者はイラストで、ご想像いただきたい。

要するに、腰を下げようとすると、体内にある二本の棒が八の字型を、いっそう拡げて、ますます抜けなくなってしまうのである。

コンベヤーの動きに、足の運動が、ついてゆかれなくなればたちまち、この八の字責めが、はじまる。王女は、必死に駆けていなければならなかった。

女として最も恥かしい部分を衆目に曝して娼婦や、いかがわしい見世物女のような真似をさせられてきたことだって、王女のプライドは、ズタズタに踏みにじられてしまっているのだ。ましてや、ここでその部位に加えられている暴力は、辱かしめというよりは苦痛だった。恐怖だった。若し転倒でもしたら、柔らかい肉の凹みは彼女の体重を支えきれるだろうか。そこに喰い込む鉄の爪は、鎖にひかれて、そのあたりを無茶苦茶に、ひきちぎってしまうにちがいない。

グイッと髪を摑んで顔をひきあげられた。ニヤニヤ嗤っている有明とウイリー博士の顔が、涙と汗で朦朧とした王女の目に映った。

激しい瞋りが、こみあげてきて、完全に自制心を奪われた王女は、自由にならず、又、激しい運動を停めることも出来ないのに苛立って、ペッーと唾を有明の顔に吹きつけたものである。

もちろん、サッと有明が身を引いたし、王女の顔の位置が低いこともあって、唾液は空しく床に落ちた。

これは大変な反逆だった。若し彼女が未決囚でなかったら、重罪に問われるべき行為である。

有明の顔に冷たい憎悪が、ひらめいた。

「もう一匹の方は、どうしていますか」

ウイリー博士に問いかける言葉が、平静であるだけに、一層新津には怖ろしく感じられた。

「只今、体毛を除去したところです」

「すぐ、連れてきていただけますか」

「承知しました」

忽ち、男奴に引き立てられたイングリス卿夫人が転がり込んできた。無残にも髪は丸坊主、ありとあらゆる体毛を剃りとられた、文字通り赤裸の姿だった。

息も絶え絶えに両足を動かしているメリー王女の背中に無理に跨がされた夫人は、転がり落ちないように両手を高々と吊られた。両足首は王女の腹下で、くくり合わされる。

「ギャーッ」

王女が獣のような悲鳴を奔らせた。夫人の体重がモロに、その背中にかかったからである。あわてた夫人が、吊られた手に力をこめて腰を浮かせた。しかし、腕の力がつきればやがては又……。永久機関のような責めのシーソーゲームだった。

鬼の目に泪

メリー王女とイングリス卿夫人の悲泣のデュエットを背後に聞き流して、有明はスタスタと拷問部屋を出て行く。一体、いつまで、この残酷な拷問が続けられるのだろうか。暗たんとした気がかりを残して新津は、これに追従する他はなかった。

貴人用のエレベーターで降りる。

プーンとすえたような臭いが、たち込めているフロアであった。何やら家畜舎に入ったようにジメジメした雰囲気がする。

たしかに、ここは家畜舎に相違なかった。ただし、ここでは家畜といっても、やはり人間であることが、ちがっている。しかも、パレス・エリアでは上は貴妃から、下は畜位物位の女囚にいたるまで、有明に奉仕するという大目的のために精進している。いわば目的集団である。ところが、ここは違う。ここで飼われている男女には、何ひとつ課されている目的がない。飽くなき「人間の研究者」ウイリー博士の実験に供される、いわばモルモットでしかなかった。

実験材料だから男女老若、差醜肥痩の区別はない。つまり、パレス・エリアでも、又、ポート・エリアでも使い途のない「クズ」が行きついた最後の場所だといえよう。

急に床が、あかるくなった。

追い込みの家畜舎は、もう一階下になっていて、その天井、つまり今、有明と新津が立っている床が素通しの強化ガラスだった。下の家畜舎は直径二十メートル程の円筒型の凹みになっていて、天井までの高さは低くやっと二メートル程しか、なかった。

中に半径分だけ格子が二組みあって、一つは固定されているが、もう一つは中心部にある柱を支点にしてグルリと一廻転出来るようになっていた。共に電流が入っているから、家畜は、さわることはおろか、うっかりして身体のどこかに触れただけで、とび上がってしまう。つまり、こうすれば囚人たちを、一カ所にまとめやすいと考えたのである。

まとまったところで、上から揚げ蓋を開いて、必要な奴だけを吊り上げればいい。

不思議なことに、人間というものは、こうした極限状態をとらされると、すっかり利己主義者に変貌してしまう。モルモット人間たちは額と背中に実験番号（現役の肉体番号にあたる。これとは別に男奴も男奴番号で整理されている）を朱彫りで黥されているから、上から大声でその番号を呼ぶと同囚者は、みんな、犠牲者が誰であるか、直ぐわかるわけである。ところが、呼ばれなかった者が争うようにして、番号を呼ばれた者に襲いかかり寄ってたかって腕輪をロックし、上から下ってきた鉤に、ひっかけてしまうのである。昨日は人の身、今日は、わが身とわかっていて

も、今の瞬間を助かったという意識で、味方を売るのであった。

新津は未決囚として、上の病院に収容されていたから、ここへきたのは始めてのことだったのである。それだけに、あまりの無残さに、心の竦む思いで強化ガラスの床を、歩いた。何か、下にいる「仲間」を足蹴にしたような気持だったからである。

有明はといえば、そんなことを気にするでもなく、スタスタと新津を導いて進んだ。

円型の空間を囲む彎曲した壁には、鉄格子で仕切られた小間が、いくつもあって、特別な配慮を必要とする実験材料の独房となっている。

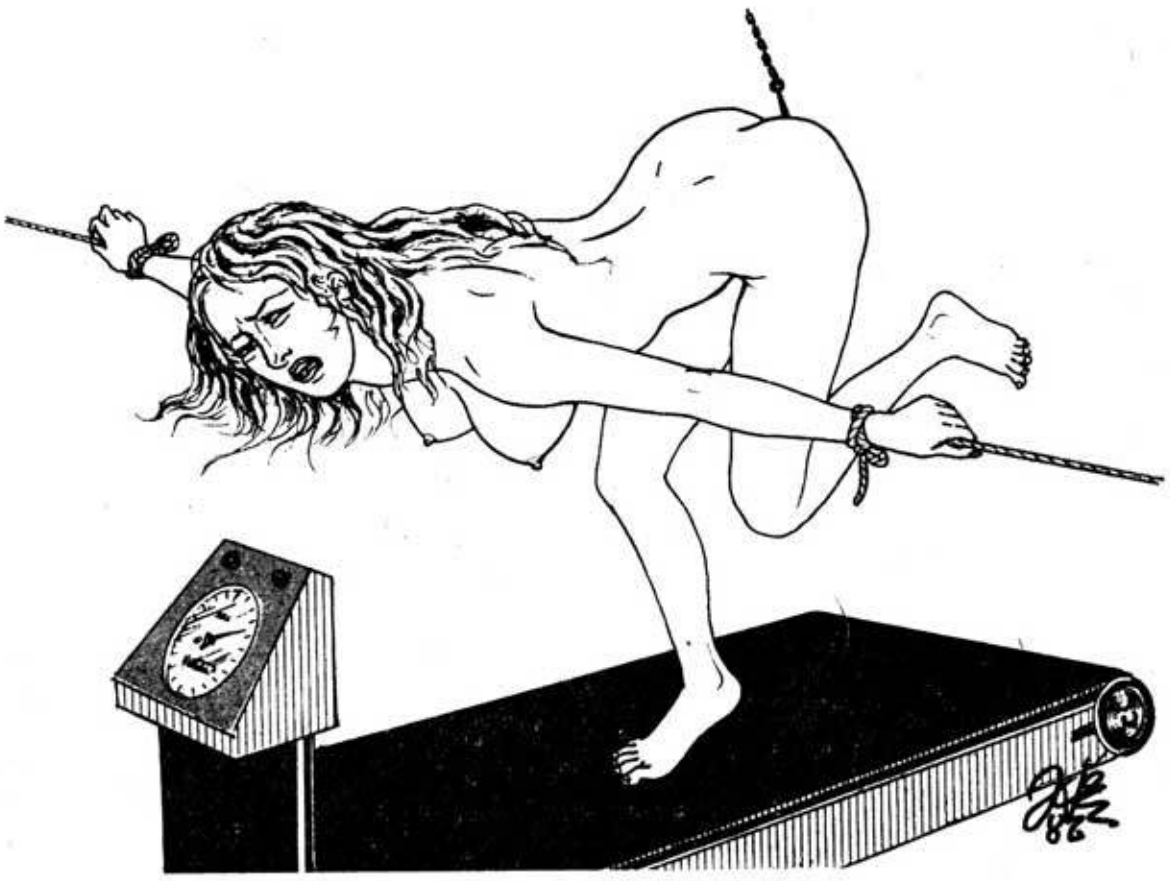
その一つに、逃亡将校として0号生存刑を執行されつつある杉本美和子が、無残な肉体を横たえていたのである。

もっとも、妊娠が判明すると同時に、刑の執行が一時停止されたので、彼女は檻の中で終日、ゴロゴロしているという、束の間の幸せで結構、満足していた。それにしても全くゴロゴロしているといった方が、適切であった。今の杉本美和子は一匹の芋虫でしかなかった。手も足もないから（第57回、参照）立つことはおろか、坐ることすら出来なかったからである。排泄物で汚れたウレタンマットの上で、輾転反側するのが、せめてもの彼女の自由だった。

苦楽といっても絶対的な尺度ではなく、単に比較の問題でしかないということは、この「芋虫」の例をもってしても実証出来よう。

あの惨烈な一寸刻み五分試しとも言うべき0号生存刑。傷の痛みが、ようやく癒えたと思うと直ぐ新しい苦痛が始まる。その度毎に、肉体が少しずつ欠損して行くという、気の遠くなるような刑罰に比べたら、こうして独房に放っておかれるということだけでも、まさに、天に昇ったような安息であった。彼女の腹は目に見えて、ふっくらと盛り上がり、時には嬰児の胎動さえ感じるようになっている。母親となることは本能的に美和子を強く、楽天的に変えてしまっていた。

彼女は死ぬことを願わず、生きることを願っていた。こんな姿にされてしまったというのに。子を宿した母体は、切実に生を希求した。それを証拠立てるかのように、優しかった乳房は貪婪（らん）なまでに盛り上がり、ピンク色に埋っていた小さな乳首は切りとられてしまっているというのに、かえって全体が逞しく突出して熟れた野苺のように赤黒く腫れ上っ



ている。

——生きたい。——という願望が、かつて経験したこともないような拷問となって、振りかかって来はじめていた。触る掌もない片輪の身ながら、日毎に盛り上がってくるお腹を下目におさめて、美和子は焦った。

苛酷な掟が美和子の逃亡罪を罰していた。果たして、この腹が月満ちて新しい生命を世に送り出すまで死に神は待っていてくれるだろうか。彼女の関心事は、そのことだけであった。そのことだけが許されれば、あとはどうなったっていいと思った。どうせ赤児を抱くことも出来やしない。可愛い唇にふくませようとしても乳首すら、ないではないか。

世の常の平和な家庭にあってさえ、妊娠した妻は、ともすれば、傷つきやすく、不安定な心理状態に陥るものである。ましてや、美和子の現実は想像を絶したアブノーマルなものであった。狂わなかったのが、不思議だった。それとても、この国の医術が処刑囚に対してさえ「狂う自由」すら与えないという残酷さの実証であった。

何はともあれ、生きたいという願望は生物本来のものであり、健康なものである。美和子は、肉体に加えられる物理的苦痛がストップされたのと相俟って目に見えて明るくなったのも又、当然かも知れない。不安に苛まれ、焦燥に狂いながら、希望が女体に輝きを与えたともいえよう。

「いや、いやです。はい芋虫が弱々しく叫んだの中へ入れと命じたから愛なくしても受精現象て起る。受精が行われれの帰結である。だからと津を恋したわけでもない美和子は、ただ哀れなイ

二人共に狼狽し蹌踉しながら美和子に語れる有明ではない。

「動物園だって、オス、檻の中に入れているんだぜい、おまえのフクレ上すってもらうがいい」

有明が、ふくみ笑いをりかけた。そして、新津「おまえが原因をつくっちゃね。つまりは自分の手で刈りとらな赤ん坊が生れるまで、こよ。赤ん坊をとりあげるのも、おまえの責任だ。父親らしく、臍の緒でも、おまえの歯で噛み切ってやれ」

「アー」

美和子の声は何とも形容し難いものであった。新津は、彼女が絶望のあまり、声を放ったのだと思った。しかし、真相はそうでなかった。彼女は、有明の言葉によって、はじめて赤ん坊が生れるまでの生命を確約されたのである。それこそ、彼女にとって今は途方もない贅沢であった。歓喜が、彼女の喉をふるわせたのである。

「どうか安心して下さい。そして私を信頼して下さい」

錠をかけて有明が立ち去ると、ほとんど半時間ほどは二人とも何も言わなかった。コチコチに堅くなって新津は檻の入口に坐ったままでいた。そして、やっとの事で美和子を慰める言葉を探し出したものである。

ククリ枕のような女体は黙って目を閉じたままであった。こぼれ出した長い睫毛の間から泪の筋が尾をひいてウレタンマットに黒いしみをつくっていた。

手があれば顔を被ったであろう。足があれ

ば立ち上って部屋の隅に、背中をまるめて蹲ることだって出来たかも知れない。狭い檻の中に、自分を妊ませた当の男と、二人っきりにされてしまったのだ。

それも愛し愛される仲ならば、あるいは不自然なこととは言えないかも知れないが、ただ一回、それも暴行同然に辱しめを受けた異性に何で心を通わせることが出来るものか。

それなのに、この狭い檻の中に、ひと番の獣のように押しこめられてしまった。

手も足も出せない無抵抗な美和子は、憤りと恥かしさの交錯に耐えきれずに、歯ぎしりして哭いた。

ただでさえ、ほの暗い英国調のサロンは、一切の照明が消さえると、文字通り真っ暗になってしまう。ただ一箇所、デイライトスクリーンにテレビ受像が映し出されている。

新津と美和子の気まずい同棲模様が、その画面でチェックされているのである。

「哀れなヤツだ。これ程、責めさいなまれながら、尚、幽かな希望にすがりついているとはねえ……」

と有明が、つぶやいた。そして、残っていたオンザロックを飲み干すと、すぐ又、バーボンのボトルを、とりあげている。そのグラスに氷の細片を補給してやりながら、ウイリー博士が早口の英語で答えた。

「最高の幸福は、最も苦しんだ者に与えられる。——とは、マスター、あなたの持論ではありませんか」

「オー、ヤー。その通りだよ、ウイリー。彼女は、その意味で、幸せを摑む資格がある」

「それに、彼女はマスターに忠誠を誓った将校だったのですからね」

「逃亡なんて、魔がさしたとしか思えないなあ」

「イエス。ほんの一寸した発作的衝動でしょう」

「バカなヤツだ。そして、バカなことをしたもんだ」

と吐き出すように言い棄てながら、さすがの有明が指でソッと目がしらを押えるのを、スクリーンの反射光で、みとめたウイリー博士は、すかさず、

「鬼の目にも泪ですね」

と、これは見事な日本語であった。

新津と美和子の檻を見るのをやめても、有明は、しばらく何かに馴れた目からは、サロンの照明でも結構、あかるく感じられるものだ。ウイリー博士も黙って、有明の思考を乱すまいとしていた。二人っきりの部屋に、シーンとした沈黙が、よどんでいた。

かなりしてから、有明がポツンと言った。

「泪ついでにね、ウイリー。メリー王女の手術は、とり止めにしましょう。二つの肉体をくっつけて、四つ足動物を作るなんて、よいアイデアだけれども、何かどうもグロテスクになりそうでね。まあ、もう少し実験用人間を使ってテストをしてみて下さい。王女とジネット（イングリス卿夫人）の使いみちはパレス・エリアで考えます」

ウイリー博士は、いくらか不満そうではあったが、この絶対者に逆らう事は出来ない。

「何事もマスターの思し召しのままです」

彼は、うやうやしく答えた。

「早速、荷造りして、レセプションにお届け申しあげます」

有明がベルを鳴らすと、今まで遠慮して別室に退いていたミセス・ウイリーをはじめ、貴妃、高官たちが艶めいた裸身を競うようにして入ってくる。パッと部屋に花が咲いたようであった。

（未完）

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

S病院始末記

芦川富士男

兄が交通事故でF市、S病院へ入院したのは、昨年の六月だった。

兄の看病のため、三カ月間、病室に泊りこんでいた私は、ここで様々な経験をした。それを思い出すまま、書いてみたいと思う。私は浪人二年目、二十歳だった。

兄は東京の運送会社に勤めていた。田舎の高校を出た私は、大学受験のため上京し、兄のアパートへ住みついていたのだ。

その日、いつものように予備校へ行こうとすると、電話が鳴った。兄の会社からで、昨夜、兄が東名高速道路で、事故を起こしたこと、内臓破裂でF市のS病院へ入院したこと手術は未だおこなわれていないこと、これから迎えにゆくから、荷物をまとめて待っているようにと、手短な報せがあった。

私は大急ぎでバッグへ手回り品をつめ、迎えの車を待った。病院へは昼頃着き、手術は三時間近くかかり、無事に終った。そして、その日から私の病院での生活が始まった。

○

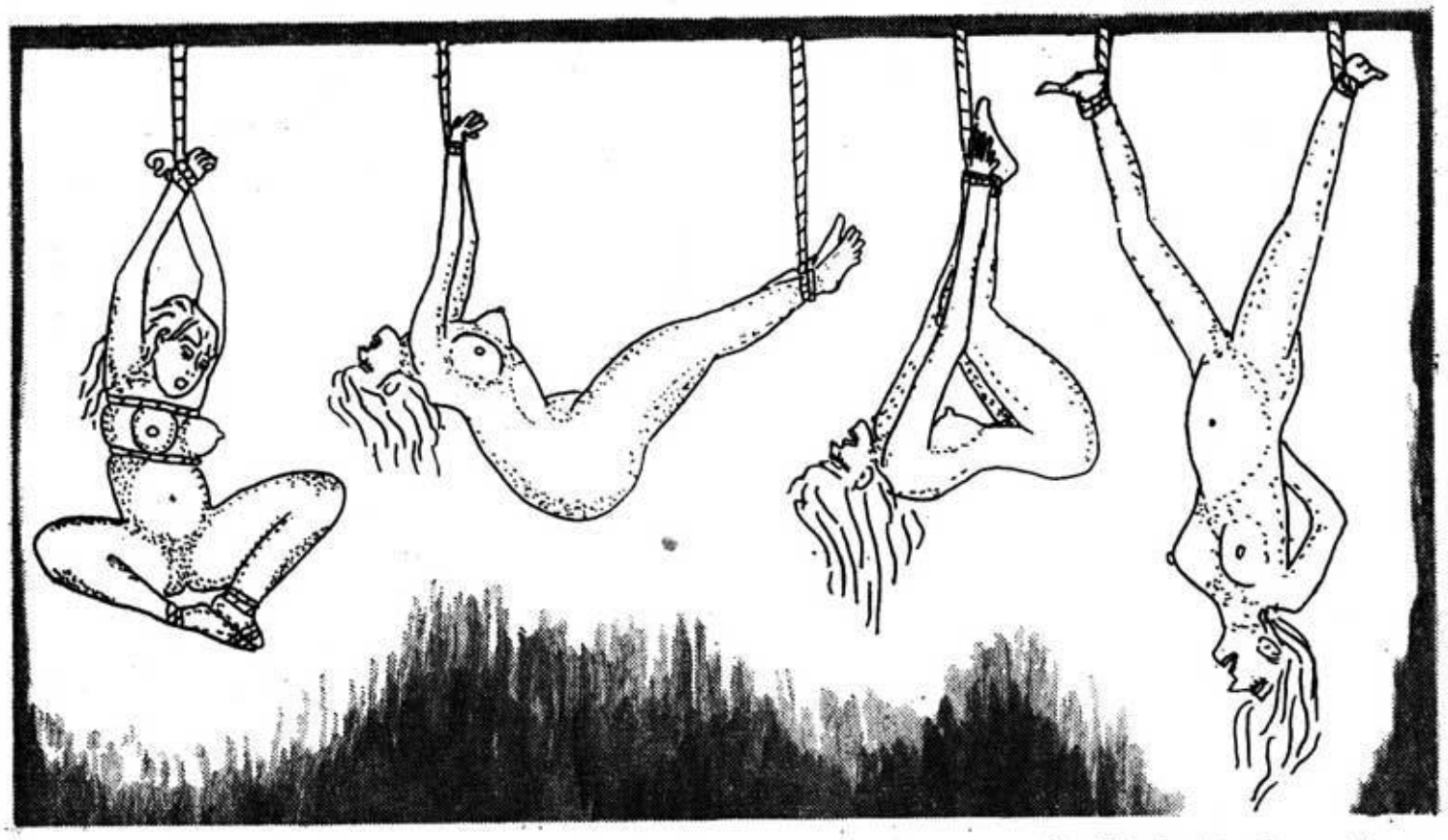
病院の朝は意外に早い。午前六時に一回目の検温。十時に二回目がきて、午後に二度の検温と回診。その合間をぬうようにして、輸血や点滴の交換、注射、小水ビンの取りかえなどがある。

三日目の朝、私は看病づかれでダウン寸前になっていた。病人の看護が、これほど心身を疲労させるものだとは、思いもよらなかった。できれば、一日だけでも誰かと代わってもらえたら、とそう思ったが、身近には誰もいなかった。

心臓の悪い母を気づかってのことだろう。兄のいいつけで、田舎の母と姉には事故のことは知らせてはいなかった。そんな私を元気にさせるような出来事が、その朝、起った。いや発見したというほうが、より正確かもしれない。

それは、こういうことである。

毎朝、看護婦がビンに貯まった兄の小水の量をメモし、胃液ビンと胃をつないでいる細い管に、針のない注射器をさし込み、ゴム管



の中の汚物を吸いとる。こうして胃液の流出をスムーズにするわけである。

この作業は、だいたい二分ぐらいかかる。ビンは二つともベッドの下にあり、当然、看護婦はシャガミ込んで作業をする。ベッドを挟んで、シャガンでいる看護婦と私は向い合っているわけである。私はソファーに浅く腰をかけ、視線をベッドの下へ移すだけで、彼女の白い制服の中が、のぞけるのである。

私はそれまで、彼女達は制服の下にもスカートをつけているものとばかり、思っていたが、そうではなかった。白いストッキングにつつまれた太腿や、真白いパンティが私の目をとらえ、腰を動かすたびに浮びあがる光景に、私は心をうばわれてしまった。

こうして私は、兄が尿瓶で用がたせるようになるまでの間に、ただ一人の例外をのぞいて、十人の白衣の中を見ることができた。ただ一人の例外は、伊賀さんという人で、優しく美しく、看護婦とか白衣の天使とかいう言葉は、この人のためにあるのではないかと思ったほど、素晴しい女性だった。

この人の場合、床にシャガミこむことをせず、両膝を床につけて体を支えたりまたベッドと並行になるようにして、しゃがみこむので、どうすることもできなかった。

そのうちに病院の生活にも慣れ、看護婦とも気軽に話せるようになり、彼女達との会話を通して、病院内外の事情も、だいたいわかるようになった。

病院は五階建てで、一階が診療、手術、事務、レントゲン、食堂など。二、三、四階が病室で、私達のいる四階だけが個室、五階が看護婦寮になっている。看護婦の総数は三十人前後で、大半が十代ないし二十代であること、そして各階七、八人ずつ配置され、三週間ごとに入れ替ることなどが分かった。

そのせいで、急に看護婦の顔ぶれが変った事情がわかった。伊賀さんは一階へ移り、私のいる四階へ上ってくるまでには大分、日数がかかるので、ガッカリしてしまった。

が反面、看護婦の顔触れが変ったことは、新鮮な刺激にもなったことは事実である。私の日課は、朝の掃除から始まり、洗濯など細々とした雑用に追われ、結構、忙しい。

特に洗濯は苦痛だった。洗場には洗濯機も乾燥機もなく、昔ながらの洗濯板に石けんをつけて、ゴシゴシやる方法である。腰は痛くなるし、仕事ははかどらずで、本当に往生した。しかし、そのおかげで、また新しい発見をしたのである。洗場で洗濯をしていた女の子のミニの中が、床の水溜りに写っていたの

である。光線の加減で、水が鏡の役目をしたらしく、白地に水玉模様のパンティがハッキリと写っていた。

そのことからヒントを得た私は、さっそくあくる朝、鏡を使って実験した。朝の検温後兄の脈をとる看護婦の背後に回り、大きな手鏡を彼女の白衣の下に位置させようとしたがこれは失敗した。時間が短いことと、なによりもマズイことは、ベッドで寝ている兄と目が合ってしまうためである。

しかしチャンスは意外に早くやってきた。注射である。化膿止めなど、毎日、三本ないし四本の注射を、お尻に打つのである。この場合、兄は私にお尻を向けるようにして横になる。さらに都合のよいことは、時間もけっこうかかることと、お尻に注射を打つため看護婦は前かがみの姿勢をとる点である。すると白衣の裾は開き、若干、上にずり上がるため、そこへ鏡を持ってゆくと、兄にも当の看護婦にも気づかれることなく、目的を達することができたのである。

これも場数を踏むたびに、色々なことが分かってくる。後ろに回って鏡をさし入れる際私が、しゃがんだり、また完全に背後に回ったりしては絶対にダメなのである。背後に人の気配があると、人は、たいてい不安になるものらしく、時々後ろを振り向いたりする。一度しゃがみこんで鏡の中をのぞいていて、あやうく見つかりそうになって、息が止まりそうになったことがある。

それ以後は、看護婦の横に立つようにして片方の手で兄の体をおさえ、あいた手で鏡を使うようにした。そして鏡も手の中に入るような小さな手鏡を買ってきた。

この鏡の中の光景も楽しいもので、ちょうど真下からパンティを見ることになるので、足を開いて薄いナイロン製のパンティをはいている時などは、なかなか、見ごたえがあった。

それから下着は皆、白で、色物やガラ物などはなかった。これは病院で決められているのかも知れない。看護学校へ通いながらの十六、七の見習いさんは可愛らしいことに、厚手の木綿製のパンティをつけていたが、準看や正看ぐらいの年頃の女性達は、同じ白でも型や透明度などの点で、それぞれ、違っていた。この手鏡を使う方法は至極、便利なもので、私は病院内のトイレで、しばしば利用した。S病院のトイレは男女共用になっていたので、その点でも私は運がよかった。

トイレは、この頃、流行の、間じきりが床から三センチぐらい空いている造りで、そこへ手鏡をセットするだけで、隣のボックスはほぼ視角に入った。

私の利用したトイレは四階と一階のトイレセンターの横に看護婦専用の小さなトイレがあったが、このトイレも患者用のトイレが満員の時は使用が許されていた。

四階には交通事故で入院した男子患者が多く、女性それも若い女性は少なかった。私の気をひいたのは、腎結石で入院していた、タレントの栗田ひろみに似た可愛い女高生ぐらいで、あとは、ほとんど中年以上の婦人だった。この女高生とは後で二度ばかり関係を持った。

それに比べると、一階は午前中、外来患者を受付けるために、トイレも、にぎやかである。また、看護婦や女子事務員も、けっこう利用するので、収穫はあった。なかでも、おかしかったことは、ある看護婦の場合で、小用を終えた彼女はチリ紙でアヌスのあたりまで、ていねいにぬぐい、人差指でマッサージするような仕草をした。

不審に思った私が鏡の角度をかえて見ると肛門から小指の先ぐらいのものが露出していた。それを指で押しこんだ後、塗り薬をつけて立ち上がった。多分、イボ痔か何かであろう。それにしても、S病院が胃腸、秘尿器、肛門の専門病院であることを思うと苦笑を禁じ得なかった。

○

午前零時、兄のベッドと私の手首を結ぶ連絡用のヒモをほどいた私は、夜具から身を起し、そっと病室を抜け出した。行く先は屋上

にある電源室である。そこで私は、別府看護婦と待合せをしていた。

別府看護婦は二十七で、一度、結婚をしてS病院を辞め、離婚後、再び病院へ戻ってきたという話だった。看護婦不足の折でもあり腕も確かなので病院でも喜んで迎え、今は五階の寮にいる。美人とは、ほど遠い顔をしているが、小太りで色が白く、ちょっと淫らな感じで、愛嬌があるので、男の患者には受けがよかった。この人が私に好意というか、興味を持ってくれたのであるが、どうも初めは好きになれなかった。

することが露骨で直接的すぎるのである。例えば私がトイレで小用をたしていると、尿瓶を洗いながら、のぞきこんだり、エレベーターの中でズボンの前を握ったりするのであるから、恐れ入ってしまう。その都度、赤くなるのは私の方である。

その別府さんと約束が出来たのは、その日の昼だった。洗濯物をバケツにつめて屋上へゆく階段を登ってゆくと、彼女が最上段に腰を下してタバコを吸っていた。足を拡げているのでパンティが、まともに見えたので、ドギマギしながら、

「別府さん、見えてるよ」

と注意すると、フフフと鼻で笑い、

「見せてるのよ、興味ある?」

「まあね」

そんなやり取りがあり、「電源室で待っているわ」ということになった。

セックスの経験は、東京に出てきた直後、トルコでの一回きりであったから、私は彼女の申し出を二つ返事でOKしてしまった。

彼女は先に来て待っていた。クリーニングに出す前の毛布を床に拡げ、その上で私は彼女にリードされるままに、時をすごした。彼女とは、退院するまでの二カ月間、週一度の割で会うようになった。スの教師であった。

彼女とのつき合いを通じて、それまでの私の中にあった、女性に対する奇妙な羞恥心が少しずつ薄らいでゆくように感じられた。以前の私なら、とうてい、とれないような行動を、女性に対してとれるようになっていた。

栗田ひろみに似た女高生、大屋光子とのキッカケも、その頃のことである。彼女とは深夜のトイレで出合った。私がボックスに入っていると、入口に人の気配がした。首を回してドアのすき間から見ると、はたして彼女であった。私は気づかれぬように身づくろいをして立ち上がり、ズボンの後ろポケットから手鏡を出して息を殺した。彼女のものは、まだ見たことがなかったからである。

彼女は私のいるボックスの前に入った。私は手鏡を床にセットし、角度を調整した。やがて鏡の中に彼女のお尻が写り、谷間から勢いよく小水が噴き出した。そして続けざまに二発、オナラをした。深夜のトイレで誰もいないと安心していたのだろう。

普通、トイレの入口でスリッパから木製のサンダルに、はきかえることになっていた。が私は、めんどうなのでそれをしなかった。多分、彼女は、入口に誰のスリッパもないことで、人はいないと判断したのだろう。

身づくろいを終えた彼女が立ち上がり、水洗のコックをひねる。私もコックをひねる。ドアがあき、彼女が出ると同時に、私も飛び出していた。彼女は驚いて立ちすくんだ。それはそうだろう。誰もいないと思っていたトイレから男が出てきたのだから。その上、その男に「すごい音だったね」といわれれば、死にたくなるだろう。

彼女は、真赤になって、うつむいてしまった。後になって考えてみると、よくもあんな行動がとれたものだと思い、冷汗がでるが、その時は私も必死だった。夢中で、うなだれている彼女を抱きすくめ、唇を吸った。そしてそのままボックスの中へ、彼女を引き入れた。彼女は、まったく、あらがわなかった。

私は彼女と取引きをした。つまり、私は彼女がオナラをしたことを口外しない。そのかわり、彼女の観音さまを拝ませてもらう、という条件である。

彼女は私が拍子抜けするほど簡単に、OK

した。年頃の女の子にとって、オナラをしたことを人に知られるということは、私が想像していた以上にショックだったらしい。

私は彼女が泣き出すことを恐れていたが、どうやらそんな様子もないので一安心。早速仕事にかかった。白地に花ガラのあるネグリジェをまくり上げ、小花のプリント模様のビキニ・パンティが見えた時は、心臓がドキドキした。それを引き下すとき、彼女は一瞬抵抗を示したが、それもじきにやんだ。

可愛らしいという形容がピッタリの観音さまだった。私は顔を近づけた。ムッとする臭気が私の鼻を襲い、思わず私は顔を、そむけた。

後で考えてみると、これは彼女の責任ではなく、入院以来、入浴を禁じられているのだから、しかたのないことであった。

彼女とはその後、日を改めて二度、会ったが、残念なことに処女ではなかった。見かけによらず、遊んでいるらしく、私に馴れるにしたがい、蓮っ葉な口の聞き方をするのには驚いた。

○

兄が退院する一週間前、再び伊賀さん達が四階へ上ってきた。そして幸運なことに、その日の注射当番は伊賀さんだった。私は、はやる心を押えながら、手鏡をソット伊賀さんの白衣の下に回した。

見えた、ついに見えた。ピンク色のガータ ーが太腿をギュッと、しめつけている光景が伊賀さんの秘所をおおっている真白いパンティが、丸い小さな鏡の中に写っていた。

私は突然に、そのパンティが、欲しくなった。伊賀さんが身につけている、伊賀さんの体温で温められた、そのパンティが無性に欲しくなった。

こんなことは、かつて、ないことだった。病院の屋上にある干場から看護婦や女性患者のパンティが盗まれるという。そんなものを盗むやつがいるのかと、私は思った。もし私がその気になれば、誰にも怪しまれずにパンティを盗ることができるのである。

でも、そんな物には、とんと興味がなかった。その私が、伊賀さんのパンティだけは、どんなことをしてでも欲しいと思った。しかし実際問題としては、むずかしい。

なにか、いい方法はないだろうか。それも伊賀さん自身も盗られたことがわからない、というのが理想的だ。私は、ない知恵をしぼって考えた末、一計を案じた。

『パンティ抜き取り作戦』の開始である。まず情報収集から、始めなければならない。期間は一週間しかない。兄の退院は、動かせない事実である。

私はナース・センターへ行き、カレンダーに朱書きされている、当直者の氏名を盗み見た。四階にいる看護婦は、婦長を含め九人。うち、正看は伊賀さんを含めて三人である。当直は、必ず正看と決まっていた。伊賀さんの名は、兄の退院日の丁度、前日になっていた。チャンスは一度、失敗は許されない。

次に私がしたことは、街へ出て婦人用のパンティを買ったことである。これは恥かしかったが、どうにか手に入れた。買ったばかりのパンティを水洗いして、私の洗濯物と一緒に干して、まずは準備完了というところである。

私の立てた計画のあらすじはこうである。伊賀さんが当直の時、飲物の中に睡眠薬をまぜて飲ませる。寝こんだところでパンティを取りかえるという寸法である。その際、買ったばかりのパンティでは肌ざわりが違うといけないので、洗ったのである。

睡眠薬は、痛み止めの薬とともに三袋ばかり、兄の枕元にある。病院からもらったものの、薬ギライの兄が、飲まなかったものである。問題は、その量である。薬は丸薬で、たしか一錠で八時間は効くといっていた。が一錠、飲ます必要はない。

当直の看護婦は二時までは起きている。その後、ナース・センターの奥にある仮眠所で五時頃まで、仮眠する。しかし、急患や術後時間がたっていない患者のいる時は文字通り徹夜である。薬の量は、兄に飲ませて試した

ところ、錠剤を粉にして、四分の一ぐらいが適当であることが分かった。あとは当日、急患が入ってこないことを祈るだけである。

その夜、私は落着かず、トイレへゆくふりをして、何度もナース・センターの前を通った。時計は一時を回っている。伊賀さんは医学雑誌のようなものを読んでいる。幸い今のところ、急患は入ってこない。この分だと、うまくいきそうだと私は思った。

二時少し前、私はコーヒーを作り、ナース・センターまで運んだ。夜中、差し入れをするのは毎度のことだが、どうも気持が落着かない。

「よかったら、飲んで下さい」

「あら、ありがとう。明日、退院でしょう。大変だったわねー」

「ええ」

そんな会話をかわした後、私は逃げるように病室へ戻った。二時半を回った頃、私はナース・センターまで様子を見にいった。伊賀さんの姿は見えない。机の上のカップに目をやると、カラになっている。成功した。私ははやる気持を押えて、病室へ戻った。決行は三時と決めた。

時間がたつのが、その時ほど、遅く感じられた時はない。私は何度も時計を見ながら、ジリジリして待った。三時ジャスト、私は病室を抜け出した。足がふるえて、心臓の音がやけに大きく響く。落着け落着け、そう自分に言いきかせながら、センターの前にきた。

あたりを見回す。誰もいないのを確かめた上で、ドアのノブを握り、そっと押した。三月近くいて、ナース・センターの中へ入ったのは、その時が初めてだった。奥の仮眠所のドアは開いている。足音をたてぬように近より、中をうかがうと、長イスの上に、頭を入口に向けて寝ている伊賀さんを見つけた。

そっとそばによる。肩に手を当て二、三度、ゆすってみた。が、反応はない。息も規則正しく上下している様子なので安心した。

白衣の裾を恐る恐る、まくり上げると、目的のパンティが見えた。しかし、それからが大変だった。眠っている女性のパンティを抜きとるのは、大変な労力がいる。あまり長居はできないのである。あせればあせるほど、思うように、いかないのである。二十分近くかかって膝のところまで下ろし、あとは一気に抜きとった。

伊賀さんの温くもりのあるパンティを顔に近づけ、私は、ほおずりをしてポケットへおさめた。

その時、ドキッとした。うめき声をあげながら、伊賀さんが右足をソファーの下に下ろしたのである。私は、息が止まりそうになった。しばらく、そのまま様子をうかがっていると、また規則正しい寝息がきこえてきたので、本当にホッとした。

帰ろうと思い、立ち上がったが、かわりのパンティを、はかせることを忘れていた。再び足元に座りこみ、作業を開始しようとしたが、伊賀さんの姿が、あまりエロチックなので、私は予定を少し変更することにした。枕元にあった懐中電灯を取って、スイッチを入れ、伊賀さんの中心部に当てた。

ピクッと伊賀さんが動いたように感じられたが、私はそのまま、じっと見つめていた。甘ずっぱい沈丁花の香りのような匂いが広がり、そこは、うるおいをおびていた。婦人科の医師がするように、私は指の先に全神経を集中させて、伊賀さんの感触を楽しんだ。

時計が、三時半を回った。急がねばならない。私は、用意してきたパンティを、はかせた。これは、脱がすよりは、はるかに楽だった。センターを出たのは三時五十分。一時間に満たない冒険は終わった。

翌朝、退院の準備をしていると、伊賀さんがコーヒー・カップを持って入ってきた。

「どうでした」

私は、しらばっくれて聞いた。

「ええ、とても。でもコーヒーは飲まなかったわ、眠れないといけないから」

そういって伊賀さんはクスッと笑った。

私は顔が上げられなかった。

（終）

ふんどし・腋毛・ETC

鈴木ゆり子

ご無沙汰しました。ふんどしレディの皆さま、お元気ですか？　毎月二十五日、今月こそは、と胸をときめかせて書店へ行きます。けれども、グラビヤも値段も豪華になる一方の奇クの誌面から同志が姿を消して何年になるでしょう。分譲フォトも、ふんどし関係は十年一日です。

ふんどしの世界は終ってしまったのでしょうか？　決してそうではありません。

――世界のレディふんどし――ファッションの震源地フランスでは、今年はストリング水着が大流行。この夏、朝日新聞のサトウ・サンペイのマンガにも取り上げられました。これは私たちの三角ふんどし、そのものです。ストリッパーのバタフライのように、青白い肌につけて、金をとって見せるものではなく、太陽の下、栗色のお尻にキリリとしめて堂々と歩き、ねそべり、泳ぐ実用品です。

週刊文春九月十六日号のグラビヤには、南仏サン・トロペのボクシング場で、観客の二人の娘が服をぬいで三角ふんどし一丁のいさましいスタイルで、とび入りしたのが出ています。

一九六九年七月十五日のプレイ・ボーイ誌のグラビヤを飾った谷内リエさんの三角ふんどしスタイルは、本誌でも紹介されましたが何か密室でポーズをとったような、感じでした。週刊サンケイのグラビヤには、いつも女性のピンナップがでていますが、感心するのはありませんでした。ところが、九月二十六日号のジーン・ラウプ嬢の、日やけした股間に深く食い込んだ三角ふんどしスタイルは、自然で、凛々しく、「うしろも見せて！」と叫びたくなるようなものでした。

商品として、おとなのオモチャ店などで売っているのは、ケバケバしいばかりで、ひとに薦められるものは見当りません。しばらく前、新宿の小田急デパートで男女兼用の三角ふんどしを「ティコ」という名で売っていました。一九七二年ごろ、「密室の艶技」というピンク映画で、トルコ嬢が、これに似たのを締めていました。

昔の、男の子用の黒い水泳ふんどしは、ふしぎに穿き込みが深く、ヤボったい仕立てでしたが、ティコは腿の上端スレスレに腰紐が来て、良いセンスでした。

私は、赤、白、黄などを買いだめて、外人女性へのプレゼント用に使っています。「日本の若い女性は、みんな、こんな気のきいた下着なんですか?」といわれると、どうも、こそばゆい思いです。

さて、日本人には、富と教養がある男はパンツをはき、ふんどしは貧乏人、無教養、不潔、ないし、ヨボヨボ爺さんにふさわしいものであるかのような歴史的偏見があるのではないでしょうか。ヨーロッパには、ふんどしの歴史がありませんから、女性ふんどしの美しさ、心地よさが、かえって素直に受け入れられ、根をおろしつつあるのでしょう。

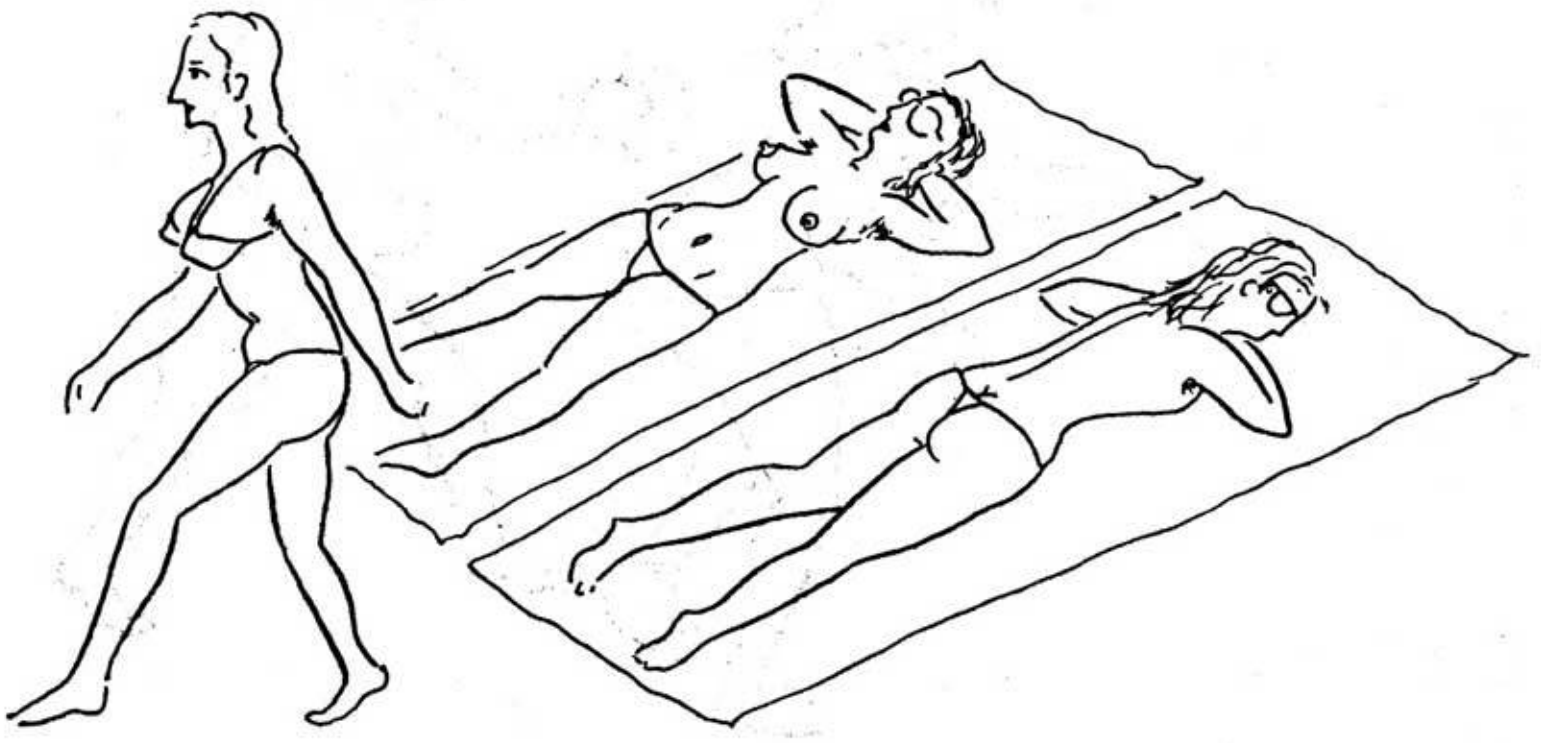
ふんどしという名前こそ使いませんが、フアッションの最先端として、日本に再上陸する気運が熟して来ました。ミニだマキシだジーンズだ、という外面の流行は、行ったり来たりしていますが、ズロースからパンティへビキニ型ショーツへという道は、一直線に進んで来ています。その延長線上にあるもの、それが、ふんどしです。

——腋毛——この夏、富士フィルムの立看板が全国の写真屋の店頭に飾られました。緑色のセパレーツ型水着の婦人が肘を上げて、脇の下をガッポリと見せているものです。その脇の下は、茶碗の底のようにツルツルと真っ白です。ノッペラボウという化け物がありますが、まさに化け物です。

近ごろ、日本中の殆どの女の人が、化け物と化しています。大人になっても、あるべき物がないのを、マージャンのパイの名で呼んでバカにしますが、腋の下の場合は、ある方を「ムダ毛」と称して、目のかたきに、していいます。

欧米人は毛深いですから、チョボチョボと口ひげを生やしたおばあさんが、ノースリーブの服を着て、ひと抱えもある、しみだらけのブヨブヨの上膊のつけ根から、赤茶に灰色をまじえた腋毛がモシャモシャと、はみ出ているのは、それは醜悪です。

しかし、ピチピチした若い日本女性の腋毛は、同性が見ても、まさにチャーム・ポイントです。私たちのふんどしパーティでは、はじめの内、私以外は腋毛を剃っていました。その内、「ふんどしと腋毛が作る逆三角形でゆり子さんのスタイルはピチッと締まってる



わね。私たちのは、何か一本たりない感じ」ということになって、みんな、腋毛を大切に扱うようになりました。

ふんどしと腋毛には相乗効果のようなものがありますが、腋毛だけでも、若い女を、いさぎよく、けなげに見せます。杉浦幸雄さんのマンガに出て来る女の人は、みんな腋毛を誇らしげにのぞかせていますが、この点で、杉浦さんを尊敬しています。小島功さんなどは、ご自分では美人を描いておられるつもりかもしれませんが腋毛なしです。目玉を入れない竜の絵で、腑抜けた竜のイメージをバラまいているようなもので、女性に対する侮辱だと思います。

笑止なのは、時代劇に腋毛なしの女優が出る場面で、パンツをはいたチョンまげ男と同じです。テレビでは、乳房に、まさぐり金太郎の入れ墨をした片桐夕子が、子連れ狼に斬られるところがありましたが、腋毛なしでした。人斬りという、岡田以蔵を扱った映画で倍賞美津子が女郎役で、ヌードで熱演したのですが、これも毛がありません。時代考証の係は、いちばん大切なところで、何をしているのかと腹立たしくなります。

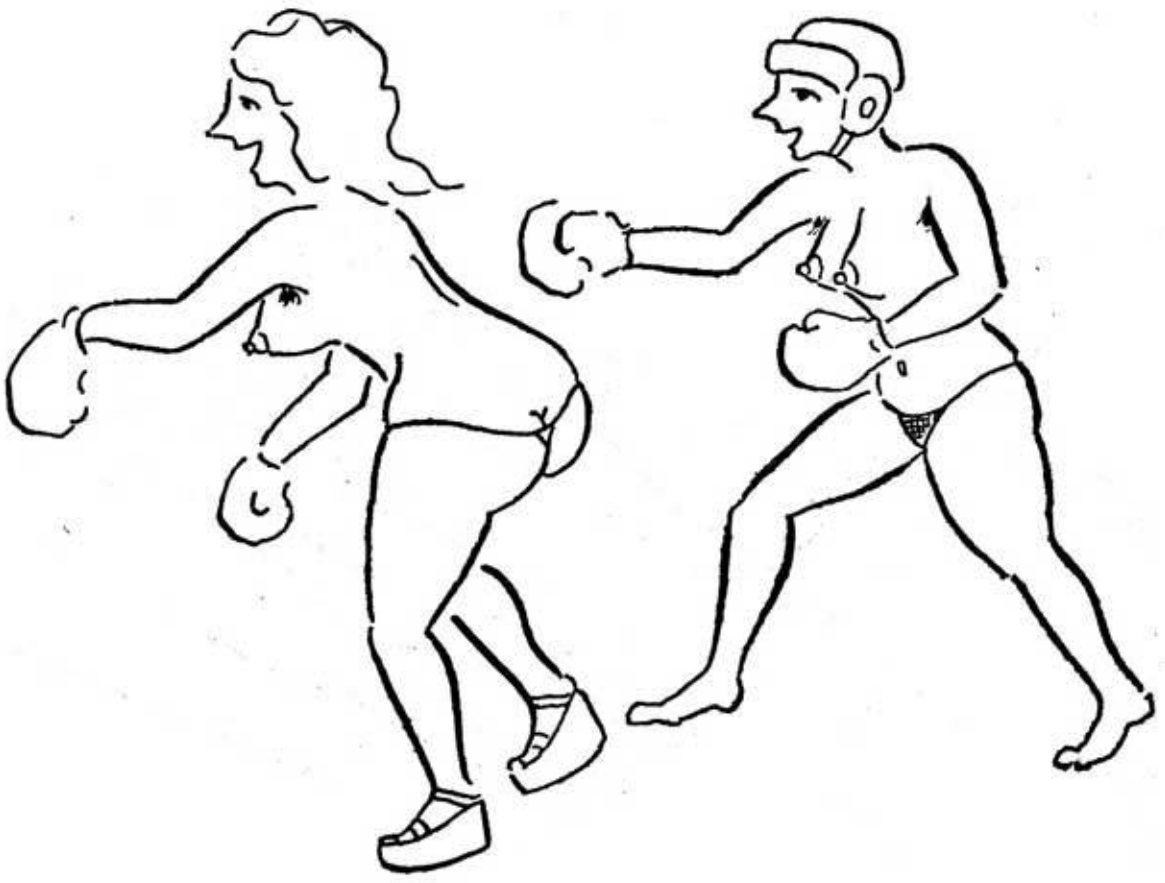
ポルノ女優で偉いのは二条朱実さんです。この人は、恐らく意識して腋毛を守り通しています。『OH！』の一九七三年五月号のグラビヤでは、「おんなの部分観察」という題で、いろんな角度から腋毛を写しています。

宮下順子さんも腋毛を守っておられたので尊敬していたのですが、どうも、最近、剃ってしまわれたようです。本人の意志か、日活の監督の指図か、いずれにしてもクリープのないコーヒーのようなものです。

田中真理さんは、「戦国ロック、疾風の女たち」で、遠景ながら、みごとな腋毛を見せましたが、私の知る限り、あれ一回だけです。あれだけ美しい毛を持ちながら、何とも、はがゆい限りです。

真湖道代さんは、さすがに腋毛を守っておられます。紺がすりで、日にやけた田舎娘をやっておられた頃は、腋毛も、みずみずしかったのが、最近はちょっと貧弱な腋毛が痛々しいぐらいですが、むろん、ないよりましです。

梢ひとみさんは、時々、五分刈りぐらいのをのぞかせていることがありますが、じれったい限りです。引きしまった体ですから、日にやいて房々させて、欲をいえば、ふんどしを締めれば、どんなに美しいかと思います。



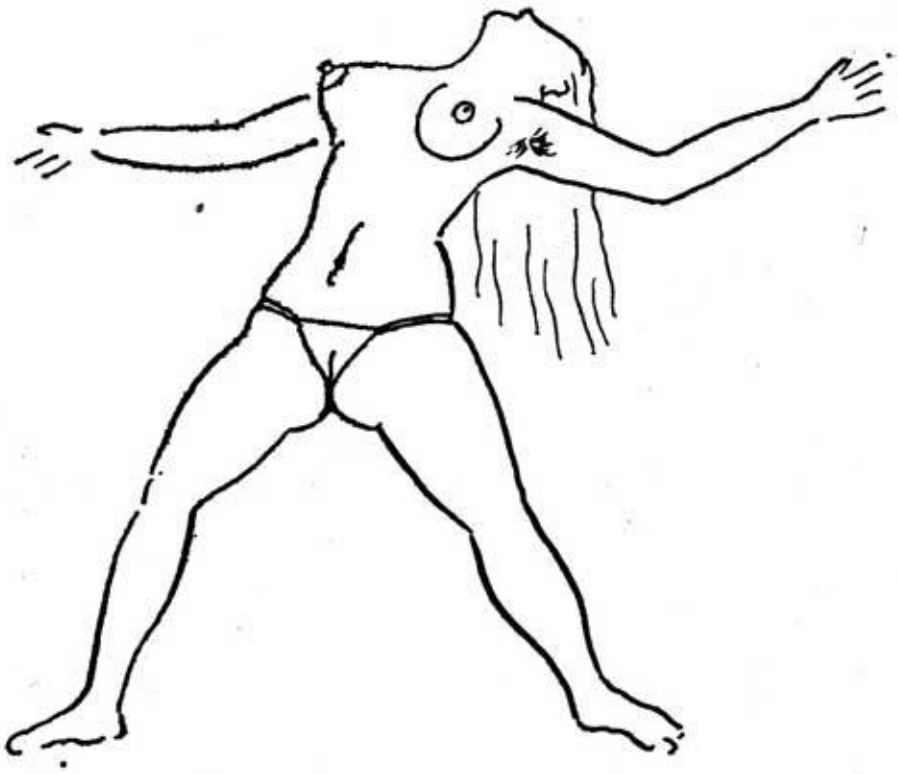
一九七三年三月八日の『アサヒ芸能』には

「大阪ホステス・ヌードコンクール」という特集がありましたが、ツァールという店の、神戸出身の、令子さん（二十一才）は、肘を高く上げて、腋毛を誇っています。世の中には、めざめた女性もいる、と令子さんの健闘を祈って、ひそかに乾杯しました。

ついでながら、私は男の腋毛には何の興味も持っていません。もともと毛むくじゃらな男の、どこに毛があっても、何ということはありません。しっとりと艶のある若い女の腋の下だけに、情熱的な毛が秘められ、ポーズによっては、「何をかくそう」と出て来る所に、意義があります。厚顔無恥なおばさんでは効果半減、稚な顔なら効果倍増します。

――日やけ――日にやけた、ピチピチした肌にこそ、ふんどしが似合います。病み上がりのような黄色く、たるんだ肌では、ふんどしがオムツになってしまいます。首から上、肘から先は、とかく日にやけがちですから、私は、この部分は、なるべく、やかないように細心の注意を払っています。

テレビで見る木原美知子さんの顔は、黒々と照り輝いています。しかし、失礼ながら、裸になったら、顔や手足など、末端ばかり黒くて、胸やお尻など、しかくないのではないか、という気がします。



そこへ行くと、私たち、ふんどし世界の女性は、服を着れば、ふつうの娘であり、只の奥さんです。しかし、素っ裸になると、小麦色の肌に、白いふんどしを締めたようです。ふんどしでかくれていた部分をのぞけば体の中心ほど日やけしていて、末端は、ふつうなのです。

全身に太陽の恵みを浴びることは、基本的人権の中でも基本的なものだと思います。石器時代の人は、食うものがなくても、この権利だけは行使できました。今日の都会人にとって、これは容易なことではありません。

この権利を行使することに気づかずに老いて死んでしまう人も多いことでしょう。私たち、ふんどしクラブの女性は、あらゆる知恵を働かせて、貪婪に太陽をむさぼっているのです。

夏になると、女性週刊誌から赤旗に至るまで、肌を日にやくときの注意が、のります。一日に三〇分以上、やくなとか、ひる下りの陽は避けよとか。あれは、年に一回、思い出したように海へ行く人のための、記事でしょう。私たちのように季節を問わず、寸暇を惜しんで、やいていれば、真赤になったり、ベロベロ皮がむけたりすることはありません。

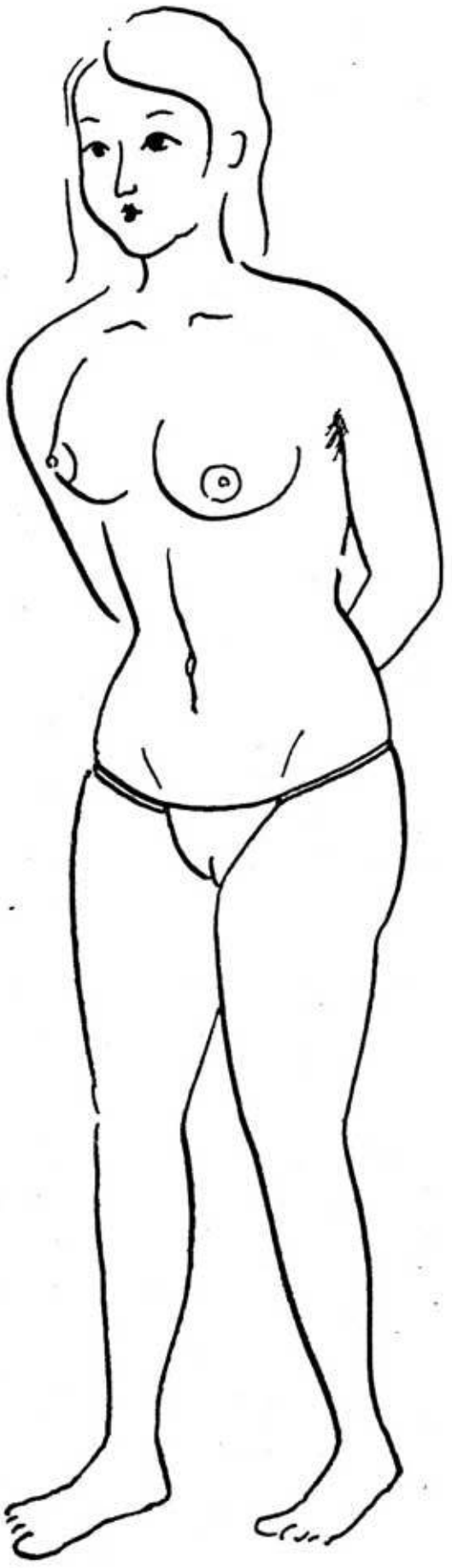
さて、日やけも、ふんどしの大切な小道具のひとつですが、それだけでも、女のチャーム・ポイントの一つといえるでしょう。ゴルファーの、シャツの襟首から上だけの日やけなどは醜怪で、私がいうのは、体の中心部の日やけのことです。

能登の舳倉島や東南アジアから東京へ帰ると、厚みのある立体の世界から、ヘラヘラの肝腎の、体の中心は黄色いのです。

平面の世界へ来たような気がします。行き交う女性の上膊やスカートの奥が生っ白いのがその主な原因でしょうか。

腋毛なら一カ月で何とか形がつきますが、体の中心の日やけおしゃれは一朝一夕ではできません。ですから、あれだけ沢山のピンク映画が作られていても、日やけの点で感心するのは殆どありません。「裸足の夏」などという化粧品のポスターは、モデルをグアムなどへ出張させて撮るのでしょうから、そのつもりになれば出来ない筈はありません。くだらない書き割りや衣裳に金をかけるより、女優の体そのものにおしゃれをさせた方が、どのぐらい、制作費が生きるかしれません。

「濃艶みだら海女」というピンク映画がありました。海女というと、健康でセクシーな体を連想しますから「稚な」とか、あるいはどぎつく「ふんどし」とかいう字を添えれば生きるものを、「みだら」では、相殺されてしまいます。それはそれとして、出て来たのは腋毛を剃った、ブヨブヨの生っ白い女優でした。むろん、ふんどし姿でもありません。



池怜子、丘奈保美などは黄色いブヨブヨ女優の典型。杉本美樹さんの背中は、照明によって、かなり美しい小麦色に見えることがありました。潤ますみさんは、いちど、ビキニの跡もクッキリと、美しい日やけ色を見せました。安田のぞみ、南昌子さんなどは肌の色に関する限り、見に来てよかった、と思うことがあります。

さて、新聞でもテレビでも、ピンク映画がほめられることは、まずありません。しかし私は思うのです。映画にできて、本やテレビにできないこと、それは、めったに見られないものを、自然のままの姿で、縦横いろいろなアングルから鮮明な広い画面に映し出すことではないでしょうか。

アマゾンの奥の動植物や原住民、海底や顕微鏡下の世界などを紹介するのは、まさに映画の使命でしょう。今日の地上の誇りである若く美しい女の裸を躍動のうちに見せることこれもまた、映画の役割だと思います。ピンク映画が非難されねばならないとしたら、町へ行けば只で見られる服を着た場面が多すぎること、場ちがいな勧善懲悪や、よけいな思想？　を盛り込もうとして、へたな芝居や、みにくい男の裸を割り込ませすぎることでしょう。

選りすぐった、いろんなタイプの若い女優に、健康的に肌をやかせ、腋毛も房々と、自然な動きをさせて、不自然な前ばりや、あそこを避けたカメラ・アングルでなく、小さい三角ふんどしを締めさせて、あらゆる角度から映せば、ストーリーなどは必要最低限で良

ましいと思います。無臭の私など、どんなに努力しても、女の魅力はマリちゃんの足元にも、及ばないので す。しかし、マリちゃんの兄さんのことを考えると、複雑な気持になります。マリちゃんの兄さんも強い腋臭なのですが、私は、これを嗅ぐとゲエッといいたくなります。似たような匂いなのに、女と男でどうしてこうも正反対なのでしょう。

もし、私に腋臭があって、娘が年頃になるにつれてマリちゃんのように腋臭の花が咲けば、何よりの誇りですが、息子が腋臭を発するようになったら私は、どこへ逃げて行けば良いでしょう。

ひとりで何でも独占しようというのは欲張りで、私は房枝さんやマリちゃんのような生まれながらの匂いの芸術品を磨き上げ、時々嗅がせて貰うことで満足しましょう。

山口百恵さんと大原麗子さんをたして二で割ったような顔つき、かっての小川ローザさんのような日にやけた肌、マレー人のような円錐形の乳房、長い黒髪、房々した腋毛、縦にくぼんだ深いお臍、高く張ったお尻、豊かな太腿、キュッと引き締まった足首。この体いのではないでしょうか。

——腋臭——ふんどし、腋毛、日やけ、これは本人の心がけ次第で達成できるものです。体や顔の造作も、ある程度は、努力で左右できます。しかし、体臭ばかりは、消すことしかできません。

私たちのふんどしグループの中で腋臭があるのは、以前本誌で紹介したことがある房枝さんと、十七才のマリちゃんです。房枝さんのは乾いた感じで、若いマリちゃんの方が、重く、湿った感じです。

この二人を見るたびに、つくづく、うらやを、ふんどしでキリリと締めくくった小柄な少女、それがマリちゃんです。

「私って、強烈に匂うでしょう。自己主張が強くって、ごめんなさあい」

ヌケヌケと、こういわれては、お手上げです。私は、かねてからマリちゃんを可愛がっていたのですが、おとなのつきあいをするキッカケを作ったのはマリちゃんの方です。

「おばさん、私ポルノ映画を見て来たのよ」

彼女は、徳川セックス禁止令という映画で池島ルリ子さんが肌ぬぎになって腹十文字に掻き切るシーンを見て、興奮して話しに来たのです。私も、かねがね、色香のあせぬ内に六尺ふんどしで切腹して死にたいと思っていたのですが、三島由紀夫のあの醜悪不潔な切腹で、すっかり熱がさめてしまったのです。そんな話から、彼女は、私たちのふんどしクラブに仲間入りすることになりました。

さて、一九六一年四月号、十九才で本誌に登場した、ふんどし乙女の私ですが、結婚しておばさんと呼ばれるようになり、もう三十二才の大年増です。女は退け時が肝腎ですから、ここらで私にはない、若さと匂いに恵まれたマリちゃんにバトンタッチしようかなと思っています。私同様宜しくお願いします。

〈連載〉Mグループ〔空想創作集団〕作品

女の虜囚

(11)

〈ある湯治客の話より〉

佐治麻造

準備室には、いろいろ懲罰用具や装置もあって、受刑者の二名には胸も凍る程に恐ろしい。制服姿の看守達や勤務を終えて帰り支度の私服に着替えた看守連中が多勢、台の周りに集まっていて、台を前にした三十五、六才のスーツを着込んだ婦人が皆に何か説明していた。台の上には、鎖の塊が置いてある。集まったのは監視台勤務の二名と欠勤中の一、二名を除いて、一監の看守達全員だ。十数名のうち、婦人看守が圧倒的に多い。派手なドレスを着た松原婦人看守が、十四号女囚に磨かせた黒エナメルのハイヒールを光らせ、とがった靴先で床を叩きながら、しきりに腕時計を覗き込んで時間を気にしている。黒いスーツのドレスを、ぴったりと着てスラリと立つ理智的な顔の婦人が、連れ込まれた二名の囚人を、ちらりと見やって言葉を続けた。

「勤務明けでお帰りの方々もありますから、早いこと、済ませましょう。要するに、新しい戒具を、この拘置所で試用して戴きたいのです。重腰枷と重股帯と、そして新型の嵌口具です。刑事局長通達の通り、嵌口具は二監で、あとの二つは一監の皆さんで試用して頂きます」

それから数日後の夕方、四十五号と十四号は準備室に連れて行かれた。準備室というのは、判決を受けた囚人を受刑者の姿にし、護送等の準備を施す大きな室だ。

法務省の本省の職員らしい黒ドレスの婦人は台上の鎖の塊をジャラジャラと拡げた。

「要するに、鋼製の褌です。腰枷と股帯とを一括して一般に鎖褌と称され、奴隷に対しては以前から、あちこちで使用されているのは御存知だと思います。今度、審査にパスした現物はBタイプで、御覧のように、腰部に締める鎖と、それに取りつけるY字型の鎖から成っています。重腰枷、重股帯の重とは、いうまでもなく、革製のものに対する仮の呼称で、制式戒具となれば、革製のものに軽の字を付ける事になると思います。今、御覧のものは、腰枷も鎖状になっておりますが、腰部全体に一個の環を嵌め込む式のものもあってそのAタイプはF監獄で試用する予定です。ともかく装着して見ましょう」

婦人が顎をしゃくると、二名の囚人の革褌の錠が外されて取り除かれた。女囚が床にうずくまって、恥らった。

「立たせて。二人共、手が邪魔にならないように、しといて下さいな」

刑事局の婦人職員は冷然と言い、忽ち嵌められた後手錠は、それぞれの首環にグィと捕縄で吊り上げられた。

「十四号！　ちゃんと、お立ち」

「痛いっ！　腕が折れる。少しゆるめて！」

無理に立たされた女囚は身を、もだえた。

「まっすぐに、じっと立ってないからよ。昨日や今日、鼻環つけられたお前じゃなし、恥かしいなんて笑われるわよ。馬鹿な女ねえ」

婦人職員は囚人達の体を無表情に見やって続けた。

「これに切り替える理由はですね、第一に汚損の問題、それと耐久性と、扱い易さの点です。革製のものは、皆さんの方が、よく御存知と思いますが、いくら清掃手入れさせても汚損するのは止むを得ません。きびしい労役を毎日、課する場合は尚更です。又、新品の革褌を装着される囚人と、古いのを装着される囚人との間に不公平をも生じます。言い忘れましたけど、鋼鉄製の方が少し廉いですし耐久度を考えますと経済性の点で大きな差があります。これが腰帯で、この金具で締め合わせます。鎖の一端をこのガイド金具に挿入して緊めつける訳です。勿論、内部に歯止金具があって、鍵を回わさなければ逆には戻りません。更に緊迫するには、この小さなハンドルを回わせば歯車で、いくらでも強く締めつける事が出来ます」

婦人職員はハイヒールを鳴らして四十五号囚の背後に立ち、腰帯を囚人の腰に巻きつけ錠金具にガチガチと鎖を差し込んで締めつけて行った。腰帯の冷たさに、四十五号はビクリと震えた。

「次は股帯ですが、勿論、Y字形の二本が前部で、一本が後ろです。前部に於ける結合は革褌のように左右に滑らせる訳には行きませんから、この独立した錠金具を、腰帯の適当な位置の環に取り付けます」

婦人職員は、開閉環が上下にあって鍵穴も二個ある、小さな錠を取り上げた。

「体を、ぐるっと回して見せて……」

看守達の職業的な視線が注がれる中を四十五号は足鎖をガチャつかせて体を回した。

「で、この結合錠の取り付け位置ですが……ちょっと、こっちをお向き。そうそう」

男囚の前半身は電灯の方に向いて明るく照らされる。

「股帯、即ち、股鎖は、それぞれ鼠渓部に沿って締めるのが原則です」

腰骨の内側あたりの鉄環に、それぞれ錠金具がカチリと嵌められて取り付けられた。真正面を見て立ちすくむ男囚の鼻環に、婦人職員の襟元から立ち昇る香料の匂いが漂う。

「この金具の環も、嵌める時には勿論、鍵は

要りません。えーと、今度は股鎖ですね。正式には重股帯といいます」

彼女は台上の鎖を重たそうにジャラジャラと取り上げた。三センチに二センチ程の鋼鉄の環が小さく円いコロコロした鋼鉄環で繋がれてY字形に連なり、既に締められている腰帯と同様に、油が薄く光っている。三本の鎖は厚手のマッチ箱位の大きさの錠箱で結合されていて、そのうちの一本の鎖だけは、煙草の箱より、やや細い目の、少し舟型に反った角環を介して錠箱に取り付けられていた。

「お分かりでしょうけど、この角環がある鎖が後ろ側ですのよ。この錠箱は隆起のある方を内面に当てます。前後で下方に延びているカバーのような物は開閉環を保護すると共にそれや鍵穴やらの汚れを防ぐためです。もっとも、汚れには余り役には立たないかも知れません。試用の結果を見ないことにはね。でこの構造上、もうお分かりでしょうけど、これを装着しておきますと、用便の際も、そのままで済みますのよ」

「あら、手数が省けて、いいですわね」

と嵯峨婦人看守が言った。

「ホホホ。ええ、まあそういう訳ですけど、その代り、用便の制限を課するには、きびしい監視を要しますよ」

「あら、あの、じかに装着しますの？」

と水戸婦人看守が軽く驚きの声を挙げた。

「そりゃ、決まってるじゃないの。フフフ」

と村田婦人看守がガラガラ声で笑う。

「で、いうまでもありませんけど、この角環の位置、勿論、締め上げた状態に於いての話なんですが、それから錠箱の表裏に注意する必要がありますけど、これと、取り付けるのが普通です」

婦人職員は、じろりと目測すると、二本の鎖の端から三個目あたりの環を、それぞれ腰帯の金具にガチリと嵌め込んだ。男囚の前にY字形になった重い鎖が垂れて揺れる。

「うしろ向いて！　何を棒みたいに立ってるの。足を開くのは分かった事じゃないの」

叱りつけて片手を伸ばした婦人職員が、垂れた一本の鎖を、うしろへ引き上げた。鎖がジャラジャラ鳴って、男囚の両鼠蹊部に沿うて触れ、錠箱が、更に角環が硬く当り、そして鎖の感触が走った。えもいわれぬ冷たさに男囚は、わななく思いだ。腰のうしろへ回わした鎖の端を握った婦人職員は、

「膝を床について、上体を前に倒すのよ。まだ、もっともっと……」

首環に後手錠を吊り上げられたまま、男囚は額を床に、ごつんとすり当て、腰を高く挙げて突き出したまま、呻いた。

「位置は、こんなものですわね。角環が少し前気味になるようにしておかないと、だいぶ締め上げる訳ですから。これ、起きるのよ」

もがきのた打って身を起そうとする囚人の股に、婦人職員に握られた鎖や錠箱が、すれた。開いた膝で床に膝立ちした男囚は、次の瞬間、ぐいと締め上げられて喰い込む鎖のみじめさに思わず腰をもだえてヒーと泣いた。

「装着の仕方は、こんな所です。何か御質問はございません？」

ハンカチで拭っている婦人職員の、きゃしゃな指先が遂に囚人の体の表面には全然、触れもしなかったのは、さすがだった。

「相当、こたえるようねえ」

「そりゃ革褌とは、ちょっと、ちがうわよ」

婦人看守達が私語し合った。

「ともかく、想像以上に、みじめな気持にさせるようですわ」

と婦人職員が胸許を直しながら言う。

「……それに、この重股帯の効果といいますか、最もすぐれている点の一つとして、被装着者が、お尻を地面や床に下ろせないことで

イメージギャラリー……『凶悪犯逮捕』……春日田春夫……

す。腰掛けるのも勿論です。つまり、足を折ってしか坐れないんですの、あぐらなんか、とても出来ませんわ。これ、ちょっと壁際へ行って、あぐらに坐って御覧」

壁を背に、尻を床に下ろした男囚は、途端に呻いて足をガチャガチャと、もがいた。体重を尻のうしろの方に掛けて背を壁にもたれると、苦痛は少し軽くなったが、忽ち顔を歪ませて尻を浮かせる。

「ああすると、今度は尾底骨に鎖が当って痛い訳なんですの」

眺める看守達は、うなずき合った。重腰帯や重股帯を施された囚人が、どんなに苦しくみじめなものであるかは、彼等刑務官達にとっては関係のない事なのだ。戒護規程どおりに取扱うのが、この人達の職務なのだ。そうとは分かっていても、締め上げられた鎖の冷たさ切なさに、囚人は鼻を啜りながら、もがいて立ち上った。

「私、やって見るわね」

と村田婦人看守が囚人の背後に回り、後手錠を外そうとして、ぶっぶっ言った。

「誰が嵌めたの？　鍵穴が反対じゃないの」

喰い込んだ手錠を乱暴にこじられて囚人は呻き、新米の若い男の看守が頭を掻いた。

「鍵穴が両側にあるようにしたら、いいのにさ。これ、あんたのだろう」

外した手錠を男の看守に投げ返した村田婦人看守は、囚人の背を突き飛ばした。

「四つ這いにおなりよ。膝をつくんじゃないよ」

股革から手錠が分離され、更に吊鎖から革褌が離された。

「へーえ、これじゃ慣れるまで大変だよ。こたえるだろうねえ」

しげしげと覗き込んだ彼女は、鎖のあちこちを指先で押さえたりしながら、ガラガラ声

で感心し、そして吊鎖を錠箱の開閉環の一つにカチッと取り付けた。

「さ、嵌めて」

お尻を軽く叩かれた囚人は、立ち上って身を屈め、両足の間で自らの両手に手錠を掛けねばならない。手錠を動かすと錠箱の内側が痛かった。

「ちょっと歩いてごらん」

婦人職員は冷たく言う。歩くと、みじめな思いが募った。歩き難くて、一歩毎に、やり切れない感じが突き上げて来た。これからの日夜を、こんなものを装着されたまま過ごすのかと思うと、堪まらなかった。声を挙げて喚きたい気持がした。けれども、鍵がなければどうする事も出来ない錠が下ろされているのだ。立ち止った囚人は、しゅくっとすすり上げ、精一杯に顔を挙げて喘いだ。

「かなり傷がつくかも知れませんわね。隔日位に外して点検して、ついでに手入れさせて下さいな」

黒ドレスの婦人職員は煙草に火をつけ、

「錠箱の形状等は未だ改良しなければ、いけないと思いますね。又、錠箱の大きさも、も少し小さく出来る筈です。股鎖は合油鋼でという意見もあったんですけど何分、値段が、かなり高くなりますのでね。ではと、今度はあの女囚ね」

震えおののいて立ちすくんでいた十四号が婦人職員にじろりと見られて、びくっと体を硬張らせた。

「どなたか、おやりになって下さいな」

同僚達と少し譲り合った末、嵯峨婦人看守が重腰帯をジャラジャラ持って拇指を立て、女囚を促した。

「ここへおいで」

革褌を床に引きずって、唇をわなわなさせながら立ちすくんだ女囚は、腰に冷たい鎖を巻きつけられ締めつけられて、身を揉んだ。

「そう、そんな所でしょうね」

黒ドレスの婦人職員や同年配の嵯峨婦人看守、更に周りの男女に、じろじろと視線を注がれて、若い女囚は堪え切れずに膝を、がくりと床に落した。

「馬鹿ね、お立ちよ」

垂れていた鎖が、うしろへ潜って回されて引き上げられた。

「か、かんにん、堪忍してっ。お願い。ヒーッ、つめたいっ。かんにん」

腰を揉んで絶叫する女囚は容赦もなく締め上げられ身も世もないように鳴咽し続けた。

男の自分でも、こんなに切なく、みじめな思いなのに、若い女性の身で、どんなにか情けなかろうと、四十五号囚は床に伏せた目をそむけるのだった。女囚の足鎖が吊られ、手錠が取り付けられ、後手錠を外された女囚は泣きながら自分で股手錠を嵌め、深く体を屈めたまま悄然として立ちすくんだ。

「相当こたえるのね。大分、しょげてるわ」

松原婦人看守が鼻の頭をパフで叩きながらそう言い、嵯峨婦人看守は

「締め方が足りないかしら？　ま、いいわ」

と女囚のお尻を平手でピシャリと打って、男囚の横に並べて立たせた。

「男囚に鎖褌を掛けて股手錠にしてやると本当に滑稽な恰好になるものねえ」

と婦人職員は言いながら、こっそり逃げ出して行く松原婦人看守の背を苦笑いで見送った。

「指先が届くように思うけど届かないのね、やっぱり。届いた所で仕方ないけど……」

頭を垂れた男囚の目には、目の真下で鈍く光る錠が嫌でも見え、更にその下方に手錠がキラキラと光って見え隠れしていた。背筋を少し伸ばそうとすると、錠箱が硬く突き上げ股鎖が冷たく喰い込んで、ガッチリと嘲笑う

ように手錠を押えた。

「この重腰帯やなんかですけど、全部の囚人に施すようになるんですの？」

と水戸婦人看守が女囚の姿を、眉をひそめて見ながら訊ねた。

「細部に亘っては勿論、未だ決まってませんけど、未決囚に対しては懲罰の目的以外には使用されないことになると思います。まあ数量も急には揃いませんしね、最初は受刑者の護送とか、獄外に連れ出す時なんかから、使われることになると思いますわ」

黒ドレスの婦人職員は答えながら、又もライターを鳴らす。

「教化刑という考え方が叫ばれてますけど、どうかと思いますわね。スェーデンじゃ教化刑制度に踏み切ってから、もう二十年程になりますか。その他、最近二、三の国も採り入れてやってるようです。しかし我が国では、そのような急進的な考え方は全く、ありません。そりや詰まらない団体やなんかが、いろいろ喚いているようですけど、行刑というものは、そんな甘い物じゃありませんもの。本省じゃ、それ所か、更に峻厳なものにする方向に動いてますわ。ただね、被疑者、被告人の段階では、少し緩めてやってもいいじゃないか、という空気はあります。私も外国の行刑状態を視察に参りましたけど……」

婦人職員は微かに得意の色を浮べて、並みいる看守達を見回した。

「文明国の中では叡国が矢張り一番、厳しいようですわ。ともかく、受刑中に命を落としても自業自得であって、罪を償う能力もないような人間は生かしておく要はないっていう調子でしてね。情け容赦もなく執行するんですのよ。御存知のように叡国は犯罪発生率も再犯率も最低なんですからね、社会の秩序も筋金が通ってますしね。伊多利じゃ面白いことしてるのよ、フフフ」

婦人職員は口を押えて、思い出しても面白いという風情で笑いを噛み殺し、

「あのね、男囚の場合だけど、錠に手錠を結合してるのよ。錠の裏側に金具があって…。海岸の近くの監獄だったけど、多勢の男囚がそうされて海水浴場の砂の中から、ごみを拾わされているのよ。皆、若くて血気盛んな男囚達ばかりだったわ。砂に膝をついて、うんと腿を開いて、ハアハア喘ぎながら拾ってるの。勿論、鎖褌に鉄の腰枷で、足に鉄丸を曳きずってね。二名宛、鼻環を連鎖されてさ、腰枷のうしろに袋をつけてるのよ。その袋に拾ったごみを入れ合う訳だけど、ともかく手を動かすたびに錠が凄く痛いのね。相手の袋の口へ、ごみを入れるには、どうしても手錠を持ち上げなきゃならないし、男囚達は額に脂汗を浮べてヒーヒー呻いてたわね。ごみを拾いそこねて砂の上に、ぶっ倒れるのは、しょっ中だし、そんなのをさ、水着姿の娘さん達がキャアキャア笑って見物してるのよ。私もおかしいやら可哀想やら、吹き出しちゃったわ。そしてね、男囚達を連れて帰る時の連鎖が又、傑作なのよ。一米おき位に直径一〇センチ程の環が混じってる鎖を使うの。手錠をつけてる錠の裏側の金具を繋いで、腿の間をずっと通す訳だけど、大きな環があると便利というか、邪魔物をそれに潜らせてさ、まっすぐに通せるでしょ。感心しちゃったわ。若い金髪の婦人看守達が平気な顔でテキパキと繋ぎ合わせて行くのよ。婦人看守の娘さん達は、南国でしょ、ショートパンツ姿でさ、皆とっても、いい体してるわね。胸なんかブラジャーなしで、こんなのがプリプリしてるの。羨ましかったわ。あの錠に連鎖をつけられると重いし、とっても辛いらしくって、オイオイ泣き出すのがいたわ。あら、私、ついつい脱線しちゃって。どうも、おそくまで御苦労

様でした」

婦人職員を先頭に皆は、ぞろぞろと準備室を出て行った。

「合衆国は連邦制でしょう。州によって、ひどく、まちまちなのよ。死刑の方法だって五種類ほどあるし……」

未だ海外視察をひけらかせている婦人職員の声が遠ざかり、残されて立ちすくむ囚人の背後に、嵯峨婦人看守の靴音が近寄った。

「さ、労役して貰おうかな。その鎖褌のままでね」

鎖褌を締められたままの日夜は、全く骨身にこたえて辛かった。隔日に外されて体の点検を受け、鎖の手入れをさせられる。合理的に調合された囚人食しか口に出来ない受刑者の便は大抵コロコロとしているから、鎖をそれで汚すことは滅多にはないが、鎖褌の手入れは先ず角環と錠箱の内面を丹念に舐め取ることから初められるのだ。装着されて一カ月ばかりの間というものは、外されるたびに血がこびりついていた。手入れを済ませると女囚には治癒促進剤を、ふんだんに塗りたくられるが、男囚四十五号の方は、損傷の程度が余程ひどくならないと、薬剤は用いて貰えない。比較するためなのだ。十四号と四十五号は、ホッとする暇もあらばこそ、忽ち腰を蹴り上げられて立たされ、今磨き上げたばかりの鎖褌を、又も装着される。泣いたとて喚いたとて所詮、無駄なこと。情け容赦もなく冷たい鎖が肉に喰い込んで、ぐいぐい緊め上げられてガチッと錠が鳴り、吊鎖と手錠が股間にぶら下って冷たく揺れて鳴り、そして鼠蹊部から尾底骨あたりに、どうしようもないみじめさが、ジーンと泌み渡るのだった。

待ち焦かれていた面会日がやって来た。それを取消されないがためにこそ、毎日毎夜の苦痛と屈辱を、ひたすらに、甘受して来たのだ。二重の金網越しに見る早苗は、やつれていて彼の胸はキリキリと痛んだ。

「鎖の褌なんか掛けられて……」

早苗は、声を呑んで顔を掩った。

「あんまりだわ、ひどい。何か懲罰を受けてるの？　けど、そうなら会わせてくれない筈ね」

彼女の声には、怒りさえ感じられた。

「試験のために掛けられてるんだよ」

「試験て？　あ、じゃずっとなのね。まあ」

「もう二週間位になるかな」

「そうお。辛いでしょうね、これから寒くなるし。ああ、代って上げられたら……」

早苗は涙をポロポロ涙して身を揉んだ。

「なあに、もう少しは慣れたよ」

彼は股手錠をガチャガチャいわせながら虚勢を張って見たものの、忽ち肩を落し、

「辛いんだ。このみじめな気持といったら、もう……」

と涙声で訴えた。

「こんな、こんな恰好で、お前に会わなきゃならないなんて……お前は笑わないでおくれだろ？　ああ、自分が、もうみじめでみじめで堪まらないよ」

「そんな。けど、ほんとに、ひどいわ」

冷然と監視していた嵯峨婦人看守が、つかつかと近寄って

「お前達、何を話してるの？　あんまり行刑の不平を言うと、ためにならないわよ。受刑者の処置の権限は、こちらにあるのよ。それでもいいの？　え、おかみさん」

とげとげしく、きめつけた。早苗の顔が無念の思いに歪み、一瞬キラリと婦人看守に向けられた目は忽ち、弱々しく伏せられた。

「す、すみません。あの、お願いですから、この人を、あんまり痛めないで下さいまし。

この通りでございます」

早苗は懸命の面持ちで、両手を胸許で合掌して歎願するのだった。そのいじらしさに、囚人の頬は涙で濡れる。

「ホホホ、おかみさん。私達だって、何も不当な扱いをする訳じゃないのよ。規則に従って処置するだけなんだから」

婦人看守は勝ち誇ったような冷笑を浮べて元の位置に戻り、革鞭を床にピシリと鳴らして腕を組んだ。

「ね、別の話をしようよ。そんなことは何と言ったって仕方ないんだから」

囚人は涙で曇る目を挙げて早苗の顔をヒタと見つめ言った。許された時間は短いのだ。

「坊やは元気だろうね？」

「ええ。余っ程、連れて来ようかと思ったんですけど……会いたいでしょ？　あなた」

「会いたい。一目でいいから、見たい。けれども連れて来ちゃ駄目だよ。何度も言う通りこんな所で、こんな、ざまの俺を」

囚人の語尾は、悲しみと切なさに震えて消えた。早苗が金網の向う側で示す写真を夢中で見つめる囚人の胸が波打ち、写真を持つ早苗の手も、ぶるぶる震えた。せめて写真なりとも手に取って眺めたかった。無心に笑っている愛児の像を指先で愛撫し、頬ずりしてやりたかった。あの小さな写真一枚さえ、独房へ持ち込むことを許して貰えたら、受刑の日々が現在の数倍の苦痛と屈辱に満ち満ちようと、喜んで甘受するのに、とさえ思う。

「あなた、可愛いでしょ？　もっと大きいといいんだけど、これ以上の大きさは許して貰えないのよ」

愛児の面影を心に刻みつけようと喰い入るように見入る囚人にとって、二重の金網で隔てられた薄暗い二尺の空間が恨めしくも切ない。じりじりと、にじり寄る囚人の咽喉のあたりが、悲痛な思いをこめてゴクゴクと、わななき、股手錠に捉えられた両手は、固く握り締められてガチガチと震え、両腕の無意識のもだえは、喰い込んだ鎖を揺すぶり、両腿の間で押えられた手錠の環がジ、ジーと鳴って更に締まった。気付いた早苗がハッとするも暇もなく、囚人の鼻環が金網に触れた。激しい電撃を身に受けて、囚人はギェッと喚いて硬直した。硬直する瞬間、股手錠のあたりでガッと低く金属音が聞え、囚人は棒のように床に倒れる。倒れると更に頭や肩が金網に触れ、白目を見開いた囚人の口から涎れが流れ呻きが声もなく洩れた。

「アッ、担、担当様ッ。早く来て！」

金網にしがみついた早苗がオロオロと絶叫し、冷笑を浮べた婦人看守がゆっくりとやって来た。婦人看守の靴先が金網と囚人との接触部分を蹴って離し、更に邪慳に蹴られて囚人の体が金網から少し遠ざけられた。硬直していた囚人の体がゆるんで弱々しくもがく。

「さっさと起きるんだよ。ま、起きたくなきゃ起きなくていいけどね、そうしてる間も時間のうちだよ。いいの？」

婦人看守は囚人を小突きながら嘲笑った。

「あ、あなた。起きて！　お願い。お顔を見せてよ。しっかりして！」

金網に指をからませて縋りついた早苗が、必死に呼び掛けた。

「ホホホ、おかみさん。御覧のように自業自得ですわね」

ビクともしない鉄網を早苗は必死にゆすぶり叩き、囚人は起き上ろうと死物狂いに、もがいた。その有様を小気味よげに眺めながら婦人看守は、

「おかみさん。あんた先刻、私のことを担当様ッて呼んだわね。前科があるのね、おかみさんも」

辱かしめられた早苗の顔が一瞬、更に曇っ

て、唇がワナワナ震えた。

「フフフ、やっと起き上れたわね。お気の毒だけど、あと一分足らずよ。四十五号ッ、気をつけなきゃ駄目じゃないの、馬鹿ね」

必要のない鞭が囚人の背に音高く鳴って、早苗の方がヒーと泣いた。

「どう？　もっと欲しい？　少しはシャンとしたかい？」

「ハ、ハイ。お、お手数を掛けましてございます。有難うございました」

股手錠のために曲げた体を更に深く屈め、与えられた革鞭のお礼を言っている愛しい男の浅間しくも哀れな姿と声に、早苗の胸は煮えるようだった。しかも傲然と見下ろしている看守は、自分と同年配の女性なのだ。早苗は思わず噛みしめた唇から血が滲むのにも気づかなかった。嫉ましさの微かに混じった口惜しさが胸一杯にこみ上げて溢れ、早苗は涙の乾いた顔を上げて婦人看守を睨みつけた。血の通った人間なのか、とさえ思ったことだった。しかし、この恨めしくも冷酷な婦人看守でも、社会では通常の娘さんと何等、変わらないという事を早苗は知っていた。法とか規則とかの冷たさ、そして刑というものの厳しさ、おそろしさを、今更のように、ひしひしと、如何に悲しく思ったことか。

哀れな二人は涙を流し合い、もどかしげな語らいを再び初めた。再審訴願の状況は一向に、はかばかしく進んでいないようだった。早苗は口ごもりながらも、費用が嵩むことを告げた。兄夫婦や法理士達は、一縷の救いを再審による刑の軽減、ただそれだけにかけて獄窓の明け暮れに呻吟する彼をよそに、豊かな生活を楽しんでいるに違いない。そう考えると矢も楯も堪まらない憤りの渦が奔流となって全身を、わなわなかせた。こうして社会から隔絶され、自分の運命をすべて他人に握られたまま如何にする術もなく、苦痛と屈辱をただ甘受して、ひたすらに待ち続けている心細さとみじめさとは、筆舌に尽し難いのだった。早苗は口にはしないが、嫂から冷たく扱われているに相違なかった。鉄網にしがみつく早苗の指は荒れていた。せめて手と手を握り合えたら、とこみ上げる、いとおしさに身をもだえる彼に、嵯峨婦人看守が鞭を鳴らして近寄った。

「時間だよ」

哀願の涙を湛え、唇を震わせて喘ぐ彼の鼻環に、婦人看守の白手袋の指先が伸びて、ぐいと、こじて引き上げられる。

「とっとと、おいで」

革ロープを短く握られて曳かれれば、最早振り向くことも出来ない、みじめさだ。

無慈悲なこの婦人看守に鼻環を曳きずられながら、叶うことなら八ツ裂きにしてやりたい程の衝動に駆られて、囚人は力一杯、もがいた。しかし鎖褌、股手錠、足錠の身が、如何する事が出来よう。

「ち、ちくしょう！　あ、あんまりだ。く、くそっ！　こ、こんな、血も涙もないじゃないか！」

抑え切れない無念の言葉が、夢中で唇を突いて洩れた。

「おんや？　お前、不服なのね。フフフ」

婦人看守は眉を吊り上げて、囚人をジロリと冷たく見やった。

「あッ、あなた。そんなこと、おっしゃっちゃ駄目よッ。は、はやく、お詫びして……」

早苗がオロオロ声を悲痛に張り上げる。

「担当様ッ！　お願いです、赦してやって下さいまし。聞き逃がしてやって……お慈悲です。こ、この通り拝みます」

「ふん。おかみさんが幾ら、そんな事を言ったって初まらないわね。ま、どんな根性なのか、あとで調べてやるわ。こらッ、又うしろ

を向こうとするのねッ」

荒々しく引き寄せられ、その上に上下に揺すぶられる鼻環の痛さに、囚人はポロポロと泣いた。未だ涙の残っていたのが不思議だった。後ろ髪を引かれる思いで面会室を出た囚人の背後で扉が閉まり、泣き崩れた早苗の、すすり泣きも聞えなくなった。恐怖の念が突然、囚人の胸を締め上げる。

「担、担当様。とんでもない事を口走ってしまいました。お赦し下さいまし」

なえた膝を床に落とした囚人は鼻環を曳かれて、いざりながら懸命に哀願の声を、振り絞った。腰の右後ろには、手錠の革サックが、その殆どを上衣に被われて、少しはみ出た先端が、よく磨き込まれた光沢を見せていた。

「うるさいわね。こっちから訊問するまで黙つといで。それとも何かい？　看守抗弁の罰を逃れようというつもり？」

婦人看守は右手の革鞭を、ゆるくり回転しながら、振り向きもしないで冷たく、きめつけ、左手の革ロープを引っ張り上げた。

イメージギャラリー……『社長と課長・昼はＯＬ、夜は女王様』……春日田春夫

四十五号囚に科された懲罰は『吊り』であった。『吊り』にも『爪先立ち鼻環吊り、後ろ手吊り、膝抱き足吊り』など、いろいろとあるが、彼は『ハンモック吊り』をやられた。懲罰の中には入らない革鞭を全身に浴びて、体中みみずばれで縞馬のようになった彼は、準備室の壁際の二本の柱の間にハンモックのように横に吊られた。嵌口具を嵌められ、前手錠と足鎖とをそれぞれ、長い鎖で柱に吊られて、体を一文字にした状態で、腹部が台上一米位だ。両腋下と両足裏とに擽り器が取り付けられ、腹部の下の台上に固定された小箱から伸びた鋼線が、男囚の錠に結ばれる。鋼線は小箱内

のバネで常に下の方へ、かなりの力で引かれているのだ。擽り器や小箱が電線で接続され電源が入った。体をゆるめてグッタリとしていた囚人は、両腋下、両足裏で、作動を初めた、擽り器の堪え難い感覚に、ギャッと喚いて体を、のた打たせた。

「まあ、こんな所ね」

小箱を調節していた嵯峨婦人看守が鋼線の張り具合を揺すぶって見て、ゆっくり立ち上った。

「フフフ。お前、これは初めてなのね。錠についてる針金を引き上げたら、擽り器は停まるわ。けど、三十秒間は切れないのよ」

残酷な装置だった。全身に力をこめ、精一杯の努力で体を横一文字に保っていないといけないのだ。鋼線に引かれた錠はキリキリと喰い入って柔らかい皮肉を鋭く噛み苛み、引き縮める両手両足の錠は骨も砕くばかり。全身を自ら硬直させ続ける苦しみに疲れ果て、わずかでも力をゆるめれば、錠を引っ張る鋼線は小箱の中へスルスルと吸い込まれる。ものの一寸程、吸い込まれるや否や、擽り器がぶーんと作動を初めて、この世のものとは思えない、堪え難い感覚が湧き返って、囚人の体は分解してしまうような苦しみを味わうのだ。死力を尽して再び鋼線を錠で引き上げ、更に三十秒程を、その苦しみに堪え続けなければならないのは、気のせいではなかった。

「どうお、気分は？　そろそろボンヤリしてきた頃ね。元気をつけたげるわ」

やって来た嵯峨婦人看守は、被懲罰囚の体を観察しながら小気味よげに、からかい、ハイポンを囚人の尻に射った。

「あと、二時間あるのよ。ハ、ハ、ハ」

漏洩防止のための充填剤が施され、彼女は笑いながら立ち去った。

床に降ろされた四十五号囚の体は棒のようだった。足蹴で転がされ、嵌口具等が外され、嵌口具等が外されつつ、充填剤が溶かされ、嵌口具等が外されつつ、充填剤が溶かされ、嵌口具等が外されつつ、充填剤が溶かされ

め取らされた。

「よし、お立ち」

嵯峨婦人看守の声を聞くと、死物狂いの力が湧いて、囚人は鎖を鳴らして立ち上って、よろめいた。錠箱から離されていた吊り鎖を自分で吊り、四つ這って検査を受ける。嵯峨婦人看守が顎を、しゃくった。彼女の視線がちらと見やった箇所で囚人には、その命令の意味が分かる。

「股手錠にさせて頂きます」

男囚は前面を婦人看守に曝したまま、両膝を開き、両腕を揃えて垂らし、ぶら下った手錠を指先で引き寄せ、体を屈めて自分の両手首に鋼鉄環を嵌めた。なまじ、わずかばかりの間隙があるため、かえって鋼鉄環が手首にすれて、飛び上がる程に痛かった。呻きながらも囚人は、何か安堵の気持を味わった。みじめな姿ではあるが、こうして股手錠の姿になると、あの恐ろしい懲罰から完全に赦されたのだ、という感じだった。

嵯峨婦人看守は黙って鎖褌を更に締め上げ鼻環に革ロープをつけて乱暴に引っ張った。懸命に歩くつもりでも、弱った体は何度か足鎖をもつらせ、つまずいて廊下に倒れた。

「申し訳ございません。す、すぐ起きます。うッ、う、う、ヒーッ。鼻、鼻を、ゆるめて下さいまし」

必死に鎖錠をガチャつかせる囚人に、婦人看守は舌打ちを浴びせて、立ち止まりはするが、鼻環の革ロープを、ゆるめてやろうとはしないのだった。部長室へ連れて行かれた四十五号囚は、年配の看守部長の女性に油を絞られた。

「言って聞かせて貰えるなんて、滅多にない事なんだよ。これからもあることだから、ようく肝に銘じておくことね」

嵯峨婦人看守は革ロープを握ったまま、椅子に腰掛けて言った。

「ハイ。お言葉は、肝に銘じましてございます。有難うございました」

「今度、抗弁なんかしたら、こんなことじゃ済まないよ。お前は再審を訴願したりして、お上の手を煩わしてるんだよ。その上、こんなことで面倒かけるなんて。罪に服する気持があるの？」

看守部長の婦人は回転椅子を半回転させて手を伸ばし、側机から飲物のコップを取り上げながら叱りつける。

「お前達一名に対して刑を執行するのに、どの位の費用が要ると思ってるの？　お前が今身につけさせて頂いてる戒具だって、相当な金額なんだよ」

「申し訳ございません」

「よし。まあ、言葉で言って聞かせるというのは人間対人間のことだったわね。ともかく性根を入れて勤めさせて頂くんだね」

看守部長は、長いホルダーに煙草を差してライターを鳴らした。

「あ、それから言つといてやるけど、今度の面会は保留しとくからね。性根が入ったようなら許してやるわ。えーと、今日は絶食よ。それから錠を外しての処理は当分させないからね。根性が直らなきや、お上の器具を使用させる訳には行かないわ。鼻血を流して苦しむがいいね」

男囚は、うなだれた目の真下に鈍く光る錠を悲しく眺めた。懲罰に弱り切った体の今はそれ所ではないが、近い将来に味わねばならない七転八倒の苦しさは充分、想像することが出来た。しかし、この女性にそう言い渡されれば、それでもう如何ともならないのだ。しかし、どう思って見たとて所詮、自由を奪われた身。ひたすらに刑を勤めて、御慈悲の程を希うしかないのだ。

（つづく）

さるぐつわ

――この美しきものの詩と真実――

（第三回）

新川裕夫

○

今回も前回に引き続き、柳亭種彦の作品をみてみよう。

『高野山萬年草紙』

ここに薄衣（うすぎぬ）という遊女がいる。以前から遇いそめた恋人は、何故かこの所、何のおとずれもなく、若い肉体は、うずくが、だからといって外の男に体を許す事も、いやだ。そこで病気と言って部屋に引きこもっていたが、ある夜――

一人の曲者忍び入り、薄衣が小腕取て高手小手にいましめ手拭にてしかと口を包みたれば、叫ばんとするに聲さへ出ず

つづらに押し込まれて、さらわれてしまうのである。

猿轡は、あきらかに手拭を巾広くひろげて掩うように口の上からグイと包んで、後頭部で結ぶ方式である。第二回の『天縁奇遇』で解説したが、もっとも種彦の好きな猿轡の型である。

この場合（これは、いずれ真実篇で考察する予定であるが――）手拭一枚を一重にして口を包んで後ろで結ぶのみでは、女の声が容易に外部へもれる危険性がありはしないか。しかし本文には「しかと口を包みたれば」とあるから、一重でなく、長い手拭を二、三重か、或は、われわれが使っている手拭と長さが同様なものであるならば、一重でも、女の顔が、くびれる程に、ぐいッと引きしぼって後ろで縛ったとみるべきである。

女は、もうそれだけで心理的に、〝あたしは猿轡をされているから、絶対に声は出ないのだわ〟と思いこんでしまうであろう。

いずれにしても、この『万年草紙』で使用されている猿轡は、女にそう思わせるに充分な、きびしさであろう。

『翻案道中雙六』

重（しげ）の井（い）は上品で美しい娘である。彼女を、ある、むくつけき大男が、ぞっこん惚れて、

つけまわす。しかし重の井は勿論、承知しない。そこで失恋した悪漢は一計を案じ、外出中の重の井を迎えの者と偽って彼女を駕籠に乗せ連れ出す。途中で待ち伏せして、時分よしと見るや駕籠を襲い、つきそいの男たちを殺したことは、かねての計画通り。

　重の井は気も狂乱、こわさも忘れて乗物よりまろび出るを駕(かど)ぞひの熊鷹眼助と って押へ、しごきの帯にてぐるぐるまき、あれよとさけぶを手拭を取より早く猿ぐつわ

かくして重の井は、まんまと、さらわれてしまうのである。

　重の井の場合も、「手拭を取より早く」猿轡をしたのであるから、女の口を開けて布切れを突っ込みその上から別の手拭で掩ったり、或は女の口に手拭をくわえさせるような型式の、それではなさそうである。

　やはり『万年草紙』の薄衣がされたように女の口、それも丹花の唇を開いて今にも助けを叫びそうな口の上から手拭を、ぐいッと強く後ろへ引きしぼって後頭部で固く結んだ猿轡であると推定される。

　重の井は薄衣と同様、心理的に声を出すことが不可能であったのだろう。

『蛙歌春土手節』

　悪漢、泥沼鷲平次と環(かん)八は、かしくという美女をさらい、さんざん楽しんだ後は、遊女にでも売りとばそうと相談する。さて、いよいよ実行する段になって、何ぶん暗い部屋の中、かしくと思ったが実は——

　下女のおりんに猿轡はませ二人の悪漢はうまくいったと逃げて行く。

　さて、おりんがされている猿轡は、明らかに手拭を、女の口にくわえさせた型式のものである。この猿轡は、薄衣や重の井の場合のように、手拭一枚で、ぐいと包むよりも、発声は不明瞭になるであろうから、人さらいにとっては好都合であり、悪者どもに、この猿轡を選択させた種彦は——それは無思考の選択であったろうが、それだけに、——さすがである。

しかし、人違いとはいえ、下女のおりんはとんだ災難であった。人違いとわかった時、悪者どもから、如何なる腹いせの処置を受けるであろうか。裸にされ、縛られ、打たれ、さわられ、吸われ……。

けれども、おりんは固い猿轡の下から、ただ、うめくのみであろう。そしてこの女も、いつしか、猿轡と縄の、たまらない味を覚えて、愛するようになっていく——。

そうなった時、わが党の士として、おりんを暖かく歓迎したい。

『関東小六昔舞臺』

小桜という女を悪者どもが三人、なだめすかして、あざむいて、ある男の妾にしょうとしている。しかし小桜は、なかなか、気丈な女。少しも、いう事を聞かず「殺さば殺せとどう挫と坐し、動く気色は無かりけり」という有様である。遂に悪者ども「エエ面倒な」と、小桜を縛ろうとでもしたのであろう。ざわざわ立ちかかると、「一寸、待った」と、そばの川に、もやってあった船から船頭が一人、出て来た。話を聞くと、さらった女の運び屋だという。江戸時代には面白い商売もあったものだ。船頭は俺の商売の証拠を見せようと船の苫を、はねのける。そして——

船底より、引出したる顔よき娘、身は侭ならぬ縛り縄、物も云ひ得ぬ猿轡、

さて、この娘がされている猿轡は如何なる型式のものと考えればよいのだろうか。

イメージとしては、鼻孔を出し、口から頭を包むようにおおった猿轡が浮かぶ。少なくとも鼻の上から包む型式ではなかろう。というのは、「引出したる顔よき娘」と、猿轡をされていても「顔よき」状態が分かっているからだ。そのためには、どうしても鼻の形の美しさも外部に見せねばならぬであろう。故に、鼻の上から包むよりは、むしろ口を開かせて手拭をくわえさせる猿轡の方に必然性がある。こうなれば、目、鼻、口と、この娘を「顔よき」状態にしている、すべての要素がはっきりするからだ。そして、「物も云ひ得ぬ」猿轡である。ますます口を割って、かませる型式の可能性が濃くなる。或は、これかも知れないが、美しさから見て、つまり、縛られた顔よき娘を、ますます、ひきたたせるという観点から、又、種彦好みという点から見て、私は中間をとり、鼻を出して口を包んだ猿轡としたい。

しかし、いずれにせよ「物を云ひ得ぬ」程厳しい猿轡なのだ。口を包む、それにせよ、先ず、娘の口の中には何か布切れが、つめこまれてあり、その上から猿轡をしてあると考えるべきであろう。

『邯鄲諸国物語』

ある失恋男が、遂にたまらず、自分を袖にしている女の寝込みを襲おうと決心する。そして、この男は女の部屋に入ろうとしながら手下の者に次のように言っている。

手前は四辺(あたり)へ気を配れ。よし人が起き合ふても、高の知れた女許(ばか)り。口へ手拭頬張らせ、息の根上げさすなと、（以下略）

この男が、これから女にしようと思っている猿轡は、女の口の中に手拭をつめ物した型式である事は確実である。その上から、おおう手拭は（一）、女の口を割り、つめ物の上から、それが舌などの作用で外部へ押し出されないように後ろで縛る（二）、同じく、つめ物を出させない目的のために、口の上から頤にかけて包むようにして後ろで縛る（三）同じ目的のために、鼻の上から口、頤を包むようにして縛る、の三型式のうち、いずれであるかは判然としないが、それは、この小説を読む側の各自の好みによる裁量にまかせてあるのだろう。

いずれにせよ、「口へ手拭頬張らせ」の文

句が不思議な生々しさと迫力を持って読者に迫る。さすが種彦だ。

さて、もう少し、この諸国物語を読もう。

ここに金持の娘で、甘やかされて育ったので、わがままで人使いが荒く、生意気な女がいた。

ある時、飼い鳥を不注意から逃がしてしまった女中が、いくら詫びても聞かず、なぐるわ、蹴るわの責め折檻。その女中六出（むつで）という美女は、間違って鳥を死なせたために、とうとう腰巻一枚の裸にされ、庭の立木に縛りつけられてしまった。

又、このわがまま娘の母親も、悪い女である。良人が、この六出を可愛がっているのが面白くなく、娘と一緒になって、いや、自分が先頭になって六出を責め始めるのである。

裸で縛られている六出は、折から降り出した雪に体を青くしてガタガタふるえる。それを見て娘の母親は「余り寒いなら、何ぞ着せてやるがよい」と、死んだ鳥がいた鳥篭を、外の女中に言いつけて六出の頭から、すっぽり被せてしまう。そして、「こりゃ面白い面白い、さア皆で、うんと笑っておあげ。鳥を殺した、その罰で生きながら鳥になったわ、この女。そうね、鳥だから、生餌をあげましょう。どれ、あたしが先ず手本をみせてあげよう」と、餌擂鉢を左手に持ち、食いしばる六出の歯を擂り木で、グイグイと、こじ開け生餌を口の中へ注ぎ込み「ゲッゲ、ペッペ」と泣きながら苦しみ、もだえる六出を見て、この母親は大喜び。そればかりか「さア、おかける勢いであるまいこと。お部屋で何か、あ前も行って責めてらっしゃい」と娘を、けしゆるして解いて下されませ」と、しきりに哀げに詫びるが、母娘は、かえって憎々しげに笑いつつ、

ええ喧（やかま）しいと手拭を、食ませて声を立てさせず。

「まア風がつめたいこと。お部屋で何か、あったかい物でも食べましょう」と行ってしまうのである。

六出がされている猿轡は「食ませ」であるから、口を割って、手拭をくわえさせ、後ろで引きしぼって縛った型式であろう。又、そう考えた方が、この荒々しい型式の猿轡が、女が女にほどこすという憎悪に満ちた情景に極めて効果的な、或種の陰湿さを持って迫って来るのである。

話変って、忠太夫という俠気（おとこぎ）のある人物、人々が群がって、さわいでいるので、急いで行ってみると、古葛篭を背負った、一人の悪漢に、六十あまりの老人が、とりすがっている。話を聞くと、この葛篭には老人の孫娘が入っており、この男は、人さらいだという。

「義を見てせざるは勇なきなり」忠太夫は先ず悪漢の眉間にストレート・パンチ。打たれて悪漢は、よろめきながら逃げて行く。老人は「おお可愛いそうに飛んだ目になって…」と言いながら葛篭の蓋をあけると、

出づるは十か十一の、いたいけの小娘が猿轡にものも云はれず、縛縄（しばりなわ）に手も利かねど、転（まろ）び出でつつ倒れたる。

という状態であった。

これでは一寸どういう猿轡か分からぬが、幸いな事に、この老人は、もう少し後の所で娘がさらわれた時の事を説明しており、それによって、この娘は如何なる型式の猿轡をされたのか、よくわかる。老人は曰く、

休んで居る其の処へ、来掛ったのが先刻の悪漢、誘拐とは夢にも知らず、親切さうにもの言はれ、撫で擦らるるが嬉しさに、心を許してとろとろと、疲労て眠るを見済してか。此の孫に手拭喰ませ、

娘は口を割って手拭をかませ、後ろへ引き

しぼって、縛る型式の猿轡を、されたのである。一秒たりとも惜しむ、とっさの場合、口の中に、つめ物をして、その上を布で縛るよりも、つめ物と似たような効果が期待できる口にかませる型式の猿轡は、まさにこの場合の悪漢にとっては最も便利なものであろう。

『邯鄲諸国物語』から、もう一場面。

渚（なぎさ）という年増が、山の中で「あなたの知り合いの者が急病だ」という使いをうけ、渚はあわてて言われた通り、山中へ。おいにあたる十三郎という若侍、虫の知らせか、どうも怪しいと後から急いでついて行くと、伯母の渚は一体、どうした事か「高手篭手に縛め」られて、主人と覚しき着飾った男の前に引きすえられて、下人共からピシリピシリと打たれて責められている。男どもは、渚や十三郎たちが仇と狙う悪漢の手下であった。そして遂に十三郎も多勢にかなわず、刀を打ち落されて組み伏せられ縛られてしまう。渚は覚悟の声、震わし「やっと時節が来て夫の仇に出会ったと思ったら、一ト太刀もあびせる事が出来ず、そればかりか、こんなに厳しく縛られて、く、くやしい！」と悪漢に、うらみの言葉を、ぶつける。

悪漢の親玉は、憎々しげに、もだえる渚を見下ろして笑い、「やい、やかましい。おれは何処までも善人を苦しませるのが大好物なんだ」と、手下に下知をして曰く。

手速（てばし）こく、口も足も捕縛（しっち）ばり、二人ともに是れに押し容れ、明日は土産の荷の振で、屋敷へ早く馬で遣れと、腰を掛たる用意の揚げ荷に、二個の葛篭へ、あらがふ二人、猿轡にほだしを掛け、押し入れ蓋を覆はせつ。

さて、二人は如何なる形で口を「捕縛（しっち）」ばられたのであろうか。

「猿轡にほだしを掛け」とある。〝ほだし〟は絆で、辞書を見ると、①足かせ、手かせ。②自由を束縛するもの等とある。

そこで思うのだが、「猿轡を掛け」でなくわざわざ「ほだしを掛け」と、ことわって書いてあるところをみると、まず二人の口を開けさせ、口中に布か何か（この場合、賊どもの黄色く汚れた、フンドシだったかもしれない）を、つめこみ、その中から念入りに、しっかりと手拭で、いく重にもつつみ、後頭部で固く結んだ型式の本格的猿轡であった、と想像されるのである。

こうなれば、まさに完全なる①口かせであり、発声の②自由を束縛するものとなっている。

それはそれとして、渚の口の中に無理に、つめ物をされる時、どうであったろう。口を開く、開かないは彼女の自由意志であるが、勿論、開きたくない。そこを荒くれ男たちによって、無理やりつめられるのである。きっと、もがいたろう、うめいたろう。二、三度頬をなぐられたかもしれない。しかし、彼女は、固く口をつぐむ。男たちの手は、やわらかい渚の乳房を、ねじるように、つかんだかもしれない。そして結局、一人の男に形のよい鼻を、きさえつけられ、一人の男に頭を押つく、つままれ、思わず口を開いた所を、男たちの汚ないフンドシを押しこまれたのであろう。彼女は、その瞬間、思わず一種異様な味と臭さに目を閉じて顔を振ったであろう。

こうして猿轡をされた女体の荷造りは完了した。

えっ、十三郎の方は、どうだって？　野郎なんか、どうでもいい。

○美図垣笑顔

種彦は、以上で一応、本を閉じて、美図垣笑顔の作品を読もう。彼の名は、あまりポピュラーでないが、作品の名を挙げれば、うなずかれる読者もあろうか。

『児雷也豪傑譚』

例の大蛇、なめくじ、蝦蟇の妖術が出てくるアレである。目玉の松チャンが活動大写真で主演して有名になった原作である。

ここに深雪（みゆき）という優しく美しい娘がいる。今しも父親、畑作の足腰をもみ、畑作は気持よさそうに、うつらうつら。とその時、裏の破れ垣を押し倒し、ぬっと出でたる一人の曲者。手拭で面を深く包み、腰に一刀、ぼっこんで尻ぱしより、テピカルな江戸時代の悪漢スタイルである。彼は家の周囲を、じろじろ見まわしていたが——

深雪を見つつ、物を言はず引捕らへ、やれ盗人と言ふ口へ、ぐっとかけたる猿轡。そして驚いて起き上る畑作を、刀を抜いてバラリズンと肩口に切り込み、深雪をさらって逃げるのである。

この場合の猿轡は、口にかませる方式のものであると思う。

というのは、深雪は「あっ泥棒！」と言っている。故に口は開いていた。そこへ「ぐっとかけたる猿轡」である。曲者は必ずや手拭をしごいて棒状に細くし、開きかけた女の口を、いい幸いに割るようにかませて、ぐっと後ろへ引きしぼり、固く結んだに違いない。

「……と言ふ口へ、ぐっとかけたる猿轡」読めば読む程、味と迫力のある文句だ。

○　為永春水

『北雪美談時代加賀見』

二人の男女が、にわか雨に降られて、とある辻堂の中へ、かけこむ。男は狐格子を開いて、たずさえて来た提燈の燈火の中を照らしてハッとした。そこには、

二八ばかりの容貌（みめ）よき少女（おとめ）を、堂の柱に縛り付け、声立てさせじと手拭にて、猿轡さへ掛たるを、

見たのである。

二人は少女の猿轡や縄をとき介抱すると、件の少女は喜びに声ふるわせ、祭見物に行き悪漢共にさらわれたのだという。

男は一計を案じ、堂の中に安置してあった石地蔵菩薩に少女の着ていた振袖を着せる。そして、

前を合はせて帯を締め、有合ふ縄にてぐるぐると、傍の柱へ縛り付け、落たる手拭拾ひ取り、猿轡さへはますまするにぞ。見ていた女たちは、呆れたり噴出したり。男は真面目な顔で、「これが私の手段の極意。石地蔵に化けた少女に悪漢どもが驚いている間に逃げるのだ。たとへ地蔵を縛るとも人救ふが仏の役、萬更罰もあたるまい」と言うのである。

彼等は行ってしまったが、われわれは、もう少し、この辻堂に留って様子を見よう。

やがて、少女が救い出されて逃げたとも知らずに、酒くさい息を吐きつつ、悪漢どもが千鳥足で帰ってくる。

「こりゃ暗い暗い、お娘（むす）は何処だ」と言いながら、手さぐり足さぐりで入って来た一人の悪漢。やっと縛られた地蔵をさぐりあてたが着物を着せてあるため、まだ分からない。

「しめたぞ、娘はここにいた。俺は、ここに隠して置いた娘の初物を頂こうと、仲間の奴等を出しぬいてやってきたんだ。さァ、こうなったら娘は完全に俺のものだ。コレお娘、お前は最前から此の堂に縛られっぱなし。さぞ、のどがかわいて酒が飲みたいだろう。ここへ来て一杯、呑めゃ。そして、俺とシッポリ楽しまう。エッ、どうだ。是れ程、人に物を云わせて、返事をしないのは、不承知なのか。どうなんだ」と云いかけてフッと気がつき、額を撫でる。

その次のくだりは、なかなか面白いから、原文を引用しよう。

「是はおいらが悪かった。逃さぬために柱

へ縛り、猿轡まで箝せしを、返事のならぬも尤もぢゃ。どれどれ物の云はれるやう、解いてやらう」と立掛り、口に結びし手拭と、共に縄をも解き捨て、地蔵と知らねば吾顔を、顔に押しあて打驚き、「こりゃ大層に冷たい顔。とは云へ夫も尤もだ。最前からして此柱へ、縛り付けられ居たものを冷たくなった筈のこと、身内も定めて冷たであらう、肌暖めて抱いてやる……」

そして、力にまかせて抱きつくはずみに、悪漢は石地蔵と倒れ、やっと少女でないと悟るのであるが、それは又、別のお話。

さて、今、われわれは、この少女がされていた猿轡は、如何なる型式であったかを考察せねばならぬ。

春水は少女に猿轡をした事をどの様に表現しているか整理してみると次の通りである。

掛けた、はます、箝(はま)せ。

これまで、しばしば考察して来た如く〝はませ〟は〝食ませ〟或は〝喰ませ〟で、口を割り、手拭をかませ後で縛る型式であった。又、〝箝せ〟は、口にはめ込むという意味がある。（長沢規矩也編著『明解漢和辞典』）故に狭義に考えれば、口の中へ、つめ物をする事、それを、せいぜい、ゆるく考えても、口を割って手拭をかませる型式であろう。

字面の解釈は一応おいて、今度は内容面から考究しよう。

少女は先ず縛られ、猿轡を「掛け」られている。まだ、この段階では、いかなる型式かいたものと推定する。

さて、場面は変る。

今しも美しい一人の腰元が、男の胸にすがって我が身の不幸を涙ながらに告げている。

「今から、そうです、五年前になりますわ。忘れもしません、氏神様の、お祭りの夜でした。あたしは友達と一緒に見物に行ったのです。境内はもう人で一杯でした。そして、押しつ押されつ、しているうちに、友達にはぐれてしまいました。あら、どうしましょう」

あとは、この腰元の朱唇から語らせよう。

其処よ此処よと尋ぬる折から、夫と見るより一人の悪漢、矢先に私を引担ぎ、何処ともなく馳せ行くを、群集の人も何事と、知らねば支ゆる者もなく、声立んにもいつの間にか、猿轡さへ箝(はめ)られたれば、詮術なさに阿容々々と、担かれて行く悲さ辛さ。

という次第であった。

春水は又も、ここで〝箝られ〟という表現を使っている。

いくら夜だとはいえ、群衆の中から一人の女をさらうのであるから、悪漢はその行動を迅速にせねばならぬ。そのため、女の鼻をつまむか何かをして口を開かせ、手拭をねじこで縛った型式の猿轡を、この少女は、されていたものと推定する。

さて、場面は変る。

今しも美しい一人の腰元が、男の胸にすがって我が身の不幸を涙ながらに告げている。

「今から、そうです、五年前になりますわ。忘れもしません、氏神様の、お祭りの夜でした。あたしは友達と一緒に見物に行ったのです。境内はもう人で一杯でした。そして、押しつ押されつ、しているうちに、友達にはぐれてしまいました。あら、どうしましょう」

あとは、この腰元の朱唇から語らせよう。

其処よ此処よと尋ぬる折から、夫と見るより一人の悪漢、矢先に私を引担ぎ、何処ともなく馳せ行くを、群集の人も何事と、知らねば支ゆる者もなく、声立んにもいつの間にか、猿轡さへ箝(はめ)られたれば、詮術なさに阿容々々と、担かれて行く悲さ辛さ。

という次第であった。

春水は又も、ここで〝箝られ〟という表現を使っている。

いくら夜だとはいえ、群衆の中から一人の女をさらうのであるから、悪漢はその行動を迅速にせねばならぬ。そのため、女の鼻をつまむか何かをして口を開かせ、手拭をねじこ

んだり、同じく口を、こじ開けさせて手拭をかませる型式の猿轡は、何秒かの（下手をすれば何分かの）時間のロスをきたすところから、必ずや、ただ口の上から手拭を包み、巻きつける型の猿轡をしたに相違ない。春水の〝箝〟が、文字通りの〝箝〟でないことは既に考察した。

思うにこの女は、暗がりで不意に猿轡をされたのであるから、悪漢の手も狂う可能性もあろう。そこで口を掩った手拭は、力あまって女の鼻をつぶすように、その上からも、巻かれていたかもしれない。女は声ばかりか、息も絶え絶えに、さらわれて行ったのであろう。その時の、猿轡から出ている女の目が、いかに美しいか、たとえ夜の暗やみの中であろうと私には、はっきりとわかる。

○　伊丹椿圓

『今古小説唐錦』

愛しあった男女があったが、女は親の反対に合い、悲観して入水自殺。男は、すっかりこの世に絶望的となり、出家して愛人の霊をなぐさめようと、ある寺に行く。ここで剃髪しようと思ったからである。実に大きく立派な寺だ。男は喜んだが和尚が外出していないので、待つ間のつれづれに、寺のあちこちを見物していると、「ここは秘法を修する所だから入ってはいけない」と書いてある。入ってはいけないと云われると、入りたいのが、今も昔も変らぬ人情。男は誰も見ていないのを幸い、入ってしまった。部屋の中に見なれぬ画がかかっている。何の画だろうと近くに寄ってみると、何処からともなく風が吹いてきて、画を巻き上げた。とみれば後に人の入る程の穴がポッカリ。男は早速、先へ進む。と又、部屋があり「杯盤酒肉を取散らして、酒宴を催せし跡の如くなり。障子をひらきて奥をみれば、一人の女を柱に縛り付け置きたり」という有様である。

一つの密室があり、入口に

に轡をいれ手足を強く縛りたれば、泣くに声出でず、走るに道なく、（略）」

いやここまで聞けば充分だ。あとの男女の睦言には用はない。

「口に轡をいれ」、面白い表現である。この猿轡は絶対に、口の中に、つめ物をして、その上から手拭で、なおも包むようにして縛り後頭部で結んだ型式のものである。せいぜい妥協しても、つめ物をした上から、手拭を細くしごいて、かませるようにしたものであろう。

いずれ真実篇で実験観察を試みるつもりであるが、この型式の猿轡ならば、全く「泣くに声出でず」であろうと容易に想像がつく。

○　平賀梅雪山人

『絵本二島英勇記』

一寸この作者には疑点があるが、今は一応こうして置く。

御存じ宮本無三四（むさし）の話である。

無三四が、とある辻堂の中でウトウトしていると、そうとは知らぬ三、四人の賊が堂の前で、たき火を始めた。無三四は、そのパチパチという音に目をさます。賊どもは「どれ強く抱きしめたでこわくてこわくて。――我を飯にしよう」と握り飯をパクつき出したが、櫃のごとき物に入れて、ここにおくる。口中の一人が、「そうだ、あのいまいましい女

にも少し食わせてやれ」と言う。

両人の漢子(おとこ)打黙き、側の園地より、年齢廿四五ばかりなる婦人を曳(ひきづ)り来り、縛めたる索をほどき両肘(て)をゆるめまた口をくくりたる猿轡を解きければ、

女は猿轡が、はずされた途端に、大いに嘆き悲しみながら、賊どもに、「あたくしは、夫あり、親あり、子ある人妻、命ばかりはお助け下さいまし」と訴える。

この女の運命は又、後で見とどけるとして一寸、ここまで。

女は勿論、ずっと縛られ、猿轡をされていた。食事のために一旦、縄はほどかれたが、それも完全でなく、「両肘(て)をゆるめ」た程度である。故に、縄を許されたのは女の手首の方だけであって、胸から腕の上部には、まだしっかりと、幾重かの縄が巻きついていたと見るべきである。こうして置けばイザという時、女の両手を後ろに縛り、背中の縄に通せば、忽ち荷造りが完了するからである。さすが慣れた賊の仕草である。

さて猿轡であるが「口をくくりたる猿轡」とは、如何なる型式のものと考えるべきか。とっさに、いくつもの猿轡が想起されて、決定しがたい。

正確な事は、当のさらわれた女に、聞くにしくはない。女は無三四に助けられ、次のように語っている。

黄昏(くれがた)に一人の婢女を連て夫の家に立帰る折から、路次(し)に於て此者三人、近辺に人無きを考へ婢女を捕へて路傍の樹に縛り着、又妾が口には声をたてざるやうに物を啣(ふく)ませ結り着、両の肘をも厳しく縛り、山坂の間をば三人の漢子共更る更る負ひ、女の猿轡は、口の中につめ物をし、その上から、布で口を包むようにして引きしぼり、後頭部で結んだ、本格的な型式のものである事が、以上で明確に分かった。

この猿轡のしかたといい、食事の時の縄の解き方といい、この賊はプロ中のプロであろう。

○ **三代目中村歌右衛門**
『積情雪乳貰(つもるなさけゆきのちもらい)』

一寸、気分をかえて歌舞伎の作品から——

トこのとき奥より権蔵、兵内出て、うしろより小雪を抱きとめる。小雪びっくりして、

アレエ。

兵内　ソし声を立てぬよう、早く早く。

権蔵　合点じゃ。

ト両人して小雪に猿ぐつわを入れ、くくる。

兵内　しめたしめた、人の来ぬ間に。

小雪という美しい娘が、さらわれる場面である。

「猿轡を入れ」　どうしても口の中につめ物をする型式である。そして、その上から手拭で包むようにして縛る型である。中村歌右衛門は、為永春水よりは事〝猿轡〟に関して高度であった、といえる。歌右衛門の頭には、〝猿轡〟といえば、かかる本格的なものが、スーッと浮かんでくるのであろう。

しかし、歌舞伎は様式美を重んずる芸術であるから、上演された時には作者の意図に反して、そのようにリアリスティックに猿轡をしなかったであろう。

私は、この芝居は未だ一見していないが想像できる。歌舞伎の猿轡は、大掃除の時の手拭の鼻おおいのような形なのだ。

猿轡に関しては芝居よりも文学の方が格段の相違で秀れているといえよう。

——(つづく)——

× × × × × ×

〔我が告白〕

〈あぶ・らぶ〉の遍歴

今野恒春

今になって考えてみると、『奇譚クラブ』との出会いが、私の人生の軌跡を目に見えない角度で、徐々に、その方向を変えさせてしまったように思える。

そして、そのことが、善いことだったのか悪いことだったのかは、私の生命の果てる時に、私には、きっと、分かるに違いない。その時まで、この難問は、おあずけにして、これから、幾日も幾日もかかって私は、自分の四十歳の今日までの約半分に近い、十七年の〈あぶ・らぶ〉遍歴の自虐面にのみ焦点をあてて、思い出すまま、とりとめもなく書いてみて、この告白を書き終ったところで、いちど立ちどまり、そして又、SMの新しい次元に跳びこんでみよう。

もしも、私の二十二歳の春に私の兄が、結婚していなかったら、私の心の深底に、多少SMの性向が、あったにしても、こうまでドップリと〈あぶ・らぶ〉に漬かった日々を送っては、いなかった筈である。

結核療養所に、二十二歳の春を、あせりとあきらめと、退屈の内に、その身をもてあましていた私は、久しぶりに外泊の許可を得て兄の婚礼に列席した。その夜、旅行に出発した新郎新婦の部屋の、兄嫁の持参した桐タンスの中に、半紙にくるまれた二冊の雑誌を発見した。それが『奇譚クラブ』であった。

私を含めて三人の弟たちは、相談の末、その雑誌は、捨てることに決まった。『だが待てよ』と私は言った。〈療養所の俺の隣のベッドのアノ親父に、郵便で送り届けてやったら、面白いことになるぜ〉彼は県警の少年係の刑事であった。

私が療養所に帰ると間もなく、彼宛の書籍小包が届けられた。差出人の名は、谷崎潤二郎としてあった。職業意識があるためか、好奇心にかられてか、書見器に、のせると、彼は、熱心に読み始めた。次第に顔がホテッてくるようだ。読み疲れると、彼は、顔を私の方に向けて言った。「ヘタなエロ小説より面白いよ。こんなのも、あっていいんじゃないのか。それにしても、誰が、いったい、よりによって、このオレ宛に送り届けやがったのか？　おまけに小包が破れていて、そのせいか、看護婦の奴、ニヤニヤして渡して行ったぜ。クソ、イマイマシイ」……と。

日頃、口ぐせのように、〈誰にも暗いところはあるもんだ。叩けばホコリの出るもんだヨ〉と、私の仕業を暴くかに見えた彼にもついに、その雑誌の送り主の所在は、突きとめられなかったのである。

兄の結婚が縁となって、療養所を退所すると間もなく、兄嫁の実家の持ち家の大磯の海辺に近い、六畳と四畳半二間の、こじんまりした家に、アフターケアーの身を、一人淋しく暮すことになったのは、その年の七月頃であった。

一人暮しのつれづれに、隣町の平塚に、日用品を買いに行き、駅裏の古本屋で、白いアート紙に、墨一色の表紙の『奇譚クラブ』を発見して、胸のトキメキと、目くるめくばかりの戦慄を覚え、一冊買い求めると、自転車で暗闇を、大磯に向って走った。一刻も早く自分一人の自由な時間を、思う存分、全く新

しい世界に浸りたかったからである。

家は松林の中にあった。周囲から孤立した私の仮の宿は、プレイには最適の環境だったのである。

白いアート紙に墨一色の表紙、厚手のザラ紙を用いた本文。それは毎号、誌面を飾るカラー緊縛写真の迫真美を提供してくれる、今日の『奇ク』とは較ぶべくもないのだが、内容は充実していた。私の最も好きな浣腸記事は、エネマシリンジ・イルリガートル・嘴管などの新しい単語を私に注ぎ込み、私は、その、ひとつひとつの言葉を反芻し、そして空想の世界とは全く別な方法で、浣腸プレイに深入りしていった。

松林の中の一軒家で夜更けに湯を沸かし、石けん液をバケツに満たすと、椅子の台座に載せ、石油カンからビニール製の安手のポンプを引き抜いてくる。これが私の浣腸器具であった。

全裸の私はバケツに向って立ったまま、バターをタップリ塗った肛門にポンプの管を挿入する。ポンプの頭を、ひとにぎり、ギュッと握ると、ポンプの管の中の空気が、腹に入る。ブク、ゴボ、ブクブク、また握る。ゴボゴボゴボ、ジュク、シューシュー。強く握ると、その強さだけ快感が、足の爪先から頭のテッペンまで這い上る。まるで、感電したときは、こうなのかと思えるほどの衝撃。ゾクゾクと足裏を透明な蟻が這い廻わる。

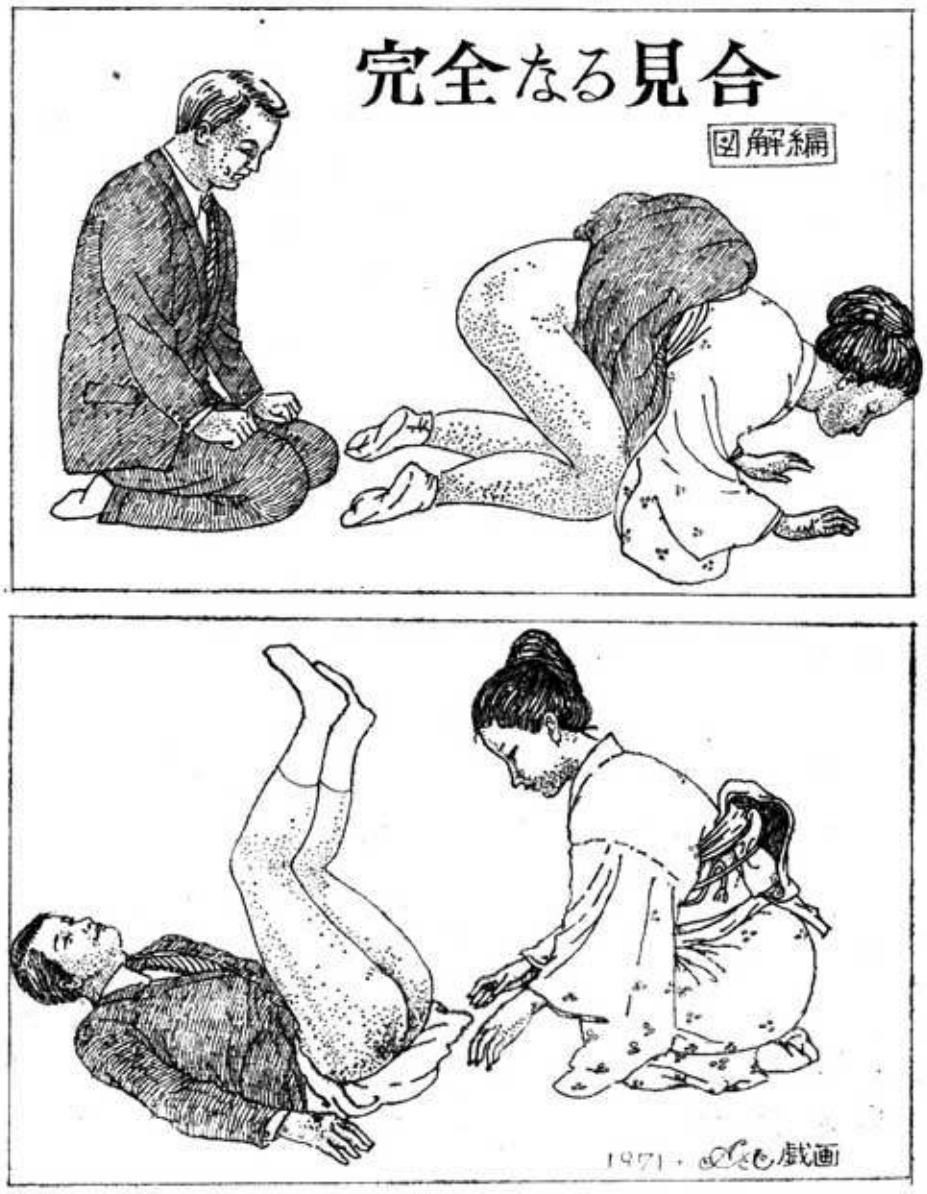
アア、バケツの液は、徐々に減ってゆく。五分の一、四分の一、三分の一、二分の一。今夜は二〇〇〇CCくらい、はいっただろうか？

アヌスに栓をすることを知らなかった二十三歳の私は、縁側の柱に両足を、もたせかけると、頭を床につけヨガの行者のような姿勢になる。腹の中の石けん液は直腸を抜け、大腸を逆流する。グウ、グウ……ああ……。目まい。

私は、自分の手で、せてしまったのだ。あの反逆。ハレンチきわまる抗。しかし、やったぞ、のときより多く入ったあ、いけない。このま中に石けん液が流入してくるのではないか？

私は縁側に寝そべってもだえる。ああ、咳が出そうだ。でも我慢だ、我慢するのだ。咳をしたら液が飛び出すではないか。ああ、タマラナイ。足の裏にタタミ針でも突き刺されたような激痛。足の指を、内側に曲げて耐える。イケナイ、早く便所に、便所に、入るのだ。腹を抱えて転げ込む、ひとつしかない下腹部の穴から迸り出る液体。夜目にも白く湯気の立つ液体。それが…それが、滝の如く流れる。

ドー、ドドーッと流れる液体の、この強い



音に、いくら林の中とはいえ、誰かに聞かれていないかと、しばらくは個室の中で身を固くして、じっと耳をすませていた。

チロチロと秋の虫が鳴く、鳴いている虫たちに、掛けてやりたい、ほの白い奔流。

○

その当時、お金もなく、それゆえ浣腸用の器具も容易に手に入らぬ頃に考案した、この簡単な石けん浣腸を、私は今でも時折り実行している。手軽に浣腸プレイが楽しめる(?)し、石けん水を、塩水や牛乳に変えることもできるし、時にはバターを解かしたりして、液の調合は、お好み次第……腸に入れる量も好き勝手というわけである。

私は、ぐっすり眠る。疲れと満足感で、ぐっすり眠り、小鳥の鳴き声で目をさますと、朝の海辺に出てみる。ズボンのポケットにはタバコの箱がしのばせてある。松林を通り抜け、小川を渡り、畑を横切って、アスファルトの観光道路を足早に横断すると、砂利採集場の標識。それを左に見て右に曲り、砂丘を登りつめると、海のうねりが、ゆるく、ゆるく、岸に打ち寄せている。

昨夜のプレイの疲れが、残っているのか、妙に身体がダルイのだ。砂丘を滑り降りると私の姿は、誰にも見られることのない死角に入ってしまうのだ。ズボンのベルトをゆるめる。チャックをはずす。ズボン下もパンツも脱いでしまう。太陽エネルギーでも吸って健康そうな黒ん坊になれヨ。

咥えタバコを右手の親指と人差し指で、その火先が、自分の腹に向くように持ちかえると、吾が身に、それを押しつける。つけては離す。「アツ、アツ、アツ」目から火花が飛び散るみたいだ。涙で海が曇る。立っているのも、おぼつかない。砂浜に尻モチをつく。〈弱るな、弱るな〉逃げてはイケナイのだ。左手でペニスの根元を押さえ、展げた指のスキ間から、タバコの火をつける。「アツ、アツ。熱いです。止めて下さい」私の中の弱気な男が哀願する。「やめるものか！」と、強気な男がドナル。タバコの火は肌を焦がす。

吾れに、かえると、にわかに、この世の私をとりまく光が、さっきとは、ちがった透明度で、私を包んでいるように思われた。ちがっている。確かに、ちがっていて明るい。この明るさは何処から来たのだ。確かに、確かに明るい。業だ、私の業が焼きつくされたのだ。罪深い私の心のその奥に連綿と続いて来た業が幾分でも、薄められたのだ。

私の露出癖とタバコの結びつきは、その後になっても尾をひいていて、実家に戻ってからは、精神的サディズムと変わり、対象は、若い見知らぬ女性に向けられて行ったのであった。

私の心の中に、裸身で、月の光に濡れながら、街に出てみたいという思いが湧いてくるのは、たいてい、晩夏から初秋にかけてのこと近寄って行っては声をかける。

「アノー、チョットお願いがあるんですが」

女は特に頼まれごとには弱いらしい。トテモ親切そうな顔で、こちらの願いを叶えてあげようと、（少しは警戒もするが）半分は心を許していて、口許には笑みすら浮かべている。私は猫撫で声で言う。

「ココントコロに、タバコの火を押しつけてくれないですか」

女の顔から、さっと血の気の引いてゆくのが夜目にもハッキリわかる。グッと唾をのみ込んで、女は身をひるがえして逃げて行く。私の肌にタバコの火を押しつけた女は、まだひとりも現われてはいないのである。

堀割河の両岸は暗い。暗いと、何かしたくなる。裸で歩いてみたいという思いが、十年くらい前に起ったことがあった。そして、私は、それを実際やってみた。堂々と、大人が夜の大通りを裸で歩くことができたら、それは素晴しいことなのだ。自由自在に、生れたままの裸身を大気にさらすことは、人間のナマの姿で原始に返ることなのだ。しかし、文明は隠すことのみ伝えて来た。私は、それにも又、反逆の鉾先を向けて行ったものであった。

私の心の中に、裸身で、月の光に濡れながら、街に出てみたいという思いが湧いてくるのは、たいてい、晩夏から初秋にかけてのこ

となのである。

夢遊病者のように、深夜、家を抜けだすときは、きまって寝間着姿のままである。蒸し暑い夜だと、誰も不審に思わないし、パトカーと出会っても、とがめだてされることはない。

河岸を暗い方へ暗い方へと歩くのは悲しい習性だ。そんなとき、青空駐車のトラックを見付けると、ソット身を荷台の下に滑りこませる。トラックの荷台の下で身につけている着物を半ば腹這いの姿で脱ぐと、私は人間様からお犬様に変身する。ジキルとハイドの話を思い出す。

時折りアベックの足だけがトラックの傍らを通り過ぎて行く。誰も荷台の下なぞ、のぞく者はいない。全くの都会の死角だ。あたりに人影が消え、自動車のライトも遠去かると荷台の下からパッと、飛び出す。飛び出す瞬間が決断の時だ。このタイミングを誤ると、後はこわくて何もできなくなる。

冷えた大気が私の全身を愛撫してくれる。両手を振って、大股に歩く。20米、30米、トラックから、次第に離れてゆく私。早く元の所に帰ろうとする気持と、もっと裸のままでいたい気持が微妙に交錯する。何かが来る気配が感じられる。それは一種の動物的本能がそう感じるのだ。一目散にかけて帰る。そして、元の古巣に身をひそめて、砂利道に丸く脱ぎすてた浴衣を着る。帯を締める。人間様に再び戻ると、何くわぬ顔でタバコに火をつけ、ゆっくりとした歩調で家に帰る。

〈ヨカッタ〉。

一度それが成功すると、二度が三度と、エスカレートする。季節は夏から秋へと少しずつ移り変わって行く。夏の夜更けの篠つく雨に裸身をさらして立っていたこと。公衆便所の個室に、洋服を脱いで、暗がりへ飛び出して行った縁日の晩。乱雑に置かれたコンテナーの間を迷路のように、さまよった風呂帰りの夜。

思い出せば際限なく走馬灯のように現われては消えて行く思い出。一つ、また一つ。それは、鮮烈なイメージとなって私の潜在意識の底深く埋めこまれた宝石なのである。そして、いちばん大きな宝石のことを書いておくのも懺悔の記録を、より正確なものにしてくれるようにも思える。

夏も終り秋風の立つ、或夜のことだった。所用を済ませた私は、丘の上の共同墓地の近くを通りがかった時、何者かに誘われるように、フラフラと墓地に向ってネギ畑を横切っていた。正面に立ち並ぶ墓石の紫色の群落が後ろに塔婆の背光を持って、彼岸と此岸の垣根を作って、生あるものの侵入を拒ばんでいるように見える。

〈ここは三途の河なのだ〉と、その時、私はそう思った。この境界をくぐる時が変身の決定的瞬間なのだ。犬の遠吠え、ヒヤリと悪感が背筋を走る。帰ろうとする私と、先に進めと命令する私。心の内部で人格の分裂が始まっていた。

ダラダラと道は下り勾配で、雑草を踏み倒しながら周囲を見やる。誰もいない静かな墓地。人影が全くないのは淋しいことだ。ここで覚悟がきまる。ムラムラと胸の底から突きあげてくるようなハレンチな妄想。

四坪ほどの、石垣のある墓の石段をのぼって、線香立てを横に見て、スルリと石塔の裏に廻る。Yシャツを脱ぐ、ズボンをとる。Tシャツを捨てる。パンツを丸める。クツ下とクツを、けとばす。又、私は原始に返った。類人猿かホモサピェンスか？　都会人でなかったことは確かである。

一個の、みすぼらしい、やせた裸身は丸味を帯びた築山の芝草を踏みしめながら、のぼる。最初は芝草の生えた空地と思っていたのだが、ふと足許をみると、大理石の墓碑銘はその下に、誰かが眠っていることを示していた。その変った墓地の芝草のチクチクする刺激を背に長々と身を延べる。

自由だ、これこそ真の自由だ。俺は自由の身なのだ。社会の総べての機構から解放された、この自由こそ、人間の本来の所有物ではなかったのか？　私は、それを取り戻したの

だ。ウッスラと目をあける。流れる雲、雲が足早に東から西に流れる。サヤサヤと竹林の葉ずれ。犬が吠える。私の目に映るものは、月と雲と、夜空の蒼さのみだった。

ふと、その時、私は自分が無いことに気付いた。大地を背にしていると自分の身体を見ることができない。見えないモノは、ないのと同然だ。私は、私がないのに気づいた。いったい〈生きる〉とは、〈生きている〉とはどういうことなのか？　私は何処に行ってしまったのだ。

雲だけが流れる。それを映すだけの眼球。又、芝草がチクリと背中を刺す。痛覚が、私の生を呼び戻す。触覚を糸口に私は生きていることの証を探ろうとしている。

この夜、以来、私の胃の調子が、おかしくなってしまった。そして、いつも便秘していた。胃の調子が、おかしくなったのは、墓場の地下の住人が私に仕返しをしてきたものなのか？　しかし、このことが再び私に、浣腸の味を思い出させることになった。

松林の中での一人暮しの男が、年月の流れの中にマンションを買うまでに成長した。マンションには風呂場もある。私は深夜ひとり風呂に入る時に、よく浣腸をする。薬液は用いない。水である。ビニール・ホースで水道の蛇口とアヌスを直結する。栓をひねって、腹に水を充満させる。水を強く出すと刺激が強くなる。透明な液が、つららのように、たれ下る。私の腹は、みるみる内に、ふくれて行く。下腹から水落ちの部分まで、まるで蛙の腹のように、なってしまう。

ビニール・ホースを抜き、頭を浴室のタイルにつけ、腰高に、水が逆流するような体位で、二分か三分間くらい我慢する。グリセリンと違って痛さはない。この点、少し物足りないようだが浣腸の役目は果たしてくれる。浴室に便器もセットしてあるので、いちいち便所に行かずにすむ。最近は、浴室に便器のある、洋式トイレ付きのホテルも出来ているので、同好者に、こんな所での浣腸プレイをおすすめしたい。

それにしても、ハレンチな私の告白を、読者の皆様が、どう読み取って下さるのか不安だ。けれども、私の〝業〟を愧悔の形で書き記すことで皆様の不安を解消させることの、お役に立つならば幸いである。

次には、更に私の内部的な告白を書いてみたいと思っている。

――（未完）――

新発足　懸賞〈告白、手記、体験〉原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき　五万円
良作	一篇につき　参万円
秀作	一篇につき　弐万円
佳作	一篇につき　壱万円
可作	一篇につき　五千円

☆規　定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

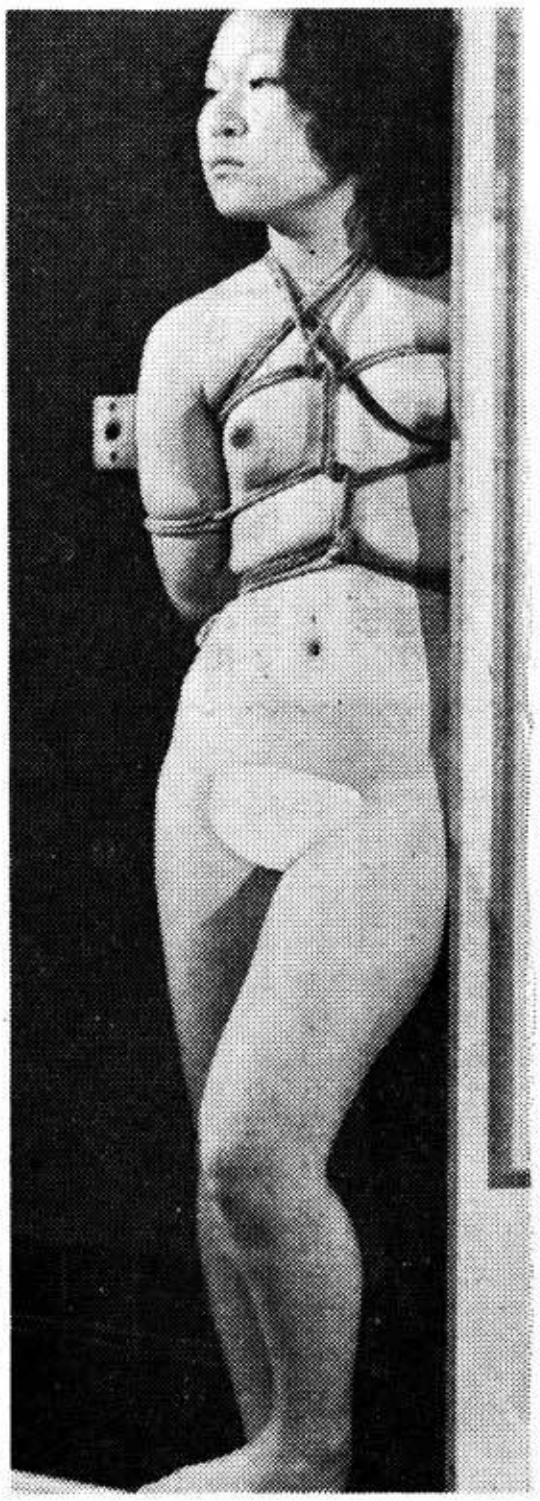
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

孤独な紀代よりの便り

飛騨の高山にて

西条紀代



塚本鉄三さま。

大変ごぶさたしました。西条紀代です。

今、故郷に近い飛騨の高山のおみやげ物店に勤めております。休日には、たくさんの観光客が見えて忙しいです。でも、ひっそりとした静かな日もあります。雨の日なんか、人通りも少なくて、淋しいことがあります。

そして、ふと、そんな時に、こんなお手紙を書いてみたくなりました。

今から、何年何カ月前になるでしょうか。塚本さまに飛行場を見せて貰ったり、責められたりした日のことが、なんだか、夢のように思いだされて、なつかしくなります。

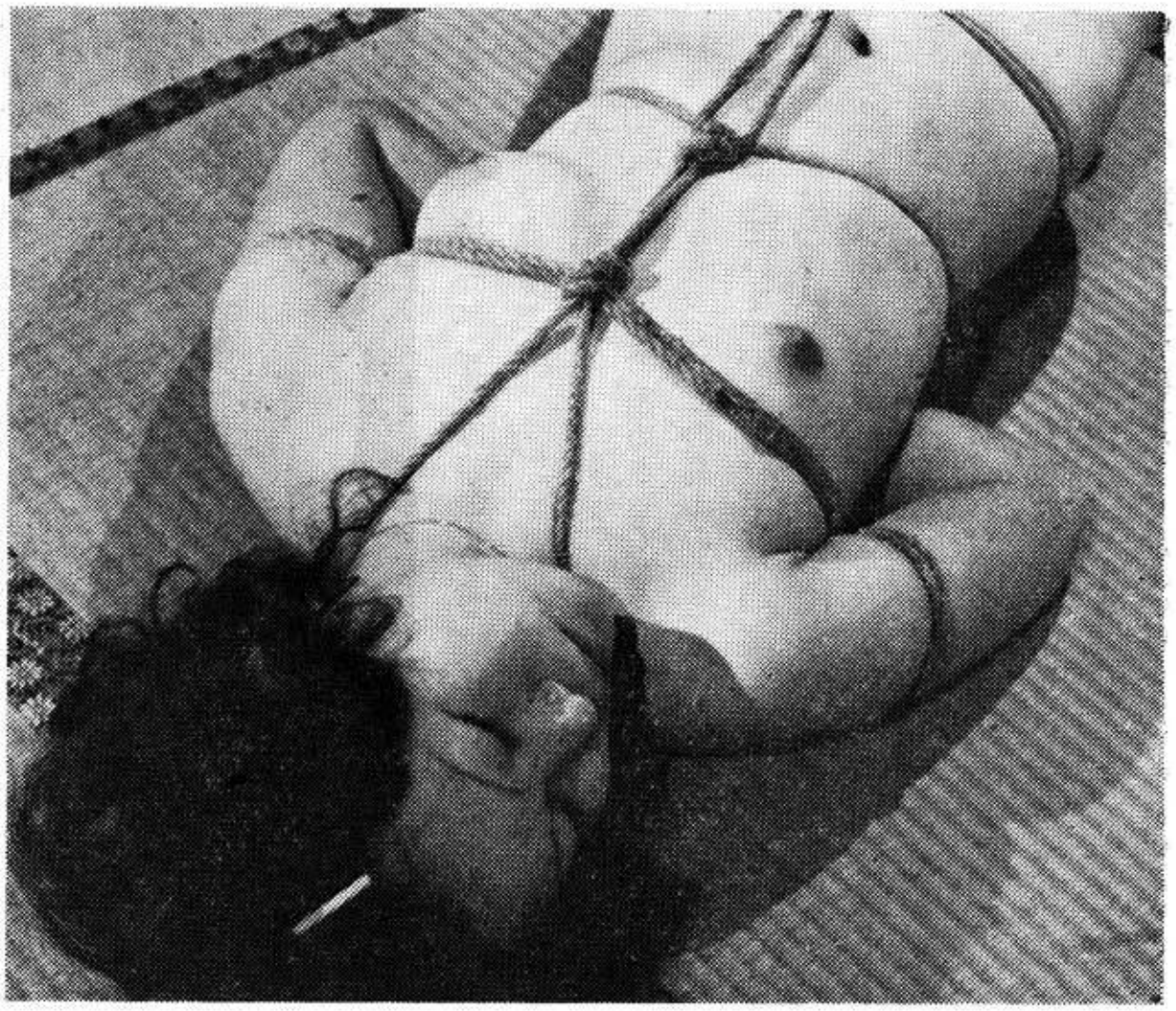
三回にわたって、プレイして頂いた、あの日の頃が、ほんとうに幸せだったような気がします。それなのに、お約束していた五月十五日には、とうとう勝手に、無断で、すっぽ抜かしてしまいました。

あの日、お約束しました通り、私は塚本さまにお会いするのを、ずっと楽しみにしていました。それが、とうとう、行けなくなってしまったのです。

私は、騙されていたのです。第三回目に、塚本さまに新大阪駅まで送って頂き、いそいそと帰ってまいりましたが、その日の夜、彼とデートをする約束をしていたのです。

年若い私は、相手のことも、よく考えずにつき合っていたのが失敗でした。その彼は、私の喫茶店に昼前から、よく出入りしていた青年で、口かずの少ない私にも、笑わせたりさせてくれるハンサムボーイだったのです。

ひょっとしたら、この人と結婚できるので



はないか。あんなに私にばかり言葉をかけてくれるんだもの、という甘い夢をいだいて、交際するようになったのです。

私は毎日が楽しくて、仕方がなかったのです。このことは、芙美代お姉さんにも、一言も喋らずにかくしていましたので、途中で今更、相談することもできなくなってしまったのです。あんなに、親身になって、私のことを心配していて下さった芙美代姉さんには、ほんとうに、すまないと思っています。

幾回かのデイトをかさねたあと、身の回りのものを持って、すぐ来るようにと彼に言われたのは、四月の中頃でした。

「あんな喫茶店に勤めていても、ろくなことはない。俺がもっと給料のよいとこを探してやる」と言って、彼につれて来られたのは、名古屋市内の場末のあるバーでした。

お化粧の仕方も、そんなバーで勤まる筈がありませんが、それでも、彼にとっては、私は利用価値があったのでしょう。私を裏で稼がせて自分はヒモにおさまっていたのです。

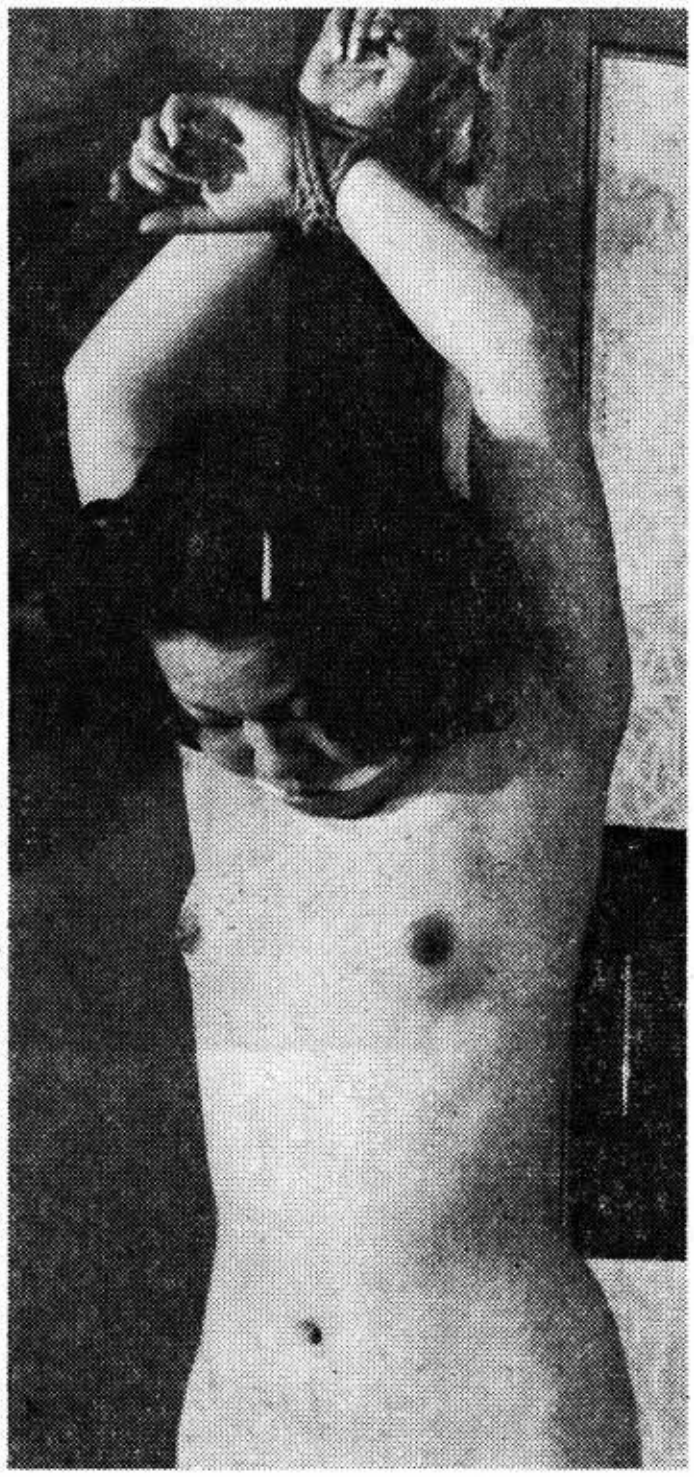
でも、その頃、純真だった私は、そんなことを少しも知らず、「金をためて、二人で世帯を持とう」という彼の、うまい言葉に騙されて、必死で夜毎、見知らぬ男に、この身体を売っていたのです。

そんなわけで、五月十五日に、お会いする約束をしていながら、すっぽかしてしまったのです。芙美代お姉さんにも、とうとう、一言も、お知らせすることが、できませんでした。

それからの私は、売られるようにして、あちら、こちらの怪しげな店を転々とさせられました。そして、いつも私の背後には、あの男が見えかくれしているのです。

その頃になって、私は初めて、彼に騙されたということに気がつきました。純真だった頃の私の俤は、もうすっかりありません。でも、体は別としても、心だけは、あのプレイをして頂いた頃とは変りないつもりです。

騙された、と気がついてからは、私は彼から逃げようと、そればかり考えていました。しかし、なかなか、そのすきがないのです。それが今年の春、彼が傷害で捕まって、いな



高山は、朝晩、めっきり冷え込みがきびしいです。そんな冷たい風を頬に受けるとき、私は、ふと、飛行場で全身を風に吹かれた時のことが、物悲しいように思いだされるのです。あれは、たしか、十二月の中頃すぎでしたかしら。お忙しい所を塚本さまは、私を案内して下さって、私の写真をたくさん撮って下さいましたわね。

その時のことが、今、私の胸を熱くさせています。縛られたり、責められたりしてみたいと思ったことが、ほんの自分の気まぐれだったのかしら……と思ったりしています。

もう一度、縛って、責めて下さい——と、お願いしましたら、どんなお答えを頂けるでしょうかしら。お断りしておきますが、心は別としましても、体の方は、もう、あの頃の西条紀代では、決して、ございません。

こんな紀代でもよろしかったら、一度でもいい、縛って責めてみようと、お思いになりませんか。いいえ、こんな馬鹿な紀代を、思いきり、折檻して下さいませ。

その後、なつかしい奇譚クラブも拝見する機会もございませんが、私なんかより、もっと美しいお方が、たくさん、きっと誌上を花のように飾っていられることでしょう。

それにボールペンで書いた——西条紀代——という下手な字をお見せしましたわね。

そんなことを思いだしていますと、あの頃がなつかしくなってきました。そして、この静かな高山の町が、なんとなく物足りなくなってくるのでした。

でも、今の紀代は、あの岐阜の喫茶店に勤めていた頃の紀代ではなくなっています。たくさんの男の体を、この身で、じかに知りつくした、この体は、あの頃の純真さは持っていません。冷たい朝風に、頬っぺたは、相変らず赤らんでいますが、静かさに物足りなさを感ずる今日この頃の紀代なのです。

くなったのを機会に、着のみ着のままで逃げだすことができました。

傷心の身を故郷へ、そして知人のツテで、今のお店へ住み込みで、勤めさせてもらいました。大都会と違って、この高山の空は、いつも青く澄んでいます。こんな平和で、美しい町は、またとないと思っています。

ここへ来てから、半年がたちました。私も昔の西条紀代にかえりました。この西条紀代という名前は、非常になつかしいんです。だって、私が一晩中、考えてつけた名前なんですもの。初めて、塚本さまにお会いした日、「私、この名前にして頂戴」と言って、紙き

三回にわたって、私を雑誌におのせ下さった御好意は忘れることができません。自分から誌上名（芸名）まで考えました私ですから四回も五回も、ずっとSMプレイで責めて頂きたいという気持でございました。

公休日で私の誕生日である五月十五日を、あれほど楽しみにしていました私ですのに、いろんな事情で、お約束の場所へ行けなかったのが、今でも心残りです。そうそう、紀代も今年の五月で二十二歳を迎えました。まだこちらへ来たばかりで、一人淋しく、みたらしダンゴ（私も、このお店で時たま焼くのを手伝っています）を食べながら、自分も、とうとう二十二になったんだわと、しみじみ思いました。

芙美代姉さんには、会わせる顔がないのでどうか、私のことは知らせないで下さい。その方に知り合いの多い姉さんのことですから彼をつかまえて、ひどい目に合わすかも知れないからです。彼のことは、もう諦めています。でも、ひどい目にだけは合わしてあげたくないのです。

芙美代姉さんのご紹介があったとはいえ、十二月に二回、二月に一回と、こんな私に親切にして下さって、ほんとうに有難く思っております。それなのに、すっぽ抜かしたりして、申しわけありませんでした。どうか、お許し下さいませ。すべて紀代が馬鹿だったのです。もう二度と、岐阜へは帰りたくありませんが、このお店も、長いことは勤めている気はありませんので、ここの所は書かないでおきます。新しく落着く所がきまりましたら、また改めて、お便りいたします。

もし、こんな紀代でも、もう一度、責めて頂けるのでしたら、この手紙のお返事、奇譚クラブの片隅にでも、お載せ下さい。私は書店にて、ひそかに、ひっそりとページをめくって拝見したいと思います。私のことを48年の3月号、4月号、5月号と三回にわたって載せて頂いた、なつかしい奇譚クラブを、親しく手に取らして頂きたいと思います。

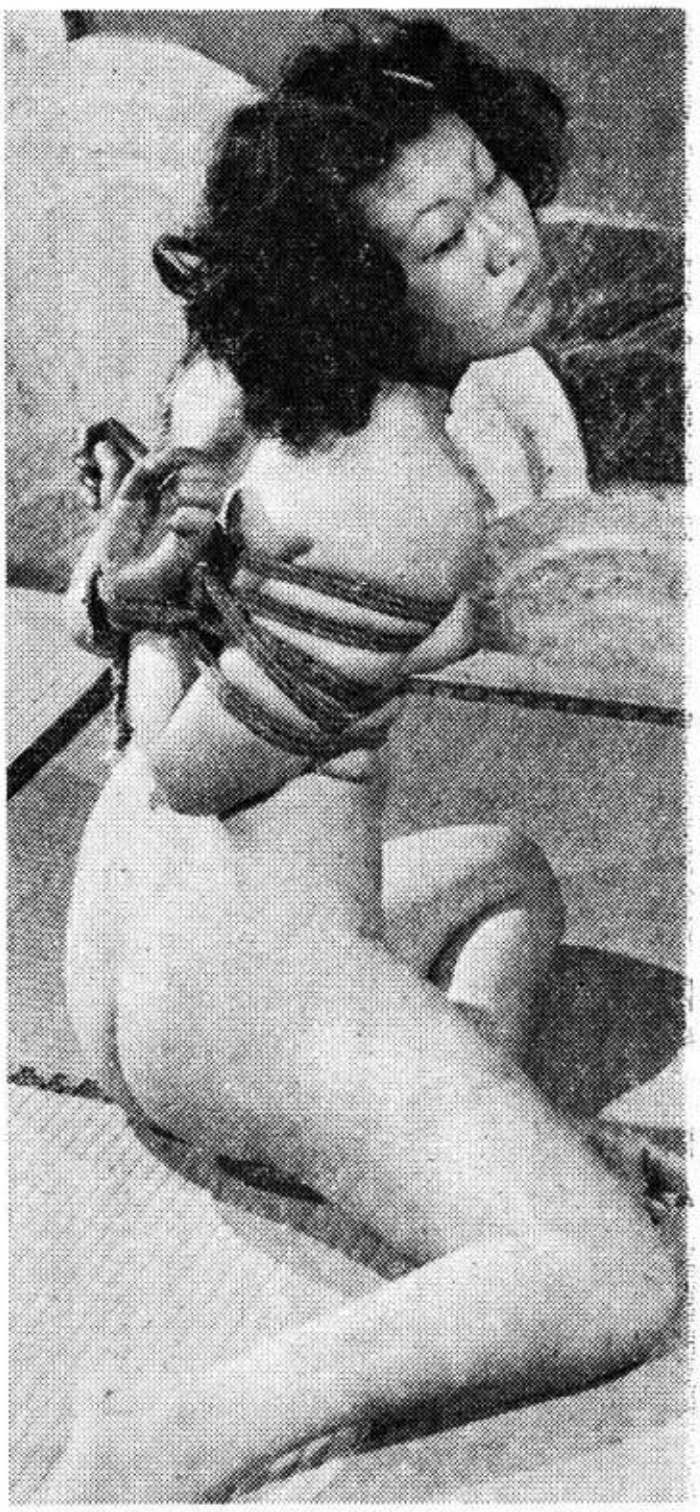
こんな事を書いていますと、私の目に知らず知らず涙が、あふれてきました。

浣腸された事、ムチ打たれた事、その他の事が思い出されて仕方がないのです。今、宮川の流れが聞えてきます。静かな町ですから川の流れもよく聞えるのです。

この次に、いつまた、お便りが書けるか、わかりませんが、どうか、お体を大切に。

高山にて　西条紀代より

塚本鉄三さま



連載・S時代小説

紫蘭の門

(41)

風流極道軒

幻うは女、霧たちわたれるも女
雪降り騒ぐも女、霞たなびくも女
――男心ときめかするはただ女
五十億余の人間輩のなかに、ひとりきわ立ちたるただひとりの恋しい女

この間、いったい何度の仇討があったか知っておるかの」

徳夜叉出現の報せに、ソリゲの儀式の後始末を昭吉に、雅子とお景、それに老中筆頭、水野出羽への配慮を和吉に託して、斑猿と黒馬を従えて麻布六本木へと急行してきた元禄屋であったが、鞭兵衛たちのつかんだ情報の曖昧さに、いささか、つむじを曲げながらも、豊香と春田和泉の責めを眺めていた。

「二百三十年の間に、僅かに七十六回。そのうち、武士の仇討は半数にも、みたぬ」

やられ化粧

「御主君のため、親のため、仇を報ずるのが武士の道じゃと神君家康公以来、口をきわめて称揚されておるが、慶長以来二百三十年、

「へえ、そんなに少ないんで。あっしは、また何百人もの、お侍が一生を棒にふって御主君の仇を討ったとばかり思ってやした」

赤狐の言葉に鞭兵衛たちも同感とばかりにうなずいた。

「しかも、三十二件の武士の仇討ちは、親の仇、兄弟の仇をうったというのが殆どで」

「江戸は市ケ谷浄瑠璃坂の仇討。奥平源八が奥平隼人を討ちとったやつでがっしょう」

「よく知ってるな、青蛇」

「へエッー　それに伊勢は鈴鹿・亀山城内の仇討。摂津は浜村で生田伝八郎が討たれた崇

禅寺馬場の仇討。それに大阪は南御堂前で磯貝兵左衛門が島川太兵衛をうちとった……」

とくとくと、しゃべり出した青蛇を制して

「いずれも父のため、兄のためじゃ。ご主君のためではあるまいがの。伊賀上野の鍵谷の辻の仇討は弟のため。元文五年の三月に江戸は築地南小田原町二丁目で矢内武平治という侍が杉山某を討ちとったのは母のため。つづいて出雲国松江城下で生駒帯刀が飯尾某に討たれたのは弟の養父の仇じゃという」

何をおっしゃりたいのだろうと鞭兵衛たちの視線が豊香の裸身から、いっせいに元禄屋に、そそがれた。

「侍とは、さぶらうといっての、高貴の人のそばにあって、あれこれ、まわりの世話をするのが本来のつとめ、つまり番犬の役割を果すのが侍なのだ」

「だから犬侍というのでやすね」

「そのとおり。俺は侍だなどと見栄をはっておるが、あれは〝俺は番犬だ、飼犬だ〟と威張っておるのと同じで、ちゃんちゃら、おかしい言葉ではあるのう。しかもじゃ」

盃をグイッと干した元禄屋は、

「三十二件の仇討のなかで主君の仇をうったのが何回くらいはあると思うかな」

前号まで——金魚責めのあとで**小紫のお景**に土佐名物タタキをつくらせたり、**雅子**をひき出して二人いっしょに「穴沢流・双っ臼」で責めている最中、豊太閤の秘宝の謎をめぐって怪盗・**徳夜叉**がふたたび江戸に現われたという情報をうけた**元禄屋**は、取りあえず麻布別邸に急行したが——。

「さあて、少なくとも半数、いや二十件以上は、あるのでがしようが」

鞭兵衛が、さも当然という風にいったとき元禄屋の鷲のような眸に嘲笑の影が浮んだ。

「たったの一件……」

「なんでございますって！」

一同が奇声をあげた。

「そんな馬鹿な！　家康公御入府以来、主君の仇を討ったのが、たったの一回きり、ですって！」

「そ、それは、例の大石良雄たちでやんしょう。すると赤穂浪士以外には……」

「一件もなし！」

断呼としていった元禄屋は浜田侯邸内

「享保八年三月二十七日に江戸は

で奥女中の沢野という女が殺されておるが討

ったのは山路という女中。仕えていた側室の

仇を討ったのじゃという。それと明和二年に西国で一件あったというが、これも下僕が仇を討ったらしい。あわせて三件、これが全部じゃ。よって純粋に主君の仇を報じたのは赤穂四十七士あるのみじゃ」

「わ、わかった！」

素頓狂な声をあげた白豚が、

「たった一件きりしかねえので、繰り返し巻き返し何十回、何百回、忠臣蔵ばかりを飽きもしねえで舞台にかけるんでござんすねえ」

「そのとおりじゃ。これでお侍が、いかに口先だけのものかが、ようわかったじゃろう。お侍たちのいう武士道は、むしろ儂等のなかにこそ、生きておる。大和国吉野郡では吉太郎という百姓が、五年かかって兄の仇を討っておるし、常陸国では茂助・つやという兄妹が二十一年かかって父の仇を討っておる」

「二十一年もねえ」

「もっと長いのがある。陸奥国江刺郡の善六という百姓は実に二十九年もかかって寛保二年五月に父の仇・六之助という者を、みごと討ちとっておるからのう」

「二十九年もねえ……ヘエッヘエッ、親分」

と白豚は鞭兵衛に視線をうつすと、

「親分が殺されなすったら、あっしたち五人草の根、踏み分けても仇を討ってさしあげま

すぜ。そうすりゃあ忽ち瓦版にのって江戸中の娘が、ちやほやしてくれますからね」

「白豚。おめえ、自分が、ちやほやされてえために仇を討つというのだろう」

「あたりきでさあ、親分。だれが親分なんぞのために……」

「こらァ！」

雷をおとされた白豚は、

「い、いけねえ！　和泉の野郎が、おっ死んでしまわあ」

と、天井の梁から逆さ吊りにされている春田和泉の上半身を抱きあげて血のめぐりを正常にしてやった。

「ゆ、ゆ、ゆるしてくれ！　もう、こ、これ以上は……な、なんでもするから白豚さん」

「へえっへえっへえっ……ほんとに、やるのかい。ほんとに、この大マナイタの上に乗っかっているてめえの女房殿をヒイヒイッ哭かせてみせるというのだな」

「ハ……はい」

「フッフッフッ、面白え、やってみな。親分には俺から、お取りなし申し上げるからさ」

滑車が軋むとドサッと床におちた和泉の縄を解いてやったが、しばらくは、この公僕御用の櫛師は身動きひとつ、できなかった。

そのそばの大きな俎の上で和泉の妻・豊香は、爛熟しきった裸身を横たえていた。

豊太閤が一子秀頼のために残した莫大な埋蔵金の謎を秘める丁夜のロザリオを持っていたがゆえに養女の千登世ともども、ここへ連れこまれて以来、数多くの凌辱を受けつづけてきた身であった。

が、むっちりと脂肪ののった練絹のような肌はおとろえを見せることもなく、今にも貪り喰われるのを待っているような乳房もまた妖艶な光沢を秘めていた。

「肉は腐りかけのときが一番うまいと申すがのう、鞭兵衛」

「猪の肉でござりますか。それとも鶏、馬、牛、狸？」

「バカ」――話にならない頭の回転の鈍さに元禄屋は、ひとり盃をあおった。おっつけ、夜もあけよう、夜があければ、徳夜叉の新しい動きも知れよう。それまでは待つほかはない。

水野出羽守忠成は今日、登城するといっていたが……剃毛の儀式を終えて肥田や工頭たちは、もうひきとっていっただろうか。

チラッとあるべきところにあるべきものがなくなった貴子の下腹を瞼にうかべて、

「鞭兵衛。早く責めぬか！」

眼前によこたわる豊香のとき色の湯文字からこぼれる部分へと、眸をめぐらす元禄屋であった。

徳夜叉がでてきた。彼の手にあるは戊夜ひとつ、残りの甲・乙・丙・丁と四つのロザリオは、わが手にある。さすれば徳夜叉の狙うのは、ここ麻布別邸か日本橋の本宅か、それとも雑司ケ谷の寮だろうか。いずれにしても前回の強襲で負傷したのにかんがみても堂々と攻撃することを避け、何等かの策を企てるに違いない。

よろよろと立ち上った和泉が、豊香の膝に手をかけた。

「あ、あなた……」

と叫んだのは妻のほうであり、責め苛まれた夫は虚脱したように口をきかない。

「その両脚を、こことここへ縛りつけな」

白豚が二本の杭を指示した。

杭は、仰向けにされている豊香の肩の左右にもあったが、それには両腕の肘のあたりががっちりと細い鎖で繋ぎとめられていた。

白豚から手渡された縄を手に和泉は黙々と仕事を開始した。

割られまいと必死で擦りあわせている内股

が生木を裂くように右、左に裂け、右足首がまず杭に、そして悲しげな叫びのなかで左足首に絡んだ麻縄がピーンと張りつめたかとみると蛇のように棒杭へと巻きついて行った。

「やるじゃあねえか、フッフッフッ……」

「自分の女房の股倉を人前で開かせるってのはオツなものだろうなあ、春田さん」

「よほど、自信があるのさ。でなくっちゃあとてもとても」

「どこに自信があるんですかね、兄哥。ここですかい。てめえの女房のここに自信があるので御開帳しているとでもおっしゃるので」

赤狐が触ったのは淫らにうごめいている肘のつけね——掛燭の光に、てり映える腋毛であった。

「この女、以前よりも益々色っぽくなってくるじゃああありやせんか。何ともいえねえ、この手触り。ビロードを撫でてるみたいだ」

「ヘェ！　赤狐の兄貴。ビロードというのはこんなに長くて房々としているものなんですかい」

「バカ！　白豚……」

数本の毛を、くるくるっと指に巻きつけて

「この艶っぽさだよ。どうでえ、この色艶」

伸ばした手をピシッと黒馬にぶったたかれた白豚は、

「ヘェヘッヘッ。御先客さまがいらしましたか、こりゃあどうも」

頭をかいたものの、その手を、ひっこめるはずはなく、柔らかい耳たぶをつまんだが、

「アレッ、豊香姐さん、耳化粧をなさっているじゃあありませんかい」

「耳化粧だと、どれ、どれ」

青蛇の視線が、そこにおちた。

耳たぶと、そのうしろのくぼみに、うっすらと白さが、ただよっているのは水白粉であろうし、耳たぶのふっくらした厚みの部分にほんのりとさされているのは、まさしく紅。

「こいつは嬉しいねえ。豊香姐さん、今夜責められるのを御存知のうえで耳化粧までしてくれるとは」

「まったくで、兄哥。スッ裸にされて骨の髄までやられることを承知しながら、化粧してくれるとは、こたえられねえ。ご厚意有難くうけますぜ、豊香姐御」

耳たぶに、そっと口をつける白豚に、

「女ってものはそういうものさ。俺の知ってる男にマンズリの政ってやつがいた」

黒馬が豊香の乳房をまさぐりながら、しゃべり出した。

「その政の野郎、バクチで負けてよ。そのカタに女房を三日三晩、自由にしておくんなせえ、と申し出た。最初は泣き叫んだそうだがその女房、名は確かお駒といったが、やってきたときには耳化粧をしていた。八人の男に盥廻しにされるのを知りながら湯につかって垢をおとして身綺麗にしてやってきやがったものよ」

「そんなもんですかねえ」

「そんなものよ。耳化粧だけじゃあねえ、躰全体から佳い匂いをプンプンさせやがってさどうせ汚されるのに、ご丁寧なことさ」

「ヘエ……」

唇についた紅を手で白豚が拭ったとき、

「やられ化粧——といってね、女はやられる前に必ず化粧するものよ」

大きく開かれた股間から、むっくりと顔をあげたのは鞭兵衛であった。

「ここを見ねえ。水白粉が、ほんのりと、うい てるぜ」

指さされた部分に五人の子分たちの視線が集中した。

「ア、アッ、見ちゃあ、いけないよう！」

大マナイタの上で巨大な肉塊がくねったがその内股から太腿のつけねにかけて、鞭兵衛

……イメージギャラリー……『豊満女体の逆海老吊り』……マエダヒオミ……

たちが、出なくちゃあなんねえ。どうせ責められるなら、可愛い亭主に責められたいとこの豊香さんが、おっしゃるのでね」

むろん、嘘であった。

疎遠なものよりも、だんだんと身近な男になるにつれて嬲られる女の羞恥はたかまっていく。ましてや自分の亭主に嬲られる——人前で——これほど恥かしいことはなかった。

「か、かんにんして……あ、あなた……」

うわずった声をあげたが、

「豊香、お前、亭主をもう一度、逆さ吊りにしてえとでもいうのかい。てえした女房だ」

鞭兵衛にいわれると返す言葉はなかった。

十日ほどまえのこと——、

天井から逆さ大の字なりにスッ裸で吊るされた経験のある豊香には逆さ吊りの苦しさがよくわかった。とてもじゃあないが線香半分が燃えつきるほどの時間も持ちこたえられるものではない。

「早くやりな。景気よくやってみな、といってるのよ、和泉」

ハイッ……とでもいうように、あごをたてに振った和泉は、両手でにぎりしめた、ほうき尻を、まっすぐ、前へと繰り出した。

「ヒ、ヒャアア……』」

の指摘したとおり、ほのかな香料のかおりがただよっていた。

ほうき尻

「さあ、これで可愛がってやんな。せいいっぱい、やるんだぜ」

青蛇から渡されたほうき尻を脅えた表情でうけとった和泉は、もうヌケガラのように豊香の股間に入っていった。

「うまくやるんだぜ。泣かせかたが悪いと俺

長く悲鳴が尾をひきはしたものの、
「チェッ！　それで入ると思ってやがるのかまだムリじゃあねえか！」
黒馬が怒鳴りつけると斑猿が、
「人穴の広さ五人がみな入り――って川柳にも、ありやすぜ、黒馬の兄貴。これくらいのほうき尻なら、簡単に入ろうじゃあありませんかい」
と、茶々を入れたものの、このほうき尻というやつは直径が一寸近い。一寸といえば三センチ強。なかなか、うまくことをしとげるわけには、いかなかった。
「元来が縛・敲（しばりたたき）の責道具。豊香にゃあ、おあつらえむきの小道具だと、おもったのだが」
しげしげと顔を寄せた鞭兵衛が、フッフッフッと含み笑いをうかべ、
「少し手助けしてやろうかい」
両手がツト股間にのびると、つんざくような悲鳴があがった。
「ほら、これで少しは滑らかになった筈だ」
中腰のまま和泉が繰り出すと、紙こよりを巻いた尖端が、少し隠れた。
「調子いいじゃあないの。もっと、ひねりを加えると、なおうまく行くぜ」
もう和泉はでく人形と同じだった。縛敲とも笞打ともよばれる拷問に使われる長さ一尺九寸の割竹を麻苧でつつみ、紙こよりを巻きつけた、ほうき尻に、回転を加えながら責めつけていく。
「ア、アレェッ！　ア、アッ！　や、や、やめて。や、やアア……アアアワワ……」
顔も目も鼻も、すべてが、おおづくりの女体から絞りあげるような叫びが、あがった。
「よい声だねえ。腐りかけのほうが肉が、うまいと大旦那は、おっしゃったが、肉だけじゃあねえ、夜雁の声も年増女のほうが、味があって、いいじゃあねえか」
「夜雁の声とはよがり声、叫声、嬌声、文弥節、訴泣に騒声、おつなところで春よび鳥の洩らし音か」
青蛇がいい、斑猿が囃したてるなかで、紙こよりは徐々に姿を沈めていき、豊香の裸身が弩弓のように反りかえる。
いや弩弓のようにというよりも滑らかな大理石造りの太鼓橋のように反りかえり、しっかりと噛みしめられた唇の端からは一筋の唾液が白木の大マナイタへと糸ひいた。
「ちょっと引いてみな。てもとへよ」
痴呆のように、うなずいた春田が、そのとおりにすると、
――キャアア……
すさまじい絶叫とともに、マナイタに着いていた双臀が狂ったように躍りあがり、
「引け！」「突け！」「引けい！」「突っこめえ！」
螺線型に巻きつけられている紙こよりは繰り出すときには好調だが、手もとにひく場合には螺線型が逆になってアチコチにひっかかってくる。刺戟がそれだけ強烈になり、女体の柔らかい部分を内側から〝逆撫で〟することになるのだから豊香の懊悩も想像できた。
「フッフッフッ、面白いのう」
元禄屋が一声かけた。
それに勢いづいたのか「突け！　引け！」という懸声は、いよいよ早くなり、一定の淫らなリズムをもって和泉の耳に迫ってきて、
「オ、オウ……オ、お許しおう……」
豊香が吼えた。
が男たちは許すはずもなく、わいわいと、はやしたてるのであった。
春だというのに和泉の顔には汗がにじんでいた。白木の大マナイタの上が濡れているのは、豊香の汗だろうか、それとも唾液だろうか――。

豊香は持ちあげていた双臀をドサッとマナイタにおろし、あとはもう、いくらいじられても太鼓橋のように裸身を反らせようとはしなかった。

「フッフッフッ。どうやら、オチなすったようだな、和泉さま。そっと取り出してごらんよ。紙こよりが、どうなっているか」

脅えるように和泉が、ひき出した、ほうき尻からは、ほんのりと湯気が立っていたが、ところどころ、紙こよりが濡れ溶けて茶褐色の麻苧の部分が、あらわれていた。

「三段締めか、いいねえ。名器だとは分かっているが、責めれば責めるほど、磨きがかかってくるようだぜ」

「肉は腐ったほうが一番、うめえって」

「バカ野郎。腐った肉を誰が食うか。腐りかけだ、腐りかけ。散り際……蝋燭だって消えるまえが一番、明るいというだろう、白豚」

「黒馬の兄貴。じゃあ豊香を囲ゃあいい。あっしは千登世のほうを頂戴しまさあ」

「図にのるんじゃあねえ！」

一喝された白豚は、とびのこうとしたはずみ、と見せて豊香の、はりさけるように開かれている内股と内股のあいだに顔をつっこみ

「この野郎！」

とひき起された。

「夜明けのまえが一番、暗いか」

ひとり呟いた元禄屋は、ゆったりと立ち上ると雨戸を繰った。

淫らな部屋のなかに朝の清冽な大気が舞いこみ、しらしらと明けそめた庭に、こぶしの花が匂っていた。その花かげに、またたいているのは明けの明星であろうか。

「もはや領田さまのお眠りを妨げることにはなるまいて、どりゃ」

振り返って、鞭兵衛に、

「せいぜい楽しんでおきなされ。どうやら働いてもらう時期が近い」

下林流・二本棒

早朝にもかかわらず元禄屋が小石川にある領田下野の中屋敷を訪ねたのは徳夜叉出現の情報をつたえ、協力を得るためであった。

水野さまでは、物足りぬて。やはり領田様でのうては——剃毛の儀式には重要会議があるとかで参加してくれなかったが、元禄屋にとって領田は、腹の底をうちあけることのできる人物であった。

「儀式、滞りなく終ったそうじゃの」

城中から、いま帰ったばかりだという領田は、袴をとらせると侍女たちを退け、

「お早いお耳で」という元禄屋に、

「フッフッフッ、地獄耳よ。貴子姫のすすり哭きまで聞えてきたわ」

「例の、黒鍬の方々でございまするな。殿もお人が悪い」

「姫の下腹が水野や肥田たちの手で白うなっていくかとおもうと、気が気でなかったわ」

濶達に笑って見せた。

「して、話とは」

「徳夜叉のことにござります」

キラリ目をひからせて聞きいった領田は、やがて、

「徳夜叉には随分と気をつかっておるのう」

「奇妙でござりまするか」

「いや、いや」

「敵ながら、あっぱれ——と申すほかはございませぬ」

「よかろう。さっそく北と南の奉行所に手配いたそう」

「それに、お手もとの黒鍬の方々にも」

「フッフッフッ、承知」

これでよし、あとはお疲れであろうからと立ち上った元禄屋に、

「目の保養をして参らぬかの。疲れたときはあれにかぎるて、あれに」
「おスキでござりまするなあ」
「なあに、そちほどではない」
「これは、これは」
この様子なら、しばらく邪魔をしても構うまいと元禄屋は腰をおろし、
「美和殿でございましょう。お美しうなられましたか」
いかにも、いかにもというふうに目を細めた領田は、鈴をふると用人の樺山を招き、何事か耳打ちして退らせた。
「例の下林六平がの」
「藩中随一の拷問達者でござりまするの」
「そうじゃ。やつが、珍しい責めを創案しての、これなら穴沢流にも劣るまいと申しておる。見てやってくれい」
「承知いたしました。実は夜分では、いかがかと、いままで麻布で」
「鞭兵衛たちに誰を責めさせておった。豊香か、千登世か」
答えのかわりに笑ってみせた元禄屋は、
「御老中さま。武士道とは奴隷道徳と見つけたり——いかがでございましょう」
「こりゃまた、例の元禄屋流じゃの」
突拍子もないことを、時々いい出す男だがよく考えてみると一つ一つ首肯するところがあった。
「なぜに奴隷道徳じゃの」
「一言では申せませぬが、自分というものがまったくございませぬ。只管、ご主君の命ずるままに右し左し」
「それでこそ武士じゃわ。侍が自己のことを考えておっては、ご奉公は相かなわぬ」
「さようでござりましょうか。自分の目で見自分の耳で聞き、自分の心で考えて行動するものをこそ真の人間と申せましょうに……それをバカ殿のいいつけどおりに」
「これ、言葉を慎しめ。バカ殿とは誰のことじゃ、まさか余のことではあるまいの」
「ハッハッハッ、殿も、そのお一人かも知れませぬ。天下の民悉く飢ゆるとき、栄耀栄華の限りをつくすうつけ者」
「ワッハッハッハッ、そのほうには叶わぬ。じゃが、そのほうとて飢えに苦しむものどもを傲然として睥睨いたしておるではないか」
「いかにも、いかにも。じゃが私は商人、まず金をたくわえることが第一番の仕事」
「まだ足らぬと申すのか」
なかば、あきれたように領田がいった。
「足りませぬ、この日本国を買いとるほどの金がのうては真の金持ちとはいえませぬ」
「相変らずの男よのう」
「先日のヘンドリックの言によりまするとと異国には一国や二国を買いとるほどの大金持ちは、いくらでもいる、ということでござりまする。私とても」
「して、どこを買いとるつもりじゃ。エゲレスかオランダか。二つとも、小さな国じゃと申すではないか」
「ハッハッハッ、二つの国を買いとりましてそのあとで……」
「そのあとで」
「この日本を買いとりましょう」
「こやつめ！」
武士道の話は、いつのまにか、南蛮紅毛の国々へと飛躍していったが、この二人、心のどこかで互いに尊敬しあっていた。
「鎖国はバカ殿のバカな掟でございましょうに、領田さま」
元禄屋が一膝のり出したとき、樺山が白髪頭をふりたてて、あらわれた。
「準備が出来たようじゃ。その話、あらためてきくといたそうぞ」
燦然とした春の光のそそぐ長い渡殿をわた

り庭にでると艮（うしとら）の方角、雑木林にかこまれたなかに牢屋があった。

幾つもに仕切られた区画に、罪人は見あたらない。

「御善政でござりまするな」

「おだてても無駄じゃ。余はバカ殿じゃからの、フッフッフッ」

一番奥まったところに並みの区画とは異なり、半分は畳の敷かれた部屋があった。

「美和の部屋じゃ。散歩もさせておるし湯浴みも与えておる。化粧道具も一応は揃えて」

茶室の躙り口に似た潜り戸を入ると、確かにそこには衣桁があり、小簞笥があり、隅には鏡までが備わって若い女の匂いが、そこはかとなく漂っていた。

「拷問は、こちらでやるのじゃ」

右手の扉を押すと五間に六間はあろうか広い〝部屋〟があった。

半分は土間になっているその部屋をチラッと見やった元禄屋は、

フッと、息をのんだ。元禄屋ほどの男が、たかだか女の責め場をみて息をのむというのは珍しいことと、いわねばなるまい。

二歩三歩、拷問部屋に入って、

「おみごとでござりまするなア」

「そなたにそういって貰えれば余も満足。どうじゃな、安房東条十万石、幾万人の女の中でこれこそ随一の美女と家臣良民どもが噂した美和が、これじゃ。御弓組百五十石・衣笠内記の女房殿じゃて」

「いこう美しうなられました。フッフッフ」

「なんで笑う」

「女は、愛玩動物と同じ、飼主次第」

「よいことを申すのう。それも護摩をするとか下世話に申しておる立身出世の近道かの」

元禄屋は軽く頷いて見せたが、用人の樺山や御弓組々頭・石川、牢奉行の鈴木四郎太夫たちは一斉に平身低頭した。

なかでも下林六平は、これをこそ自慢げに碁盤の上に乗った美和の傍らに立っている。

――鉄砲だ。

と元禄屋は察していた。鉄砲組の侍たちが右肩から左脇下へかけて火縄銃をはすかいに背負うように、右手を肩甲骨の上から首頸へ左に向って曲げさせる一方では左手をいわゆる逆手に取って右なめ上方にあげさせて、両手首をひとつにして括りあげる――銃を背負っている侍にとってみれば何でもないことなのだが、誰が、いつ、その姿態を取って囚人を責めるのに〝鉄砲責め〟と名付けたのであろうか。

故事来歴はさておいて、元禄屋が息をのんだのは美和の女体であった。

――小紫のお景に、いくらか肉を盈ちさせたようだ。絖（ぬめ）のように光沢のある肌やいまにも弾けそうな乳房はお景にそっくりだが、違っているのは……さあて――と元禄屋が、美和の真正面に歩みよったとき、

「お景を菊の花に、たとえれば美和は芙蓉であろうがの」

「……まさしく。さすがは領田さま」

この世のありとあらゆる〝美〟を花びらに凝結させた可憐な嵯峨菊に似た小紫のお景に較ぶれば、衣笠美和には、たしかに鈴木春信の錦絵から抜けでたような馥郁として下ぶくれした肉感があった。

「ここしばらくの間に、いっそうにお美しうなられた――と、いうよりも麗しうなられましたの」

「そなたに賞められれば……」

下林をみやった領田が、

「美和も嬉しかろう……て」

と、そういった瞬間、形容できない悲鳴が美和の唇から、ほとばしり、鈴木と石川の手がサアーッと、碁盤台の上でしっかりと合わ

されていた美和の膝にのびたかとみると、右左に割り裂き、持ちあげて、

「おおあぐら！」

石川の声とともに、美和は一尺八寸四方の黄楊（つげ）材の盤上で、女としてもっとも恥かしい大胡座を組まされてしまった。

元禄屋が、その瞬間の羞恥の極みに達した美和の顔をみやったとき、

「下村流・二本棒！」

六平が、すぐそばにある台を指さした。

その台は、碁盤の高さを、いや高さも縦も横も厚さも、すべての寸法を二倍にしたくらいの台で、片よった一隅の二箇所に、銀色の棒が、ななめに聳え立っていた。

そこへ、大あぐらを組まされたままの美和の一糸まとわぬ裸身が、空間、六尺をとんでふんわりと載せられたのであった。

「ウ、ウ、ウウウウ……」

すさまじい呻きのなかで、

「石川さま！　右へ、三分（さんぶ）！」

下林の叱声がとんだ。

石川が美和の右双臀をわずかに右にずらせると今度は、けたたましい叫びがあがった。

「鈴木さま、左へ。左腿を、ほんの少し」

鈴木がいわれたとおり、異国のまだ見ぬ宝珠のような美和の滑らかな太腿をほんの少し斜め上へ持ちあげて下へ、おろそうとした。

（お許し下さいませ！）

という言葉を元禄屋が耳にしたと思ったのは錯覚だったのかも知れない。

かりにも御弓組百五十石取の武士の妻が自分を、そして夫を、いわれなき理由で捕囚し責め嬲っている男たちに憐れみを請う筈がない。

しかも、その嬲りかたるや――、

元禄屋の視野のなかで美和の裸身は微動だもしなかった。

……イメージギャラリー……『吟味与力、問責』……岡　たかし……

鉄砲縛りにされた一糸まとわぬ裸身が、いま、麗しい肌だけでなく女肉の深奥にまで責具を加えられている。

二本の棒のうち、より太い一棒が、斜めにもたげられた内股のあわいに、その小部分を見せていた。淡桃色にそまった内股、そして白木の盤とを結ぶ、その二寸ばかりの銀色の輝きは、凄いばかりの妖しさに閃く。

もう一棒——細くて長い銀色の棒は、前面からは見えない。

「後庭華でございます」

下林の言を待つまでもなく美和の背面に廻った元禄屋は、しっとりと肉の盈ちた双臀の凹みが盤上に、いくらか持ちあがり、そこに前面と同じく銀色の輝きをみた。

「二本串刺し……もはや女は身動きひとつできませぬ。ほれ、このとおり」

はちきれそうな乳房を摑みあげた鈴木は、かって美和の夫・内記の上司ではないか。

「ウ……ウッ！」

かすかにあごが左右に振られ、のけぞっている咽喉もとをスウーッと一滴の汗が流れ、

「ここをほれ、こういたしましても」

鈴木の手が今度は銀色の棒に触れた。

地底から洩れるような呻きがあがる。

「前からもほれ、このように」

樺山が年甲斐もなく内股伝いに皺だった掌をのばして柔らかい肌に触れた。

縄がかかっていないのだから大あぐらに組まされた双脚を正座させることも不能なはずであったが、美和は、ただほっそりした足の指々をピクピクッと震わせただけであった。

あ、あなた様——

美和のしっかりと閉ざされた瞼にうかぶのは夫と共にすごした安房東条での幸せな日々であった。乙夜のロザリオを先祖から譲りうけたばかりに降りかかってきたこの屈辱。夫の内記はどこにいるのか、この邸内に閉じこめられているはずだが、ここしばらく逢わせてもらってはいなかった。

——逢いたい！

——だが、逢ったとて……こんな姿を見られたら舌を噛むかも知れない。

いまも、こうして女としてこの上ない「下林流・二本棒」の責めをうけているいま、美和は自害したかった。

そなたが死ねば夫・内記は八つ裂きの刑じゃぞ——という領田の言葉が、美和をいまの境地に追いつめたのであった。

「縛られた芙蓉の花を偲ばせはせぬかの」

領田が二歩退いて美和の裸身の全景をその鉤鼻の上の眼におさめていった。

「〝架けられた花〟というほうが、より応わしゅうございましょう」

「架けられた——か、まさしくのう」

御女子と後庭華の二つを、二本の棒に奥深くまで〝繋ぎ〟とめられては、いかなる凶悪女囚と雖もグウーの音も出まい。

「このぐみの実のような乳首を見い。この内股の色艶、そしてこの」

領田は、樺山の指に沿って、さらに、しなやかな指を加える。

あらたに加わってきた領田の指に刺戟されたのであろう、樺山の指が三本にふえ、四本となり、いつしか左手の指五本がすべて銀色の棒のまわりに群れ集うたとき、

「殿。まだこれがござりまするぞ」

下林の声がひびいて、

——ア、ワワワ……

身動きひとつ出来ないはずの美和の上半身が右に傾いた。

それというのも下林が右へと鉄砲責めにされている両腕を引き寄せたせいであったが、つづいて起った叫びは形容を絶した。

乳房がブル、ブルッと震えたかとみると、

数滴の汗が、大あぐらに組まされた太腿へと降りしきって行く。

美和の口のなかへと下林が、弓の折れを突っこんだのである。重藤の弓というのであろうか黒塗りの真竹を三本重ね合わせた上に真紅に漆した引藤を鮮やかに巻いたその鮮烈さが、淡紅色の舌と搦まりあって奇妙な妖しさを発散させた。

「下林、〝五本棒〟といくぞ」

声をかけたのは鈴木であった。かねて用意していたのであろうか、親指大の春大根を二本取り出すと、口を塞がれて開ききっている美和の双つの鼻孔に、何のためらいもなく突っこんだのである。

肉体の五つの穴に総て異物を挿入されてしまったとき女は果たしてどうなるだろうか。

まず唾液が、したたってくる。

つづいて鼻孔から、したたってきた粘々しい液体があった。

「ここは、もう存分に濡れておるからのう」

領田が、指をさらに奥へと沈めたとき、なぜか領田が、突如、全身に緊張感を漲らせると、

「元禄屋、暫時」

その声音をきくまでもなく元禄屋は、天井裏の気配を察知していた。

――黒鍬の者に違いない。何用ぞ。

御主君が突然、出ていくのを、ながめはしたものの樺山たちは、一向にその淫ら極まりない指々の動きを止めようとはしない。

ものの数呼吸ののちであったろうか。

「元禄屋――」

領田の声がした。

予想どおり――土台がこの牢屋敷にきて衣笠美和をひと目みたときに我にもなく息をのんだ、あれが、思えば、地異の勃発するきざしであったのだろう、チラッと下林たちに目礼して扉をくぐりぬけると外へ出た。

「殺されたそうじゃ」

春の日ざしのなかで領田の声は、こわばっていた。

「水野さまでござりましょう」

「な、なぜ！　なぜ、それを！」

領田の手が思わず佩刀の柄にかかった。

「幕閣の重大事、しかも四半刻前におこった出来事を、なぜに、そのほうが……」

「ハッハッハッハ、この元禄屋、天下のことすべて己れの掌を指すが如し」

ことともなげな哄笑に、つりこまれて、こわばっていた領田の顔は、もとにもどり、柄にかかっていた手も離れた。

「刺した者を、あててみましょうか」

「わかるかの」

いかに元禄屋とて、そこまでは――と多寡をくくった領田の耳に、

「徳夜叉、怪盗徳夜叉でござりましょう」

確信に満ちた声音がひびいた。

領田の驚きにつづいて、しばらくの沈黙があたりを支配した。

が、やがて、

「よいことではございませぬか。水野さま亡きあと、老中首座は、ほかならぬ領田さま。老中首座から、やがては御大老の職へと」

「いうでないわ」

春の日が、北のほうに向って咲きそろっているこぶしの白色六弁の大輪の花々におぼろおぼろの光を投げかけ、かすかに聞えてきたのは美和の羞恥の喘ぎであったろうか。

領田の目がこぶしの花に向けられたとき、元禄屋の鷲のような巨眼は、天の一角に向けられていた。

「暁……」

その堅く結ばれた口元が開き、

「暁、単騎、本営を衝く――敵ながら、あっぱれなやつ……」

（未完）

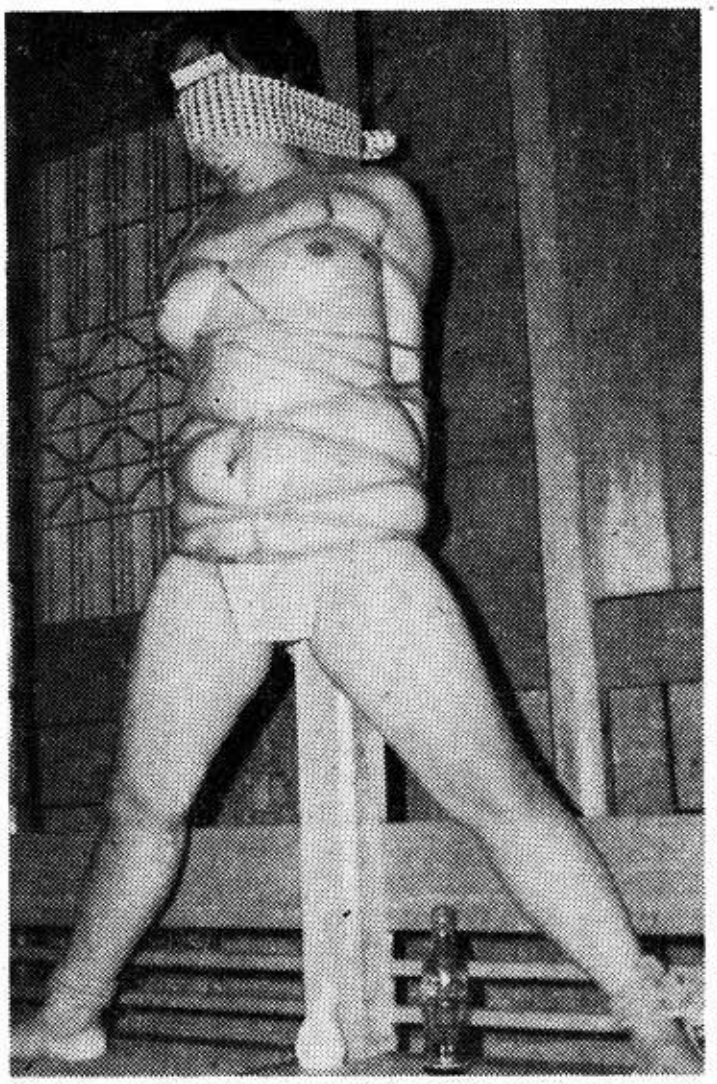
縛りの美学

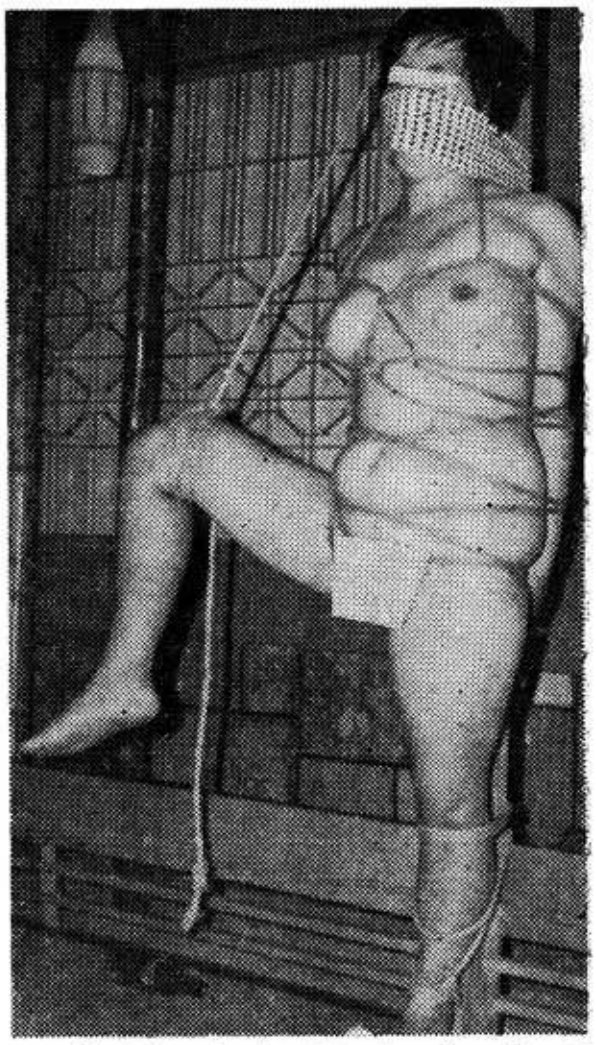
ロマン派生

なんだかんだと言いながらも、この連載も五回目になると、一種のスタイルが出来て来て、謙遜しているような、不遜のような、妙な文体と、上手なような下手なような写真とが、或種のハーモニーで、ロマン派ぶしを、かなでていて、面白い（のではなかろうか）と、書いている本人が言うのだから間違いない。また、今までに奇クに登場したモデルの人達や、寄稿された人々を勝手に引き合いに出したり、呼びかけたり、少々失礼かなと思うこともあるのだが、そこが読者サロンのサロンたる、ゆえんだと思って、大目に見てお許し頂きたいものである。

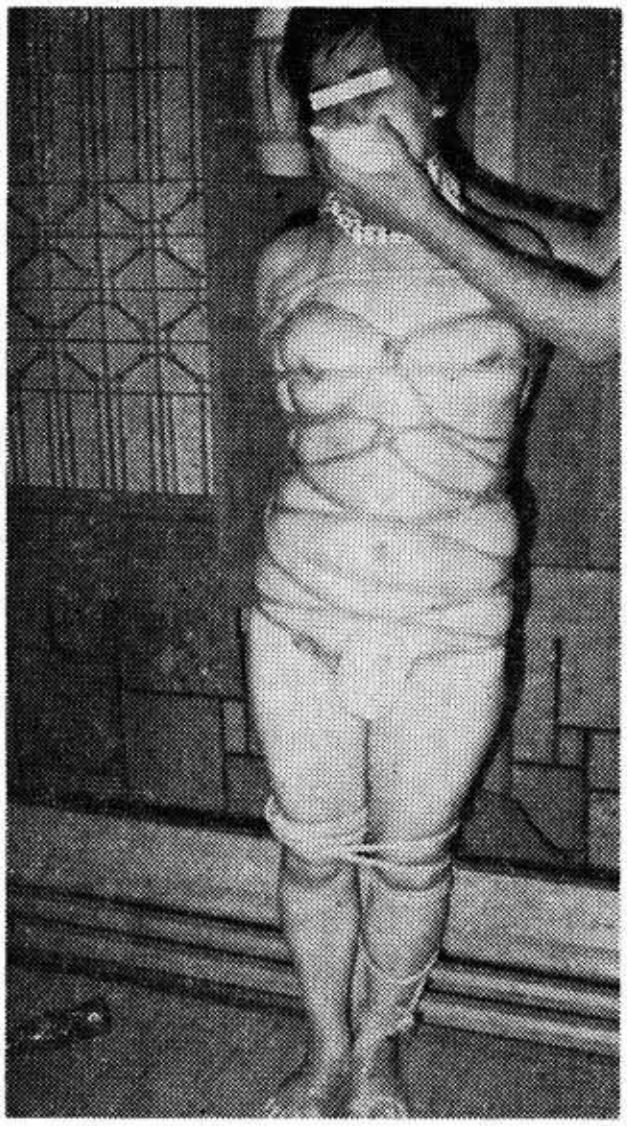
柱縛り

柱を利用して女体を固定することは大昔から行われていたし、現在もSMプレイをする人は、誰でも試みるに違いない。実際、女体を動けないようにキチンと固定するためには、柱を利用するのが一番、都合がよい。ところが今時のプレハブ住宅には、全く柱がないのが普通だし、コンクリートのデラックスなマンションやホテルでも、適当な柱がないことが多い。結局、やや古いタイプの木造一戸建てか、モーテルのような所でないと仲々柱縛りが出来ないのは、残念なことである。ま、それはさておいて、昔の歌舞伎か、時代劇のシーンに、よくあるように、女をくくった縄尻を柱に結びつけておくだけでも柱縛りには違いないが、これは、あまり固定感もないので、この際は除外し、女体を直接、柱に縛ることに限定したい。また、女囚を坐らせて柱に縛りつけたポーズは手頃な写真がないので、勝手に割愛してしまうことにする。



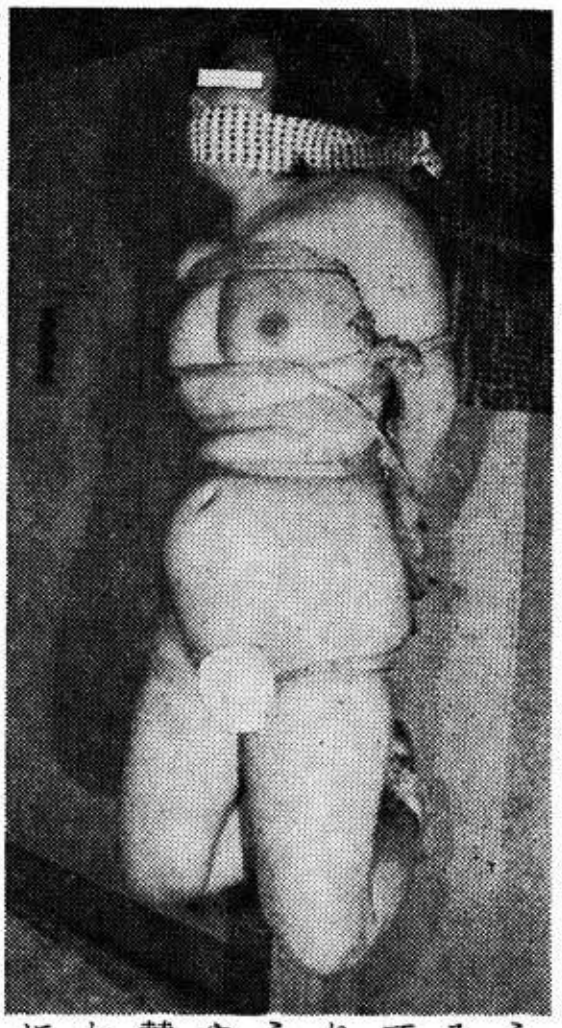


先ず写真①は柱に立ち縛りにして、両足を大きく開股させたポーズである。縄掛けも特に自慢出来るほどのものでもないし、ポーズも平凡だが、他に、もっと立派な写真もないので、これを種に、少々ごたくを並べてみよう。まず用いた縄は一寸、細過ぎた感じで、もう少し太目のものの方が良さそうだ。もし細目のものを使うなら、もっと大量に用いてたんねんに細かく緊縛すべきであった。猿轡は柱と一緒に柱の後方で結んであるが、これには異論もあろうかと思う。しかし、経験者は誰でも御存知の通り、猿轡というものは相当きつくかけても、すぐに、ゆるみ勝ちのものなのだが、このように柱の後ろで結んでおけば、まず一寸やそっとでは、ゆるまないのがついているのが、気になる。また、女囚の色々と欠点はあるにしても実用上、こういう風に縛り上げられてしまった女囚みさ子は、どんな、いたぶりを受けても、抵抗出来ずに、されるままになっているより仕方がない。このみさ子の前に座卓を据えて、五、六人の男達が、みさ子を肴に一杯やったら、さぞ酒が美味く呑めることだろう。その上、着飾った芸者を何人か同席させて、なんだかんだと批評したり、或は色々と、いたぶったりしながら呑めば、裸の女囚が一層、目立って尚結構な酒盛りとなること、請け合いである。



さて写真②は写真①の縛りと、ほぼ同じで片足を膝の上で縛って吊り上げた所である。まず、膝から垂れ下がった余分な縄尻が目障りで、これをキチンと処理すべきであった。このポーズも、よく試みられるが、開股という意味では結構なのだが、仲々美的なポーズとは、なり憎いようだ。むしろ単純に、

写真③のように両足を揃えて縛った方が美しいポーズとなる。十数年前にアメリカのション・ウィリィという人の画いた「スウィート・グェンドリン」というシリーズの劇画があったが、その中でヒロインのグェンドリン

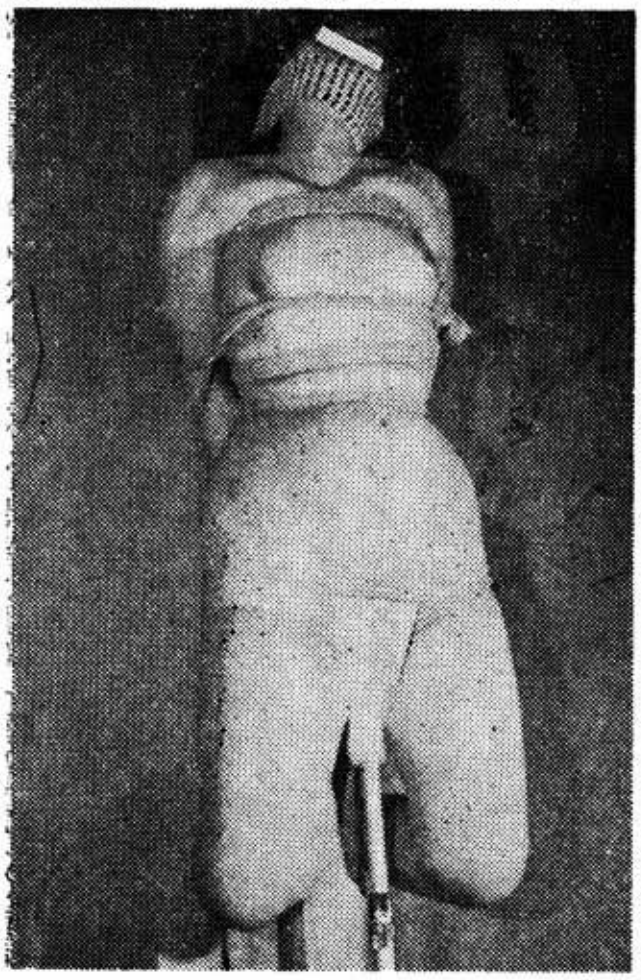


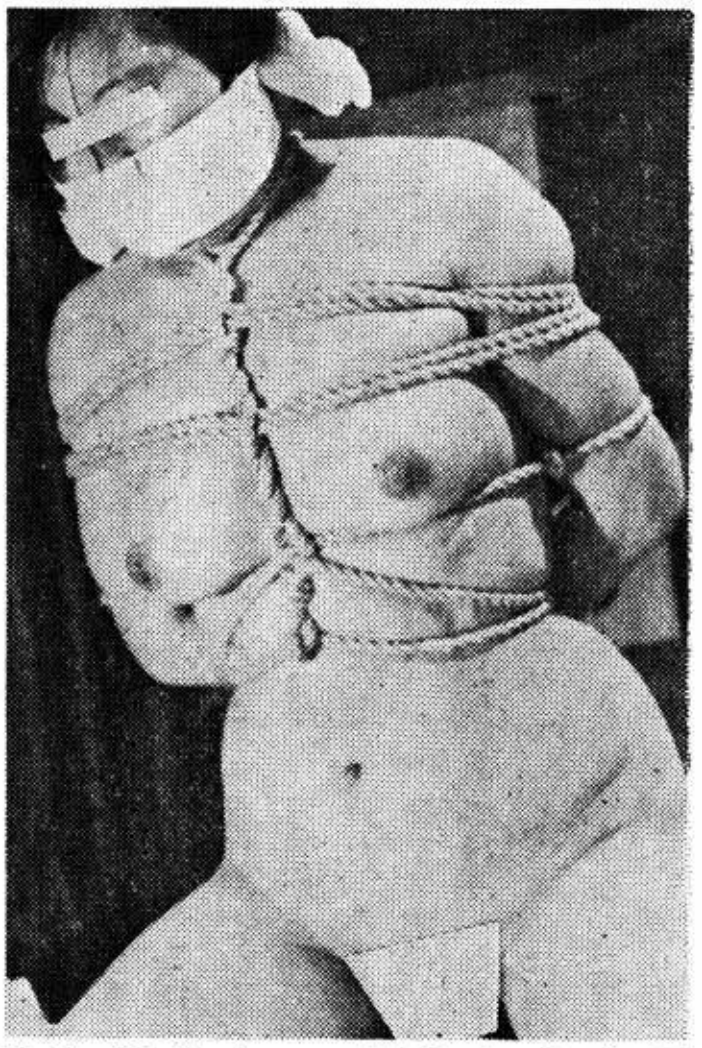
らば腹を木につけて鳴くのだが
みさ子は背中を柱に、くっつけ
て泣き声を上げたので、逆蝉縛
りと名付けたわけである。何や
ら源氏物語の一帳のような雅び
やかな名前で結構々々と自画自
賛しても誰も同調してくれない
かな。この逆蝉縛りのような形
に縛ると、どうしても体重で女
体が、ずり落ち易いので、そうならないため
に、鴨居に固定した縄尻を柱に沿って垂らし
みさ子を縛った横縄を一々、その縦縛に、か
らませて縛り上げたので、ずり落ちる心配は
なかった。しかし、胸や腹が、ひどくきつく
緊めつけられるので、さすがのマ
ゾ女みさ子も、意識が、もうろう
となって、大声で、あらぬことを
叫び出したので、ロマン派先生、
大あわてに、あわてて縄をほどこ
うとしたが、固く縛った縄は、あ
わてればあわてるほど、仲々ほど
けず、大汗をかいたものである。
みさ子に大分、苦痛を与えた甲斐
があって、かなり迫力のある写真
がとれ、私は大切にしているのだ
が、誌上では例によってモノクロ写真の上、
目隠しをして表情を隠してしまったので、大
分、迫力が減殺されてしまうと思うが、それ
でも雰囲気位は、なんとか分かってもらえる
かと思う。

写真⑤は逆蝉縛りの女囚みさ子を正面から
うつした所で、タンポ槍で串刺しの形を執行
した瞬間である。ギャーッというような悲鳴
が聞えてくるでしょう。こうなるとロマン派
を少々逸脱しているかも知れないが、それで
も私は女体の美しさを損っているとは思わな
い。むしろ逆に女体の美しさ、可愛らしさを
引き出しているのだと思っているが、それは
私の一人よがりにすぎないのだろうか。可愛

が立木に細目の縄で、たんねんに綺麗に縛ら
れている絵があった。あれが柱縛りの一つの
頂点のような気がする。縛られる女は高いハ
イヒールをはくか、或は爪先立ちとなると、
足の線が綺麗に見えるようである。写真③は
写真②の膝を縛った縄を利用して膝頭を縛る
といった手抜き工事の跡が歴然と残っている
ので、折角の豊満な、みさ子の女体を、むご
たらしく縛り上げる美しさという点で、やや
物足りない所がある点、いかんに存じます。

さて、写真④は、いかがであろうか。柱を
背負い、足は地上から三尺（それほどでもな
いが）離れて高々と、くくりつけられた、そ
れはそれは可哀そうな、みさ子の姿を見てや
って欲しい。私は、この縛りに対して、ひそ
かに逆蝉縛りという名前を奉っている。蝉な



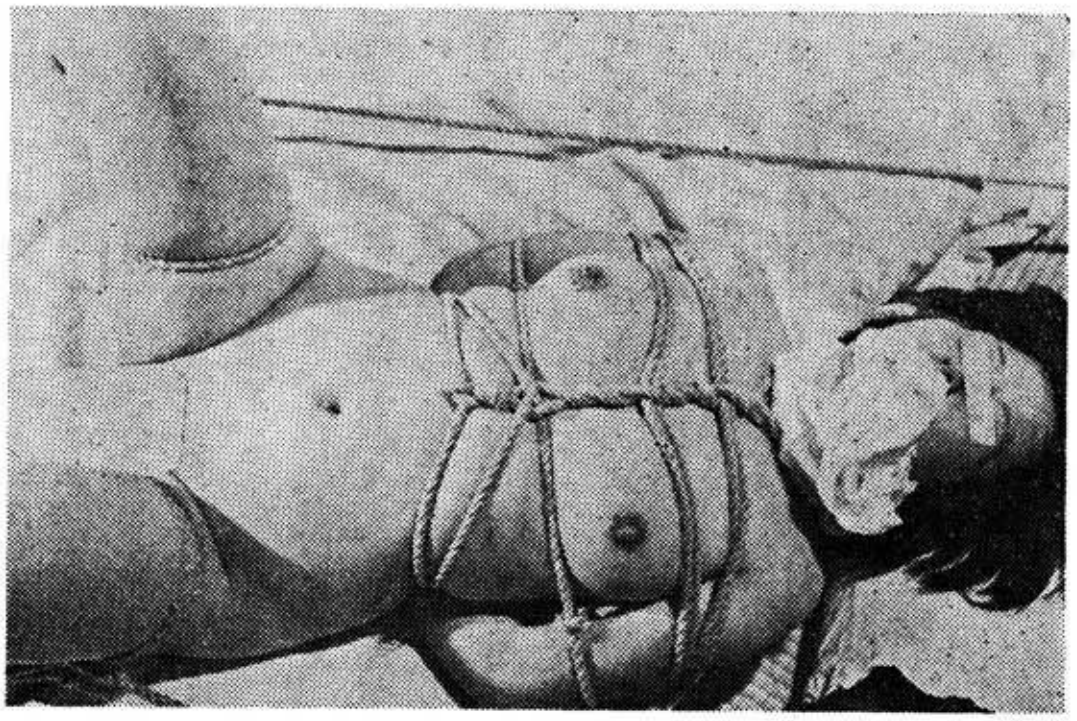


二回目以降、そしらぬ顔で書かずに避けて来たのだが、そうそうネタも切れかかって来たので、良い名前も浮かばぬままに、登場させざるを得なくなった次第である。

縛り方としては、首から廻して、乳房の谷間に垂直に下ろした縄と、それに直角に横縄をかける極く、ありきたりの縛り方で、横縄を乳房の上下だけ二筋かければ、¥という形にもなるが、横縄を沢山かけると、¥縛りとも云えないし、語呂も良くない。平凡な縛り方は、かえって名前がつけにくい。縦横縛りというのは、仮につけた名前として、もっと洒落た名前を、どなたか考えて欲しい。

写真⑥は縦に、よじり合わせた縄の間に横縄を通して縛ったもので、縄目のコブを作らないのがミソである。乳房に直接、縄をかけず、縄で乳房を上下から、はさみ出すように縛るのが定石だが、みさ子のように大きな乳房に対しては、逆に乳房を押しつぶすように直接、乳房の上に縄をかけるのも、良いものだ。この形の縛りは、それほど技巧的に、むずかしいものではないし、誰にでも或程度の緊縛感は出せるので基本的な縛り方といって良い。写真では腹部にかけた一本だけがやや斜になっているが、徹底して垂直と水平だけの縄がけにした方が、すっきりするようだ。

写真⑦は同じ縛りで仰向けに寝かせた所で口には例によって、みさ子のパンティが詰め



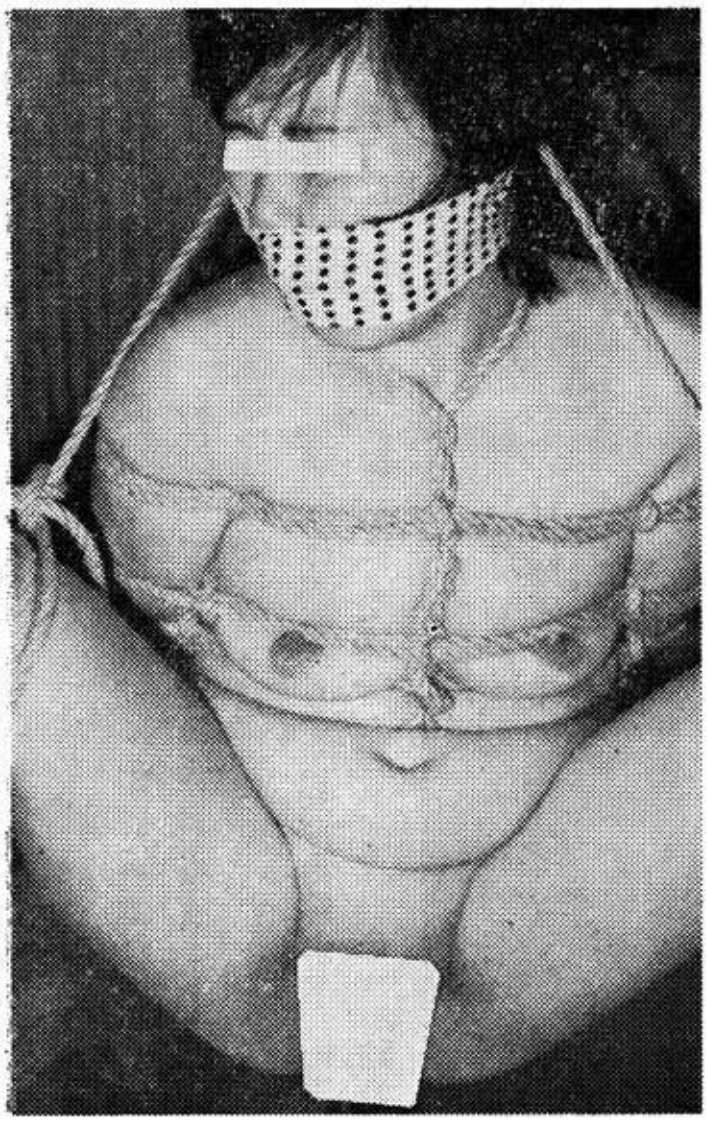
縦横縛り

実をいうと、四十九年九月号に載ったこの美学の一回目の原稿の末尾に、二回目の予告として縦横縛り云々と書いたのだが、我ながら下手なネーミングだと気がひけてしまい、がるために、可哀そうな状態にしてしまうというロマン派サジストの心性は、素直とは言えないにしても、全く不可解なものではないと私は考えている。その点、女性の方々は、なんと感じているだろうか、女性の御意見をきいてみたいものだ。ただし、ウーマンリブの方の御意見は無用のこと、桑原、桑原。

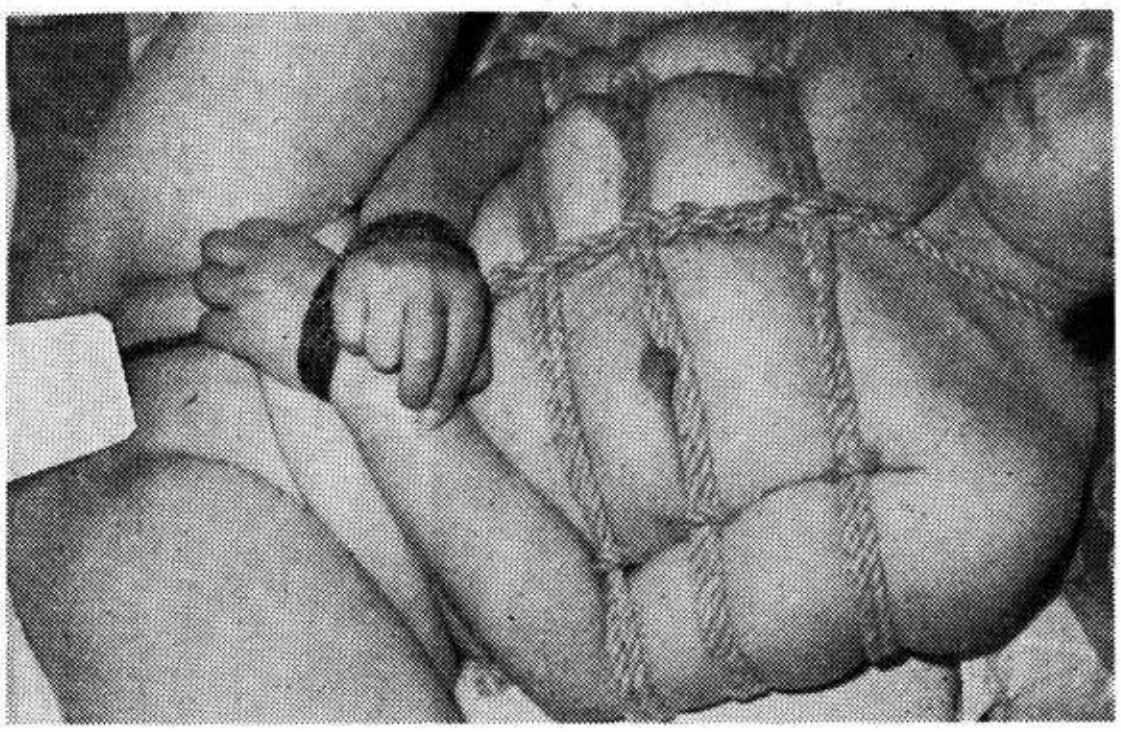
込んである。（みさ子は、どうしてこんなに自分のパンティを口に詰めこまれたがるのだろうか。馬鹿な女囚だなあ、全く）この写真の方が光線の具合がよく、すっきりした仕上がりになっている。

写真⑧は前の二枚の写真と、ほぼ同じような縛り方だが、乳房の真上に縄をかけたのと腕と胸の間に一々、縄を通して、縄目をひきしめてある所が違う。こちらの方が丁寧に縛ってあるが、それだけ緊縛感が強く出ていると思う。

写真⑨は同じポーズを、もう少し接近してやや高目のカメラアングルで、とったもので乳首が上を向いて、そり返っている所が何とも可愛らしいじゃありませんか。写真では、よくわからないが、ピカピカのテーブルの上に載せて縛ってあるので、写真⑧のようにローアングルから撮るのも、かんたんだし、鏡のように反射するテーブルに、みさ子の大切な所が写って、丁度キスしてるように見えたり、色々と都合が良い。また柱を背負わせて膝にかけた縄は柱に結んであるので、これも柱縛りの一種といえないこともないが、一寸、柱縛りという感じからは遠いので、これは縦横縛りの仲間としておく。この写真から縄に締めつけられた、みさ子の豊かな女体美の素晴しさが分かって頂けることと思う。



写真⑩は同じ縛りの後手の部分だけ、ほどいて前手に縛り直してみたものだが、やはり、前手縛りというものは迫力が乏しく、何か、なれ合いのような感じがする。よく前手に縛って、その手を、どこにも固定してないような縛りがあるが、それでは歯を使って簡単に、ほどくことが出来るので縛った手が口の方に持って行けないように、手首をどこかに固定しておかなくては意味がない。その固定法の一つとして、この写真のように手首を縛った縄尻を股間を通して背後に縛ってしまえば、手首が口の方に持って行けなくなる。もっとも、下の口を使って、ほどいてしまうという特技をもった女には無効であるが……。こんな風に、とけるとか、と

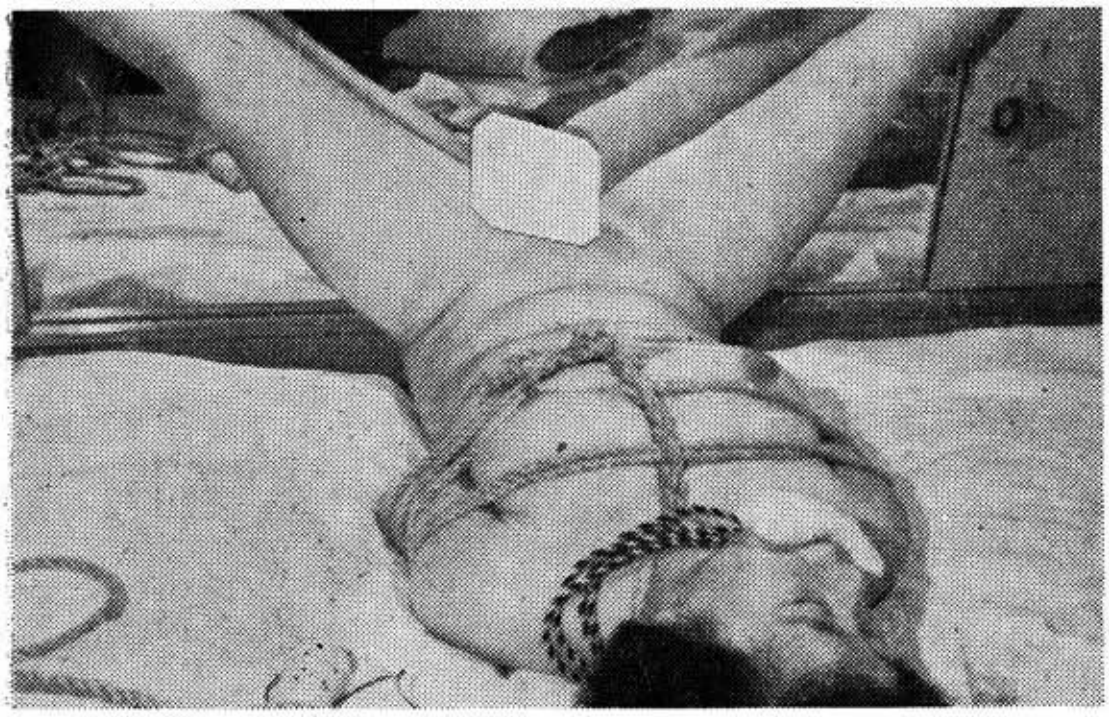


けないとか、或は、ゆるむとか、ゆるまないとか、縛り方の有効性というか、実用性に私は、こだわるが、民芸品などでも、実用性の追求が自然と無駄を省き、美しさにつながって行くものだと思うし、実用性を無視するとどうしても、わざとらしさ、こしらえものという感じが強くなって、美しさを損うことが多い。これは縛りの美学でも、かなり相通ずるものがあって、実用性の全く、ともなわない縄がけは、SM美を損うと思う。縄の実用性ということは、縛り方の力学的な安定感とつながるようである。しかし、実用性さえ備われば、それが直ちに美しいと言っているわけではない。実用性をふまえた上で、且つ女の可愛らしさ、哀れっぽさを十分に引き出すような縄がけが、美しいと言っているわけである。

話を写真⑩に戻すと、ここでは前手に縛った縄は生きた縄で、決して死縄（無効な縄）ではないが、写真⑨に較べると、どうしても迫力が落ちるのは、いなめない。この辺りが前手縛りの限界であろう。

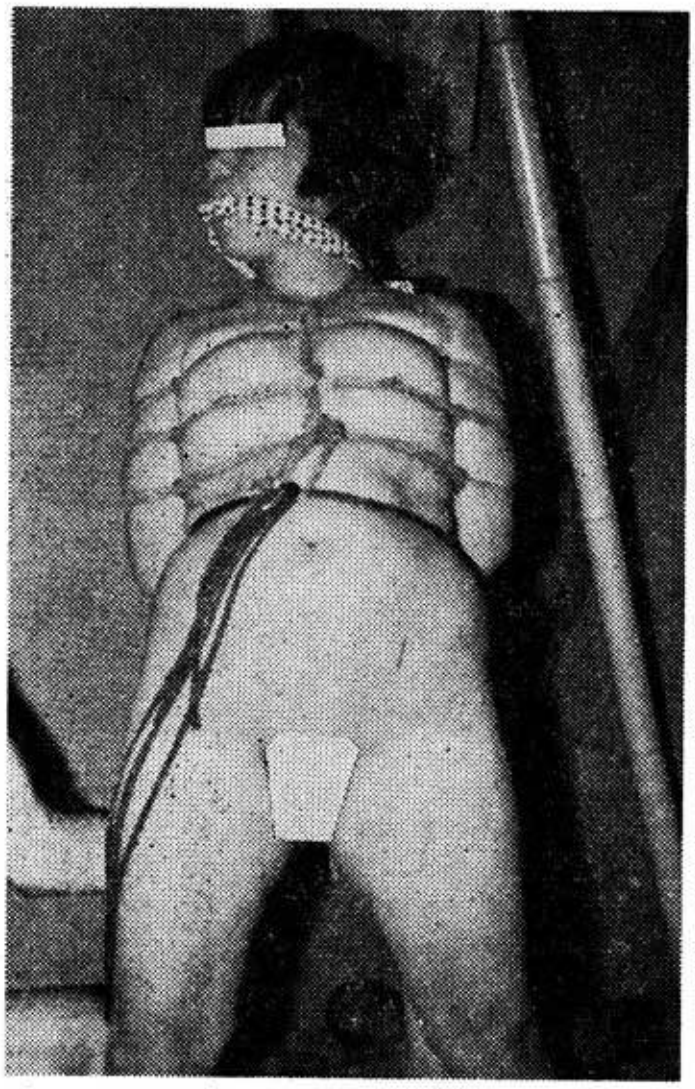
前手にする場合は、むしろ、縄は使わずに手錠とか、手枷とか言った自分では到底、解き得ないような道具を使う方が、美的な印象を受ける。

写真⑪は、前の三枚と殆ど同じ縛りだが、別の時のもので、乳首の一方を縄の上に一方を下に、はみ出すようにしてある。また、腕と胸の間に、横縄を引き締める縄が入っていないので、やや緊縛感が弱い。ここでは縄目を見て頂くより、壁に、はめ込まれた鏡に大きく開股してピッタリと、くっついたポーズから、色々と連想して楽しんで頂きたい。口には脱脂綿を噛ませ、黄色と黒のダンダラの縄で縛っておいたのだが、いつの間にか、ゆるんでしまった。それでも脱脂綿を口にくわ



えている、みさ子のいじらしさは、御覧の通りである。

写真⑫も、あまり変り映えのしない縛り方だが、首から垂直に下ろした縄と横縄の交点は、一々結び目を作って動かないようにしてある。こうしておいた方が縄目が、ずれない長所があるが、逆に前の縛りのように融通がきかないので、横縄を上にあげたり、さげたりするのが面倒なことと、結び目が、こぶになって、うつ伏せに寝かせる時、肌を痛めることがある。尚、腹部から垂れ下がった黒い紐は全く邪魔物で、別な目的で使ったものをとり除かずに撮ってしまった故である。良い

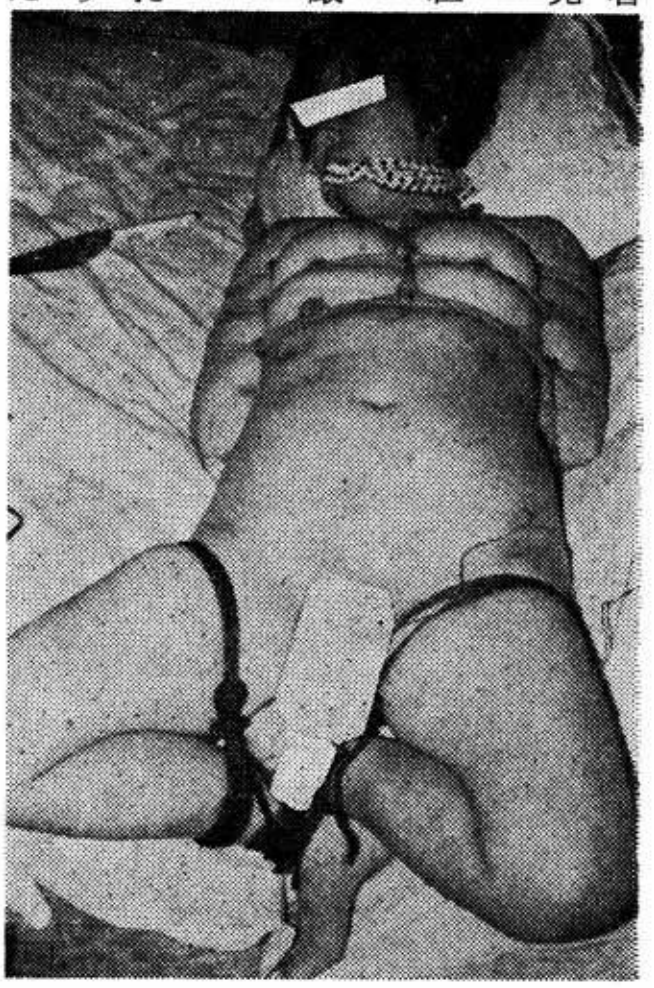


写真をとるためには、決して横着をしては不可ませんという悪い見本である。

写真⑬は⑫の縛りの上に足を組ませて仰臥させたもので、乳房への縄の噛い込み具合から縄目の厳しさが、うかがえると思う。

この縦横縛りのバリエーションとして、肩の方から左右別々に乳首の真上を通し垂直に下ろす縛り方も可能だが、すぐに、ゆるんだり、ずれたりして、あまり効果的ではない。

また横縄は最少、乳房の上下あたりで、乳房のふくらみに縄が喰い込むように縛るのが良い。いずれの場合でも、腕と側胸部の間で横縄を引き締める、短い縦縄を入れておいた方が、よく締まるし、ゆるまないので、是非、おっくうがらずに、励行したい。



いが、三筋、四筋とふやせば緊縛感は強くなる。ただその際、一番上の肩に近い部分をあまり上に縛ると、肩から抜けて外れそうに見えて、かえってだらしなくなるから、その点、注意がある。下の方は二の腕より下がって腹部を縛っても、おかしくはない。

横縄は若し一筋だけ、かけるとしたら、乳首のすぐ下あたりで、乳房のふくらみに縄が喰い込むように縛るのが良い。いずれの場合でも、腕と側胸部の間で横縄を引き締める、短い縦縄を入れておいた方が、よく締まるし、ゆるまないので、是非、おっくうがらずに、励行したい。

今回は、この辺で終りとし、次回は最終回として、とっておきの写真を、お見せすると言いたい所だが、実は、もう種切れで、最終回は落穂拾いのようなものに、なりそうである。どなたか小生の美学に協力して、モデルになって下さる人はおられないだろうか。

――(未完)――

〔白告〕

婦屁論オンパニズム

黄与三郎

婦人の膣屁については雑音、不快音、膣放屁、前おなら、ふ、などの呼び名があるが、バンデ・ベルデは神への冒瀆を恐れることなく、背後位の特異現象を真実のものとして、はじめて「雑音を発する」と、そのメカニズムを明らかにしている。

後ではおなら出ますと前を出し
知らなかったの　こんなこと
男はみんなエッチなのネ
いきなりおならが出るなんて
坐り直しても駄目なのよ

私は結婚してから十五年目になるが、妻の美佐子にとって結婚生活が、こんなに性的で淫らなものとは知らなかったらしい。

ざっと試算しても、交りは四七八五回になる。最初の一年間は一夜に三回が常だったから、五千五百回に達していると思われる。

謝国権先生によれば、雑音が出るのは「経産婦」とある。これは絶対的なものでない。没入したままで抽送を繰り返すだけでは、空気は送りこまれるものではない。豊満な臀を抱き締めながら暗闇の中で、音の出ないわけを、あれこれと、まさぐり、妻の躯が、どぶのように、ぬるぬると濡れれば濡れるほど、私はそれに没頭した。

そして遂に、私は新しいことを発見した。私は抜去して、圧した。二度、三度、繰り返す。圧縮空気の弾力的な感触が奥に感じられるようになると、それから数刻、空気ポンプの機能が正常に作動をはじめる。

妻は恥かしさに思い余って崩れる。音は意識することなく出る。あわてて坐り直す。音は妻の意にかかわらず、前から、後から出て身の置き所さえ、ない。妻は、なすすべを知らず、顔を伏せる。

したがって、婦屁ということ自体、取り立ててアブ視するほどのこともないというのが愛読者、大方の意見と思われるが、縛り、浣腸、鞭打ちの本質は性行為である。そうでなければ、これらのファンは精神分裂病患者の集団といって過言でなかろう。

ところが、サロン、読者通信欄を通して見ると、決してそうではない。みな、正常な精神の持主の集まりである。

しかも、婦屁は視覚的に動物的スタイルで営まれる結果、生ずるものであり、それだけに加虐趣味を、そそのかす。四九年三月号で苗木さんは、バスから上がってきて「犬のよ

うにして、妾、後から犯されたいんです」と塚本氏に懇願している。塚本氏も、お尻をツンと突き出した恰好は彼女の最も好むポーズであると述べている。また、同年四月号でも塚本氏は苗木さんに例のケモノのポーズをとらせる。豊満な臀部をデンと突き出して、膝を立て、頬を床につけた尻立ての姿勢だ。

それに加え、屁そのものは単調になりがちな行為を感覚的に一層、充実したものに変容させ、止揚させるのではないだろうか。

そう考えれば、おならで曲屁の芸を発案した曲屁福平とまでいかなくても、SMに志す人は、婦屁についても当然、研究がなされてしかるべきだと思う。

恵子は、S市本郷通りの美容室のママだった。当時、私は三十代で、土曜の夜、彼女が薄野の寿司屋から酔ぱらって出て来たところを藻南の温泉マークに誘い込んだ。

お風呂の中でおならをすれば男後で女前

浴槽の縁に摑まらせ、太腿を抱え上げた。小柄な躯は湯面に臀丘を出して浮いた。

彼女の結い上げた髪は、後れ毛が崩れて肩から脊に流れ、湯の中にこぼれて、幾条もの黒藻を漂わせる。

浴室の窓外が急に、ざわめかしくなってきた。物音から、先刻、降り出した雨は、どうやら本降りになったらしい。

酔いつぶれたのか彼女は躯を私のなすがままにさせ、喘ぎながら責めの仕置を受けている。美貌の彼女も吐息は熟柿のように臭い。それがまた、私の加虐趣味をつのらせる。

ようやく浴室での一戦を終え、床に入ろうとしたが、この頃になって恵子も、やっと酔が醒めたのであろう。時計の針は一時を指し

イメージギャラリー……『ショーウインドの怪』……水江　伸

ていたが、「明日の朝、店をあけておかないと、店の子が困るから」と、本郷に戻り、私と一緒に泊りこんでしまった。

私は美容室に入ったのは、はじめてであった。ピンク色のオカマの珍しさもあり、また女の子にも覗かれたいとの下心もあって、二人は美容室の一角にしつらえた二帖ばかりの畳敷きに、隅に積んであった座布団を二、三枚、敷き並べ、横たわった。

恵子は、開放感が出て来たのであろうか。「ネエ、今晩、いろんなこと教えて」と、積極的に求めてきた。

幾時が経っただろうか。頭の中は濛々とし腰は抜けるように、だるい。通りの人声に気が付いたときは、広々としたルームに朝日が射しこんでいた。側に横たわっている彼女の肉体に情欲を感じ、腕をまわそうとすると、いきなり唇を求めてきた。そのまま、ずるずると泥沼に落ちこんでゆく。彼女の躯は濡れに濡れきっている。

「ネエ、起きましょう。店の子が来るわ」

と、横に脱ぎ捨ててあったパンティを取り立ち上ろうとした。私は放すまいと腰に抱きつき、押し倒してしまった。

「あ、あ、止めて。聞えるわ。男をくわえこんだことが知れると、店の子に、しめしがつかなくなるわ」

「うそつけ、女狐。それが嬉しいんだろ」

私はそれにかまわず、脊中から髪を、ぐいっと引っ摑むと、風呂場にひきずりこむ。

彼女は「お願い。後生だから、髪だけ止めて。きのう、女の子に結ってもらったのに。よして、よあ、いじわる。ああ、止めてしてよ」と、必死に抵抗する。

「うるさい。エイ、騒ぐな」と、ふっくらと盛り上がった髪の中に指を突っ込み、頭の地肌を鷲摑みにし、そのまま、四つん這いに押し倒した。その時、ガラス戸越しに、ちらっと、人の気配を感じた。何か影が動いたようだ。恵子は感知していない。

私はガスのコックをあけ、ゴーゴーと燃える音で、二人が風呂場にいることを、わざと知らせるとともに、恵子のよがり声をカムフラージュしようとした。

だが、何か、ルームのほうが、ひっそりしている。私は、ふっと気がつき、しまったとっさに思った。

彼女らは、あるものを見つけたようだ。もう仕方ないと諦めがつくと、淫らな情欲が前のほうから、むくむくと起き出してくる。そこには赤い血のりのついた塵紙のかたまりや白濁したゴム、乱雑に脱ぎ捨てた服や下着がところ狭ましと散らかされており、行為のあとが歴然としていた。

彼女らは私達と目が合った時、知らないふりをしてくれるだろうか。パッと頬を染め、下を向いてしまうのだろうか。そっと下着類を風呂場のところに持って来てくれるだろうか。妄想が走馬燈のようにめぐり、私のたかぶりは燃えに燃え、彼女を責めに、責め抜いた。やがて、行為の果てた二人の耳に、ルームの方から電気掃除機のかける音が聞こえ、彼女らの、ふだんと変らない、動きを知らせてくれた。

後日談であるが、恵子とは翌日、会う約束であったが、私の都合で会うことが出来なかった。それから半年たった夜たずねたが、夕方、急に店の子が流産したということで、介添えに忙しく話すことができなかった。その後、消息のないまま、翌春たずねたが、店はすでに他人に変っていた。

親から二十万円、借り、若い身空で遠く稚内から出て来て、独立しようとした恵子の心を思うと泣けてくる。

あの時、彼女らは私達の行為を覗き、あま

りのショックに、体内に陰微な興奮が異様にうずいたのだろうか。

四九年四月号で、飯島春代さんが手術の介添えをしたときなど、ふと自分もあのように手術台に縛りつけられたいと考えたり、何人も男の人たちの見守る中で全裸をさらして実験台になってみたいと空想したりすることがあると述べているが、彼女らも、そうだったのかも知れない。

陽子はS市H大病院の看護婦であった。土曜の夜、創成川のほとりでボーイ・フレンドでも待ち合わせていたのであろうか、人待ち顔にたたずんでいたところを誘いこみ、なんのかんのだましながら、とうとう社宅に連れ込んでしまった。

プロポーションのよい大柄な女だったが、憶することなく、一しょに風呂に入ってくれた。家庭的なふんいきのほかに、夫婦生活のママごと遊びが珍しかったのであろうか。風呂を炊いたり、夜食に冷蔵庫から、ありあわせの惣菜を出して野菜サラダをつくったりして結構、楽しそうだった。

ベッドは手作りの木製のもので、二人がのるとギシギシ軋んだが、彼女はなんのためらいもなく横たわり、愛撫を受入れた。

誘った時から大分、時間も経っていることで、そこは、ぬめりにぬめりこんで、感触の中でうごめき、また抽送した。

彼女は気分がよすぎるのか、ヒーヒーヒー、よがり声を出す。しかも、大げさに躯をゆするのでベッドの、きしみが激しい。

「おい、よせ。隣に、聞えるぞ。みっともないぞ。お前を内緒に連れこんだのだから、おとなしくしろ」と、注意せざるを得ない。

「あら、十時ね。義兄さんが帰って来る頃だわ。電話かけなくちゃ。お姉さんが心配するわ」

「かけろよ」

「いや、放して」

「このまま、お前の屁を聞かせるよ」

「いや、よして」

私は彼女のハンドバッグからメモを取り上げ、書いてあるとおりのダイヤルを回した。

受話器を彼女の尻の上にもって来る。

女の声がする。

「もしもし、どなた」

「おい、出ろよ」

「あっ、あっ、お姉ちゃん」

「どうしたの、おそいじゃないの。どこからかけているの。今夜、帰って来るんでしょ」

「今夜、泊りなの。お友達が用があるということで、急に変ったの」

「陽子ちゃん、大変ね」

「今、患者さんのところに行ってたの。一寸手放せないの」

「調子のいいこと言って」と、陽子の臀部を押す。

「えっ、今、何か言って」

「いえ」

陽子の臀部の部分は、かなり、ゆるくなってきている。

「エイッ」と押す。

プウ、プウーと、驚くほどの大きな破裂音が出る。

「あら、誰かいるの」

「いえ、おならしちゃった」

「いやねえ、慎しみなさい」

「ごめんなさい」

「おなか、悪いんじゃないの」

「大丈夫よ」

「それならいいけど。じゃ、気を付けてね」

「ネエ、あんた。お姉さんに聞かれちゃったわ、どうしょう。お姉さんたら、すごく勘がいいの」

「そんなこと、知るもんか」
「牝犬は牝犬らしくしろよ」
「それっ」
「あっ、あっ、あっ――」
私は乱暴に陽子の躯を畳の上に転がした。

「いや、よして」
「何言うんだ。洋服欲しかったら、がまんしろ」
「お隣に聞えるわ」
「聞こえたっていいじゃないか。そんなことより、朝、帰れないぞ。帰るとき、玄関でお向かいの爺さんと鉢合せになるかも知れんからな。はて、どこのお嬢さんだったかな。与三郎さんのところに、あんな大きな娘さんいたかな。それにしてもグラマーだな。このぽってりとした腹は何とも言えないな。お前のは、おなかのこの辺まではあるだろな」
「いやーっ、助平」

……イメージギャラリー……『V相鑑定』……水江伸

こうしてみると、ストリップの天狗ショーほど、つまらないものはない。最近のショーでは、観客も舞台に上って女のものをいじくりまわすことができるような仕組みになっているが、よがり声も演技でなく、婦屁を活用してもらいたいものである。

バック・ミュージックにのって、足を伸ばし、腰を上げ、躯をゆさぶり、歯をくいしばり、髪をひきむしり、躯の奥底からこみ上げる官能の波に堪え切れず、いつしか拒否の声が歓喜の声にかわり、息づかいと婦屁が噛み合わされたら、どんなに素晴しいだろう。

「ねえ、寄ってて、お兄さん。口あけ、まだなの」
「口あいてるじゃないか」
「いじわる」

「口も大きいけど、けつも大きいな」
「ねッ、サービスするわよ」
「お前、ほんとに、いいけつしてるな。たまんねえ。一寸、舐めさせろよ」
「いや」と女は、くるりと身を、かわした。
君子は大牟田の炭鉱夫の娘で、外国船員相手のパンパン宿にいた。
当時、学生だった私にとって、戦後解禁されたバンデベルデの「完全なる結婚」は人生の珠玉をちりばめた宝庫のように思われた。
好色心をあおられ、正常位、伸長位、屈曲位、騎乗位、前座位、後座位、側位、後側位腹臥位、後脊位、立位等を詳しく知りたいばっかりに、やっと、あがない得たアルバイト代から求め、それからは日ごと、夜ごと、性の悩ましい幻想にふけったものである。
その中でも好色のまとになったのが、婦屁だった。
店の上り口で脱いだ靴を下駄箱に預けることなく、手に持って、恐る恐る女の後から狭い階段をのぼった二階は、ベニヤ板で仕切って急造した部屋が五、六室、並んでいた。そして、それぞれのドアロの廊下にはスリッパが二つずつ、揃えてあった。
君子の部屋は一番、奥のはずれにあった。そこに行くまで、通りすがりの部屋の天井は隣と境がなかったから、紙の音も、睦言も嬌声も筒抜けであった。
君子の部屋の中は、窓側の白壁におっつけて置かれたベッドがわりの診察台があるだけで、頭のほうに枕、その足元の方に肉色の毛布が雑然とかけられてあった。
君子は黒しゅすの着物で、臀部をむっちりと包むよう、帯をひきしめ、なんとも言えない色気を発散していた。
「おい、後からしよう」
「後から出来るの」
「お前、知らないのか。商売してるんだろ」
「知らないわ」
「あなた、遊び人なのね。ねえ、このごろ、アレないの。子供できたのかしら」
「お前、ゴム、使わないのか」
「だって、お客さんで、嫌がる人、いるんだもの」
「オッパイ、出してみろよ」
「あっ、くすぐったい。あんまり、さわらないで」
「オッパイ、黒いじゃないか。検診、受けてるんだろ」
「毎週、木曜日なのよ。カードあるわ。見てよ」
「相手は誰だか、わかんのか」
「わかんないわ。一晩で多い時、十人ぐらい取るもの。少ない時でも十二時まで、四、五人、取るもの。あと泊りよ」
「そんで、後からしたことなか」
「だって、お店に来てから三月目だもの、知らないわ。私んとこに来るお客さんで、あんた見たいな人、いないわ」
「検診の時、医者に、ちゃんと言えよ。指の形をV字形にして女性自身を開き、妾には、このごろお客さんが、さっぱりまいりませんと言えよ」
「恥かしいわ」
「おい、恥かしくないようにしてやるぞ。お前のおっきな、けつを出せ」
君子の、どでかいけつに、むらむらと加虐の情念が掻き立てられる。
髪を鷲づかみにし、昆布巻のままベッドの上に四つん這いにさせ、着物の裾を白い尻まで、まくりあげた。
君子は観念したのか、顔を枕に埋め、デンと、でかい尻を、おっ立てた。
「よし、空気を入れるぞ」
矢場の、それ突け、やれ突けの妄想が双臀

の翳りに目を遣らせる。
「ねえ、強く押さないで」
「なに言ってるだ。どぶどぶでねえか」
自分の卑わいな言葉に益々妄想がつのり、獣欲を一層、高ぶらせる。
君子は腰をずらそうとするが、そうはさせじと、がっちりけつを押さえつける。
たしかに深奥部で自転車の空気ポンプを押すような感触を受けた。
私は得たりと抜去した。
夜ごと日ごと延千五百回は、ひさいだであろう躯は、胎内に空気が充満してしまったのか、肩で息をし、丘にあがったあわびのように、ぶざまな恰好で開口したまんまである。
私は大きなうねりの中で、腸に圧迫されて取りだした彼女の腹部を、いたわるように愛撫を続けた。
実験は成功した。
暗紫色の縁口部はビビビと、にぶい音を漏らし、ピンク色の内壁部は抵抗感のある濁音破裂をブッブッとあげ、深奥部はプッとはじけるように破裂した。
私は完全に婦屁の虜になってしまった。
最近、性書を漁っているが、体位については文献は多く見当らない。
性生活の智慧（謝国権）によれば、性交運動によって膣内に入った空気が圧出されて風声を発する。ことに、足をおろしたときに、おこりやすいとある。
同著者のポケット版性生活の智慧でも、膣内に空気が流入しやすいので、性交時、音がしたり、抜去後、すわりなおすときに空気が漏れたりするとある。
また、性体位の百科（藤　竜太郎）によれば、臀部及び腰を高く突き出した脊後位は膣口が開かれ、陰圧によって膣内に空気が吸い込まれやすい。このため、膣が弛緩した女性の場合、性交運動のとき、膣内の空気が押出され不快な音を出すことがある、とあり、膣放屁という題名で、膣内への空気の流入と膣内からの雑音の流出が図解入りで詳述されている。
読者の方で、文献について、ご紹介いただければ幸甚のかぎりである。
また、婦屁を希望の女性の方、是非ご連絡を下さい。誌上で貴女との体験を発表させていただきたいと思っている。

――（おわり）――

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。
一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。
一、投稿には必ず〈奇クサロン原稿〉と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。
一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。
一、誌上に掲載しました作品に対しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。
一、奇クサロンに掲載可能の絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。
一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思いますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返えしお返事差し上げます。

〔マゾ告白記〕

私の長い長い一日

清水敏明

これから、世間に、あまり例のない、私達夫婦の事を、ありのまま書きますので、よろしくお願い申し上げます。

今から五年前、私はA市のある病院にインターンとして、実習を受けていました。その頃、アパートの一室で一人暮しをしておりました私は、いつ頃から芽生えたのか判然とはしませんが、自分の体にひそむマゾヒズムの血に夜毎、悩んでおりました。

空想の世界でのみ、マゾへの憧憬をまぎらわしていた私は、やがて、やり場のない欲求に、トルコ風呂へ行き、自分の欲求をトルコの女に訴えました。私の相手の女は、最近、私のような客が多い、と言いながら私の望む行為をしてくれました。

私の父は、かなりの資産家でしたので、一人息子の私には甘く、その時から光子というそのトルコ女の所へ通うために必要なお金を勉学の実習に要ると偽って、父へ送金を頼むようになりました。しかし私と光子の関係はトルコの一室における遊びの枠の中だけのことでした。私は自分がマゾであるという事を人に知られるのを極度に、おそれていましたので、光子にも一切、身の上などについては話しませんでした。

そんな或日、私は三月程前から時々、アパートの廊下で顔を合せたことのある、となりの三十半ばの徳永艶子という女性の訪問を受けました。

大柄で太り肉の、一目で堅気でないと判る女は、手に持った白い封筒を私に差し出すと意味有げな笑みを浮かべて、自分の部屋へ帰りました。

私は早速、その封筒を、あけて見ました。そして中から出て来た便箋には、次のようなことが書かれていました。「この手紙を読み次第、私の部屋へ来て下さい。貴方にとって重大な話があります。もし来なければ貴方は世間の笑い者になるでしょう。部屋のカギは

開けておきますから黙って入って下さい」

私は、その脅迫じみた手紙に怒りを感じて彼女の部屋へ行きました。私がドアを開けて入ると、奥の部屋のフスマのかげから「来たの。ちょっと、そっちでまっていて」という彼女の声がしました。しかし、彼女は、なかなか姿を見せませんでした。

私は怒りが段々と、こみ上げて来るのを抑えることが出来ず、立ち上がると奥の部屋へ行きました。女は鏡台に向かって化粧をしていました。私は、その女の態度に思わず声を荒げて、「こんな脅迫じみた手紙で人を呼んでおきながら、人をまたすなんて、なんや、その態度は。あんまり人を馬鹿にするな」と彼女の背に向かって憤りをぶちまけました。

彼女は振り向きもせず、「人が、そっちで待っていうたら、待ってたらええんや。あんまり、いばってたら、あとで、あやまらな、いかんようになるよ」と人を馬鹿にしたように申しました。私は憤りで顔を真っ赤にしながら、「なに、どういうことや、それは？　お前こそ、あやまらんか」

その時、くるっと私の方を振り向いた女はどぎつい化粧をした唇を、ゆがめて「うるさい、お黙り。人が、やさしく言ってるのに、どこまで、つけ上がるんや。そっちで、まっとれ、変態！」と嶮しい声をあげました。私は彼女の『変態』という言葉に一瞬、ガーンと頭をなぐられたような気がしました。もしや私がマゾであることを彼女は知っているのではないか、いや、そんなはずはない。しかし彼女の言葉は、どういうことだ。と私は頭の中を、かけめぐる不安に、その場に棒立ちになっていました。

「なにをボーッと、つっ立ってるのや、そっちで待っとれ言うのが、わからんのか」そのトゲのある声は、私の秘めた恥部を知り尽している響きをもって、私の耳を襲いました。疑問と不安が急に私の心を、しめつけ、私は彼女の言うがままに、となりの部屋で不安にさいなまれながら、待っていました。

やがてフスマのかげから、それまで着物姿であった彼女が、派手なピンクのネグリジェを着て現われ、皮肉な口調で「ええ顔してるのに、人は見かけによらんというが、本当やな。人は、お前がマゾやと知ったら、びっくりするやろな」と私の不安を決定づける言葉を私に投げました。

私は頭の血が凍るような気がしました。自分一人の秘密であるマゾのことを人に知られることは、身の破滅であると思っている私にとって、彼女の言葉は怖ろしい響きをもって私を襲いました。そして追い討をかけるように「お前が女王様と呼んでいる光子は、私の知り合いや。十日程前に駅前で光子と立ち話をしていた時、お前が私等に気付かず側を通り過ぎたんや。その時、光子に全部、お前のことは聞いたんや。それから、お前が病院に行ってることは管理人に聞いて、わかってるんや。光子には、まだお前が、このアパートにいてるいう事も話してないが、なんやったら光子にも、それから病院の人にも、マゾやいうこと教えたろか」と、うそぶくように言いました。「やめてくれ、いわないでくれ」と私は頼みました。「なんや、その言葉。人に物を頼む時は、もっと丁寧に、お願いせんか」

彼女の嶮しい言葉に、私は「お願いです。どうか、だれにも、いわないで下さい」と言葉を改めて頼みました。「やっぱり恥かしいのか。さっきの、えらそうな態度は、どうした。え、あやまれ。両手をついて、あやまらんか」

完全に主導権を摑んだ艶子は、私に謝罪を強制するのでした。私は口惜しさを、かみ殺

して「さきほどは、すみませんでした。おゆるし下さい」と彼女の前に手をついて、あやまりました。

「ははは……」勝ち誇ったように太い声で高らかに哄笑した女は、「そんなに人に知られるのが怖ろしいのか。それなら、どんなことでも私の言うことを、きくか」

「はい、はい。ききますから他人には、しゃべらないで下さい」

「うるさい。お前のことを、人にしゃべろうと、しゃべるまいと、それは、お前の心掛次第や。私はお前に、どんなことでも私の言うことを聞くか、どうか言うてるんや。どっちや、返事せんかい」

彼女の惨酷な言葉に「はい、どんなことでも、おききします」口惜しさで唇をふるわせながら答えた私は、みじめさに目が熱くなるのを感じました。

彼女は「本当やな。うそつくと、承知せんよ」といって、奥の部屋のベッドの所へ行きベッドに腰を下ろしました。彼女は、そこから私の方を、にらみながら強い声で「ここまで、這ってこい」と言いました。

私が逡巡していると、彼女は、そばの鏡台においてあるヘアーブラシをとり「こい言ったら、こんか」と、いうなり、それを私に投げつけました。私の額の所に、あたったヘアーブラシの痛さに、私は彼女の怒りを感じ、四つんばいになると傲然と足を組んでベッドに坐っている女の足元へ這っていきました。

その私の目の前に、彼女の着物の腰ヒモが投げられ「さあ、それで自分の両足を縛れ」というのでした。無気味に光る彼女の目に見据えられると私は、そのヒモで両足をしばりました。そして私はセーターとシャツをぬいで上半身、裸になるようにいわれました。屈辱感と羞恥心で血が逆流するのを感じながら

イメージギャラリー『ハンモック、女王様のおあそび』岡　たかし

も彼女の命令に逆えず、上半身、裸になった私は、彼女によって両手を後手に縛られ、彼女の前に引き据えられました。

「男のくせに生白い体をして、みかけは上品なくせに、本当は畜生と同じや。今から卑しい畜生やということを、お前の体に思いしらしてやるから、覚悟おし」というなり、彼女の手が私の頬へピシッと炸烈しました。そして返す手で、容赦のない往復ビンタが反対側の頬にも炸烈しました。痛みに顔をゆがめる私に「こんなことは序の口や」と獲物をねらう蛇のように目をギラギラさせた女は、私のズボンからバンドを引抜くと、バシッーと床に、たたきつけました。

その音に私の顔は恐怖に引きつり、全身はがくがくと、震えました。私は恥も外聞も、かなぐり捨てて、床に頭をすりつけると「ゆるして、ゆるして下さい」と哀願しました。

「うるさい」その声と共に私の背に激痛が走りました。「アアー、ヒー」体をよじって、さけようとする私の肩へ、又も痛烈な一撃が襲いました。「ウウー、ヒー、ゆるして。おゆるし、ヒー」と悲鳴を上げて哀願する私の体に、彼女は情容赦なくバンドを振り下ろすのでした。「アーアッ、おゆるしを……ヒーわあー」われ知らず絶叫する私の声に、やっと彼女は手を止めました。

息もたえだえに床にうつ伏した私の頭に、彼女は足をのせると、ぐいぐいと、ふみにじりしながら「ええか、これからは素直に私の言うことを聞くんや。ぐずぐずしていると承知せんで、わかったか」私は苦痛に呻きながら「わかりました」と答えました。

彼女はベッドに坐ると「さあ起きるんや。起きて、ちゃんと坐れ」私は全身の痛みを我慢して不自由な体をもち上げ、彼女の足下に坐りました。私の体中に、赤いみみずばれが走っておりました。そんなあわれな私の姿を冷然と見ながら「これからは私の気に入るように、せい。そうしたら、そんな目に合わずにすむんや」というと、彼女は私の鼻先に、自分の脚を差し出し、「ちゃんと、きれいに舐め」

もうその時には、私は屈辱感も羞恥心も、けしとんで、ただ艶子に対する恐怖心だけが心を圧しておりました。私は彼女の言うがまま、彼女の足の方へ唇をよせると、犬のように舌を出して一生懸命に舐めました。

「もっと舌を出して、ゆびの間も、きれいに舐めんか」彼女の叱咤に私は精一杯、舌を出して舐めました。そして私が、ちょっと舌の動きをとめた時「誰が、やめいうた」というなり、喫っていた煙草の火を私の肩に押しつけたのです。その熱さに私は「ヒー」と呻き体中に脂汗がにじみ出るのを感じました。

やっと足舐をゆるされた時には、私の舌は感覚がなくなっておりました。そして顎を出して苦しさにあえいでいる私の前に立ち上がった彼女は「さあ、お前の口でパンティを、ぬがせ」といってネグリジェの裾を、はね上げて私に命じました。私は中腰になり、彼女の体の周りを、ぐるぐると何回もまわりながら、彼女のはいている、真っ赤なパンティのはしをくわえては、少しずつ引き落とし、そして、やっと、ぬがすことが出来ました。

彼女は私の手足のヒモをほどくと、自分はベッドに腰をおろし、今ぬいだばかりのパンティを私の顔に投げつけ「その汚れている所を舌で綺麗になるまで舐めよ」というのでした。

私は、いわれるままに艶子の前が当っていたと思われる部分を、口のところへ、もっていきました。すえたような異臭が私の鼻を襲いました。しかし彼女の私を見つめる目に私は、その汚れた部分を舐めました。

「もっと、つばを出して、ペロペロと舐めんか」という声に、私は一心に舐めました。

「よし、もうええ」私が、ほっとした時、私の髪の毛が艶子の手によってつかまれ、ぐいと引っぱられました。艶子の太い二本の脚が私の目の前で拡げられると、片方の脚が上がり、私の首を、まくようにすると、自分の方に私の顔を、ぐいと引き寄せました。やわらかい、ねっとりと濡れた箇所へ、私の鼻と口は、べったりと密着させられました。

私の鼻は強烈な匂いで、ひん曲がりそうでした。それは、何ともいえない不快な呕吐感を催す悪臭で、私は本当に吐気を感じ、もう少しで吐くところでした。彼女は、そんな私に気付いてかどうか「どんな匂いや言うてみい」と申すのでした。私は彼女の気嫌をとるように、心とは反対に「香ぐわしい、お匂いでございます」と申しました。

優越感を顔一杯に、みなぎらせた艶子は、「お前のような畜生には勿体ないが、今から私が、よしと言うまで舐めるんや」というとその太い両股を、ぐいと締めつけ、そのままベッドに仰向けになりました。

私は苦しさに息も出来ず、窒息しそうになりました。それからの私は、彼女のあくなき情欲の嵐に、じゅうりんされつづけました。私の舌の動きが鈍ると、彼女は凄い量感の太股で私を締めつけたり、又、私の髪を引っぱったりして、自分の思いのままに私に舌奉仕をつづけさせました。彼女は快感を感じる毎に背を浮かして、私の顔を太股で締めつけながら、のたうち呻きました。その度に私は首の骨が折れるかと思う程でした。

果てることを知らない彼女の、すさまじい欲望は、窓の外の日が落ち、部屋中、真っ暗になるまで、つづきました。そして何度目かの身もだえをして、凄い声で呻いた艶子は、ギュウーと私の顔を、しめつけたまま、しばらく、じっと身動きしませんでした。私は苦しさに気が遠くなりかかった時、艶子は股を開くと、私の顔を蹴とばしました。

私は床へくずれるように倒れると、全身の力が抜けて身動きも出来ず、息もたえだえに肩で、あえいでいました。しばらく余韻を楽しんでいたのか、艶子もベッドの上で、じったとしておりましたが、やがて身をおこすとベッドをおり、電気をつけると私の体を蹴り上げ、私を仰向けにすると、私の頭の下に私のセーターとシャツを足で押し込みました。

そして私の顔を、またいで仁王立ちになった艶子は、私の顔を見下ろし「さあ、口をあけるんや。私の味を、とっぷり味わわせてやるから、ありがたく思え。ちょっとでも、こぼしたら承知せんぞ」というなり、すっと腰をおとしました。そして少し腰を浮かしたと思うと、私の口に激しい勢いの水流が、そそぎこまれました。そして、私に舌で自分の肌についた水滴を清めさすと、彼女はそのままどすんと、私の顔に、その大きな尻をのせました。そして、体をゆすりながら彼女は「ははは……」と身を、のけぞらして笑いつづけました。征服者の満ち足りた笑いを聞きながら、私は苦しさに呻いておりました。

そのあと、私は彼女の足下にひれ伏して奴隷の誓いをさせられました。そして私は彼女の命令で、その誓いを紙に書かされました。

空想の世界で描いていた事、光子とのプレイで感じた事に比べ、この現実のおぞましさに、涙にぬれながら私は奴隷誓約の書を、したためました。そして私が許されて自分の部屋へ帰ったのは、もう夜も更けた十二時すぎでした。

○

この艶子という女性こそ、その後、私と結婚して戸籍上は私の妻ということになってい

イメージギャラリー……『哀願踏台』……岡たかし……

る私の女王様です。これは後で知ったことですが、艶子は、この都市の近くの貧農の出で若い時から水商売の道に入り、これまでの15年間に、ホステス、トルコ嬢、やくざの情婦等と汚濁にまみれて暮して来た女でした。

私と知り合う2年位前まではトルコ風呂で働いておりましたが、年増で下腹の出た、肉のかたまりのような艶子には、あまり客がつかず、それからキャバレーに替りましたが、そこでも、あまり客受けが、よくなく、売れっ子の若い女のヘルプになって、若い女の気嫌をとりながら、なんとか、やっていたそうです。

実際、艶子は大柄で色も浅黒く、その肥満した肌は脂ぎっており、私が理想の女性として頭に描いていた女性とは全く天と地程の差がありました。しかし私は、そんな艶子のあわれな奴隷にされてしまいました。

次の日から私の生活は、一変しました。朝病院へ行く前に、いつも昼過ぎに目覚める艶子女王様の食事の支度をしておき、三時頃に病院を出た私は、帰りに前日、艶子女王様から命じられている、夕食のお召上り物を買って、四時頃迄に帰って来るのが日課になりました。

そして私が料理した夕食をとられた艶子女王様は、キャバレーに、お出かけになられます。そのあと、私は部屋の掃除、女王様のお汚れ物の洗濯等を済まし、お風呂を沸かして艶子女王様のお帰りをお待ちするのです。いくら遅くなっても、私は先に寝むことは許されません。必ず艶子女王様のお帰りの時にはドアの所でひれ伏して、お迎えせねばならないのです。

お帰りになった艶子女王様のご入浴の時は私は三助にされ、そして、いつもお寝み前にマッサージを、させられます。そして情欲の異常に強い女王様は、ほとんど毎夜、私に舌奉仕をお命じになられるのです。女王様がお

寝みになると、私は疲れた体を引きずるようにして自分の部屋へ帰り、寝むのでした。

こんな毎日で三月間程たった或日、母が私の幼い時に死んだ後、ずっと父や私の面倒を見てくれていた婆やの、お米から電話がありました。それは脳溢血で倒れた父の危篤を知らせるものでした。私は女王様のお許しを得て、父のもとへ急ぎました。しかし私が着いた時には、父は息を引き取ったあとでした。

葬儀をすませ、あと始末をすませた私は、又おぞましい生活に戻るために艶子女王様のところへ帰りました。この十日間程の、あわただしい中にも、自分の自由があったことに私は生きかえる心地がしておりました。

もっとも、父の死は私の心を痛めましたが艶子女王様の足下で、これからも、その苛酷な責苦にあえぎつづけなければならない私にとりまして、私には貴重な十日間でありました。私の帰る足は重たく、足に鎖のついたような気持でした。

帰りついた私を待っていたのは艶子女王様の、あくなき情欲の嵐でした。満ちたりた艶子女王様は、ベッドに身を横たえて私にマッサージをさせながら「お前、えらい金持ちになったそうやな。私立探偵に調べさせて、全部わかってるのや。お前は明日から私の夫にしてやるわ。結婚するんや。ええか、わかったな。結婚したら、お前のものは、私のものや。ちゃんと遺産相続したら、私に渡すんやで。ごまかしたりしたら承知せんで」と申しました。

それから五年の歳月が経ち、現在に至りました。その間には色々、艶子女王様と私の身に変化がありましたが、ただ女王様と奴隷の間柄は一向に変りませんでした。戸籍上は夫婦になっておりました、世間に対しては、そのようなことは秘密になっておりました。と申しますのは、私の父が遺した財産を全て私から取り上げた女王様は、それから色々と事業をはじめられました。その為に私のような男が夫としていることは、あまり芳しくなかったからでした。

そして現在、私達夫婦と申しますよりは、女王様と奴隷は、女王様が所有する五階建てのマンションの最上階全面を使った豪華な部屋に住んでおります。部屋数だけで八室あるその一室が、私の部屋でございます。その部屋は十畳位有り、その内、六畳は浴室とトイレになっております。この浴室は私専用でございますが、トイレは女王様の、ご専用でございます。いや、トイレばかりでなく、この室全体が女王様のトイレなのです。と申しますのは、女王様の人間便器である私が、女王様専用のトイレに住まわしていただいているということです。

私は浴室で、いつも体を清めて、女王様のご排泄に、いつでも便器として、ご使用いただける様、この室を女王様から私の居室として賜っているのでした。そして他の部屋は女王様と女中達の部屋で、特に女王様のご寝室やご居間は、それはそれは豪華で贅を尽したものでした。そして女王様は、この都市の中心部に八軒も高級クラブを、おもちになっておられます。

クラブのホステスや従業員から会長様と呼ばれる身におなりの艶子女王様は、その大柄な体に、ますます、ぜい肉がつき、脂ぎった体になっておられましたが、環境の変化は怖ろしいもので、一種異様な貫録がおつきになり、従業員やホステスは皆、艶子女王様を怖れております。又、クラブの雇われマダム達八人は、五年前迄、艶子女王橋と同じキャバレーで働いていた者達ですが、今では艶子女王様の一喜一憂に、おどおどしながら、忠実に艶子女王様に仕えているのです。

現在の私は、艶子女王様のご命令で医学の道は放棄させられて、ただ女王様御一人の奴隷として召使われる身でございます。

五年前から今日まで、ありとあらゆる屈辱の極を女王様から味わされてまいりました。私は、もう今では完全に心身共、女王様の奴隷になり切ってしまいました。そして、この頃では、ただひたすら、女王様のお召しを待ち焦がれる身になってしまいました。女王様の御足下に、ひれ伏して、その御姿を拝したてまつるだけで、私は喜びに胸が打ち震えるのでした。

これが現在の私の姿でございます。哀れな性（さが）の者とお笑い下さい。

○

現在、艶子女王様は四十一才におなりになりました。私は、まだ三十才でございますがいずれ、その内に、私の肉体は、やせ衰え、艶子女王様の肥料として燃えつきてしまうでしょう。その日まで私は、私の全てを捧げて女王様に、ご忠誠を尽す覚悟でございます。

こんな哀れな私でございますが、艶子女王様に、お仕えする幸福感だけは忘れることは出来ません。何という馬鹿な男だと、きっと読者の皆様は蔑まれることと思いますが、この性癖は一生涯、直らないと思います。

――（おわり）――

☆読者告白原稿募集☆
奮て御投稿して下さい！
左記テーマにて募ります

一、女性読者の告白、体験談

最近、読者通信に投稿されたり、編集部や編集長、或は執筆者に対して通信を寄せられたりする女性読者の方が多くて、大変意を強くしております。しかし、読者通信なんかでお友達を得たりして満足されると、そのまま沈黙してしまわれる方が案外に多いのです。それには、いろいろと御事情もお有りと思いますが、やはり本誌の読者の方々の気持としては、その後の経過も、どうなったのだろうかと、知りたいものなのです。

そんなわけですから、お便りだけでも、是非、お寄せ願いたいのです。編集部としましても直接、お願いしているわけですが、新しい女性読者の方々も、文章の長短巧拙に拘らず、勇気を出して、お寄せ下さるよう、お待ちしております。〈読者通信〉を初め、〈奇クサロン〉でも、誌面を開放しております。告白に限らず、身辺雑記、読後感、執筆者、編集者への呼びかけでも結構です。参考資料（写真など）があれば、何更有難いです。

二、夫婦SMプレイの体験

今迄に、夫婦SMプレイの珠玉の告白が数多く本誌上に発表されて、文献誌としての本誌の評価を高めて参りましたが、同時に、読者間に告白された夫婦の方々の人気をも一層高めて参りました。

こうしたSM夫婦プレイ体験者の方々の告白が、今や、真に待望される時代になってきました。そうした体験者の誌上を通じての交流こそ、焦眉の急と云っても過言ではないでしょう。

読者の方々の中で、夫婦又は恋人、愛人間に於ける広い意味でのSM関係の体験談を、お寄せ下さるよう、お待ち致します。裏付けになるような写真があれば尚結構ですが、なければないでも構いません。住所氏名、其の他、発表に支障のある事柄は、一切、秘匿されていいのですが体験の内容に関しては、出来るだけ詳細且つ正確に御報告頂ければ幸いです。

尚、塚本鉄三氏の写真撮影を希望される御夫婦の方は、別に御照会下されば、改めて御返事差し上げます。

三、特別異色体験談と告白

普通の雑誌では、取扱わない異色ある性癖の告白。例えば、マゾ体験、窃視、下着愛好同性愛、節片崇拝（フエチシズム）、獣姦体験或は嗜好、近親相姦など、どのようなことでも、長短に拘らず、詳しく記載の上、御投稿下さい。尚、体験に至らずとも、それが異色あるものでしたら、一応歓迎します。

本誌既刊号の読後感につきましても、それが執筆者の特異な性癖に由来するものでしたら是非、お寄せ願います。投稿者のプライバシーに関しては、固く秘密を守りますから、その点、御安心下さい。掲載篇につきましては応分の原稿料或は資料参考謝礼を差し上げます。何卒、奮て御遠慮なく、ドシドシ投稿下さるのを、お待ちしております。

〔憧　憬〕

和装美と意地悪責め

高橋秀樹

暑い夏が過ぎて、さわやかな秋が訪れるとともに、『きもの』の季節となります。十月は婚礼、十一月は七五三と『きものの日』、そして正月へと、女性の和服姿が目につく日が続いて行きます。そしてまた、和装緊縛マニアに、なにやら落ち着かぬ日々がくることになるわけです。

縛りといえば全裸姿が圧倒的に多い中で、和装縛り、特に振袖姿の緊縛美に執着するのは異端者なのかも知れません。けれども和装の縛りには全裸縛りにない情緒があり、幻想的な美しさがあります。それについて、少々思いつくことを記し、しばしのおなぐさみに供したいと思います。

振袖衣裳の加虐性

私の理想とする和装は、花嫁姿に代表される、大振袖・日本髪の盛装です。歌舞伎や舞踊に見られるお姫様や武家娘、下町娘といった振袖姿は、花嫁姿の原形として、ひとしく魅力のあるものといわなければなりません。

山本五郎様好みの花嫁衣裳は、これらの舞台衣裳を上回る、すばらしいものですが、こうした振袖衣裳の魅力は、そのけんらん豪華な美しさのかげに、それを身にまとう女性への、加虐性が秘められているところにあります。衣裳・かつらが豪華になればなるほど、着る者には、つらさが増してくる、というところに、たまらない魅力を感じるのです。

髪は文金高島田、裾綿入り三枚重ねの大振袖に厚板の巾広帯を胸高に締めた花嫁姿は、本当に「輝くばかりに美しい」という形容がぴったりですが、その代償として「重く、暑く、息苦しい」思いをしながら披露宴にのぞむ花嫁さんは、嬉しさ半分、つらさ半分の複雑な心境でいることでしょう。

けれども、殆どの花嫁さんは、やれ、かつらが重いの、帯がきつくて苦しいの、といいながら、ひそかに、そのつらさを楽しんでいて、むしろ、そんなつらい目にあっていることを得意としているふうがあります。

友人たちにとりかこまれて、「その衣裳じゃ暑いでしょうね」とか、「かつらが重いでしょう」などと、いわれると、「ええ、もう暑くて暑くてたまらないわ」とか、「重いっていうより、首が痛いって感じよ」などと、さも、つらそうに答えながら、内心「どう、私の花嫁姿、すてきでしょう」とでもいいたそうな表情で、生涯で一番美しく、誰よりも豪華な盛装をしていることに満足しているよ

うな感じがします。

そんな状態の花嫁に、「そんなに身動きの不自由さや、重さ、暑さが楽しいなら、もっと本格的に楽しませてあげよう」といって緊縛プレイのモデルをやらせたら、どんなことになるでしょう。少々の苦痛が、むしろ快感であった振袖姿。その得意の絶頂から一挙に屈辱と羞恥の、どん底につき落とされ、口にするさえ、はばかられるような恥ずかしい姿に縛られると、美しい衣裳も残酷な責め道具に変わります。

こうした情景を、山本様の写真は実によく捉え、縛られた花嫁の哀美感を、強く感じさせてくれます。山本様の一連の『花嫁緊縛写真』をカラー、キャビネ版で拝見できたら、もう何もいうことはありません。でも、それは、おそらく夢に終わってしまうでしょう。せめて奇クのカラーページででも見せて頂けないものかと、はかない望みをかけている昨今です。あの、加虐性に富んだ振袖衣裳に苦しむ美しい女性の姿を、ぜひ見せて下さい。

ある「意地悪責め」

和装花嫁は楽しくもまた、つらいものですが、日本舞踊の衣裳もまた、女性に楽しさとつらさとを与えてくれるものです。知合いの娘さんが名取り披露の会で『藤娘』を踊るのを見に行ったことがありますが、衣裳をつけて舞台に出るのは大変、晴れがましいことであると同時に、女性にとって自虐的な行為であることを感じました。

まず、衣裳をつけてしまうと、出演がすむまで行動を制限されます。早目に支度をしますから、出番まで三十分くらいは扮装したままで待っていなければなりません。ふしぎなことに楽屋というところは妙に暑くて、ふつうの服装でいても暑く感じるのに、引抜きの衣裳とあって、厚ぼったい掘引きの大振袖の重ね着に巾広帯の振下げ結びという格好ですから、その暑苦しさは大体、、察しがつこうというものです。

その娘さんも、すっかり『藤娘』の扮装をおわり、もたれのないイスに腰かけて出番を待っていました。楽屋見舞いにくる人たちにとりまかれ、衣裳の重いことや帯の締め方のきついこと、身動きの不自由さなどを、つらそうに話していましたが、そのつらさが、実は一種の快感であり、そんなつらい服装をしていることが、むしろ、得意のような感じで

した。

「だって、おけいこの時は軽い、たもとの短いきものか、ゆかたで、細い帯でしょう。こんな重苦しい衣裳なんて慣れてないから、衣裳合わせのとき、こんな格好で動けるのかしらと思っちゃった」とか、「中振袖なんかとぜんぜん、感じが違うの。帯もこんなに太い帯でしょ。それを男の人が二人がかりで締めるのよ。一人は前で位置を決めて、もう一人は後で締めるわけだけど、初めの一巻きを締められたときは、大げさだけど息がつまっちゃうんじゃないかと思ったわ」などと、ずいぶん、つらそうで、実際また、そうなのでしょうが。そんなにつらいなら、やめれば良いのにと思わせるようなことをいいながら、反面、その苦しさ、つらさを楽しんでいるふうを、強く感じさせられたものです。

もともと自分から好んで始めたことですから、誰に文句をいうわけにも行きません。かつらが重いことや、衣裳を着た時の暑さ、大きな帯で息苦しくさせられることは、あらかじめ、わかっていることです。承知の上で難行苦行をしているのですから、舞台にくりひろげる、あでやかな大振袖の娘姿は、女性の持つ自虐本能の具象化といえるのではないでしょうか。そしてまた、そのような要素を持つ『振袖姿』が、女性を鑑賞用・愛玩用人形にしたがる男性の心を刺激して、やまないのだと思います。

さて、『藤娘』に話を、もどしましょう。あと出番まで二十分という頃、思わぬことが起こって、この娘さんは、とんだ意地悪責めにあうことになってしまいました。あとのほうの番組で不都合がおこり、急に番組のさしかえをすることになったのです。

番組の進行が予定より遅れたために、一部の地方さんたちが出演できないと、いいだしたのです。予定した時間に終わらないと、旅興行に出る列車に間に合わないということで録音テープを使うわけにも行かず、出演者も衣装を着つけ中だったので、急にその番組を『藤娘』のところへ入れてしまうことになったのでした。

ひとつ、ずらすと、あちこちに支障が起きて、結局、出演者のやりくりがつくのは『藤娘』だけという結果になり、気の毒に結局、この娘さんは二時間余りも重い衣装を着たまま待たされる破目になってしまい、心理的にも肉体的にも疲れ果てたころ晴れの舞台に立たなければならないという、全く意地悪責めの極といいたいような目に、あったのです。

途中で、なんども、一度衣裳を脱ぎたいといっていましたが、脱いでも、すぐに着せるようになるから、となだめられ、厚化粧の美しい顔をこわばらせて出番を待っているのでした。大体イスにかけていましたが、立っているか、イスにかけるか、しかせず、下に座らないので、どうしてか訊いてみましたら、大きな帯が胸につかえて、とても苦しくて座っていられないといいます。

意地悪に、いちど、やってごらんといっていやがるのを無理に座らせたら、反り身になって、こらえていました。まっすぐに座るのは、かなり、つらいようで、「これで、おじぎしたら、ほんとに息が、つまっちゃう」といっていました。「歌舞伎のお姫様なんか、あの格好で、ちゃんと、おじぎする場面があるじゃない?」といったら、「あれは男の人だから、できるのよ」と、妙な答が、かえってきました。

ためしに測ってみたら、帯は丸帯で固い芯が、はいっており、巾30センチという太い帯を、そのまま折らずに締めているのです。小柄な女性の体では腰から乳の上までくるのですから、こんな巾の広い帯を、男の人の力で

締めつけられては、なるほど、苦しいわけです。もともと舞台衣裳というものは立姿が美しく見えるように工夫され、だんだんに華美になり、女のきものにおいては特に袖は長く帯は巾広くなって行き、ついに着る者の方が耐えられなくなるところまで発展した歴史を持っています。

『藤娘』や『娘道成寺』などの振袖衣裳や、山本様好みの花嫁姿などは、その発展の極にあるといってもよいもので、着ているだけでさまざまな責苦を受け、疲れてしまうものです。『藤娘』の場合、一般の花嫁姿とは少し違い、舞台用の着付けなので、帯の位置が特に高く、娘さんにとっては非常につらいものだったようです。

それでも、やっと出番がくると、重いかつらをつけ、お師匠さんに励まされながら舞台に立って、二十分ほどを、あでやかに舞い、盛大な拍手を受けて引っ込んできたときは、満面に汗をうかべながら嬉しそうな表情でした。

後日、聞いたところでは、「慣れない衣裳を長時間、着せられて疲れたので、舞台で、ちゃんと動けるか心配だった。一番つらかったのは、かつらをつけたとき。首が肩にめりこむような気がして、ちょっと、クラクラした。ああ、いよいよ舞台なのにと思ったら、急に目の前が真っ暗になって、ちょっと、よろけたら、しっかりしなさいと、お師匠さんにお尻を、ひっぱたかれたのが利いた。あとは夢中で踊り、楽屋へ帰って、かつらをとり帯を解かれて衣裳を脱いだ時の解放感は、とてもすばらしかった」そうです。

それは、きっとM女性が緊縛プレイのあとに感じる解放感、快美感と通じるものではなかろうかと思える表現でした。いずれにしても、きれいな衣裳を長時間、身にまとい、重く暑く、そして息苦しい思いをしながらも、夢幻のひとときを過ごせたことに満足していたようです。

花嫁残酷物語

きものの中でも最も豪華な『振袖姿』は、

以上のように、なんの手も加えなくても女性を、いじめることができます。『振袖姿』の魅力はまさに、この合理的加虐性にあると、いえるでしょう。ちょっとした着付けの仕方で、着る女性を責めるのは簡単で、しかも外見からは、わからないという、意地悪な、いじめ方ができます。さしずめ花嫁などは最適の責めモデルで、緊縛プレイより、ずっと、つらい目にあわせてやることができます。

あるグラフ誌に、「山村の花嫁」というフォト・ルポルタージュが載ったのを見ましたが、これなど典型的な意地悪責め・花嫁残酷物語でした。

写真は、まず着付けから始まり、婚家へ着くまで続くのですが、衣裳は山本様ばりの豪華なもので、ちょうど山本様の写真の花嫁姿を想い出して頂けばよく、帯だけは腋の下まできているのかと思うほど、巾広に写っていたのが印象的でした。

地方によって着付けが少し違うかも知れませんが、これはまた、特に帯巾が広く、体の横巾より帯のほうが広い。歌舞伎の女形風の大時代な着付けで、もちろん、重い裾をひき動きにくそうな花嫁姿でした。花嫁は、この格好で近所の人たちに、あいさつをし、家を出るのですが、祝いに来た人たちに、いちいち土下座のようにて、ていねいなおじぎをしていきます。

やっと家を出ようとすると、小雨が降り出し、厚い裾をからげ、ビニール製のコートを着せられ、高下駄に番傘という支度で出なければなりません。あの厚い裾をからげた格好では、家の中でも歩きにくいのに、高下駄をはいて傘をさして、すべりやすい雨の山道から歩くのです。婚家まで10キロメートルの山道を下るという記事には、びっくりしました。

このただでも動きにくい格好で、雨の中を10キロメートルも歩くとは、ミニスカートで育った都会のお嬢さんたちだったら、とてもできないでしょう。文金高島田に大振袖の花嫁姿を、すっぽりとビニールのコートで包まれた暑さは想像もできません。こんな合理的な、いじめ方が他に、あるでしょうか。

とにかく花嫁は、この残酷な花嫁道中10キロメートルを歩き抜き、婚家にたどりつきます。婚家では、またしても、あいさつ責めのおじぎ責めときます。披静宴は三日三晩続き毎日、衣裳責めの、おじぎ責めが続きます。

三日目の晩、やっと客は帰りますが、深夜まで婚家の長老方から、この家の嫁になることについて説教を開かされます。もちろん花嫁衣裳は脱がせてもらえず、正座して、いつ果てるともない老人たちの話を聞かなければなりません。こうした難行苦行の末、やっと初夜を迎えることになり、花嫁が部屋にはいると、新郎の手が帯を解くという解説で、花嫁が初夜の床の部屋へ、はいりかけた写真で終わりでした。

写真を見ているだけで疲れてしまいそうなルポで、縄を使わなくても、女性をいじめる方法はあるものだと、感じ入った次第です。この上、初夜の床で、振袖姿のまま新郎に緊縛プレイをされたら、どんなでしょう。それでも恐らく、この花嫁は、それを愛の行為として受け入れ、どんな恥ずかしい格好をさせられても、こらえ、新郎の気に入るようにつとめるに違いないと思います。女性には耐えることを美徳とし、苦痛を快感に変える、ふしぎな能力がありますから。それにしても、こうした地方ではお嫁に行くにも大変な努力が必要だと、つくづく感じました。

縛りのお話から大分それてしまいました。この次ぎは、もうすこし、縛りについて書くよう気をつけることにいたしましょう。

——(了)——

露悪的な我が体験＝言葉による羞恥責め

いまどきの娘（ケイ子のこと）

＝小岩井次郎＝

私は、ある事務所の所長です。ケイ子は今春、採用され、私以下、男子ばかり五名のところへ、この四月に配属されて来ました。高校卒で十八才です。私は一目、ケイ子を観て多分、処女じゃないだろうと思いました。といって、生活態度が不真面目というのではありません。むしろ真面目なくらいで、服装など同年輩の娘達に比べ、地味なくらいです。もちろん、化粧もしていません。私のところの来客は一様に、いい娘と評価しています。

それでも私には、何となくピンと感ずるものがありました。「これはムスメじゃない」と……。

私の好き心が、むくむくと頭をもたげ、ちょいと、からかって見たい気がしました。以下は、二人きりになったチャンスに行なった、言葉による、羞恥責めです。

×

ちょっとした大きな仕事が終わって、職員全員で、飲みに行くことになった。タクシー一台に乗りきれないので二台に分乗した。こういうとき、女の子と乗れるのは所長の役得で、私ということになる。はじめてのケイ子と二人きりのチャンスが、こうしてきた。そこへ持って行く導入は省略して、肝心なところから……。

「彼氏、いるんだろう?」

「ヘッヘッ……」

幼なさの残る堅い声で、曖昧に笑う。

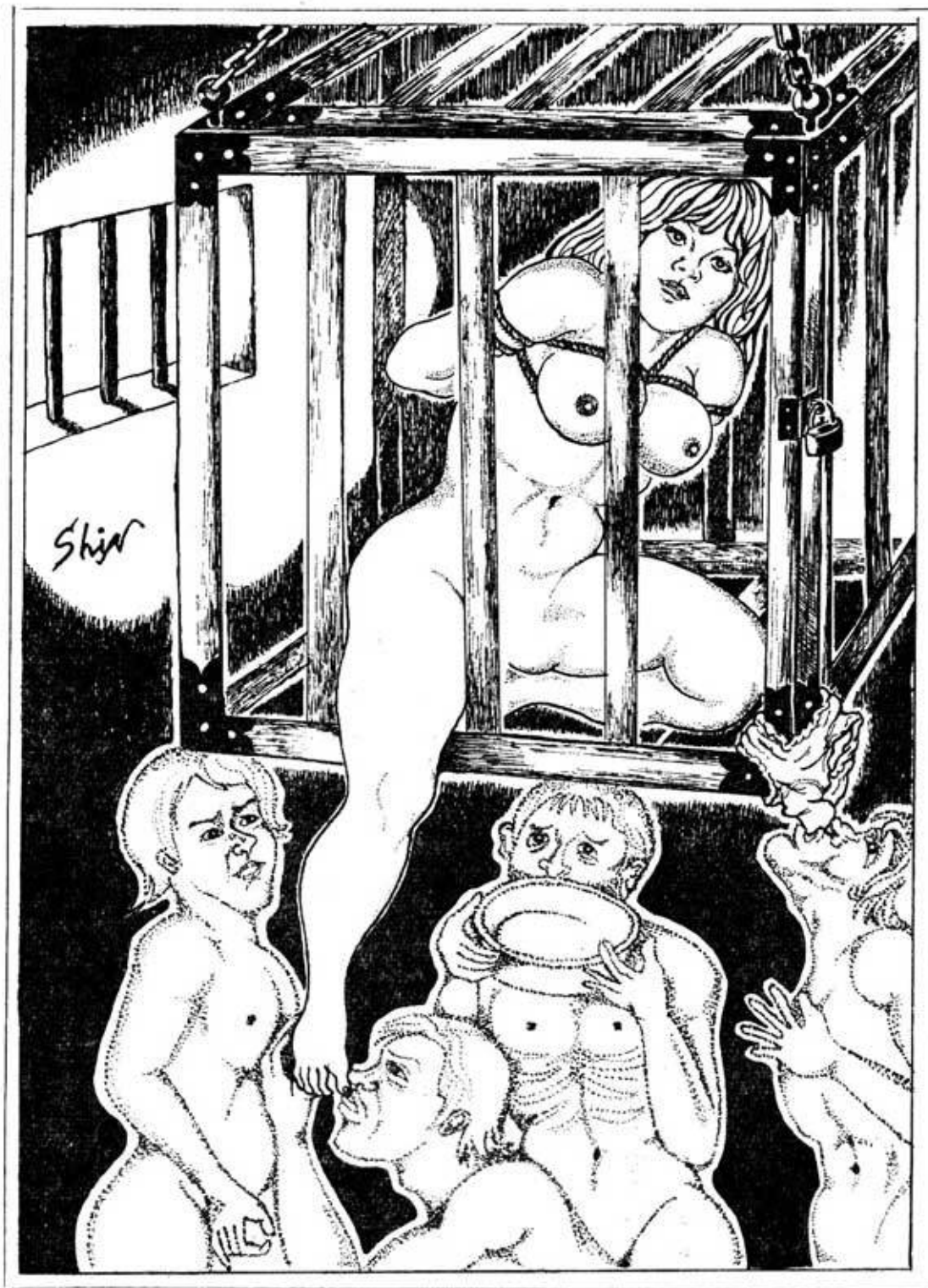
「その顔（まあまあだと思う）、そのスタイル（抜群に良い）で、男が放っておくはずがないものネ」

「……」

「キッスは?」

突然、強烈な質問をされて、ケイ子は、うろたえたが、かすかに、うなずく。

「セックスの経験もあるんだろう?」
核心にズバリ触れてみる。ケイ子は、やにわに体を、もじもじさせ、目をキョトキョトし、大分、あわてている。
「体に出ているもの……わかるんだよ」
と、追い討ちをかける。ケイ子は、じっと私の顔を、不思議そうに観ていたが、うなずいた。
「彼は社会人? それとも学生?」
「学生です」
「何年生?」
「大学2年です」
H大生で、年令はケイ子より一才上ということだ。
「妊娠だけは気を付けるんだよ」
「はい」
通常すましているケイ子の顔からは、想像もできないテレ笑いというか、助平ったらしい笑いをした。
突然のことではあるし、途惑っていたことは確かだった。
「このことは、誰にも内緒にしておいた方がいいよ。そんなことないだろうけど、捨てられたとき、君が困るからね。僕も、しゃべらないから、安心していいよ」



……イメージギャラリー……『虜囚の女王』……水江　伸……

と、ずるく恩着せがましく言うことも忘れなかった。

×

目的地付近は、連れ込み旅館が林立している。そのうちの一軒に〝一時間六百円〟の表示がある。
「一時間六百円というと、二時間で千二百円か、安いネ。僕がよく利用していた頃から、仕事上、二人で外出したときのこと、第二のチャンスがおとずれた。

変っていない。十数年、経っているのに。もっとも、あの頃は二時間単位だったが……」

「……」

「君は、ちょくちょく来るんだろう？」

「いいえ」

「彼と一緒のとき、利用しないの？」

「家で……」

「君の？」

「あの人の……」

「彼は下宿とかアパート？」

「あの人のご両親は、日曜日、連れだって、よく出掛けるんです」

「日曜日しか、つき合わないの？」

「日曜の朝、あの人に電話して、ご両親の出掛けたのを確かめて私が行くんです」

そりゃそうだ。二人とも学生（つい先頃までケイ子も学生だった）の身分で、ホテル代は、そうそう捻出できまい。話を聴いてみれば、小遣いだって潤沢ではなさそうだ。もっとも四月からは、ケイ子が勤めたので、多少ゆとりは出てきたようだが、以前からの習慣から、乱費しないようにしているらしい。

ケイ子は、すでに秘密を打ちあけた安心感からか、生来の助平心からか、きわどい話にも乗って来るようになっていた。私は内心、シメシメと、ほくそ笑んだ。

×

仕事を済ませての帰り、先ほどの続きをする。

暑いので、喫茶店で、お茶でも飲んでいこう、と誘うと、素直に従いて来た。

「君の両親は、君が女になっていることを知ってるの？」

「多分……。なんでも分かるんだから、ってこの間、母が言ったから、びっくりしちゃった」

「そのことで何も言わないの？」

「はっきりとは、何も……」

ケイ子の両親は分からないのだ。未成年の娘が男と関係があるのを知っていて黙っている親は、いまい。たとえ肯定したとしても、注意の一つや二つは、するはずだ。

「初体験は？」

この質問は何回かしたが、なかなか言わなかったもの。私にとっては大変に興味のあることの一つ。ここでも数回、繰り返し、強引に聴きかえし、やっと口を割らせた。

「高二のとき……」

「今、十八才だから、十六才のときか。だいぶ、早かったね。やはり高校生の体験者は多いの？」

「なかには自慢する娘もいるけど、はっきり分かりません。でも、かなりの娘が体験していると思います」

「初体験のときの感想は？　例えば、苦痛だったとか、しばらく物が、はさまった感じが残ったとか……」

「なにをされたのか全然、分かりませんでした。痛かったようだけど……忘れちゃった」

都合が悪くなると、全部、忘れるらしい。大分、慣れて来た感じだ。

「ところで、日曜日しか会わないとなると、現在は、どうしているの？」

ずっと日曜日も出勤しているからだ。

「はい。もうずっと……」

「すると、マスターベーションで処理しているの？」

「えっ？」

「マスターベーションをしてるんだろう？」

「日本語で言ってくださらないと分かりません」

日本語で言ってくれ、とは可愛いい。一瞬跨踏したが、嗜虐の露悪趣味が露骨な言葉を吐かせた。

「自慰のことだ。自分で自分のものを、なぐ

さめるのだよ」
「そんなこと、しません」
「うそ、うそ」と口から出かかった。ケイ子は顔面を、たちまち紅潮させた。
「そんなこと、ないだろう。これは健康のあかしなんだ。精神と肉体が健康なら、性欲が湧然と惹起するのは当然すぎるほどだ。羞恥は分かるが、ヘソから下に人格を持たせては楽しくない」
「……」
肯定も否定もしない。あるいは微かに、うなずいたようにも見えた。
「彼は君のものを弄るばかりか、覗いたり、舐めたりするだろう?」
「……」
今度は大きく、うなずいた。
「君だって、彼のを握ったり、咥えたりするだろう?」
「ええ、でも、はじめは気持悪くて……」
へんてこな理屈を並べて、秘密を吐かせてしまい、我れながら、おかしかったが、ええままよ、と突っ込んでみる。
「そりゃそうだ。排泄器具でもあるわけだから……。でも今は、いいだろう?」
「そりゃあ……まあ」
「かなり大胆なプレイをしているらしいネ。ところでSMPってのは、やったことある」
いよいよ、核心に触れてみた。
「なんですか、SMって?」
わずかに落胆。
「サド・マゾのことだ」
「話には聴いたこと、ありますけど、わかんない」
「縄で女体を縛ったり、浣腸したり、猿ぐつわしたり、バイブレーターで、いいことしたり、したことない? 本格的ではなくても真似事ぐらいはあるんじゃない」
暫時、反応を観るが、無言。そこで緊縛の良さ、浣腸の面白さなど、図解で説明してやる。すると、ほどなく顔面が紅潮し、頬を両手のひらで覆いだし、目が興奮で、潤んできた。体を左右に小刻みに揺すり、かすかに呼吸が乱れ動揺しているのが判った。私の嗜虐心は、いたく満足していた。
そこで、手持ちの(常時、仕事の関係で数枚、持ち歩いている)ポルノ写真と以前、撮ったヌード写真(残念ながらSM写真はなかった)を出して見せ、追い討ちを、かけてみる。こういう種類のものは女に、その気を起させてからでないと拒否されることが多分にある。本心は観たいくせに「気持悪いから嫌ッ」と、突っぱねるのだ。ケイ子にも朝、出勤したばかりの時に見せて失敗したことがあった。今は、自分から手に採って、まじまじと観ている。私はケイ子の顔の変貌のみ、観察していた。目が釣り上がり、キラキラと輝きを増し、潤んでいるのが、はっきりしていた。
「どうだい、こういうの、やるんだろう?」
無言で、うなずく。
「君の性感帯は、どこ? 乳首は良いだろうが、その外のところで」
「耳の穴の中や、背中を撫でられると、たまらなくなります」
「脚は? 脚の付け根や内股、足指なんかも快いんじゃない?」
「はい。あの人は、足の指を良く、しゃぶってくれます。ジーンときちゃう……」
「そこで君が、お返しに彼の……をするわけだ」
「まあ、そうです」
もう、ケイ子は催眠術にかかったように、何でも白状してしまう。愉快でたまらない。
「フォア・プレイで、彼は指を使うんだろうが、当然……の中へ入れるだろう? 弄られ

9折

……イメージギャラリー……『渓谷めぐり』……水江伸……

て快感ある？」

「感じてると思います」

「適度に、君が潤いをみせれば、彼のものを……という運びになるんだろうが……をしてもらった方が良いか、ギュッと押しつけ擦りつけられた方が良いか、どっち？」

「うーん、どっちも、快いみたい」

「強いのがいい？　ソフトにやってもらった方がいい？」

「……わかんない」

〝ヘッヘッ〟と、またまたカタイ声でテレ笑いをする。更に追求しようとしていたら、

「あのう……、そういうヌードを撮らせる人って、どんな人なんですか？」

と、矛先を変えられてしまった。残念だが止むを得ない。ケイ子からの初めての質問だから答えずばなるまい。

「人妻などが多い。娘ということになっている女の子でも処女は、いなかった。やはり男を知っている女性じゃないと無理かも知れないと思う。処女は興味があっても、羞恥心の方が強過ぎて、くどくにしても骨が折れるばかりで、埒りがない。君も、どうだい、撮ってやろうか？」

「いいです。あのう、こういう女性を、お撮りになって、あと、何もしないんですか？」

いよいよ、この女は、かなりの助平だ。

「セックスするかどうか、ということ？　そりゃ当然、そうなる。でも嫌だっていうのを無理にはしない主義でね。中には夫公認で写真、撮らせるのがあるが、こういう場合、殆ど……する。どうだい、君も撮ってやるよ。まだ幼なさの残っているピチピチした美しい体を記録しておく気はないかね。今日という日は明日にはないんだ。一日でも早い方がい

い。そして来年も再来年もと、続けて撮るんだ。いいヌーベニールになると思うよ。僕のある女友達は、娘のときから撮っておけば良かった、と後悔している」

などと、くどくど屁理屈を並べたり、おだてたりしながら口説いてみる。どうせ、成功は望んじゃいない。紛れで当れば、もうけものなのだ。一旦は〝ウン〟と言いかけ、慌てて否定するなど、頭の中が大分、混乱しているようだ。インタレストとアバンチュール、それに彼への操立てが激しく葛藤しているに違いない。私は心の中で、助平笑いをしながら、いたって真面目な顔を、つくっていた。

「必ずしもヌードでなくてもいいんだ。ブラジャーとパンティを着けてもいいし、水着でもいい」

「……」

もじもじ体を捻じるばかりで返事がない。はじめての提案だから無理かも知れない。女の誇りとして、こういうことを素直に受け入れられないのも分かる。いままでも、そうだった。時間をかけて押してみるか、と自問自答する。

「君の素晴しいプロポーションを是非、撮ってみたい。写真が嫌ならSMなんかでもいいが……」

強烈なのを一発、ぶっぱなしてみた。ケイ子は、もう視線が定まらず、周囲をキョトキョト、手を口にあてたり、膝に置いたり、足を投げたり引っ込めたり、その狼狽ぶりが面白くて可愛いい。

「ヘッヘッ」

例のテレ笑いをするばかりで答えない。暫時、沈黙。一瞬、首を左右に振り、長い髪をなびかせ、やおら気を取りなおし、

「どうして、女性が経験すると、わかるんですか？」

またまた、矛先を変えて来た。経験が〝色に出にけり〟なら、カバーしようというのか……。私にだって、明確に分かるわけじゃない。ただ長年のカンがキンキラキンと閃くだけなのだ。と言って、手の内を明かすわけにはいかない。ここは一番、曖昧にしておく必要がある。

「そうだねえ。例えばだね、ここ（喫茶店）にウエイトレスが三人いるが、君なら、どう見る？　処女、非処女？」

「……わかんない」

「僕は三人とも娘じゃない、つまり非処女だと観るね。特に、この席に注文とりに来た娘（こ）はなんかは大分、経験あるんじゃないかな。年令は二十二、三だが、数からいけば、素人の奥さんの十年分ぐらいの経験はある」

など、素人の奥さんなら、月に何回平均として、年に何回、娼婦は一日何回だから、何カ月で、素人の何年分、と計算しながら説明する。ケイ子は、説明する私にも良くわからないことを感心して聴いていた。

「それで、どうしてわかるんですか？」

「体に出てくるんだよ。まあ経験で分かるようになるんだ。個人差もあるし、何処が、どうと、はっきり言えないけどね。その他、人間の体は、労作肥大と言って、使えば発達するものなのだ。セックスも、その通りで、一回一回が、その女性の実績となり、肉体に刻印されるのだ。当然、顔、形に出てくる。勿論、個人差があるから、一律にはいかないがおおよその見当は、その気になって観察すれば、つくものだ。特に、君のように十六、七才から、二十才位までの、これから成熟しようという過程の娘の体験は比較的、はっきり現出する」

と言うような事を物識り顔で言う。

「……」

ケイ子は無言で聴き入っている。

「ところで、来週は五日間、夏休みをとるようになってるけど、海へでも行くの？　当然彼と二人だろう？」

「はい。まだ宿はとってないんですが、行きあたりばったり、泊ろうと思っています」

「久方ぶりに、ゆっくりできるわけだ」

「まあ、そうです。ヘッヘッヘッヘッ」

勝手にしやがれ、だ。

「妊娠に気をつけるんだよ。君等みたいに若い者は特に気をつけないと……」

親切ごかしに注意する。ケイ子は、いちいち、うなずいている。

「君はオギノ式？」

「はい。でも生理が一定してないので、よく分からないんです」

「まあ、初日から一週間位なら確実だが、今日は十二、三日目ぐらいにあたるかな。旅行の時は、丁度、危いんじゃないか？」

「まあ、分かるんですか？」

「そりゃアンネぐらい、わかるさ」

「こわいみたい」

「気にしないことだ。アンネばかりか、君の体の構造だって、およその見当はつく。そろそろ、メシでも食って帰るか」

と言って、私が元気よく立ち上がると、ケイ子は一瞬、あっけにとられていたが、追いかけるようにして、従いて外へ出た。

×　　×

その日の午後、ケイ子は仕事にならないらしく、机に向かったきりで、ポーッとなっていた。私は、そういうケイ子を嗜虐の視線でじっと見ていた。

（おわり）

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十日確実発売！

一月分	1冊	六〇〇円（送共）
三月分	3冊	一八〇〇円（送共）
半年分	6冊	三六〇〇円（送共）
一年分	12冊	七二〇〇円（送共）

郵便番号 5 5 8

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八暁出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず〝現金書留〟にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に〈本号にて前金切〉の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下されば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。